

「何故と聞き出すと探偵になつて仕舞ふです」  
 「ホ、い、ちや聴きますまい」  
 「普通の小説はみんな探偵が發明したものですよ。非人情な所がないから、此とも趣がない」  
 「ちや非人情の續きを伺ひませう。夫から？」  
 「ゴニスに沈みつゝ、沈みつゝ、只空に引く一抔の淡き線となる。線は切れる。切れて點となる。蛋白質の空のなかに圓き柱が、こゝ、かしたこと立つ。遂には最も高く聳えたる鐘樓が沈む。沈んだと女が云ふ。ゴニスを去る女の心は空行く風の如く自由である。去れど隠れたるゴニスは、再び歸らねばならぬ女の心に羈縛の苦しみを與ふ。男と女は晴き雨の方に眼を注ぐ。星は次第に増す。柔らかに搖ぐ海は泡を濺がず。男は女の手を把る。鳴りやまぬ強を握つた心地である。……」  
 「あんまり非人情でもない様ですね」  
 「なに是が非人情的に開けるのですよ。然し厭なら少々略しませうか」  
 「なに私は大丈夫ですよ」  
 「わたしは、あなたより猶大丈夫です。——それからと、えいと、少しくづかしくなつて来たな。どうも譯し——いや讀みにくい」

「讀みにくければ、御略しなさい」  
 「え、い、加減にやりませう。——この一夜と女が云ふ。一夜？と男がきく。一と限るはつれなし、幾夜を重ねてこそ云ふ」  
 「女が云ふんですか、男が云ふんですか」  
 「男が云ふんです。何でも女がゴニスへ歸りたくないでせう。それで男が慰める語なんです。——眞夜中の甲板に帆綱を枕にして横たはりたる、男の記憶には、かの何時、熱き一滴の血に似たる何時、女の手を確と握りたる何時が大瀧の如くに揺れる。男は黒き夜を見上げながら、強ひられたる結婚の淵より、是非に女を救ひ出さんと思ひ定めた。かく思ひ定めて男は眼を閉づる。——」  
 「女は？」  
 「女は路に迷ひながら、いづこに迷へるかを知らぬ様である。攫はれて空行く人の如く、只不可思議の千萬無量——あとが一寸讀みにくいですよ。どうも句にならない。——只不可思議の千萬無量——何か動詞はないでせうか」  
 「動詞なんぞ入るんですか、夫で澤山です」  
 「え？」  
 「轟と音がして山の樹が悉く鳴る。思はず顔を見合はす途端に、机の上の一輪挿に活けた、」  
 「どうも濟みません。御前に何を上げませう」と出来る丈先へ出て置く。いくら出て何の利目もなかつた。女は何喚はぬ顔で大徹和尚の顔を眺めて居る。やがて、  
 「竹影拂階塵不動」  
 と口のうちで靜かに讀み了つて、又余の方へ向き直つたが、急に思ひ出した様に、  
 「何ですつて」  
 ど、わざと大きな聲で聞いた。その手は喚はな

「なに、清慮して居るんです。まだ子供ですか」  
 「子供つて、あなたと同じ位ちやありませんか」  
 「ホ、い、さうですか。あれは私の従弟ですが、今度戦地へ行くので、暇乞に来たのです」  
 「こゝに留まつて、ゐるんですか」  
 「い、え、兄の家に居ります」  
 「ちや、わざと御茶を飲みに来た譯ですね」  
 「御茶より御白湯の方が好きなんです。父がよせばいいのに、呼ぶものだから。麻痺が切れて困つたでせう。私が居れば申途から歸してやつたんですが……」  
 「あなたは何所へ入らしたんです。和尚が聞いて居ましたぜ、又一人散歩かつて」  
 「え、鐘が池の方を廻つて来ました」  
 「その鐘が池へ、わたしも行きたいんだが……」  
 「行つて御覽なさい」  
 「畫にかくに好い所ですか」  
 「身を投げるに好い所です」  
 「身はまだ中々投げない積りです」  
 「私は近々投げるかも知れません」  
 「餘りに女としては思ひ切つた冗談だから、余は不圖顔を上げた。女は存外愉快である。」

「讀みにくければ、御略しなさい」  
 「え、い、加減にやりませう。——この一夜と女が云ふ。一夜？と男がきく。一と限るはつれなし、幾夜を重ねてこそ云ふ」  
 「女が云ふんですか、男が云ふんですか」  
 「男が云ふんです。何でも女がゴニスへ歸りたくないでせう。それで男が慰める語なんです。——眞夜中の甲板に帆綱を枕にして横たはりたる、男の記憶には、かの何時、熱き一滴の血に似たる何時、女の手を確と握りたる何時が大瀧の如くに揺れる。男は黒き夜を見上げながら、強ひられたる結婚の淵より、是非に女を救ひ出さんと思ひ定めた。かく思ひ定めて男は眼を閉づる。——」  
 「女は？」  
 「女は路に迷ひながら、いづこに迷へるかを知らぬ様である。攫はれて空行く人の如く、只不可思議の千萬無量——あとが一寸讀みにくいですよ。どうも句にならない。——只不可思議の千萬無量——何か動詞はないでせうか」  
 「動詞なんぞ入るんですか、夫で澤山です」  
 「え？」  
 「轟と音がして山の樹が悉く鳴る。思はず顔を見合はす途端に、机の上の一輪挿に活けた、」

「どうも濟みません。御前に何を上げませう」と出来る丈先へ出て置く。いくら出て何の利目もなかつた。女は何喚はぬ顔で大徹和尚の顔を眺めて居る。やがて、  
 「竹影拂階塵不動」  
 と口のうちで靜かに讀み了つて、又余の方へ向き直つたが、急に思ひ出した様に、  
 「何ですつて」  
 ど、わざと大きな聲で聞いた。その手は喚はな

「なに、清慮して居るんです。まだ子供ですか」  
 「子供つて、あなたと同じ位ちやありませんか」  
 「ホ、い、さうですか。あれは私の従弟ですが、今度戦地へ行くので、暇乞に来たのです」  
 「こゝに留まつて、ゐるんですか」  
 「い、え、兄の家に居ります」  
 「ちや、わざと御茶を飲みに来た譯ですね」  
 「御茶より御白湯の方が好きなんです。父がよせばいいのに、呼ぶものだから。麻痺が切れて困つたでせう。私が居れば申途から歸してやつたんですが……」  
 「あなたは何所へ入らしたんです。和尚が聞いて居ましたぜ、又一人散歩かつて」  
 「え、鐘が池の方を廻つて来ました」  
 「その鐘が池へ、わたしも行きたいんだが……」  
 「行つて御覽なさい」  
 「畫にかくに好い所ですか」  
 「身を投げるに好い所です」  
 「身はまだ中々投げない積りです」  
 「私は近々投げるかも知れません」  
 「餘りに女としては思ひ切つた冗談だから、余は不圖顔を上げた。女は存外愉快である。」



「私が身を投げて浮いて居る所を——苦しんで浮いて居る所ぢやないんです——やす／＼と往生して浮いて居る所を——綺麗な雲にかいて下さい」

「え？」  
「驚いた、驚いた、驚いたでせう」  
「女はすうりと立ち上がる。三歩にして盡くる部屋出入口を出るとき、顧みてこりと笑つた。茫然たる事多し。」

十

鏡が池へ来て見る。曾海寺の裏道の、杉の間から谷へ降りて、向うの山へ登らぬうちに、路は二股に岐れて、おのづから鏡が池の周囲となる。池の縁には蘆花が多い。ある所は、左右から生ひ重なつて、殆ど音を立てずには通れない。木の間に透ると、池の水は見えるが、どこで始まつて、どこで終るか一應通つた上でないと見當がつかぬ。あるいて見ると存外小さい。三丁程よりあるまい。只非常に不規則な形で、所々に岩が自然の儘水際に横たはつて居る。縁の高さも、池の形も名状し難い様に、波を打つて、色々な起伏を不規則に述べて居る。池をめぐりては雜木が多い。何百本あるか勘

定がし切れぬ。中には、まだ春の芽を吹いて居らんがある。割合に枝の葉まなほは、依然として、うら／＼かな春の日を受けて、萌え出た下草さへある。蘆花の淡き影が、ちらり／＼と其間に見える。

日本の蘆花は眠つて居る感じである。「天來の奇想の様に」と形容した西人の句は到底あてはまるまい。かう思ふ途端に余の足はとまつた。足がとまれば、眠になる迄そこに居る。居られるのは、幸福な人である。東京でそんな事をすれば、すぐ電車で引き殺される。電車が殺さなければ調査が追ひ立てる。都會は太平の民を乞食と間違へて、掏摸の親分たる探偵に高い月俵を拂ふ所である。

余は草を薙ぐに太平の尻をそろりと叩いた。こゝならば、五六日斯うしたなり動かないでも、誰も苦情を持ち出す氣遣ひはない。自然の蘆花の所はこゝにある。いざとなると容赦も末練もない代りに、人に因つて取扱ひをかへる様な輕薄な態度はすこしも見せない。岩崎や三井を眼中に置かぬものは、いくらでも居る。冷然として古今帝王の權威を風馬牛し得るものは自然のみであらう。自然の徳は高く塵界を超越して、絶對の平等觀を無邊際樹立して居る。

天下の羈小を、塵いで徒らにタイモンの憤りを招くよりは、鬮を九輪に添き、蕪を百味に樹ゑて、獨り其裏に起臥する方が遙かに得策である。世は公平と云ひ無私と云ふ。左程大事なものならば、日に千人の小賊を殺して、滿園の草花を被等の屍に培養ぶがよからう。

何だか考へが理に落ちて一向つまらなくなつた。こんな中學程度の觀想を流りにわざわざ、鏡が池邊來はせぬ。袂から煙草を出して構ずをシュツと捲る。手應へはあつたが火は見えない。數島のさきを附けて吸つてみると、鼻から煙が出た。なるほど、吸つたんだと漸く氣がついた。構はずは短かい草のなかで、しばらく雨龍の様な細い煙を吐いて、すぐ寂滅した。

眼の届く所は左迄深さうにもない。底には細長い水草が、往生して沈んで居る。余は往生と云ふより外に形容すべき言葉を知らぬ。同の薄なら塵く事を知つて居る。蘆の草ならば誘ふ波の情を持つ。百年待つても動きさうもない、水の底に沈められた此水草は、動くべ

き凡ての委券を調へて、朝な夕なに弄らるゝ期を、待ち暮らし、待ち明かし、幾代の思ひを蕪の先に誰めながら、今に至る迄遂に動き得ずに、又死に切れずに、生きて居るらしい。

余は立ち上がつて、草の中から、手頃の石を二つ拾つて来る。功德になると思つたから、眼の先へ、一つ抛り込んでやる。ぶく／＼と池が二つ浮いて、すぐ消えた。すぐ消えた、すぐ消えた、余は心のうちで繰り返す。すかしで見ると、三草程の長い髪が、揺げに揺れかゝつて居る。見附かつてはと云はぬ計りに、濁つた水が底の方から騒しに來る。南無阿彌陀佛。

今度は思ひ切つて、懸命に真中へなげる。ぼかんと胸かに音がした。靜かなるものは決して取り合はない。もう抛げる氣も無くなつた。胸の具箱と帽子を置いた儘右手へ廻る。

二間餘りを爪先上りに登る。頭の上には大きな樹がかぶさつて、身體が急に寒くなる。向う岸の暗い所に、梅が咲いて居る。梅の葉は縁が深すぎて、裏見ても、日向で見ても、輕快な感じはない。ことに此梅は岩角を、奥へ二三間退いて、花がなければ、何があるか氣のつかない所に森閑として、かたまつてゐる。其花が！一日期定しても無期定し切れぬ程多

い。然し眼が附けば是非期定したくなる程鮮やかである。唯針やかと云ふ計りで、一向陽氣な感じがない。ぼつと燃え立つ様で、思はず、氣を奪られた、後は何だか凄くなる。あれ程人を欺す花はない。余は深山梅を見る度にいつでも妖女の姿を連想する。黒い眼で人を釣り寄せて、しらぬ間に、毒然たる毒を血管に吹く。欺かれたと悟つた頃は既に遅い。向う側の梅が眼に入つた時、余は、え、見なければよかつたと思つた。あの花の色は唯の赤ではな

い。眼を醒ます程の派手やかさの奥に、言ふに言はれぬ沈んだ調子を持つてゐる。悄然として萎れる雨巾の梨花には、只憐れな感じがする。冷やかに觀なる月下の海棠には、只愛らしい氣持がする。梅の沈んで居るのは全く違ふ。黒ずんだ毒氣のある、恐ろしい味を帯びた調子である。此調子を底に持つて、上部ほどどこ迄も派手に装つてゐる。然も人に媚ぶ態もなければ、ことさらに人を招く様子も見えぬ。ぼつと咲き、ぼつたりと落ち、ぼつたりと落ち、ぼつと咲いて、幾百年の星霜を、人目にかゝらぬ山陰に落ち附き捲つて暮らしてゐる。只一眼見たが最後！見た人は彼女の魔力から金輪際、免るゝ事は出来ない。あの色は只の赤ではない。腐ら

れたる囚人の血が、自ら人の眼を惹いて、自ら人の心を不快にする如く一種異様な赤である。

見てゐると、ぼつたりと赤い奴が水の上に落ちた。靜かな春に動いたものは只此一輪である。しばらくすると又ぼつたりと落ちた。あの花は決して散らない。崩れるよりも、かたまつた儘枝を離れる。枝を離れるときは一度に離れるから、未練のない様に見えるが、落ちてもかたまつて居る所は、何となく毒々しい。又ぼつたり落ちる。あゝやつて落ちてゐるうちに、池の水が赤くなるだらうと考へた。花が靜かに浮いて居る邊りは今でも少々赤い様な氣がする。また落ちた。地の上へ落ちたのか、水の上へ落ちたのか、區別がつかぬ位靜かに浮く。また落ちる。あれが沈む事があるだらうかと思ふ。年々落ち盡す幾百輪の梅は、水につかつて、色が滑け出して、腐つて泥になつて、漸く底に沈むのかしらん。幾千年の彼には此古池が、人の知らぬ間に、落ちた梅の爲に、埋もれて、元の平地に戻るかも知れぬ。又一つ大きいのが血を塗つた、人魂の様に落ちる。又落ちる。ぼつたりぼつたりと落ちる。際限なく落ちる。

こんな所へ美しい女の浮いてゐる所をか



いたら、どうだらうと思ひながら、元の所へ歸つて、又煙草を呑んで、ぼんやり考へ込む。温泉場のお那美さんが昨日冗談に云つた言葉が、うねりを打つて、記憶のうちに寄せてくる。心は大浪にのる一枚の板子の様に揺れる。あの顔を種にして、あの楫の下に浮かせて、上から楫を渡輪も落とす。楫が長しなへに落ちて、女が長しなへに水に浮いてゐる感じをあらはしたいが、夫が畫でかけるだらうか。かのラオコーンには——ラオコーン杯はどうでも構はない。腹理に背いても、背かなくつても、さう云ふ心持ちさへ出ればよい。然し人間を離れないで人間以上の永久と云ふ感じを出すのは容易な事ではない。第一顔に困る。あの顔を借りるにしても、あの表情では駄目だ。苦痛が勝つては凡てを打ち壊して仕舞ふ。と云うて無暗に氣樂で猶困る。一層ほかの顔にしてはどうだらう。あれか、これかと指を折つて見るが、どうも思はず。矢張りお那美さんの顔が一番似合ふ様だ。然し何だか物足りない。物足りないとは氣が附くが、どこが物足りないかが、吾ながら不明である。従つて自己の想像でいゝ加減に作り易へる譯に行かない。あれに嫉妬を加へたら、どうだらう。嫉妬では不安の感が多過

ぎる。憎悪はどうだらう。憎悪は烈し過ぎる。怒り、怒りでは全然調和を破る。恨、恨でも春恨とか云ふ、詩的のものならば格別、只の恨では餘り俗である。色々に考へた末、仕舞ひに漸くこれだと氣が附いた。多くある情緒のうちで、悔れと云ふ字のあるのを忘れて居た。悔れは神の知らぬ情で、しかも神に尤も近き人間の情である。お那美さんの表情のうちには此の悔れの念が少しもあらはれて居らぬ。そこで物足らぬのである。ある味味の衝動で、此情があの女の眉宇にひらめいた瞬間に、わが畫は成就するであらう。然し——何時それが見られるか解らない。あの女の顔に普段充滿して居るものは、人を馬鹿にする微笑と、勝たう、勝たうと焦る八の字のみである。あれ丈では、とても物にならない。

「且那も畫を御描きなされるか」余の繪の具箱は開けてあつた。  
「あ、此池でも畫かうと思つて来て見たが、淋しい所だね。誰も通らない」  
「はい。まことに山の中で……且那あ、峠で御降られなかつて、嘸御困りで御座んしたろ」  
「え？ うん御前はあの時の馬子さんだね」  
「はい。かうやつて薪を切つては城下へ持つて出ます」と源兵衛は荷を卸して、其上へ腰をかける。煙草入を出す。古いものだ。紙だか革だか分らない。余は楯寸を借してやる。  
「あんな所を毎日越すなあ大變だね」  
「なあに、馴れてゐますから——夫に毎日越しません。三日に一返、ことによると四日目位になります」  
「四日に一返でも御免だ」  
「アハ、ハ、ハ。馬が不馴ですだから四日目位に置きます」  
「そりやあ、どうも。自分より馬の方が大事なんだね。ハ、ハ、ハ」  
「それ程でもないんで……」  
「時に此池は餘程古いもんだね。全體何時頃かあるんだい」  
「昔からありますよ」

「昔から？ どの位昔から？」  
「なんでも餘つ程古い昔から」  
「餘つ程古い昔からか。成程」  
「なんでも昔、志保田の嬢様が、身を投げた時分からありますよ」  
「志保田つて、あの温泉場のかい」  
「はい」  
「御嬢さんが身を投げたつて、現に津で居るぢやないか」  
「いんにえ。あの嬢さまぢやない。ずつと昔の嬢様が」  
「ずつと昔の嬢様。いつ頃かね、それは」  
「なんでも、餘程昔の嬢様で……」  
「その昔の嬢様が、どうして又身を投げたんだい」  
「その嬢様は、矢張り今の嬢様の様に美しい嬢様であつたさうながな、且那様」  
「うん」  
「すると、ある日、二人の梵論字が来て……」  
「梵論字と云ふと虚無僧の事かい」  
「はい。あの尺八を吹く梵論字の事で御座んす。其梵論字が志保田の庄屋へ河留して居るうちに、その美しい嬢様が、其梵論字を見集めて——因果と申しますか、どうしても一所に

なりたいたと云うて、泣きました」  
「泣きました。ふうん」  
「所が庄屋どのが、聞き入れません。梵論字は御にはならんと云うて、とう／＼追ひ出しました」  
「其虚無僧をかい」  
「はい。そこで嬢様が、梵論字のあとを追つてこゝ迄来て、——あの向うに見える松の所から、身を投げて——とう／＼、えらい悔きになりました。其時何でも一枚の鏡を持つてゐたとか申し傳へて居りますよ。夫で此池を今でも鏡が池と申します」  
「へえ。ちや、身を投げたものがあるんだね」  
「まことに怪しからん事で御座んす」  
「何代位前の事かい、それは」  
「なんでも餘つ程昔の事で御座んすさうな。夫から——これはこゝ限りの話ですが、且那さん」  
「何だい」  
「あの志保田の家には、代々氣狂が出来ます」  
「へえ」  
「全く祟りで御座んす。今の嬢様も、近頃は少し變だ云うて、皆が噂します」  
「ハ、ハ、そんな事はなからう」  
「御座んせんかな。然しあの御袋様が矢張り

「うちにゐるのかい」  
「い、え、去年亡くなりました」  
「ふん」と余は煙草の吸殻から黒い煙の立つのを見て、口を閉ぢた。源兵衛は薪を背にして去る。  
畫をかきに来て、こんな事を考へたり、こんな話を聴く計りでは、何日かつても一枚も出来つこない。折角繪の具箱迄持ち出した以上、今日は義理にも下繪をとつて行かう。幸ひ、向う側の景色は、あれなりで晴々まつてゐる。あそこでも申し譯に一寸描かう。  
一寸餘りの着黒い岩が、前直に池の底から突き出して、濃き水の折れ曲がる角に、幾々と構へる右側には、例の熊笹が斷崖の上から水際迄、一寸の隙間なく叢生してゐる。上には三抱へ程の大きな松が、若鳥にからまれた幹を、斜に交つて、半分以上水の面へ乗り出してゐる。鏡を懐にした女は、あの岩の上からでも飛んだものだらう。  
三脚几に尻を据えて、畫面に入るべき材料を見渡す。松と、笹と、岩と水であるが、借て水はどこでとめてよいか分らぬ。岩の高さが一寸あれば、影も一寸ある。熊笹は、水際でとまら



ず、水の中迄茂り込んで居るか怪しまる、位、鮮やかに水底迄寫つてゐる。松に至つては空に響ゆる高さが、見上げらるゝ丈、影も亦頗る細長い。眼に寫つた丈の寸法では到底収りがつかない。一層の事、實物をやめて影丈描くのも一興だらう。水をかいて、水の中の影をかいて、さうして、是が畫だと人に見せたら驚くだらう。然し只驚かせる丈では詰まらない。成程畫になつて居ると驚かせなければ詰まらない。どう工夫をしたものだらうと、一心に池の面を見詰める。

奇體なもので、影丈眺めて居ては一向畫にならん。實物と見比べて工夫がして見度くなる。余は水面から岸を轉じて、そろり／＼と上の方へ視線を移して行く。一丈の崖を、影の先から、水際迄眺めて、繼日から次第に水の上に出る。潤澤の氣合から、鼓鞞の模様を逐一吟味して漸々と登つて行く。やうやく登り詰めて、余の双眼が今危巖の頂に達したるとき、余は蛇に睨まれた葉の如く、はたたりと畫筆を取り落とした。

緑の枝を通す夕日を背に、暮れんとする晩春の蒼黒く影頭を彩どる中に、豁然として讀り出されたる女の顔は、――花下に余を驚かし、

まぼろしに余を驚かし、振袖に余を驚かし、風呂場に余を驚かしたる女の顔である。余が視線は、蒼白き女の顔の眞中にぐさと釘付けにされたぎり動かない。女もしなやかなる體軀を伸せる丈伸して、高い巖の上に一指も動かさずに立つて居る。此一刹那！

余は覺えず飛び上つた。女はひらりと身をひねる。帯の間に梅の花の如く赤いものが、ちらついたりと思つたら、既に向うへ飛び下りた。夕日は樹梢を掠めて、胸かに松の幹を染むる。庶幾は愈青い。又驚かされた。

十一

山里の麓に乗じてそいろ歩く。觀海寺の石段を登りながら仰數奉星一二三と云ふ句を得た。余は別に和向に違ふ用事もない。迷うて雜話をする氣もない。偶然と宿を出でて足の向く所に任せてぶら／＼するうち、ついで此石段の下に出た。しばらく不許筆酒入山門と云ふ石を撫でて立つて居たが、急にうれしくなつて、登り出したのである。

主が出て来た。余は上る、坊主は下る。すれ違つた時、坊主が鋭い聲で何處へ御出で遊ばると問うた。余は只境内を拜見にと答へて、同時に足を停めたら、坊主は直ちに、何もありませんとぞと言ひ捨て、すた／＼下りて行つた。あまり洒落だから、余は少しく先を越された氣味で、段上に立つて、坊主を見送ると、坊主は、かの鉢の開いた頭を振り立て振り立て、遂に姿を移すの間に隠した。其間かつて一度も振り返つた事はない。成程禪僧は面白い。きび／＼して居るなど、のつそり山門を這入つて、見ると、廣い庫裏も本堂も、がらんとして、人影は丸でない。余は其時に心からうれしく感じた。世の中にこんな洒落な人があつて、こんな洒落に、人を取り扱つてくれたかと思ふと、何となく氣分が晴々した。禪を心得て居たからと云ふ譯ではない。禪のぞの字も未だに知らぬ。只あの鉢の開いた坊主の所作が氣に入つたのである。

十年も人の臂に探偵をつけて、人のひる尻の勘定をして、それが人世だと思つて居る。さうして人の前へ出て来て、御前は尻をいくつ、ひつた、いくつ、ひつたと頼みもせぬ事を教へる。前へ出て云ふなら、それも参考に於て、やらんでもないが、後の方から、御前は尻をいくつ、ひつた、いくつ、ひつたと云ふ。うるさいと云へば猶云ふ。よせと云へば益云ふ。分つたと云つても、尻をいくつ、ひつた、ひつたと云ふ。さうして夫が世の方針だと云ふ。方針は人々勝手である。只ひつた、ひつたと云はずに黙つて方針を立てるがよい。人の邪魔になる方針は差し控へるのが證據だ。邪魔にならなければ方針が立たぬと云ふなら、こつちも尻をひるのを以て、こつちの方針とする計りだ。さうなつたら日本も運の盡きだらう。

て觀海寺の石段を登るのは隨緣放曠の方針である。仰數奉星一二三の句を得て、石段を登りつくしたる時、巖にひかる春の海が帯の如くに見えた。山門に入る。絶句は飄る氣にならなかつた。御座に巴めにする方針を立てる。石を驚んで庫裏に通ずる一筋道の右側は、岡つゝの生垣で、垣の向うは墓場であらう。左は本堂だ。屋根瓦が高い所で、胸かに光る。數萬の葉に、數萬の月が落ちた様だと見上げる。何所やらで鳩の聲がしきりにする。棟の下にでも住んで居るらしい。氣の所爲か、箱のあたり白いものが、點々見える。養かも知れぬ。雨垂れ落ちの所に、妙な影が一行に並んでゐる。木とも見えぬ、草では無さな。感じから云ふと、岩佐又兵衛のかいた鬼の念佛が、念佛をやめて、節を踏つてゐる姿である。本堂の端から端迄、一行に並んで居る。其影が又本堂の端から端迄一行に行儀よく並んで踏つて居る。腰夜にそのかされて、鉦も違木も、奉加帳も打ちすてて、誘ひ合はせるや否や、此山寺へ踊りに来たのだらう。近寄つて見ると大きな菊玉樹である。高きは七八尺もあらう、結瓜程な青い黄瓜を、杓子の

とある。最初の一句はともかくも自力で綴る。あとは只管に神を念じて、筆の動くに任せる。何をかくか自分には無論見當が附かぬ。かく者は自己であるが、かく事は神の事である。従つて責任は著者にはないさうだ。余が散歩も亦此流儀を汲んだ、無責任の散歩である。只神を頼まぬ丈が一層の無責任である。スターンは自分の責任を免れると同時に之を在天の神に嫁した。引き受けて呉れる神を持たぬ余は遂に之を洋清の中に棄てた。

石段を登るにも骨を折つては登らない。骨が折れる位なら、すぐ引き返す。一段登つて竹むとき何となく愉快だ。それだから二段登る。二段目に詩が作りたくなる。默然として、吾影を見る。角石に遮られて三段に切れてゐるのは妙だ。妙だから又登る。仰いで天を望む。寐ぼけた奥から、小さい星がしきりに瞬きをする。句になると思つて、又登る。かくして、余はとら／＼、上迄登り詰めた。



「下駄を、よう御揃へなさい。そらこゝを御覽」と紙端を差しつける。黒い柱の影中に、土間から五尺許りの高さを見計らつて、半紙を四つ切りにした上へ、何か認めてある。

「そおら。讀めたる。脚下を見よ」と書いてあるが――

「成程」と余は自分の下駄を丁寧に揃へる。和尙の室は廊下を鍵の手に曲がつて、木製の横手にある。障子を恭しくあけて、恭しく敷居越しにつくばつた了念が、

「あやう、志保田から、畫工さんが来られました」と云ふ。甚だ恐縮の體である。余は一寸可笑しくなつた。

「左様か、是へ」

余は了念と入れ代る。室は頗る狭い。中に間壁裏を切つて、鏡瓶が鳴る。和尙は向う側に書見をして居た。

「さあ是へ」と眼鏡をはづして、書物を傍へおしやる。

「了念。りよう、ねえ、ん」

「はあ、い」

「座布團を上げんか」

「はあ、い」と了念は遠くで、長い返事をす

手を觸れて見ると、いら／＼と指をさす。石壁を行き違して左へ折れると庫裏へ出る。庫裏の前に大きな木蓮がある。殆ど一抱へもあらう。高さは庫裏の屋根を抜いて居る。見上げると頭の上は枝である。枝の上も、赤枝である。さうして枝の重なり合つた上が月である。普通、枝があゝ重なると、下から突は見えぬ。花があれば猶見えぬ。木蓮の枝はいくら重なつても、枝と枝の間はほがらかに隙いてゐる。木蓮は樹下に立つ人の眼を驚す程の細い枝を徒らには豊らぬ。花さへ明かである。此の遙かなる下から見上げて一輪の花は、はつきり一輪に見える。其一輪がどこ迄かはらざ一輪迄吠いて居るか分らぬ。それにも聞はらざ一輪は遠に一輪で、一輪と一輪の間から、薄青い空が惘然と望まれる。花の色は無純白ではない。徒らに白のは寒過ぎる。専らに白のは、ことさらに人の眼を奪ふ巧みが見える。木蓮の色は夫ではない。純度の白きをわざと避けて、あた／＼かみのある淡黄に、奥床しくも自らを卑下して居る。余は石壁の上に立つて、此のおとなしい花が果々どこ迄も空裏に蔓る様を見上げて、しばらく茫然として居た。眼に落つるのは花ばかりである。葉は一枚もない。

「よう、来られた。無退屈だろ」

「あまり月がいゝから、ぶら／＼来ました」

「いゝ月ぢやな」と障子をあける。飛び石が二つ、松一本の外には何もない、平庭の向うは、すぐ懸崖と見えて、眼の下に懸崖の海が忽ちに開ける。急に気が大きくなつた様な心持ちである。漁火がこゝ、かしこに、ちらついて、遙かの末の空に入つて、星に化ける積りだらう。

「是はいゝ景色。和尙さん、障子をしまめて居るのは勿論ないぢやありませんか」

「左様よ。しかし毎晩見て居るからな」

「何晩見てもいゝですよ、此景色は。私なら常に見て居ます」

「ハ、いゝ。尤もあなたは畫工だから、わたしは少し違ふて」

「和尙さんだつて、うつくしいと思つて居るうちには畫工でさあ」

「なる程それもさうぢやろ。わしも遠慮の畫位は是で、書くがの。そら、こゝに掛けてある、此輪は先代がかかれたのぢやが、申々ようかいとる」

成程遠慮の畫が小さい床に掛かつてゐる。然し畫としては頗るまづいものだ。只俗氣がない。掛を撤はうと力めて居る所が一つもない。

「へえ、ん」

「博士と云ふとえらいものぢやろな」

「え、え。えらいんでせう」

「畫工にも博士がありさうなものぢやがな。なぜ無いだらう」

「さういへば、和尙さんの方にも博士がなけりやならないでせう」

「ハ、いゝ、まあ、そんなものかな。――何とか云ふ人ぢやつたて、此間逢うた人は――どこぞに名刺がある筈だが――」

「どこで御逢ひです、東京ですか」

「いやこゝで、東京へは、も二十年も出ん。近頃は電車とか云ふものが出来たさうぢやが、一寸乗つて見たい様な気がする」

様に屈しひしやけて、柄の方を下に、上へ上へと續き合はせた様に見える。あの杓子がいくつ櫛がつたら、御仕舞ひになるのか分らない。今夜のうちにも廂を突き破つて、屋根瓦の上迄出さうだ。あの杓子が出来る時には、何でも不意に、どこからか出て来て、びしやりと飛び附くに違ひない。古い杓子が新しい小杓子を生んで、その小杓子が長い年月のうちに段々大きくなる様には思はれない。杓子と杓子の連続が如何にも突飛である。こんな滑稽な樹はたんとあるまい。しかも澄ましたものだ。如何なる是佛と問はれて、座前の柏樹子と答へた僧があるよしだが、もし同様の間に接した場合には、余は一も二もなく、月下の霸王樹と應へるであらう。

少時、晁補之と云ふ人の紀行文を讀んで、未だに論議して居る句がある。一時に九月天高く露清く、山空しく、月明かに、仰いで星斗を視れば皆光大、たま／＼人の上にあるが如し。窓間の竹數十竿、相摩娑して聲切々已まず。竹間の松、森然として鬼魁の離立空髣の状の如し。二三子相顧み、魄動いて寒ぬるを得ず。運明皆去る」と又口の内で繰り返して見て、思はず笑つた。此霸王樹も時と場合によれば、余の魄を動かして、見るや否や山を迫り下げたであらう。輒に

木蓮の花計りなる空を渡る。と云ふ句を得た。どこやらで、鳩がやさしく鳴き合つて居る。

庫裏に入る。庫裏は明け放してある。遊人の居らぬ國と見える。狗は固より吠えぬ。

「御免」

と訪問れる。森として返事がない。

「頼む」

と案内を乞ふ。鳩の聲がく／＼と聞こえる。「頼みまゝいゝ」と大きな聲を出す。

「おゝ、いゝ」と遙かの向うで答へたものがある。人の家を訪うて、こんな返事を聞かされた事は決してない。やがて足音が廊下へ響くと、紙燭の影が、衝立の向う側にさした。小切主がひよこりとはらはれる。了念であつた。

「和尙さんは御出でかい」

「居られる。何しに御座つた」

「温泉に居る畫工が来た、取次いで御呉れ」

「畫工さんか。それぢや御上がり」

「斷らないでもないのかい」

「よろしかる」

余は下駄を脱いで上がる。

「行儀がわるい畫工さんぢやな」

「なぜ」



「つまらんものですよ。やかましくつて」  
「さうかな。劉大日に吠え、兎牛月に嘯ぐと云ふから、わしの様な田舎者は、却て困るかも知れんてなう」

「困りやしませんかね。つまらんすよ」  
「左様かな」

鐵瓶の口から煙が盛に出る。和尚は茶菓筒から茶器を取り出して、茶を注いでくれる。

「番茶を一つ御上がり。志保田の隠居さんの様な甘い茶ぢやない」

「いえ結構です」

「あなたは、さうやつて、方々あるく様に見受けるが矢張り畫をかく爲かの」

「ええ。道具は持つてあるまきすが、畫はかかないでも構はないんです」

「はあ、それぢや遊び半分かの」

「さうですな。さう云つても善いでせう。屍の勘定をされるのが、いやですからな」

「流石の御僧も、此語は解しかねたと見える。屍の勘定は何かな」

「東京に永く居ると屍の勘定をされますよ」  
「どうして」

「ハ、ハ、ハ、勘定丈ならいですが。人の屍を分析して、骨の穴が三角だの、四角だのつて

鳴く。  
「勘定可愛いものはない、わしが手をたたく、みな飛んでくる。呼んで見よか」

月は愈々明るい。しん／＼として、木蓮は幾葉の雲華を空裏に撃つて居る。沈んだる春夜の真中に、和尚ははたと掌を拍つ。聲は風中に死して一羽の鳩も下りぬ。

「下りんかいな。下りさうなものぢやが」

了念は余の顔を見て、一寸笑つた。和尚は鳩の眼が夜でも見えると思つて居るらしい。氣樂なものだ。

山門の所で、余は二人に別れる。見返ると、大きな丸い影と、小さな丸い影が、石畳の上に落ちて、前後して庫裏の方に消えて行く。

十二

基督は最高度に藝術家の態度を具したるものなりとは、オスカー・ワイルドの説と記憶してゐる。基督は知らず。觀海寺の和尚の如きは、正しく此資格を有して居ると思ふ。趣味があるといふ意味ではない。時勢に通じてゐると云ふ譯でもない。彼は畫と云ふ名の始と下すべからざる事やりますよ」

「はあ、矢張り衛生の方かな」  
「衛生ぢやありません。探偵の方です」  
「探偵? 成程、それぢや警察ぢやの。一體警察の、調査の、何の役に立つかの。なけりやならんかいの」

「さうですな、畫工には入りませんね」  
「わしにも入らんがな。わしはまだ調査の厄介になつた事がない」

「さうでせう」

「しかし、いくら警察が屍の勘定をしたて、構はんがな。澄まして居たら。自分にわるい事がなけりや、なんぼ警察ぢやて、どうもなるまいがな」

「屍位で、どうかされちや堪りません」

「わしが小坊主のとき、先代がよう云はれた。人間は日本橋の真中に驢馬をさらけ出して、恥づかしくない様にしなければ修業を積んだとは云はれてな。あなたもそれ修業をしたらよかる。旅杯はせんでも済む様になる」

「畫工になり済ませば、いつでもさうなれます」

「それぢや畫工になり済ましたらよかる」

「屍の勘定をされちや、なり切れませんよ」

「ハ、ハ、ハ、それ御覽。あの、あなたの泊まつ

らざる連房の幅を掛けて、よう出来た杯と得意である。彼は畫工に博士があるものと心得て居る。彼は鳩の眼を夜でも利くものと思つて居る。それにも關はず、藝術家の資格があると云ふ。彼の心は底のない藁の様に引き抜けてある。何も停滞して居らん。隨處に動き去り、任意に作し去つて、些の塵洋の腹部に沈没する氣色がない。もし彼の胸裏に一點の趣味を貼し得たならば、彼は之く所に同化して、行果走展の際にも、完全たる藝術家として存在し得るだらう。余の如きは、探偵に屍の数を勘定される間は、到底畫家にはなれない。畫架に向ふ事は出来る。小木板を握る事は出来る。然し畫工にはなれない。かうやつて、名も知らぬ山里へ来て、暮れんとする春色のなかに五尺の瘦軀を埋めつけて、始めて、眞の藝術家たるべき態度に吾身を置き得るのである。一たび此境界に入れば美の天下はわが有に歸する。尺素を染めず、寸毫を塗らざるも、われは第一流の畫工である。技に於て、ミケルアンゼロに及ばず、巧みな事ラファエルに譲る事ありとも、藝術家たるの人格に於て、古今の大家と歩武を齊しうして、毫も遜る所を見出だし得ない。余は此温泉場へ来てから、未だ一枚の畫もかかない。

繪の具箱は醒興に、擔いできたかの感さへある。人はあれでも畫家かと嘆ふかもしれぬ。いくら嘆はれても、今の余は眞の畫家である。立派な畫家である。かう云ふ境を得たものが、名畫をかくとは限らん。然し名畫かきを得る人は必ず此境を知らねばならん。朝飯をすまして、一本の數鳥をゆたかに吹かしたるとき余の觀想は以上の如くである。日は霞を離れて高く上つて居る。障子をあげて、後の山を眺めたら、若い樹が非常にすき通つて、例になく鮮やかに見えた。余は常に空氣と、物象と、彩色の關係を字宙で尤も興味ある研究の一と考へて居る。色を主にして空氣を出すか、物を主にして空氣をかくか。又は空氣を主にして其うちに色と物を織り出すか。畫は少しの氣合一つで色々な調子が出る。此調子は畫家自身の嗜好で異なつてくる。それは無論であるが、時と場所とで、自ら賦與されるものも亦當然である。英國人のかい山水に明るいものは一つもない。明るい畫が嫌ひなのかも知れぬが、よし好きであつても、あの空氣では、どうする事も出来ない。同じ英國でもグーデル杯は色の調子が丸で違ふ。違ふ譯である。彼は英人でありながら、かつて英國の



景色をかけた事がない。彼の書物は彼の郷土にはない。彼の本國に比すると、空氣の透明の度の非常に勝つて居る。埃及又は波斯邊の光景のみを擇んでゐる。従つて彼のかけた畫を、始めて見ると誰も驚く。美人にもこんな明らかな色を出すものがあるかと疑ふ位突然出来上がつて居る。

個人の嗜好はどうする事も出来ん。然し日本の山水を描くのが主意であるならば、吾々も亦日本固有の空氣と色を出さなければならん。いくら佛蘭西の繪がうまいと云つて、其色を其儘に寫して、此が日本の景色だとは云はれない。矢張り面のあたり自然に接して、朝な夕な雲容烟態を研究した揚句、あの色こそと思つたとき、すぐ三脚几を捲いで飛び出さなければならん。色は朝顔に移る。一たび機を失すれば、同じ色は容易に眼には落ちぬ。余が今見上げた山の端には、滅多にこの邊で見る事の出来ない程な好い色が充ちてゐる。折角来て、あれを逃がすのは惜しいものだ。一寸寫してきよう。

のは惜しい。是等を取つてするのは何人にとつても苦痛である。その苦痛を冒す爲には、苦痛に打ち勝つ丈の愉快がどこかに潜んで居らねばならん。畫と云ふも、詩と云ふも、あるは芝居と云ふも、此の悲愴のうちを離る快感の別々に過ぎふも、此趣を解し得て、始めて吾人の所作は壯烈にもなる、困難にもなる、凡ての困苦に打ち勝つて、胸中一點の無上趣味を満足せしめたる。肉體の苦しみを度外に置いて、物質上の不便を物とも思はず、勇猛精進の心を驅つて、人道の爲に、眼鑿に穿らるゝを面白く思ふ。若し人情なる狭き立脚地に立つて、藝術の定義を下し得るとすれば、藝術は、われ教育ある士人の胸裏に潜んで、邪を逐け正に就き、曲を斥け直にくみし、弱を扶け強を挫かねば、どうしても堪へられぬと云ふ一念の結晶して、燦として白日を射返すものである。

も心得ぬ下司下郎の、わが卑しき心根に比較して他を賤しむに至つては許し難い。昔巖頭の吟を遺して、五十丈の飛瀑を直下して急流に赴いた青年がある。余の視る所には、彼の青年は美の一字の爲に、捨つべからざる命を捨てたるものと思ふ。死其物は海に壯烈である、只其死を促すの動機に至つては解し難い。去れども死其物の壯烈をだに體し得ざるものが、如何にして藤村子の所作を嗤ひ得べき。彼等は壯烈の最後を遂ぐるの情を味はひ得ざるが故に、たとひ正當の事情のもとにも、到底壯烈の最後を遂げ得べからざる制限ある點に於て、藤村子よりは人格として劣等であるから、嗤ふ權利がないものと余は主張する。

此旅中に人情界に歸る必要はない。あつては折角の旅が無駄になる。人情世界から、ぢやぢややりする砂をふるつて、底にある、うつろいぬの金を眺めて暮らさなければならぬ。余自らも社會の一員を以て任じて居らぬ。純粹なる専門畫家として、己さへ、誦讀たる利害の累索を絶つて、僅に畫布裏に往來して居る。況や山を水をや他人をや。那美さんの行爲動作と雖も只其儘の姿と見るより外に致し方がない。

た儘、右の手を風の如く動かした。閃めくは稽妻か、二折れ三折れ胸のあたりを、するりと走るや否や、かちりと音がして、閃めきはすぐ消えた。女の左手には九寸五分の白鞘がある。委は忽ち障子の陰に隠れた。余は朝つばらから歌舞伎座を覗いた氣で宿を出る。

爪上りになる。鶯が所々で鳴く。左手がなだらかな谷へ落ちて、蜜柑が一面に積んである。右には高からぬ岡が二つ程並んで、此所にもあるは蜜柑のみと思はれる。何年前か一度此地に來た。指を折るのも面倒だ。何でも寒い師走の頃であつた。其時蜜柑山に蜜柑がべた生りに生る景色を始めて見た。蜜柑取りに一掃賣つてくれと云つたら、幾度も上げまじよ、持つて入らつしやいと答へて、樹の上で妙な節の唄をうたひ出した。東京では蜜柑の皮でさへ、藥種屋へ買ひに行かねばならぬのと思つた。夜になると、しきりに鐘の音がする。何だと聞いたら、蜜柑が鳴をとるんだと教へてくれた。其時は那美さんの、なの字も知らずに済んだ。

あんな考へをもつ余を、誤解してはならん。社會の公民として不適當だ杯と評しては尤も不届きである。善は行ひ難い、徳は施しにくい、節操は守り安からぬ、義の爲に命を捨てるして居る。しかも芝居をして居るとは氣がつかん。自然天然に芝居をして居る。あんなのを美的生活とでも云ふのだらう。あの女の御殿で畫の修業が大分出來た。



来た青海である。路は幾筋もあるが、合うては別れ、別れては合ふから、どれが本筋とも認められぬ。どれも路である代りに、どれも路でない。草のなかに、黒赤い地が見えたり隠れたりして、どの筋につながらるか見分けのつかぬ所に變化があつて面白。

どこへ腰を据えたものかと、草のなかを遠近と徘徊する。縁から見たときは書にならと思つた景色も、いざとなると存外つまらない。色も次第に變つてくる。草原をのそつくりうちに、何時しか描く氣がなくなつた。描かぬとすれば、地位は構はん、どこでも坐つた所がわが住居である。葉み込んだ春の日は、深く草の根に籠つて、どつかと尻を叩くと、眼に入らぬ陽炎を踏み潰した様な心持ちがする。

海は足の下に光る。遮る雲の一片さへ持たぬ春の日は、普く水の上を照らして、何時の間にかほとぼりは波の底迄浸み渡つたと思はる程暖かに見える。色は一刷毛の細青を平に流したる所々に、しろかねの細鱗を疊んで濃やかに動いて居る。春の日は限り無き天が下を照らして、天が下は限りなき水を湛へたる間には、白き帆が小指の爪程に見えるのみである。

然も其帆は全く動かない。往昔入貢の高麗船が遠くから渡つてくる時には、あんなに見えたであらう。其帆は大千世界を極めて、照らす日の世、照らさるゝ海の世のみである。

ごろりと寐る。帽子が額をすべつて、やけに阿彌陀となる。所々の草を一二尺抜いて、木瓜の小株が茂つてゐる。余が顔は丁度其一つの前に落ちた。木瓜は面白い花である。枝は頑固であつて曲がつた事がない。そんなら眞直かと云ふと、決して眞直でもない。只眞直な短かい枝に、眞直な短かい枝がある角度で衝突して、斜に構へつゝ全體が出来上がつて居る。そこへ、紅だか白だか要領を得ぬ花が安閑と咲く。柔らかな葉さへちらちら着ける。評して見ると木瓜は花のうちで、愚にして情つたものであらう。世間には拙を守ると云ふ人がある。此人が来世に生れ變ると蛇皮木瓜になる。余も木瓜になりたい。

子供のうち花の咲いた、葉のついた木瓜を切つて、面白く枝振を作つて、筆架をこしらへた事がある。それへ二錢五厘の水筆を立てかけて、白い徳が花と葉の間から、隠見するのを机へ載せて楽しんで。其日は木瓜の筆架ばかり氣にして寐た。あくる日、眼が覺めるや否や、飛び起

きて机の前へ行つて見ると、花は萎え葉は枯れて、白い徳が元の如く光つて居る。あんなに綺麗なものが、どうして、かう一晚のうちに、枯れるだらうと、その時は不審の念に堪へなかつた。今思ふと其時分の方が餘程出世間的である。

寐るや否や眼に付いた木瓜は二十年來の舊知己である。見詰めて居ると次第に氣が遠くなつて、いゝ心持ちになる。又時興が浮ぶ。

寐ながら考へる。一句を得る毎に寫生帖に記して行く。しばらくして出来上がった様だ。始めから讀み直して見る。

出門多所思。春風吹吾衣。芳草生車轍。廢道入微。停第而臨目。萬葉帶晴暉。聽黃鳥宛轉。觀清英紛霏。行盡平蕪遠。四詩古寺扉。孤懸高雲際。大空鷲鴻歸。寸心何窮窅。經緯忘是非。三十我欲老。韶光猶依依。遺造隨物化。悠然對芬菲。

あゝ出来た、出来た。是で出来た。寐ながら木瓜を觀て、世の中を忘れて居る感じがよく出た。木瓜が出なくつても、海が出なくつても、感じさへ出れば夫で結構である、と唸りながら、喜んでゐると、エヘンと云ふ人間の嘆息が聞

こえた。こいつは驚いた。寐返りをして、聲の響いた方を見ると、山の出鼻を回つて、雜木の間から、一人の男があらはれた。

茶の中折を被つてゐる。中折の形は崩れて、傾く縁の下から眼が見える。眼の恰好はわからんが、懐かにきよろ／＼ときよろつく様だ。藍の縞物の尻を端折つて、素足に下駄がけの出で立ち、何だか鑑定がつかない。野生の箭丈で判断すると正に野武士の價値はある。

男は細道を下りるかと思ひの外、曲り角から又引き返した。もと来た道へ委をかくすかと思ふと、さうでもない。又あるき直して行く。此草原を、散歩する人の外に、こんなに行きつ戻りつするものはない筈だ。然しあれが散歩の姿であらうか。又あんな男が此近邊に住んで居るとも考へられない。男は時々立ち留まる。首を傾げる。又は四方を見廻す。大いに考へ込む様にもある。人を待ち合はせる風にも取られる。何だかわからない。

余は此物騒な男から、つひに吾眼をはなす事が出来なかつた。別に恐ろしいでもない、又畫にしようと思ふ氣も出ない。只眼をはなす事が出来なかつた。右から左、左から右と、男に

添うて、眼を働かせてゐるうちに、男ははたと留まつた。留まると共に、又ひとり的人物が、余が視界に露出された。

二人は双方で互に認識した様に、次第に双方から近附いて来る。余が視界は漸々縮まつて、原の眞中で一點の狭き間に疊まれて仕舞ふ。二人は春の山を背に、春の海を前に、びたりと向き合つた。

男は無鬚野武士である。相手は？ 相手は女である。那美さんである。

余是那美さんの姿を見た時、すぐ今朝の短刀を連想した。もしや、懐に吞んで居りはせぬかと思つたら、さすが非人情の余もたいひやりとした。

男女は向き合つた儘、しばらくは、同じ態度で立つて居る。動く氣色は見えぬ。口は動かし居るかも知れんが、言葉は丸で閉こえぬ。男はやがて首を垂れた。女は山の方を向く。顔は余の眼に入らぬ。

山では、鶯が啼く。女は鶯に耳を借して、居るとも見える。しばらくすると、男が屹と、垂れた首を擧げて、半ば踵を回らしかける。尋常の様ではない。女は颯と體を開いて、海の方へ向き直る。帯の間から頭を出して居るの

は懐かしい。男は昂然として行きかゝる。女は二足前り、男の踵を渡つて進む。女は草履ばきである。男の留まつたのは、呼び留められたのか。振り向く瞬間に女の右手は帯の間へ落ちた。あぶない！

するりと抜け出したのは、九寸五分かと思ひの外、財布の様な包み物である。差し出した白い手の下から、長い紐がふら／＼と春風に揺れる。

片足を前に、腰から上を少しそらして、差し出した白い手頃に、紫の色。此文の姿勢で充分畫にはならぬ。

紫で一寸切れた圓面が、二三寸の間隔をとつて、振り返る男の體のこなし具合で、うまい挨拶につながられてゐる。不即不離とは此利那の有様を形容すべき言葉と思ふ。女は前を引く態度で、男は後へ引かれた様子だ。しかもそれが實際に引いてもひかれても居らん。両者の縁は紫の財布の盡くる所で、ふつりと切れてゐる。

二人の姿勢が斯くの如く美妙な調和を保つて居ると同時に、兩者の顔と、衣服には他く迄、對照が認められるから、畫として見ると一層の興味が深い。



存のずんぐりした、色黒の、髭づらと、くつきり縮まった額面に、襟の長い、進眉の、華奢な委。ぶつきら棒に身をひねつた下駄がけの野武士と、不器量の鎧袖さへしなやかに着こなした上、腰から上をおとなく反り身に控へたる幾形。はげた茶の帽子に、藍緞の尻切り出で立ちと、陽炎さへ燃やすべき楯目の通つた紫の色に、黒緞子のひかる奥から、ちらりと見せた帯揚げのなまめかしさ。凡てが好む趣である。

男は手を出して財布を受け取る。引きつ引かれつ巧みに平均を保ちつゝあつた二人の位置は愈ち崩れる。女はもう引かぬ、男は引かれうともせぬ。心的状態が輪を構成する上に、斯程の影響を興へようとは、畫家ながら、今迄氣がつかなかつた。

二人は左右へ分かれる。双方に氣合がないから、もう畫としては、支離滅裂である。雜木林の入口で男は一度振り返つた。女は淺をも見ぬ。すらくと、こちらへ歩行いてくる。やがて余の眞正面迄来て、

「先生、先生」

と二聲掛けた。是はしたり、何時目附かつたらう。

「何です」

と余は木瓜の上へ、鏡を出す。帽子は草原へ落ちた。

「何をそんな所でして入らつしやる」

「詩を作つて寝ておました」

「うそを仰しやい。今のを御覽でせう」

「今の？ 今の、あれですか。え、少々拜見しました」

「ホ、ホ、少々でなくても、澤山御覽なさればいいのに」

「實の所は澤山拜見しました」

「それ御覽なさい。まあ一寸、こつちへ出て入らつしやい。木瓜の中から出て入らつしやい」

余は唯々として木瓜の中から出て行く。

「また木瓜の中に御用があるんですか」

「もう無いんです。歸らうかとも思ふんです」

「それぢや御一所に歸りませうか」

「え、」

余は再び唯々として、木瓜の中に退いて、帽子を披り、輪の道具を纏めて、那美さんと一所にあるき出す。

「畫を御描きになつたの」

「やめました」

「こゝへ入らつして、まだ一枚も御描きなさらないぢやありませんか」

「え、」

「でも折角畫をかきに入らつして、些とも御かきなさらなくつちや、詰まりませんわね」

「なに詰まつてるんです」

「おやさう。なぜ？」

「何故でも、ちやんと詰まるんです。畫なんぞ描いたつて、描かなくつたつて、詰まる所は同じ事ですか」

「そりや洒落なの、ホ、ホ、随分呑氣ですねえ」

「こんな所へくるからには、呑氣にでもしなくつちや、来た甲斐がないぢやありませんか」

「なあに何處に居ても、呑氣になくつちや、生きてゐる甲斐はありませんよ。私なんぞは、今の様な所を人に見られても恥づかしも何とも思ひません」

「思はんでもい、でせう」

「さうですかね。あなたは今の男を一體何だと御思ひです」

「さうさな。どうもあまり、金持ちぢやありませんね」

「ホ、ホ、善く申りました。あなたは占ひの名人ですよ。あの男は、貧乏して、日本に居られないからつて、私に御金を貰ひに来たのです」

「へえ、どこから来たのです」

「城下から来ました」

「随分遠方から来たもんですね。それで、何所へ行くんですか」

「何でも滿洲へ行くさうですが」

「何しに行くんですか」

「何しに行くんですか。御金を拾ひに行くんだか、死に行くんだか、分りません」

此時余は眼をあげて、ちよと女の顔を見た。今結んだ口元には、微かなる笑の影が消えかゝりつゝある。意味は解せぬ。

「あれは、わたくしの亭主です」

迅雷耳を掩ふに違はず、女は突然として一刀浴びせかけた。余は全く不意撃を喰つた。無論そんな事聞く氣はなし、女も、よもや、此所迄曝け出さうとは考へて居なかつた。

「どうです、驚いたでせう」と女が云ふ。

「え、少々驚いた」

「今の亭主ぢやありません、離縁された亭主です」

「なる程、それで……」

「夫ぎりです」

「さうですか。——あの蜜柑山に立派な白壁の家がありますね。ありや、いゝ地位にあるが、

誰の家なんですか」

「あれが兄の家です。歸り路に一寸寄つて行きませう」

「用でもあるんですか」

「え、一寸頼まれものがあります」

「一所に行きませう」

細道の登り口へ出て、村へ下りずに、すぐ、右に折れて、又一丁程を登ると、門がある。門から玄關へかゝらずに、すぐ庭口へ廻る。女が無遠慮につか／＼行くから、余も無遠慮につか／＼行く。南向きの庭に、松樹が三四本あつて、土塀の下はすぐ蜜柑畠である。

女はすぐ、縁鼻へ腰をかけて、云ふ。

「いい景色だ。御覽なさい」

「成程、いいですな」

障子のうちには、靜かに人の氣合もせぬ。女は音なふ氣色もない。只腰をかけて、蜜柑畠を見下ろして不氣である。余は不思議に思つた。

元來何の用があるのかしら。

仕舞ひには話しもないから、兩方共無言の儘で蜜柑畠を見下ろして居る。午に過ぎる太陽は、まともに暖かい光線を、山一面にあびせて、眼に餘る蜜柑の葉は、葉裏迄蒸し透されて輝いてゐる。やがて、裏の納屋の方で、鶏が大

きな聲を出して、こけこつこつと鳴く。

「おやもう。御午ですね。用事を忘れて居た。久一さん、久一さん」

女は及び腰になつて、立て切つた障子を、からりと開ける。内は空しき十疊敷に、狩野派の双幅が空しく春の床を飾つて居る。

「久一さん」

納屋の方で漸く返事がする。足音が襖の向うでとまつて、からりと開くが早いか、白靴の短刀が疊の上へ轉がり出す。

「そら伯父さんの健別だよ」

帯の間に、いつ手が這入つたか、余は少しも知らなかつた。短刀は二三度とんぼ返りを打つて、靜かな疊の上を、久一さんの足下へ走る。作りがゆる過ぎたと見えて、びかりと、寒いものが一寸ばかり光つた。

十三



「出でなければ分らんさ。苦しい事もあるだ  
らうが、愉快な事も出て来るんだらう」と戦争  
を知らぬ久一さんが云ふ。

「久一さん、軍は好きか嫌ひかい」と那美さん  
が聞く。  
「出でなければ分らんさ。苦しい事もあるだ  
らうが、愉快な事も出て来るんだらう」と戦争  
を知らぬ久一さんが云ふ。

「さうさね」と久一さん。  
「さうさね」と久一さん。  
「さうさね」と久一さん。

「那美さんが軍人になつたら強かからう」兄さ  
んが妹に話しかけた第一の言葉は是である。

「足らないたつて、持つて生れた奴だから仕方  
がありませぬわ」  
「持つて生れた奴は色々になるものです」  
「自分の勝手にですか」  
「え、」  
「女だと思つて、人をたんと馬鹿になさい」  
「あなたが女だから、そんな馬鹿を云ふのです  
よ」  
「それぢや、あなたの顔を色々にして見せて頂  
く」  
「是程毎日色々になつてれば澤山だ」  
「女は黙つて向うをむく。川縁はいつか、水と  
すれ／＼に低く着いて、見渡す川もは、一面  
のげんげで埋まつてゐる。鮮やかな紅の滴々  
が、いつの雨に流されてか、半分落けた花の海  
は霞のなかに果しなく廣がつて、見上げる半空  
には静寂たる一帯が半腹から微かに春の雲を吐  
いて居る。」  
「あの山の向うを、あなたは越して入らした」  
と女が白い手を袖から外へ出して、夢の様な  
春の山を指す。  
「天狗殿はあの處ですか」  
「あの翠の濃い下の、紫に見える所があり  
ませう」

「出でなければ分らんさ。苦しい事もあるだ  
らうが、愉快な事も出て来るんだらう」と戦争  
を知らぬ久一さんが云ふ。

「久一さん、軍は好きか嫌ひかい」と那美さん  
が聞く。  
「出でなければ分らんさ。苦しい事もあるだ  
らうが、愉快な事も出て来るんだらう」と戦争  
を知らぬ久一さんが云ふ。

「さうさね」と久一さん。  
「さうさね」と久一さん。  
「さうさね」と久一さん。

「那美さんが軍人になつたら強かからう」兄さ  
んが妹に話しかけた第一の言葉は是である。

「足らないたつて、持つて生れた奴だから仕方  
がありませぬわ」  
「持つて生れた奴は色々になるものです」  
「自分の勝手にですか」  
「え、」  
「女だと思つて、人をたんと馬鹿になさい」  
「あなたが女だから、そんな馬鹿を云ふのです  
よ」  
「それぢや、あなたの顔を色々にして見せて頂  
く」  
「是程毎日色々になつてれば澤山だ」  
「女は黙つて向うをむく。川縁はいつか、水と  
すれ／＼に低く着いて、見渡す川もは、一面  
のげんげで埋まつてゐる。鮮やかな紅の滴々  
が、いつの雨に流されてか、半分落けた花の海  
は霞のなかに果しなく廣がつて、見上げる半空  
には静寂たる一帯が半腹から微かに春の雲を吐  
いて居る。」  
「あの山の向うを、あなたは越して入らした」  
と女が白い手を袖から外へ出して、夢の様な  
春の山を指す。  
「天狗殿はあの處ですか」  
「あの翠の濃い下の、紫に見える所があり  
ませう」

「出でなければ分らんさ。苦しい事もあるだ  
らうが、愉快な事も出て来るんだらう」と戦争  
を知らぬ久一さんが云ふ。

「久一さん、軍は好きか嫌ひかい」と那美さん  
が聞く。  
「出でなければ分らんさ。苦しい事もあるだ  
らうが、愉快な事も出て来るんだらう」と戦争  
を知らぬ久一さんが云ふ。

「さうさね」と久一さん。  
「さうさね」と久一さん。  
「さうさね」と久一さん。

「那美さんが軍人になつたら強かからう」兄さ  
んが妹に話しかけた第一の言葉は是である。

「足らないたつて、持つて生れた奴だから仕方  
がありませぬわ」  
「持つて生れた奴は色々になるものです」  
「自分の勝手にですか」  
「え、」  
「女だと思つて、人をたんと馬鹿になさい」  
「あなたが女だから、そんな馬鹿を云ふのです  
よ」  
「それぢや、あなたの顔を色々にして見せて頂  
く」  
「是程毎日色々になつてれば澤山だ」  
「女は黙つて向うをむく。川縁はいつか、水と  
すれ／＼に低く着いて、見渡す川もは、一面  
のげんげで埋まつてゐる。鮮やかな紅の滴々  
が、いつの雨に流されてか、半分落けた花の海  
は霞のなかに果しなく廣がつて、見上げる半空  
には静寂たる一帯が半腹から微かに春の雲を吐  
いて居る。」  
「あの山の向うを、あなたは越して入らした」  
と女が白い手を袖から外へ出して、夢の様な  
春の山を指す。  
「天狗殿はあの處ですか」  
「あの翠の濃い下の、紫に見える所があり  
ませう」



存外合でも備かです」と左の肩を叩いて見せる。袖では戦争談が舞である。

舟は漸く町らしいなかへ這入る。腰障子に御看と書いた居酒屋が見える。古風な籠籠籠が見える。材木の置場が見える。人力車の音さへ時々聞こえる。乙鳥がちりと腹を返して飛ぶ。家鴨があく／＼鳴く。一行は舟を捨てて停車場に向ふ。

愈々現世世界へ引きずり出された。汽車の見える所を、現世世界と云ふ。汽車程二十世紀の文明を代表するものはあるまい。何百と云ふ人間を同じ箱へ詰めて轟と通る。情容赦はない。詰め込まれた人間は皆同程度の速力で、同一の停車場へとまつてさうして、同様に蒸氣の四深に溶されねばならぬ。人は汽車へ乗ると云ふ。余は積み込まれると云ふ。人は汽車で行くと云ふ。余は運搬されると云ふ。汽車程個性を軽蔑したものはない。文明はあらゆる限りの手段をつくして、個性を發達せしめたる後、あらゆる限りの方法によつて此個性を踏み附けようとする。一人前何れ何れかの地面を與へて、此地面のうちでは寐るとも起きるとも勝手にせよと云ふのが現今の文明である。同時に此何れ何れの周囲に鐵柵を設けて、これよりさきへは一步も出て

はならぬぞと威嚇かすのが現今の文明である。何れ何れのうちで自由を握にしたものが、此鐵柵外にも自由を握にしたくなるのは自然の勢である。潰れむき文明の國民は日夜に此鐵柵に噛み附いて咆哮して居る。文明は個人に自由を與へて虎の如く猛からしめたる後、之を檻牢の内に投げ込んで、天下の平和を維持しつゝある。此平和は眞の平和ではない。動物園の虎が見物人を睨めて、空轉んで居ると同様な平和である。檻の鐵柵が一本でも抜けたら――世は滅茶々々になる。第二の佛蘭西革命は此時に起るのであらう。個人の革命は今既に日夜に起りつゝある。北歐の偉人イブセンは此革命の起るべき状態に就いて具さに其例證を吾人に與へた。余は汽車の猛烈に、見界なく、凡ての人を貨物同様に心得て走る様を見る處に、客車のうちに閉ぢ籠められたる個人と、個人の個性に寸毫の注意をだに拂はざる此鐵柵とを比較して、――あぶない、あぶない、氣を附ければあぶないと思ふ。現代の文明は此あぶないで鼻を衝かれる位充滿してゐる。おさき眞間に自動する汽車はあぶない標本の一つである。

停車場前の茶店に腰を下ろして、蓬餅を眺めながら汽車論を考へた。是は寫生帳へかく課

にも行かず、人に話す必要もないから、だまつて、餅を食ひながら茶を飲む。

向うの床几には二人かけて居る。等しく草鞋穿きて、一人は赤毛布、一人は千草色の股引の膝頭に縞布をあてて、縞布のあたつた所を手で抑へてゐる。

「矢つ張り駄目かね」

「駄目さあ」

「牛の様に胃袋が二つあるといふなあ」

「二つあれば申し分はなえさ、一つが惡くなりや、切つて仕舞へば済むから」

此田舎者は胃病と見える。彼等は滿洲の野に吹く風の身ひも知らぬ。現代文明の弊をも認めぬ。革命とは如何なるものか、文字とへ聞いた事もあるまい。或は自己の胃袋が一つあるか二つあるか大すら辨じ得んだらう。余は寫生帳を出して、二人の姿を描き取つた。

「ちやらん／＼と號鈴が鳴る。切符は既に買つてある。」

「さあ、行きましょよ」と那美さんが立つ。

「どうれ」と老人も立つ。一行は揃つて改札場を通り抜けて、プラットフォームへ出る。號鈴がしきりに鳴る。

長蛇が蜿蜒つて来る。文明の長蛇は口から黒い煙を吐く。

「愈々御別れか」と老人が云ふ。

「それでは御機嫌よう」と久一さんが頭を下げる。

「死んで御出で」と那美さんが再び云ふ。

「荷物は来たかい」と兄さんが聞く。

蛇は吾々の前にとまる。横腹の戸がいくつもあく。人が出たり、這入つたりする。久一さんは乗つた。老人も兄さんも、那美さんも、余もそとに立つて居る。

車輪が一つ廻れば久一さんは既に吾等が世の人ではない。遠い、遠い世界へ行つて仕舞ふ。其世界では煙硝の卑ひの中で、人が働いて居る。さうして赤いものに滑つて、無暗に轉ぶ。空では大きな音がど／＼と云ふ。是からさう云ふ所へ行く久一さんは車のなかに立つて無言の儘、吾々を眺めて居る。吾々を山の中から引き出した久一さんと、引き出された吾々の因果はこゝで切れる。もう既に切れかゝつて居る。車の戸と窓があいて居る丈で、御互の顔が見える丈で、行く人と留まる人の間が六尺計り隔たつて居る丈で、因果はもう切れかゝつて居る。此車掌が、びしやり、と戸を閉てながら、此

方へ走つて来る。一つ閉てる毎に、行く人と、留まる人の距離は益々遠くなる。やがて久一さんの車室の戸もびしやりとしまつた。世界はもう二つに分つた。老人は思はず窓側へ寄る。青年は窓から首を出す。

「あぶない。出ますよ」と云ふ聲の下から、未練のない鐵車の音がごとりと／＼と調子を取つて動き出す。窓は一つ一つ、余等の前を通る。久一さんの顔が小さくなつて、最後の三等列車が、余の前を通るとき、窓の中から又一つ顔が出た。

茶色のはげた中折帽の下から、髯だらけの野武士が名残惜し氣に首を出した。そのとき、那美さんと野武士は思はず顔を見合はせた。鐵車はごとりと／＼と運轉する。野武士の顔はすぐ消えた。那美さんは茫然として、行く汽車を見送る。其茫然のうちには不思議にも今迄かつて見た事のない一雫が一面に浮いてゐる。

「それだ！ それだ！ それが出れば畫になります」

と余は那美さんの肩を叩きながら小聲に云つた。余が胸中の畫面は此の唯の間に成就したのである。











をやる水をやる。籠の出し入れをする。しない時は、家のものを呼んでさせる事もある。自分は只文鳥の聲を聞くが、役目の様になった。それでも縁側へ出る時は、必ず籠の前へ立留つて文鳥の様子を見た。大抵は狭い籠を苦しめないで、二本の留り木を満足さうに往復して居た。天氣の好い時は薄い日を扇子越に浴びて、しきりに鳴き立てゝゐた。然し三重吉の云つた様に、自分の顔を見てことさらに鳴く気色は更になかつた。

自分の指からちかちかに餌を食ふ杯と云ふ事は無論なかつた。折々機嫌のいい時は籠の中の粉などを人指指の先へつけて竹の間から一寸出して見ることがあるが、文鳥は決して近づかない。少し無遠慮に突き込んで見ると、文鳥は指の太いのを驚いて白い翼を煽りて籠の中を騒がせるのみであつた。二三度試みた後、自分は氣の毒になつて、此の鳥は永久に斷念して仕舞つた。

今の世にこんな事の出来るものが居るかどうだか甚だ疑はしい。恐らく古代の聖徳の仕事だらう。三重吉は喉を吐いたに違ない。

或日の事、書齋で籠の如くベンの音を立て、倦びしい事を書き連ねてゐると、不圖妙な音が耳に這入つた。縁側でさらさらさら云ふ。

の長い、香のすなりとした、一寸首を曲げて人を見る癖があつた。

粟はまだある。水もまだある。文鳥は満足してゐる。自分は粟も水も易へず書齋へ引込んで、書齋へ又縁側へ出た。食後の活動かたぐい、五六間の廻り縁を、あるきながら書見する時であつた。所が出て見ると粟がもう七分がた過ぎてゐる。水も全く濁つて仕舞つた。書齋を縁側へ抛り出して置いて、急いで餌と水を見へて遣つた。

次の日も亦遅く起きた。しかも顔を洗つて飯を食ふまでは縁側を覗かなかつた。書齋に歸つてから、或は昨日の様に、家人が籠を出して置かばせぬかと、一寸縁へ顔を出して見たら、果して出してあつた。其の上餌も水も新しくなつて居た。自分はやつと安心して首を書齋に入れた。途端に文鳥は千代々々と鳴いた。それで引込めた首を又出して見た。けれども文鳥は再び鳴かなかつた。げんげん顔をして扇子越に籠の箱を眺めてゐた。自分はどうも机の前に居た。

書齋の中では相懸りベンの音がさらさらす。書きかけた小説は人分にかどつた。指の先

が冷たい。今朝つけた佐倉炭は白くなつて、摩五徳に懸けた銅瓶が乾かしてゐる。炭取は空だ。手を敲いたが一寸も所送進まない。立つて戸を叩けると、文鳥は籠に似ず留り木の上になつと留つてゐる。能く見ると足が一本しかない。自分は炭取を縁に置いて、上からこいで籠の中を覗き込んだ。いくら見ても足は一本しかない。文鳥は此種奇な一本の細い足に體身を託して黙然として、籠の中に片附いてゐる。

自分は不思議に思つた。文鳥に就て萬事を説いた三重吉も此の事は抜いたと見える。自分が炭取に炭を入れて歸つた時、文鳥の足は一本であつた。しばらく寒い縁側に立つて眺めて居たが、文鳥は動く氣色もない。音を立てないで目詰めて居ると、文鳥は丸い眼を次第に細くし出した。大方眠たいのだらうと思つて、そつと書齋へ這入らうとして、一歩足を動かすや否や、文鳥は又眼を開いた。同時に眞白な胸の中から細い足を一本出した。自分は戸を閉めて火鉢へ炭をついだ。

小説は次第に忙しくなる。朝は依然として寤坊をする。一度家のものが文鳥の世話をしてくられてから、何だか自分の責任が軽くなつた様な心持がする。家のものが忘れる時は、自分が餌

をやる水をやる。籠の出し入れをする。しない時は、家のものを呼んでさせる事もある。自分は只文鳥の聲を聞くが、役目の様になった。それでも縁側へ出る時は、必ず籠の前へ立留つて文鳥の様子を見た。大抵は狭い籠を苦しめないで、二本の留り木を満足さうに往復して居た。天氣の好い時は薄い日を扇子越に浴びて、しきりに鳴き立てゝゐた。然し三重吉の云つた様に、自分の顔を見てことさらに鳴く気色は更になかつた。

自分の指からちかちかに餌を食ふ杯と云ふ事は無論なかつた。折々機嫌のいい時は籠の中の粉などを人指指の先へつけて竹の間から一寸出して見ることがあるが、文鳥は決して近づかない。少し無遠慮に突き込んで見ると、文鳥は指の太いのを驚いて白い翼を煽りて籠の中を騒がせるのみであつた。二三度試みた後、自分は氣の毒になつて、此の鳥は永久に斷念して仕舞つた。

今の世にこんな事の出来るものが居るかどうだか甚だ疑はしい。恐らく古代の聖徳の仕事だらう。三重吉は喉を吐いたに違ない。

或日の事、書齋で籠の如くベンの音を立て、倦びしい事を書き連ねてゐると、不圖妙な音が耳に這入つた。縁側でさらさらさら云ふ。

の長い、香のすなりとした、一寸首を曲げて人を見る癖があつた。

粟はまだある。水もまだある。文鳥は満足してゐる。自分は粟も水も易へず書齋へ引込んで、書齋へ又縁側へ出た。食後の活動かたぐい、五六間の廻り縁を、あるきながら書見する時であつた。所が出て見ると粟がもう七分がた過ぎてゐる。水も全く濁つて仕舞つた。書齋を縁側へ抛り出して置いて、急いで餌と水を見へて遣つた。

次の日も亦遅く起きた。しかも顔を洗つて飯を食ふまでは縁側を覗かなかつた。書齋に歸つてから、或は昨日の様に、家人が籠を出して置かばせぬかと、一寸縁へ顔を出して見たら、果して出してあつた。其の上餌も水も新しくなつて居た。自分はやつと安心して首を書齋に入れた。途端に文鳥は千代々々と鳴いた。それで引込めた首を又出して見た。けれども文鳥は再び鳴かなかつた。げんげん顔をして扇子越に籠の箱を眺めてゐた。自分はどうも机の前に居た。

書齋の中では相懸りベンの音がさらさらす。書きかけた小説は人分にかどつた。指の先

が冷たい。今朝つけた佐倉炭は白くなつて、摩五徳に懸けた銅瓶が乾かしてゐる。炭取は空だ。手を敲いたが一寸も所送進まない。立つて戸を叩けると、文鳥は籠に似ず留り木の上になつと留つてゐる。能く見ると足が一本しかない。自分は炭取を縁に置いて、上からこいで籠の中を覗き込んだ。いくら見ても足は一本しかない。文鳥は此種奇な一本の細い足に體身を託して黙然として、籠の中に片附いてゐる。

自分は不思議に思つた。文鳥に就て萬事を説いた三重吉も此の事は抜いたと見える。自分が炭取に炭を入れて歸つた時、文鳥の足は一本であつた。しばらく寒い縁側に立つて眺めて居たが、文鳥は動く氣色もない。音を立てないで目詰めて居ると、文鳥は丸い眼を次第に細くし出した。大方眠たいのだらうと思つて、そつと書齋へ這入らうとして、一歩足を動かすや否や、文鳥は又眼を開いた。同時に眞白な胸の中から細い足を一本出した。自分は戸を閉めて火鉢へ炭をついだ。

小説は次第に忙しくなる。朝は依然として寤坊をする。一度家のものが文鳥の世話をしてくられてから、何だか自分の責任が軽くなつた様な心持がする。家のものが忘れる時は、自分が餌



壺り一寸開きを立てた儘知らぬ顔で済まして  
ゐた。其の晩寢たのは十二時過ぎであつた。便  
所に行つた序、氣掛りだから念の爲一應縁側  
へ廻つて見ると――

能は箱の上から落ちて居る。さうして横に倒  
れてゐる。水人も御意も引繰返つてゐる。粟は  
一面に縁側に散らばつてゐる。留り木は抜け出  
してゐる。文鳥はしつぱやかに鳥籠の棧にかじ  
り附いて居た。自分は明日から誓つて此の縁側  
に糞を入れまいと決心した。

翌日文鳥は鳴かなかつた。粟を山盛り入れて  
やつた。水を漲る程入れてやつた。文鳥は一本  
足の儘長らく留り木の上を動かかなかつた。午飯  
を食つてから、三重吉に手紙を書かうと思つて、  
二三行書き出すと、文鳥がちつと鳴いた。自分  
は手紙の筆を留めた。文鳥が又ちつと鳴いた。  
出て見たら粟も水も大分減つてゐた。手紙に大  
限にして裂いて捨てた。

翌日文鳥が又鳴かなかつた。留り木を下り  
て籠の底へ腹を押し附けて居た。籠の所が少  
し膨らんで、小さい毛が逆の様に亂れて見え  
た。自分は此の朝、三重吉から例の件で某所迄  
来て呉れと云ふ手紙を受取つた。十時迄にと云  
ふ依頼であるから、文鳥を其の儘にして置いて

出た。三重吉に逢つて見ると例の件が色々長く  
なつて、一所に午飯を食ふ。一所に晩飯を食ふ。  
其の上明日の都合迄約束して宅へ歸つた。歸  
つたのは夜の九時頃である。文鳥の事は悉皆忘  
れて居た。寝れたから、すぐ床へ這入つて寢て  
仕舞つた。

翌日眼が覚めるや否や、すぐ例の件を思ひだ  
した。いくら當人が承知だつて、そんな所へ  
嫁に遣るのは行本よくあるまい。まだ子供だか  
ら何處へでも行けと云はれる所へ行く氣にな  
るんだらう。一旦行けば無暗に出られるものぢ  
やない。世の中には満足しながら不幸に陥つ  
て行く者が澤山ある。杯と考へて楊枝を使つ  
て、朝飯を済まして又例の件を片附けに出掛け  
て行つた。

歸つたのは午後三時頃である。玄関へ外  
を懸けて廊下へひき書箱へ這入る積りで例の縁  
側へ出て見ると、鳥籠が箱の上に出してあつた。  
けれども文鳥は籠の底に反つ歸り返つて居た。  
二本の足を硬く揃へて、胸と直線に伸ばしてゐ  
た。自分は籠の傍に立つて、じつと文鳥を見守  
つた。黒い眼が眠つてゐる。臉の色は薄蒼く變  
つた。  
前夜には粟の殻ばかり溜つてゐる。啄むべき

は一粒もない。水人は底の光る程潤れてゐる。  
西へ廻つた日が硝子戸を洩れて鮮やかに籠に落ち  
かゝる。蓋に塗つた漆は、三重吉の云つた如  
く、いつの間にか黒味が脱けて、朱の色が出て  
来た。

自分は冬の日に色づいた朱の蓋を眺めた。空  
になつた例を眺めた。空しく橋を渡してゐる  
二本の留り木を眺めた。さうして其の下に横は  
る硬い文鳥を眺めた。

自分はこゝんで兩手に鳥籠を抱へた。さうし  
て、書箱へ持つて這入つた。十疊の真中へ鳥籠  
を卸して、其の前へかしまつて、籠の戸を開  
いて、大きな手を入れて、文鳥を握つて見た。  
柔かい羽根は冷切つてゐる。

拳を籠から引き出して、握つた手を開けると、  
文鳥は静に掌の上にある。自分は手を開けた  
まゝ、しばらく死んだ鳥を見詰めて居た。それ  
から、そつと座布團の上に卸した。さうして、  
烈しく手を鳴らした。

十六になる小女が、はいと云つて敷居際に手  
をつかへる。自分はいきなり布團の上にある文  
鳥を握つて、小女の前へ抛り出した。小女は  
俯向いて墨を眺めた儘黙つてゐる。自分は、餌  
を遣らないから、とうとう死んで仕舞つたと云

ひながら、下女の顔を睥めつけた。下女は夫で  
も黙つてゐる。

自分は机の方へ向き直つた。さうして三重吉  
へ端書をかいた。「家人が餌を遣らないものだ  
から、文鳥はとうとう死んで仕舞つた。たのみ  
もせぬものを籠へ入れて、しかも餌を遣る義務  
へ盡さないのは残酷の至りだ」と云ふ文句で  
あつた。

自分は、之れを投函して来い、さうして其の  
鳥をそつちへ持つて行けと下女に云つた。下女  
は、どこへ持つて参りますかと聞き返した。ど  
こへでも勝手に持つて行けと怒鳴りついたら、  
罵いて寮所の方へ持つて行つた。

しばらくすると裏庭で、子供が文鳥を埋るん  
だくと騒いでゐる。庭掃除に頼んだ植木屋が、  
御座さん、此處いらが好いでせうと云つてゐる。  
自分は進まぬながら、書箱でペンを動かしてゐ  
た。

翌日は何だか頭が重いので、十時頃になつて  
漸く起きた。顔を洗ひながら裏庭を見ると、昨  
日植木屋の聲のしたあたりに、小さい公札が、  
蒼い木賊の一株と並んで立つてゐる。高きは木  
賊よりもずつと低い。庭下駄を穿いて、日影の  
霜を踏み碎いて、近附いて見ると、公札の表に

は、此の土手登るべからずとあつた。筆子の手  
蹟である。

午後三重吉から返事が来た。文鳥は可愛想な  
事を致しましたとある計りで家人が悪いとも殘  
酷だとも一向書いてなかつた。



Wednesday April 17, 1944

永日小品抄

元日

雑煮を食つて、書齋に引き取ると、しばらくして三四人来た。いづれも若い男である。其内の一人がフロックを着てゐる。着なれない所爲か、メルトンに對して妙に遠慮する傾きがある。あとのものは皆和服で、かつ不潔着の儘だからと正月らしくない。此連中がフロックを眺めて、やあ——やあ——とツツ、云つた。みんな驚いた證據である。自分も一番あとで、やあと云つた。

フロックは白い手巾を出して、用もない顔で拭いた。さうして、頻りに居齋を飲んだ。ほかの連中も大いに膳のものを突つてゐる。所へ虚子が車で来た。是は黒い羽織に黒い紋付を着て、極めて舊式に極つてゐる。あなたは黒紋付を持つてゐますが、矢張能をやるから其必要があるんでせうと聞いたら、虚子が、え、左うですと答へた。さうして、一つ讀ひませんかと云ひ出した。

た。自分は讀つても宜う御座んすと應じた。

それから二人して東北と云ふものを讀つた。餘程以前に習つた丈で、殆ど復習と云ふ事をやらぬから、所々甚だ風味である。其上、我ながら覺えない聲が出た。漸く讀つて仕舞ふと、聞いてゐた若い連中が、申し合せた様に自分を不味いと云ひ出した。中にもフロックは、あなただの聲はひよろ／＼してゐると云つた。此連中は元來、讀のうの字も心得ないもの共である。だから虚子と自分の優劣はとも分らないだらうと思つてゐた。然し、批評をされて見ると、素人でも理の當然な所だから已を得ない。馬鹿を云へといふ勇氣も出なかつた。

すると虚子が近來、鼓を習つてゐるといふ話を始めた。讀のうの字も知らない連中が、一つ打つて御覽なさい、是非御聞かせなさいと所望してゐる。虚子は自分に、ぢや、あなた讀つて下さいと依頼した。是は唯の何物たるを知らない自分に取つては、迷惑でもあつたが、又斬新といふ興味もあつた。讀ひませうと引き受

けた。虚子は車夫を走らして鼓を取り寄せた。鼓がくると、藁所から七輪を持って來させて、かん／＼いふ炭火の上で鼓の皮を焙り始めた。みんな驚いて見てゐる。自分も此猛烈な焙りかたには驚いた。大丈夫ですかと尋ねたら、え大丈夫ですと答へながら、指の先で強切つた皮の上をかん／＼と弾いた。一寸好い音がした。もう宜いでせうと、七輪から卸して、鼓の緒を締めにかゝつた。紋服の男が、赤い緒をいぢくつてゐる所が何となく品が好い。今度はみんな感心して見てゐる。

虚子はやがて羽織を脱いだ。さうして鼓を抱いた。自分は少し持つて呉れと頼んだ。第一彼が何處いらで鼓を打つか見當が付かないから一寸打ち合せをしたい。虚子は、こゝで掛聲をいくつ掛けて、こゝで鼓をどう打つから、御道りなさいと懇に説明して呉れた。自分にはとても呑み込めない。けれども合點の行く迄、研究してみれば、二三時間はかゝる。已を得ず、好い加減に領承した。そこで羽衣の曲を讀ひ出した。春霞たなびきにけりと半行程來るうちに、どうも出が好くなかつたと後悔し始めた。甚だ無努力である。けれども素中から急に振るひ出しては、總體の調子が崩れるから、

虚子が斬う猛烈に來やうとは夢にも豫期してゐなかつた。元來が優美な長なものに許り考へてゐた掛聲は、丸で眞逆勝負のその様に自分の鼓腹を動かした。自分の讀は此掛聲で二三度放を打つた。それが漸く静まりかけた時に、虚子が又腹一杯に横合から感傷した。自分の聲は感傷される度による／＼する。さうして小さくなる。しばらくすると聞いてゐるものがくす／＼笑ひ出した。自分も内心から馬鹿々々しくなつた。其時フロックが眞先に立つて、どつと吹き出した。自分も調子につれて、一所に吹き出した。

それから散々な批評を受けた。中にもフロックのは尤も皮肉であつた。虚子は微笑しながら、仕方なしに自分の鼓に、自分の讀を合せ、日出度讀ひ納めた。やがて、まだ聞らなければならぬ所があると云つて、車に乗つて歸つて行つた。あとから又色々若いものに冷かされた。細君一所になつて夫を慰した末、高濱さんが鼓を御打ちなさる時、襟袖の袖がびらびら見えたと、大変好い色だつたと賞めてゐる。フ

ロツクは忽ち賛成した。自分は虚子の襟袖の色も、袖の色もびら／＼する所も決して好いとは思はない。

泥棒

寝ようと思つて次の間へ出ると、娘達の臭がぶんとした。扇の歸りに、火が強過ぎる様だから、氣を付けては不可ないと妻に注意して、自分の部屋へ引取つた。もう十一時を過ぎてゐる。床の中の夢は常の如く安らかであつた。寒い割に風も吹かず、半鐘の音も耳に應へなかつた。熟睡が時の世界を盛り潰した様に正體を失つた。

すると忽然として、女の泣聲で眼が覺めた。聞けばもよと云ふ下女の聲である。此の下女は驚いて狼狽ると何時でも泣聲を出す。此の間家の赤ん坊を湯に入れた時、赤ん坊が湯氣に上つて、引き付けたといつて五分許泣聲を出した。自分が此下女の異様な聲を聞いたのは、それが始めてである。嘔り上げる様にして早口に物を云ふ。訴へる様な、口説く様な、詫を入れる様な、情人の死を悲しむ様な——到底普通の驚愕の場台に出る、鋭くつて短い感投詞の調

子ではない。

自分は今云ふ通り此の異様な聲で、眼が覺めた。聲は聲かに妻の寢てゐる、次の部屋から出る。同時に襖を渡れて赤い火が漏れ、暗い書齋に射した。今聞ける聲の裏に、此の光が弱くや否や自分は火事だと合點して飛び起きた。さうして、突然隔りの唐紙をがらりと開けた。其の時自分は顛覆返つた炬燵を想像してゐた。焦げた蒲團を想像してゐた。漲る煙と、燃える畳とを想像してゐた。所が開けて見ると、洋燈は例の如く點つてゐる。妻と子供は常の通り寢てゐる。炬燵は背の位地にちやんとあつた。凡てが、寢る前に見た時と同じである。平和である。暖かである。たゞ下女が泣いて居る。

下女は妻の蒲團の裾を抑へる様にして早口に物を云ふ。妻は眼を覺まして、ばち／＼させる許りで別に起きる様子もない。自分は何事か起つたのか殆ど判じかねて、敷居際に突立つた儘ぼんやり部屋の中を見廻した。途端に下女の泣聲のうちに、泥濘といふ二字が出た。それが自分の耳に這入るや否や、凡てが解決された様に自分は忽ち妻の部屋を大股に横切つて、次の間に飛び出しながら、何だ！と怒鳴りつけた。



けれども飛び出した次の部屋は真暗である。續く臺所の雨戸が一枚外れて、美しい月の光が部屋の入口迄射し込んでゐる。自分は眞夜中に人の住居の奥を照らす月影を見て、おのづから寒いと感じた。素足の儘板の間へ出て臺所の流し元迄来て見ると、四邊は寂としてゐる。表を覗くと月計りである。自分は、戸口から一步も外へ出る氣にならなかつた。

引き返して、妻の所へ来て、泥棒は逃げた、安心しろ、何も竊られやしない、と云つた。妻は此の時漸く起き上つてゐた。何も云はずに洋燈を持って暗い部屋迄出て来て、算筒の前に置いた。観音開きが取り外されてゐる。針が明けた儘になつてゐる。妻は自分の顔を見て、矢つ張り竊られたんですと云つた。自分も漸く泥棒が竊つた後で逃げたんだと氣が付いた。何だか急に馬鹿々々しくなつた。片方を見ると、泣いて起しに來た下女の蒲團が取つてある。其の枕元にも一つ算筒がある。其の算筒の上にも又用算筒が乗つてゐる。暮の事なので醫者の藥讀其の他に此内に這入つてゐるのださうだ。妻に調べさせると此方の方は元の通りだと云ふ。下女が泣いて縁側の方から飛び出したので、泥棒も已を得ず仕事の中途で逃げたのかも知れない。

其の内、外の部屋に寝て居たものもみんな起きて來た。さうしてみんな色々な事を云ふ。もう少し前に小用に起きたのにか、今夜は寝つかれないで、二時頃迄は眼が冴えてゐたのか、悉く残念さうである。そのなかで、十になる長女は、泥棒が臺所から這入つたのも、泥棒がみし／＼縁側を歩いたのも、すつかり知つてゐると云つた。あらまあとお房さんが驚いてゐる。お房さんは十八で、長女と同じ部屋に寝る親類の娘である。自分は又床へ這入つて寝た。

明くる日は此騒動で、例よりは少し遅く起きた。顔を洗つて、朝食を遣つてゐると、臺所へ下女が泥棒の足痕を見つけたとか、見付けないとか騒いでゐる。面倒だから書齋へ引き取つた。引き取つて十分も経つたかと思ふと、玄關で靴むと云ふ聲がした。勇ましい聲である。臺所の方へ通じない様だから、自分で取次に出て見たら、巡査が椅子の前に立つてゐた。泥棒が這入つたさうですと云つてゐる。戸締りはよくしてあつたのですかと聞くから、いや、何うも餘り好くありませんと答へた。ちや仕方がない、締りが悪いと何處からでも這入りますよ、

一枚々々雨戸へ釘を差さなくちや不可せんと注意する。自分にはあ／＼と返事をして置いた。此の巡査に遇つてから、悪いものは、泥棒ぢやなくつて、不取締な主人である様な心持になつた。

巡査は臺所へ這つた。其處で妻を捉まへて、粉失した物を手帳に書き付けて居る。機珍の丸帯が一本です、丸帯と云ふのは何ですか、丸帯と書いて置けば解るですか、さう、それでは機珍の丸帯が一本と、夫から

下女がにや／＼笑つてゐる。此の巡査は丸帯も腹合せも一向知らない。頗る單簡な面白い巡査である。やがて粉失の目録を十點ばかり書き上げて其の下に價格を記入して、すると、て百五十圓になりますと念を押して歸つて行つた。

自分は此の時始めて、何を竊られたかを明瞭に知つた。失くなつたものは十點、悉く帶である。昨夜這入つたのは泥棒であつた。御正月を眼前に控へた妻は異な顔をしてゐる。子供が三箇日にも着物を着換へる事が出来ないのださうだ。仕方がない。

妻過には刑事が來た。座敷へ上つて色々見てゐる。桶の中に蠟燭でも立てて仕事をしやしない。

いかと云つて、臺所の小桶迄檢べてゐた。まあ御茶でも御上がんなさいと云つて、日當りの好い茶の間へ申させて話をした。

泥棒は大抵下谷、淺草邊から電車までやつて來て、明くる日の朝又電車で歸るのださうだ。大抵は扱まらないものださうだ。扱まへると御事の方が損になるものださうだ。泥棒を電車に乗せると電車が損になる。裁判に出ると、辨當代が損になる。機珍費は警視廳が半分取つて仕舞ふのださうだ。餘りを各警察へ割り振るのださうだ。牛込には刑事がたつた三四人しかゐないのださうだ。警察の力なら大抵の事は出来る者と信じてゐた自分は、甚だ心細い氣がした。話をして聞かせる刑事も心細い顔をしてゐた。

出入のものを呼んで戸締りを直さうと思つたら生憎、暮で用が立て込んで來られぬ。其うちに夜になつた。仕方がないから、元の通りに置いて寝る。みんな氣味が悪さうである。自分も決して好い心持ではない。泥棒は各自勝手に取締るべきものであると警察から宣告された一級だからである。

夫でも昨日の今日だから、まあ大丈夫だらうと、氣を樂に持つて枕に就いた。すると又夜中

に妻から起された。さつきから、臺所の方がたがた云つてゐる。氣味がわるいから起きて見て下さいと云ふ。成程がた／＼いふ。妻はもう泥棒が這入つた様な顔をしてゐる。

自分はそつと床を出た。忍び足に妻の部屋を横切つて、隣の換の傍をくると、次の間では下女が扉を叩いてゐる。自分は出来る丈靜かに換を開いた。さうして、眞暗な部屋の中に一人立つた。ごとりと云ふ音がする。俄かに臺所の入口である。暗いなかを影の動く様に三歩程音のする方へ近くと、もう部屋の出口である。障子が立つてゐる。そとはすぐ板敷になる。自分は障子に身を寄せて、暗がりでも耳を立てた。やがて、ごとりと云つた。しばらくして又ごとりと云つた。自分は此の怪しい音を約四五回聞いた。さうして、これは板敷の左にある、戸棚の奥から出るに違ないといふ事を憶めた。忽ち普通の歩調と、尋常の所作をして、妻の部屋へ歸つて來た。鼠が何か囁つてゐるんだ、安心しろと云ふと、妻はさうですかと難有さうな返事をした。夫れからは二人とも落付いて寝て仕舞つた。

朝になつて又顔を洗つて、茶の間へ來ると、妻が鼠の囁つた聲を、膳の前へ出して、昨夜の

火鉢

眼が覺めたら、昨夜也いて寝た儘で火鉢の上で冷たくなつてゐた。硝子戸越しに、霜の聲を聴めると、重い空が幅三尺程の煙に見えた。胃の痛みは大分除れたらしい。思ひ切つて、床の上へ起き上がると、豫想よりも寒い。窓の下に昨日の雪が其の儘である。

風呂場は水でかち／＼光つてゐる。水道は凍り着いて、栓が利かない。漸くの事で温水摩撻を済まして、茶の間で紅茶を茶碗に移してゐると、二つになる男の子が例の通り泣き出した。この子は一昨日も一日泣いてゐた。昨日も泣き続けに泣いた。妻にどうかしたのかと聞くと、どうもしたのぢやない、寒いからだと云ふ。仕方がない。成程泣き方がぐ／＼で痛くも苦しくない様である。けれども泣く位だから、ど



こか不安な所があるのだらう。聞いてみると、仕舞には此方が不安になつて来る。時によると小悪らしくなる。大きな聲で叱りつけ度い事もあるが、何しろ、叱るには餘り小き過ぎると思つて、つい我慢をする。一昨日も昨日も左うであつたが、今日も亦一日左うなのかと思ふと、朝から心持が好くない。胃が悪いので此の頃は朝飯を食はぬ掟にしてあるから、紅茶茶碗を持つた儘、書齋へ退いた。

火鉢に手を解して、少し暖たまつてゐると、子供は向うの方でまだ泣いてゐる。其うち、掌丈は煙が出る程熱くなつた。けれども、背中から肩へ掛けては無暗に寒い。殊に足の先は冷え切つて痛い位である。だから仕方なしに蓋としてみた。少しでも手を動かすと、手が何處か冷たい所に觸れる。それが刺にでも觸つた程神経に應へる。首をぐるりと回してさへ、頸の付根が着物の襟にひやりと滑るのが堪へ難い感じである。自分は寒さの壓迫を四方から受けて、十畳の書齋の真中に凍んでゐた。此の書齋は板の間である。椅子を用ひべき所を、鉢蓋を敷いて、普通の畳の如くに想像して坐つてゐる。所が敷物が狭いので、四方とも二尺がたは、つるつるした板の間が刺き出しに光つてゐる。涙

出つ食はした。座敷へ上げて、色々身の上着を聞いてゐると、吉田はほろ／＼涙を流して泣き出した。其内奥の方では響者が来て何だかごたごたしてゐる。吉田が漸く歸ると、子供が又泣き出した。とう／＼湯に行つた。

湯から上つたら始めて暖つたかになつた。晴晴して、家へ歸つて書齋に入ると、洋燈が點いて窓掛が下りてゐる。火鉢には新しい切炭が活けてある。自分は座布團の上にとつかりと坐つた。すると、妻が奥から悪いでせうと云つて書齋湯を持って来て呉れた。お政さんの容體を聞くと、ことによると盲腸炎になるかも知れないんださうですよと云ふ。自分は書齋湯を手に受けて、もし悪い様だったら、病院に入れてやるが可いと答へた。妻はそれが宜いでせうと茶の間へ引き取た。

妻が出て行つたらあとが急に静かになつた。全くの夜の夜である。泣く子は幸ひに寝たらしい。熱い書齋湯を吸りながら、あかきい洋燈の下で、續き立ての切炭のぼち／＼鳴る音に耳を傾けてゐると、赤い火氣が、圓はれた灰の中心で灰に揺れてゐる。時々薄青い煙が炭の股から出る。自分は此の火の色に、始めて一日の暖味を覺えた。さうして次第に白くなる灰の表を

として此の板の間を眺めて、凍んでゐると、男の子がまだ泣いてゐる。とても仕事をする勇氣が出ない。

所へ妻が一寸時計を拝借と遣入つて来て、又雪になりましたと云ふ。見ると、細かいのが何時の間にか、降り出した。風もない濁つた空の途中から、靜かに、急がずに、冷冽に、落ちて来る。

「おい、去年、子供の病氣で、煙爐を焚いた時には炭代が幾何要つたかな」

「あの時は月末に廿八圓掛ひました」

自分は妻の答を聞いて、座敷煙爐を諦念した。座敷煙爐は裏の物置に轉がつてゐるのである。

「おい、もう少し子供を靜かに出来ないかな」

妻は已を得ないと云ふ様な顔をした。さうして、云つた。

「お政さんが御腹が痛いつて、大分苦しうですから、林さんでも頼んで見て貰ひませうか」

お政さんが二三日寝てゐる事は知つてゐたが、夫程悪いとは思はなかつた。早く響者を呼んだら可からうと、此方から促す様に注意すると、妻は左うしませうと答へて、時計を持つた儘出て行つた。襖を開けると、どうも此の部屋の変い事と云つた。

猫の盆

五分程見守つてゐた。

早稲田へ移つてから、猫が段々寄せて来た。一向に子供と遊ぶ氣色がない。日が當ると縁側に寝てゐる。前足を揃へた上に、四角な頸を載せて、じつと庭の植込を眺めた儘、いつ迄も動く様子が見えない。子供がいくら其の傍で騒いでも、知らぬ顔をしてゐる。子供の方でも、初めから相手にしなくなつた。此猫はとても遊び仲間に出来ないと云はん許りに、舊友を他人扱ひにしてゐる。子供のみではない、下女はたゞ三度の食を、臺所の隅に置いてやる丈で其の外には、殆ど構ひ附けなかつた。しかも其の食は大抵近所にゐる大きな三毛猫が来て食つて仕舞つた。猫は別に怒る様子もなかつた。喧嘩をする所を見た試しもない。たゞ、じつとして寝てゐた。然し其の寝方に何所となく餘裕がない。伸んびり樂々と身を横に、日光を領してゐるのと違つて、動くべきせきがないために、是れでは、まだ腹容し足りない。懶さの度がある所迄通り越して、動かなければ淋しいが、動くに猶淋しいので、我慢して、じつと辛抱してゐる様に見えた。其の眼は、何時でも庭の植込を見てゐるが、彼れは恐らく木の葉も、幹の形も意識してゐなかつたのだらう。青味が、つた黄色い瞳子を、ぼんやりと所に落ち附けてゐるのみである。彼れが家の小供から存在を認められぬ様に、自分でも、世の中の存在を突然認めてゐなかつたらしい。

夫れでも時々用があるとき見えて、外へ出て行く事がある。すると何時でも近所の三毛猫から追懸けられる。さうして、怖いものだから、縁側を飛び上がった、立て切つてある障子を突き破つて、圍爐裏の傍迄逃げ込んで来る。家のものが、彼れの存在に氣が附くのは此の時である。彼れも此の時に限つて、自分が生きてゐる事實を、満足に自覺するのだらう。

是れが度重なるにつれて、猫の長い尻尾の毛が段々抜けて来た。始めは所々がぼく／＼穴の様に落ち込んで見えたが、後には赤肌に脱け廣がつて、見るも氣の毒な程にだらりと垂れてゐた。彼れは萬事に疲れ果てた體軀を屈し曲げて、しきりに縮い局部を舐め出した。

おい猫がどうかしたやうだと云ふと、さうですね、矢つ張り年を取つた所爲でせうと、妻は至極冷淡である。自分も其の儘にして放つて

まだ、かちかんで仕事をする氣にならない。實を云ふと仕事は山程ある。自分の原稿を一回分書かなければならない。ある未知の青年から頼まれた短篇小説を二三篇讀んで置く義務がある。ある雑誌へ、ある人の作を手紙を付けて紹介する約束がある。此の二三箇月中に讀む書で讀めなかつた書籍は机の横に堆か／＼積んである。此の一週間は仕事をしようと思つて机に向ふと人が来る。さうして、皆何か相談を持ち込んでくる。その上に胃が痛む。其の點から云ふと今日は幸ひである。けれども、どう考へても、寒くて億劫で、火鉢から手を離す事が出来ない。

すると玄關に車を横付けにしたものがある。下女が来て、長澤さんが御出になりましたと云ふ。自分は火鉢の傍に凍だ儘、上眼道をして、這入つて来る長澤を見上げながら、寒くて動けないよと云つた。長澤は懐中から手紙を出して、此の十五日は舊の正月だから、是非都合して呉れとか何とか云ふ手紙を讀んだ。相變らず金の相談である。長澤は十二時過に歸つた。けれども、まだ寒くて體がこたない。いつそ湯にでも行つて、元氣を付けようと思つて、手拭を提げて玄關へ出掛かると、御免下さいと云ふ吉田に



置いた。すると、しばらくしてから、今度は三度もの時々吐く聲になつた。咽喉の所に大きな波を打たして、嘔とも、しゃくりとも附かない苦しうな音をさせる。苦しうだけれども、已を得ないから、気が附くと表へ追ひ出す。でなければ屋の上でも、布圍の上でも容赦なく汚す。來客の用意に拵へた八反の鹿布圍は、大方彼れの爲に汚されて仕舞つた。一どうも仕様がないな。腸胃が悪いんだらう、赤丹でも水に溶いて飲まして置れ。

妻は何とも云はなかつた。二三日してから、寶丹を飲ましたかと聞いたら、飲ましても駄目です、口を開きませんといふ答をした後で、魚の骨を食べさせると吐くんですと説明するから、ぢや食はせんが好いぢやないかと、少し船どんに叱りながら書見をしてゐた。

猫は吐気がなくなりさへすれば、依然として、大人しく寝てゐる。此の頃では、七つと身を練める様にして、自分の身を支へる後側丈が使であるといふ風に、如何にも切り詰めた脚踏まりをする。眼附も少し變つて来た。始めは近い視線に、遠くのもの映る如く、悄然たるうちに、どこか落着いたが、それが次第に怪しく動いて来た。けれども眼の色は段々沈んで行

く。日が落ちて微かな積雲があらはれる様な気がした。けれども放つて置いた。妻も氣にも掛けなかつたらしい。小供は無言の事さへ忘れてゐる。

ある晩、彼は子供の寝る夜兵の裾に腹遣になつてゐたが、やがて、自分の捕つた魚を取り上げられる時に出す様な唸聲を擧げた。此の時變だなど氣が附いたのは自分丈である。子供はよく寝てゐる。妻は針仕事に餘念がなかつた。しばらくすると猫が又唸つた。妻は漸く針の手を止めた。自分は、どうしたんだ、夜中に子供の頭で鳴られちや大變だと云つた。まさかと妻は又構舞の裾を覗き出した。猫は折々唸つてゐた。明くる日は團圓裏の縁に乗つたり、一日唸つてゐた。茶を注いだり、薬を取つたりするのが氣味が悪い様であつた。が、夜になると猫の事は自分も妻も丸で忘れて仕舞つた。猫の死んだのは實に其の晩である。朝になつて、下女が裏の物置に薪を出しに行つた時は、もう硬くなつて、古い藁の上に倒れて居た。

妻はわざ／＼其の死を見に行つた。夫れから今迄の冷淡に引き更へて急に驚き出した。出入の車夫を頼んで、四角な墓標を買つて来て、何か書いて遣つて下さいと云ふ。自分は表に猫

の墓と書いて、裏に此の下に積雲起る宵あらんと認めた。車夫は此の儘、埋めても好いんですかと聞いてゐる。まさか火葬にも出来ないぢやないかと下女が冷かした。

子供も急に猫を可愛がり出した。墓標の左右に硝子の燵を二つ添けて、萩の花を深山捕した。茶碗に水を汲んで、墓の前に置いた。花も水も毎日取り替へられた。三日日の夕方に四つになつた。自分はこの時書齋の窓から見てゐた。—— たつた一人墓の前へ来て、しばらく白木の柩を見てゐたが、やがて手に持つた、おもちやの杓子を卸して、猫に供へた茶碗の水をしゃくつて飲んだ。それも一度ではない。萩の花の落ちこぼれた水の源りは、靜かな夕暮の中に、幾度か愛子の小さい呼吸を潤はした。

猫の命日には、妻が乾皮一切れの餅と、鱈節を掛けた一杯の飯を墓の前に供へる。今でも忘れた事がない。たゞ此の頃では、庭先持つて出ずに、大抵は茶の間の簾の上へ載せて置くやうである。

行列

書齋の戸が何時の間にか、妙分明いて、低い廊下が二尺許見える。廊下の盡きる所は唐めいた手溜に遮られて、上には硝子戸が立て切つてある。青い空から、まともに落ちて来る日が、軒端を斜に、硝子を通して、縁側の手前丈を明るく色づけて、書齋の戸口迄はうと暖かに射しを。しばらく日の照る所を見詰めてゐると、眼の底に陽炎が湧いた様に、春の思ひが儼かになる。

其の時此の二尺、あまりの隙間に、空を踏んで、手溜の高さ程のものがあらはれた。赤に白く唐草を浮き織りにした紺紐を輪に結んで、額から髪の上へすぼりと嵌めた間に、海棠と思はれる花を青い葉ごと、ぐるりと挿した。黒髪に薄紅の唇が大きな葉の如くはつきり見えた。割合に詰つた頸の真下から、一髪になつて、二一枚の葉が縁迄ふはく／＼と動いてゐる。袖も手も足も見えない。影は廊下に落ちた日を、するりと抜ける様に通つた。後から、

今度は少し低い、眞紅の厚い織物を颯天から肩先迄被つて、餘る背中に笹の葉の葉の模様を背負つてゐる。胸中にたゞ一葉、消炭色の中に取り残された縁が見える。夫程程の模様は

大きかつた。廊下に置く足よりも大きかつた。其の足が赤くちら／＼と三足程動いたら、低いものは、戸口の幅を、音なく行き過ぎた。

第三の頭巾は白と藍の辨慶の袴子である。眉廂の下にあらはれた横顔は丸く彫らんでゐる。其の片頬の眞中が林檎の熟した様に濃い。尻丈見える茶褐色の眉毛の下が急に落ち込んで、思はざる邊から丸い鼻が膨れた頬を少し乗り越して、先丈顔の外へ出た。顔から下は一面に黄色い綿で包まれてゐる。長い袖を三寸餘も縁に牽いた。是れは頭より高い胡麻竹の杖を突いて来た。杖の先には光を帯びた鳥の羽をふきふきと着けて、照る日に輝かした。縁に赤く黄色い綿の、袖らしい裏が、銀の縁に光つたと思つたら是も行き過ぎた。

すると、すぐ後から眞白な顔があらはれた。額から始まつて、平たい頬を塗つて、頸から耳の附根迄透ぼつて、腕の様に静かである。中に眸丈が活きてゐた。唇は紅の色を重ねて、青く光線を反射した。胸のあたりは鳩の色の襟に見えて、下は裾迄はつと視線を亂してゐる中に、小さなダイヤモンドを抱へて、長い弓を腰かに掛いでゐる。二足で通り過ぎる後には、背の中へ黒い襪子の四角な片を中て、其の眞中にあ

る金絲の輻が、一度に日に浮いた。最後に出たものは、全く小さい。手溜の下から轉け落ちさうである。けれども大きな顔をしてゐる。其中でも頭は殊に大きい。それへ五色の冠を戴いてあらはれた。冠の中央にあるぼつちが高く聳えてゐる様に思はれる。身には半の字の模様のある筒袖に、藤鼠の天露紋の房の下つたものを、背から腰の下迄、角に垂れて、赤い足袋を踏んでゐた。手に持つた朝鮮の團扇が身體の半分程ある。團扇には赤と青と黄で巴を漆で描いた。

行列は靜かに自分の前を過ぎた。開け放しになつた戸が、空しい日の光を、書齋の入口に送つて、縁側に幅四尺の影しさを感じた時、向うの隅で急にダイヤモンドを擦る音がした。ついで、小さい咽喉が寄り合つて、どつと笑ふ聲がした。

宅の子供は毎日母の羽織や風呂敷を出して、こんな遊戯をしてゐる。

下宿

始めて下宿をしたのは北の高峯である。赤煉瓦の小さな二階建が氣に入つたので、



自分の部屋へ這入ると間もなく、茶を飲みに来いと云つて呼びにきた。今日も曇つてゐる。薄暗い食堂の戸を開けると、主婦がたつた一人、暖爐の横に茶器を控へて坐つてゐた。石炭を燃して呉れたので、幾分か陽気な感じがした。燃えつた灰の餘りに照らされた主婦の顔を見ると、うすく火熱つた上に、心持御白粉を塗けてゐる。自分は部屋の入り口で化粧のしきみと云ふ事を、じみくと悟つた。主婦は自分の印象を見抜いた様な眼遣ひをした。自分が主婦から一家の事情を聞いたのは此の時である。

主婦の母は、二十五年の昔、ある佛蘭西人に嫁いで、此の娘を擧げた。幾年か連れ添つた後、夫は死んだ。母は娘の手を引いて、再び獨逸人の許へ嫁いだ。その獨逸人が昨夜の老人である。今では倫敦のエスト・エンドで仕立屋の店を出して、毎日々々そこへ通勤してゐる。先妻の子も同じ店に働いてゐるが、親子非常に仲が悪い。一つ家にゐても、口を利いた事が無い。息子は夜夜度遅く歸る。玄關で靴を脱いで足袋既足になつて、爺に知れない様に廊下を通つて、自分の部屋へ這入つて寝て仕舞ふ。母は餘程前に失くなつた。死ぬ時に自分の事を突々も云ひ置いて死んだのだが、母の財産はみんな

がら、英吉利は曇つてゐて、寒くて不可なりと云つた。花でも此の通り奇麗でないかと教へた積りなのだらう。

自分は此の中で此の水仙の乏しく咲いた模様と、此の女のひすばつた顔の中を流れてゐる、色の細めた血の涙とを比較して、遠い佛蘭西で見ると、吸ひかたを想像した。主婦の黒い髪や黒い眼の裏には、幾年の昔に消えた春の匂の空しき歴史があるのだらう。あなたは佛蘭西語を話しますかと聞いた。いゝやと答へようとする舌先を返つて、二三句続け様に、滑らかな南の方の言葉を使つた。斯ういふ昔の勝つた喉から、どうして出るだらうと思ふ位美しいアクセントであつた。

其夕、晚餐の時は、頭を上げた親の白い老人が卓に着いた。是が私の親父ですと主婦から紹介されたので始めて主人は年寄であつたんだと気が附いた。此の主人は妙な言葉遣をする。一寸聞いても決して英人ではない。成程親子して、流暢を渡つて、倫敦へ落ち附いたものだなと合點した。すると老人が、私は獨逸人であると、尋ねもせぬのに向うから名乗つて出た。自分は少し見當が外れたので、さうですかと云つた限りであつた。

阿希の手に渡つて、一錢も自由にする事が出来ない。仕方がないから、かうして下宿をして小遣を拵へるのである。アゲニスは一

主婦は夫れより先を語らなかつた。アゲニスと云ふのは此處のうちに使はれてゐる十三四の女の子の名である。自分は其の時今朝見た息子の顔と、アゲニスとの間に何處か似た所がある様な気がした。恰もアゲニスは焼麴を地へて厨から出て来た。

「アゲニス、焼麴を食べるかい」

アゲニスは黙つて、一片の焼麴を受け取つて又厨の方へ退いた。

一箇月の後自分は此の下宿を去つた。

過去の匂ひ

割合に高い一週二磅の宿料を拂つて、裏の部屋を一間借り受けた。其の時表を専領してゐるK氏は目下蘇格蘭遊中であつた。其の歸らないのだと主婦の説明があつた。

主婦と云ふのは、眼の凹んだ、鼻のしゃくれた、顎と頬の尖つた、鋭い顔の女で、一寸見ると、年恰好の御断が出来ない程、女性を超越して居る。指、髪、意地、利かぬ氣、疑惑、あらゆる弱點が、露かな眼鼻を散々に弄んだ結果、かう拗ねくれた人相になつたのではあるまいかと自分は考へた。

主婦は此の國に似合はしからぬ黒い髪と黒い眼を有つてゐた。けれども言語は普通の英吉利人と少しも違つた所がない。引き移つた當日、階下から茶の案内があつたので、降りて行つて見ると、家族は誰もゐない。北向の小さい食堂に、自分は主婦とたつた二人並向ひに坐つた。日の當つた事のない様に薄暗い部屋を見廻すと、マントルピースの上に淋しい水仙が活けてあつた。主婦は自分に茶だの御断を勧めながら、四方山の話をした。其の時何かの拍子で、生れ故郷は英吉利ではない、佛蘭西であるといふ事を打ち明けた。さうして黒い眼を動かして、後の前ノ場を描いてある水仙を顧りみな

部屋へ歸つて、書物を讀んでゐると、此の下宿の親子が氣に懸つて堪らない。あの爺さんは骨張つた娘と較べて何處も似た所がない。顔中は腫れ上つた様に膨れてゐる眞中に、ずんぐりは肉の多い鼻が穿んで、細い眼が二つ着いてゐる。南亞の大統領にクルーゲルと云ふのがあつた。あれによく似てゐる。すつきりと持つよく此方の眸に映る顔ではない。其の上娘に對しての物の云ひ方が和氣を感してゐる。尙が利かなくつて、もご／＼してゐる顔に何となく調子の悪い所が見える。娘も阿希に對するときは、險相な顔が、いと險相になる様に見える。どうしても普通の親子ではない。——自分は今考へて寝た。

翌日朝飯を食ひに下りると、昨夕の親子の外に、又一人家族が居てゐる。新しく食堂に連なつた人は、血色の好い、愛嬌のある、四十恰好の男である。自分は食堂の入口で此の男の顔を見た時、始めて、生氣のある人間社會に住んでゐる様な心持がした。My brotherと主婦が其の男を自分に紹介した。欠つ張り亭主では無かつたのである。然し兄弟とはどうしても受取れない位顔立が違つてゐた。

其の日は中食を外でして、三時過ぎに歸つて、

は黒い服を着て居た。骨張つて脊の股けた様な手を前へ出して、Kさん、是がNさんと云つたが、全く云ひ切らない先に、又一本の手を相手の方へ寄せて、Nさん、是れがKさんと、公平に雙方を等分に引き合せて。

自分は老令嬢の態度が、如何にも、假で、一種重要な氣に充ちた形式を具へてゐるのに、妙からず驚かされた。K君は自分の向に立つて、奇麗な二重輪の尻に鞭を寄せながら、微笑を渡らしてゐた。自分は笑ふと云はんよりは寧ろ矛盾の淋しみを感した。幽霊の儀で、結婚の儀式を行つたら、斯んな心持ではあるまいかと、立ちながら考へた。凡て此の老令嬢の黒い影の動く所は、生氣を失つて、忽ち古蹟に變化する様に思はれる。眼つて其の肉に觸れば、隔れた人の血が、其所丈冷たくなるとしか想像出来ない。自分は戸の外に消えてゆく女の足音に半ば頭を回らした。

老令嬢が出て行つたあとで、自分とK君は忽ち親しくなつて仕舞つた。K君の部屋は美しい絨氈が敷いてあつて、白絹の窓掛が下がつてゐて、立派な安樂椅子とロッキング チェアが備へ附けてある上に、小さな装室が別に附屬してゐる。何より嬉しいのは斷えず暖爐に火を



焚いて、情氣もなく光つた石炭を崩してゐる事である。

是れから自分はK君の部屋で、K君と二人で茶を飲むことにした。晝はよく近所の料理店へ一所に出掛けた。勘定は必ずK君が拂つて呉れた。K君は何でも英港の調査に来てゐるとか云つて、大分金を持つてゐた。家にゐると、海老茶の罎子に花鳥の刺繍のあるドレスシング・ガウンを着て、甚だ愉快さうであつた。之に反して自分は日本を出た儘の着物が太分汚れて、見事な始末であつた。K君は餘りだと云つて新調の費用を貸して呉れた。

二週間の間、K君と自分とは色々な事を話した。K君が、今に應内閣を作るんだと云つた事がある。應内閣に生れたもの丈で内閣を作るから應内閣と云ふんださうである。自分に、君は何時の生れかと聞くから應三年だと答へたら、それぢや、閣員の資格があると笑つてゐた。K君は應か應二年か元年生れだと答へてゐる。自分はもう一年の事で、K君と共に權機に參する權利を失ふ所であつた。

こんな面白い話をしてゐる間に、時々下の家族が鳴り上る事があつた。するとK君は何時でも眉をひそめて、首を振つてゐた。アゲニス

と云ふ小さい女が一番可哀想だと云つてゐた。アゲニスは朝になると石炭をK君の部屋に持つて来る。晝過ぎには茶とタバと麵包を持つて来る。だまつて持つて来て、だまつて置いて歸る。いつ見ても昔糊めた顔をして、大きな潤のある目で一寸挨拶をする丈である。影の様にあらはれては影の様に下りて行く。嘗て足音のした試しがない。

ある時自分は、不愉快だから、此の家を出ようと思ふとK君に告げた。K君は賛成して、自分はかうして調査の爲方々飛び歩いてゐる身體だから、構はないが、君は、もつとコンフォダブルな所へ落ち着いて勉強したら可からうと云ふ注意をした。其の時K君は地中海の向側へ渡るんだと云つて、しきりに旅装をととのへてゐた。

自分が下宿を出るとき、老令嬢は切に思ひとまる様にと頼んだ。下宿料は負ける、K君のゐない間は、あの部屋を使つても構はないと云つたが、自分はとうとう前の方へ移つて仕舞つた。同時にK君も遠くへ行つて仕舞つた。二三箇月してから、突然K君の手紙に接した。旅から歸つて来た。當分此處にゐるから遊びに來いと書いてあつた。すぐ行きたかつたけれど

も、色々都合があつて、北の果敢推し掛ける時隙がなかつた。一週間程して、イースリントン迄行く用事が出来たのを幸ひて、歸りにK君の所へ回つて見た。

表二階の窓から、例の羽二重の窓掛が引き絞つた罎子に映つてゐる。自分は暖かい煙爐と、海老茶の罎子の刺繍と、安樂椅子と、快活なK君の旅行談を豫想して、勇んで、門を入つて、階段を駆け上る様に罎子をとんとんと打つた。戸の向側に足音がしないから、通じないのかと思つて、再び罎子に手を掛けようとする途端に、戸が自然と開いた。自分は敷居から一歩なかへ足を踏み込んだ。さうして、詫びる様に自分をじつと見上げてゐるアゲニスと顔を合はした。其の時此の三箇月程忘れてゐた、過去の下の句が、狭い廊下の真中で、自分の喚聲を、箱妻の閃めく如く、刺激した。其の句のうちには、黒い髪と黒い眼と、クルーゲルの様な顔と、アゲニスに似た息子と、息子の影の様なアゲニスと、彼等の間に、頗る秘密を、一度に一齊に合んでゐた。自分は此の句を嗅いだ時、彼等の情意、動作、言語、顔色を、あざやかに暗い地獄の裏に認めた。自分は二階へ上がつてK君に逢ふに堪へなかつた。

### 暖かい夢

風が高い建物に當つて、思ふ如く眞直に抜けれないで、急に箱妻に折れて、頭の上から、斜に鋪石を吹き飛ばして来る。自分は歩みながら、持つてゐた山高帽を右の手で抑へた。前に客待の御者が一人ゐる。御車から、此有様を眺めて居たと見えて、自分が帽子から手を離して、姿勢を正すや否や、人指指を壁に立てた。乗らないかと云ふ符徴である。自分は乗らなかつた。すると御者は右の手に拳骨を固めて、烈しく胸の邊を打ち出した。二三間離れて聞いてゐても、とん／＼音がする。倫敦の御者はかうして、己れとわが手を吸めるのである。自分は振り返つて一寸此の御者を見た。剃り懸つた堅い帽子の下から、鬚に侵された厚い髪の毛が食み出している。毛布を纏ぎ合せた様な粗い茶の外套の背中の右に其の腹を張つて、肩と平行になる迄怒らしつゝ、とん／＼胸を敲いてゐる。まるで一種の器械の活動する様である。自分は再び歩き出した。

道を行くものは皆追ひ越して行く。女でさへ後れてはゐない。腰の後部でスカートを軽く操んで、踵の高い靴が曲るかと思ふ位烈しく鋪石を鳴らして急いで行く。よく見ると、何の顔も何の顔も切齒詰つてゐる。男は正面を見たなり、女は斜目も觸らず、ひたすらにわが志す方へと一直線に走る丈である。其の時の口は堅く結んでゐる。眉は深く鎖してゐる。鼻は險しく聳てゐる。顔は奥行計り延びてゐる。さうして、足は一文字に用のある方へ進んで行く。恰も往來は歩くに堪へん、戸外は居るに忍びん、一刻も早く屋根の下へ身を隠さなければ、生涯の恥辱である、かの如き態度である。自分はその／＼歩きながら、何となく此の都に居づらいつ感じをした。上を見ると、大きな空は、何時の世からか、仕切られて、切岸の如く聳える左右の棟に餘された細い帯状が東から西へかけて長く渡つてゐる。其の帯の色は朝から風色であるが、次第々々に青色に變じて来た。建物は固より灰色である。それが暖かい日の光に飽み果てた様に、遠慮なく兩側を塞いでゐる。廣い土地を狭苦しい谷底の目影にして、高い太陽が肩く事の出来ない様に、二階の上に三階を重ねて、三階の上に四階を積んで仕舞つた。小さい人は其の底の一部分を、黒くやつて、寒さうに往來する。自分は其の黒く動くもの

うちで、尤も緩慢なる一分子である。谷へ捲まつて、出端を失つた風が、此の底を捲き上げて通り抜ける。黒いものは細い目を渡れた鰻魚の如く四方にばつと散つて行く。鈍い自分も遂に此の風に吹き散らされて、家のなかへ逃げ込んだ。長い廻廊をぐる／＼廻つて、二つ三つ階子段を上ると、弾力仕掛の大きな戸がある。身軀の重みをちよつと寄せ掛けるや否や、音もなく、自然と身は大きなガレリーの中に滑り込んだ。眼の下は眩い程明かである。後を振り返ると、戸は何時の間にか閉つて、居る所は春の様に暖かい。自分はしばらくの間、瞳を滑らす爲に、眼をばち／＼させた。さうして、左右を見たら、左右には人が澤山ゐる。けれども、みんな静かに落ち附いてゐる。さうして顔の筋肉が淺く皺んで見える。澤山の人がかう肩を并べてゐるのに、いくら澤山ゐても、一向苦にならない。悉く互ひと互ひを和らげてゐる。自分は上を見たら、上は大穹窿の天井で、極彩色の濃く眼に應へる中に、鮮かな全音が、胸を躍らす程に、燦として舞いた。自分は何を見たら、前へ手櫃で盡きてゐる。手櫃の外には何にもない。大きな穴である。自分は手櫃の傍迄寄つて、短い首



を伸ばして穴の中を覗いた。すると透の下は、輪にかいた様な小さな人で埋つてゐた。其の数の多い割に鮮に見えた事。人の海とはこの事である。白、黒、黄、青、紫、赤、あらゆる色かなが、大海原に起る波紋の如く、幾然として、透の底に、五色の縹を井べた程、小さく目奇麗に、蠢いてゐた。

其の時此の蠢くものが、ぱつと消えて、大きな天井から、透かの谷底迄一度に暗くなつた。今迄何千となく居ならんでゐたものは闇の中に葬られたきり、誰あつて聲を立てるものがない。恰も此の大きな闇に、一人残らず其の存在を打ち消されて、形も形もなくなつたかの如くに寂としてゐる。と思ふと、透かの底の、正面の一部分が四角に切り抜かれて、闇の中から浮き出した様に、ぼうつと何時の間にか薄明らくなつて来た。始めは、たゞ闇の段取が透か丈の事と思つてゐると、それが次第々々に時がりを離れてくる。儘かに柔かな光を受けて居るなと意識出来る位になつた時、自分は霧の様な光線の奥に、不透明な色を見出す事が出来た。其の色は黄と紫と藍であつた。やがて、そのうちの黄と紫が動き出した。自分は兩眼の視神経を流れる光緊張して、此の動くものを

に曇り上げた胸中へ所在が丸で分らない。それかと思ふ所が、心持悪いやうでもあるが、鐘の音は丸で響かない。鐘の形の足えない濃い影の奥に深く鎮された。

表へ出ると二間許り先は見える。其の二間を行き盡すと又二間許り先が見えて来る。世の中が二間四方に縮まつたかと思ふと、歩けば歩く程新しい二間四方が露はれる。其の代り今通つて来た過去の世界は通るに任せて消えて行く。

四つ角でバスを待ち合せてゐると、鼠色の空気が切り抜かれて急に眼の前へ馬の首が出た。それだのにバスの屋根に居る人は、まだ霧を切らずにゐる。此方から霧を冒して、飛乗つて下を見ると、馬の首はもう薄ぼんやりしてゐる。バスが行き違ふときは、行き違つた時丈奇妙だと思ふ。思ふ間もなく色のあるものは、濁つた空の中に消えて仕舞ふ。淡々として無色の標に包まれて行つた。エドミンスター橋を通るとき、白いものが二度眼を掠めて潮がへつた。眸を凝らして、其の行方を見詰めてゐると、封じ込められた大気の裡に、鳴が夢の様に微かに飛んでゐた。其の時頭の上でビツグペンが眼に十時を打ち出した。仰ぐと空の中で

たゞ音文がする。

ゼクトリヤで用を足して、テート畫館の傍を河沿にパタニー丸来ると、今迄鼠色に見えた世界が、突然と四方からばつたり暮れた。泥炭を滑りて濃く、身の周囲に流した様に、黒い色に染られた重たい霧が、目と口と鼻とに通つて来た。外套は抑へられたかと思ふ程濡つてゐる。軽い霧海を呼吸する許りに氣息が詰る。足元は無言穴の底を踏むと同然である。

自分は此の重苦しい茶褐色の中に、しばらく茫然と佇立んだ。自分の傍を人が大勢通る様な心持がする。けれども肩が觸れ合はない限りは果して、人が通つてゐるのか何うだか疑はしい。其の時此の濁々たる大海の一點が、豆位の大きさにどんよりと黄色く流れた。自分は夫を目標に、四歩許りを動かしした。するとある店先の窓硝子の前へ顔が出た。店の中では瓦斯を點けてゐる。中は比較的明かである。人は常の如く振舞つて居る。自分はやつと安心した。

パタシーを通り越して、手探りをしない許りに向うの岡へ足を向けたが、岡の上は仕舞屋計りである。同じ様な横町が幾筋も並行して、青天の下でも紛れ易い。自分は向つて左の二つ目を曲つた様な気がした。夫から二町程直

を伸ばして穴の中を覗いた。すると透の下は、輪にかいた様な小さな人で埋つてゐた。其の数の多い割に鮮に見えた事。人の海とはこの事である。白、黒、黄、青、紫、赤、あらゆる色かなが、大海原に起る波紋の如く、幾然として、透の底に、五色の縹を井べた程、小さく目奇麗に、蠢いてゐた。

其の時此の蠢くものが、ぱつと消えて、大きな天井から、透かの谷底迄一度に暗くなつた。今迄何千となく居ならんでゐたものは闇の中に葬られたきり、誰あつて聲を立てるものがない。恰も此の大きな闇に、一人残らず其の存在を打ち消されて、形も形もなくなつたかの如くに寂としてゐる。と思ふと、透かの底の、正面の一部分が四角に切り抜かれて、闇の中から浮き出した様に、ぼうつと何時の間にか薄明らくなつて来た。始めは、たゞ闇の段取が透か丈の事と思つてゐると、それが次第々々に時がりを離れてくる。儘かに柔かな光を受けて居るなと意識出来る位になつた時、自分は霧の様な光線の奥に、不透明な色を見出す事が出来た。其の色は黄と紫と藍であつた。やがて、そのうちの黄と紫が動き出した。自分は兩眼の視神経を流れる光緊張して、此の動くものを

に曇り上げた胸中へ所在が丸で分らない。それかと思ふ所が、心持悪いやうでもあるが、鐘の音は丸で響かない。鐘の形の足えない濃い影の奥に深く鎮された。

表へ出ると二間許り先は見える。其の二間を行き盡すと又二間許り先が見えて来る。世の中が二間四方に縮まつたかと思ふと、歩けば歩く程新しい二間四方が露はれる。其の代り今通つて来た過去の世界は通るに任せて消えて行く。

四つ角でバスを待ち合せてゐると、鼠色の空気が切り抜かれて急に眼の前へ馬の首が出た。それだのにバスの屋根に居る人は、まだ霧を切らずにゐる。此方から霧を冒して、飛乗つて下を見ると、馬の首はもう薄ぼんやりしてゐる。バスが行き違ふときは、行き違つた時丈奇妙だと思ふ。思ふ間もなく色のあるものは、濁つた空の中に消えて仕舞ふ。淡々として無色の標に包まれて行つた。エドミンスター橋を通るとき、白いものが二度眼を掠めて潮がへつた。眸を凝らして、其の行方を見詰めてゐると、封じ込められた大気の裡に、鳴が夢の様に微かに飛んでゐた。其の時頭の上でビツグペンが眼に十時を打ち出した。仰ぐと空の中で

たゞ音文がする。

ゼクトリヤで用を足して、テート畫館の傍を河沿にパタニー丸来ると、今迄鼠色に見えた世界が、突然と四方からばつたり暮れた。泥炭を滑りて濃く、身の周囲に流した様に、黒い色に染られた重たい霧が、目と口と鼻とに通つて来た。外套は抑へられたかと思ふ程濡つてゐる。軽い霧海を呼吸する許りに氣息が詰る。足元は無言穴の底を踏むと同然である。

自分は此の重苦しい茶褐色の中に、しばらく茫然と佇立んだ。自分の傍を人が大勢通る様な心持がする。けれども肩が觸れ合はない限りは果して、人が通つてゐるのか何うだか疑はしい。其の時此の濁々たる大海の一點が、豆位の大きさにどんよりと黄色く流れた。自分は夫を目標に、四歩許りを動かしした。するとある店先の窓硝子の前へ顔が出た。店の中では瓦斯を點けてゐる。中は比較的明かである。人は常の如く振舞つて居る。自分はやつと安心した。

パタシーを通り越して、手探りをしない許りに向うの岡へ足を向けたが、岡の上は仕舞屋計りである。同じ様な横町が幾筋も並行して、青天の下でも紛れ易い。自分は向つて左の二つ目を曲つた様な気がした。夫から二町程直



薄い底から山の地を透かして見せる。いつ見ても古い雲の心地がする。

自分の家は此の谷と此の谷を眺めるに都合よく、小さな丘の上に立つてゐる。南から一面に家の壁へ日があたる。幾年十月の日が射したのか、何處も彼處も鼠色に枯れてゐる西の端に、一本の薔薇が這ひかゝつて、冷たい壁と、暖かい日の間に突まつた花をいくつか着けた。大きな葉は卵色に豊かな波を打つて、暮から翻る様に口を開けた儘、ひそりと所々に解まり返つてゐる。香は薄い日光に吸はれて、二間の空気の裡に消えて行く。自分は其の二間の中に立つて、上を見た。薔薇は高く這ひ上つて行く。鼠色の壁は薔薇の蔓の屈かぬ限りを盡して真直に攀えてゐる。屋根が盡きた所にはまだ塔がある。日は其の又上の薔薇の奥から落ちて来る。

足元は丘がピトロクリの谷へ落ち込んで、眼の向う側の山へ上る所は層々と横の葉が段段に重なり合つて、濃淡の坂が幾層となく出来てゐる。明かで寂びた調子が谷一面に反射して来る眞中を、黒い筋が横に横つて動いてゐる。泥炭を含んだ溪水は、葉粉を溶いた様に古びた色になる。此山奥に来て始めて、こんな流を見た。

後から主人が来た。主人の時は十月の日に照らされて七分が太白くなりかけた。形も尋常ではない。腰にキルトといふものを着けてゐる。俣の膝掛の様に粗い綿の織物である。それを行燈袴に、膝頭迄縫つて、腰に袋を置いたから、膝は太い毛糸の紐足袋で隠すばかりである。少くたびにキルトの袋が揺られて、膝と股の間がちら／＼出る。肉の色に取を置かねば昔の様である。

主人は毛皮で作つた、小さい木魚型の藪口を前にぶら下げてゐる。夜燧燧の傍へ椅子を寄せて、音のする赤い石炭を眺めながら、此の木魚の中から、パイプを出す、煙草を出す。さうしてぶかりぶかりと夜長を吹かす。木魚の名をスボランと云ふ。

主人と一所に居るを下りて、小暗い路に這入つた。スコッチ・フアールと云ふ常葉木の葉が、刻み昆布に雲が這ひかゝつて、滑つても落ちない様に見える。其の黒い袴をちよ／＼と栗鼠が長く太つた尾を揺つて、馴け上つた。と思ふと古く厚みをついた首の上を又一匹、昨から疾く駆け抜けたものがある。昔は駈れた儘動かな

いと云はれた。それで自分は一回七志の刺で月本に全額を拂ふ事にしてゐたが、時によると不意に先生から催促を受ける事があつた。君、少し金が入るから拂つて行つて呉れんか。杯と云はれる。自分は洋袴の腰しから金貨を出して、むき出しにへえと云つて渡すと、先生はやあ済まんと思ひながら、例の消極的な手を掲げて、一寸掌の上で眺めた儘、やがて是れを洋袴の腰しへ収められる。困る事には先生決して釣を渡さない。餘分を来月へ繰り越さうとする、次の週に又、ちよつと書物を買ひたいから杯と催促される事がある。

先生は愛蘭土の人で言葉が頗る分らない。少し焦き込んで来ると、東京者が薩摩人と喧嘩をした時位に六づかしくなる。それで大變疎忽しい非常な焦き込み屋なんだから、自分は事が面倒になると、運を天に任せて先生の顔を見てゐた。

其の顔が又決して尋常ぢやない。西洋人だから鼻は高いけれども、段があつて、肉が厚過ぎる。其處は自分に善く似てゐるのだが、こんな鼻は一見した所がすつきりした好い感じは起らないものである。其の代り其處いら中むしやくしやくしてゐて、何となく野趣がある。指打

い、栗鼠の尾は着黒い地を拂子うららかに揺つて暗がりに入つた。

主人は横を振り向いて、ピトロクリの町をい谷を指さした。黒い河は依然として其の眞中を流れてゐる。あの河を一里半北へ廻るとキリクランキーの川間があると云つた。

高地人と低地人とキリクランキーの川間で飛つた時、尾が岩の間に挟つて、岩を打つ水を塞いだ。高地人と低地人の血を飲んだ河の流は色を變へて三日の間ピトロクリの谷を通つた。

自分は昨日早朝キリクランキーの古戦場を訪はうと決心した。崖から出たら足の下に美しい薔薇の花葉が二三片散つてゐた。

クレイグ先生

クレイグ先生は燕の様に四隅の上に足をくつてゐる。鋪石の間に立つて見上げたつて、窓さへ見えない。下から段々ト昇つて行くと、鼠の所が少し痛くなる時分に、漸く先生の門前に入る。門と申しても、扉や屋根のある次第ではない。幅三尺足らずの黒い戸に眞鍮の敲子がぶら下がつてゐる丈である。しばらく門前で

はまことに御氣の毒な位黒白顔生してゐた。いつかベーカー・カストリートで先生に出合つた時には、鞭を忘れた御者かと思つた。

先生の白襟衣や白襟を着けたのは未だ曾て見た事がない。いつでも綿のフナネルをきて、むくむくした上靴を足に穿いて、其の足を燻煙の中へ突き込む位に出して、さうして時々短い膝を敲いて、其の時始めて氣が附いたのだが、先生は消極的に手に金の指環を嵌めてゐた。一時には鼓く代りに股を敲つて、鼓へて呉れる。尤も何を鼓へて呉れるのか分らない。聞いてゐると、先生の好きな所へ連れて行つて、決して歸してくれない。さうして其の好きな所が、時候の變りや、天気都合で色々に變化する。時によると昨日と今日で、兩極へ引越しをする事さへある。わるく云へば、まあ出鱈目で、よく評すると文學上の座談をして呉れるのだが、今になつて考へて見ると、一回七志位で纏つた規則正しい講義杯の出来る譯のものではないのだから、是は先生の方が尤もなので、それを不平に考へた自分は馬鹿なのである。尤も先生の頭も、其の時の代表する如く、少しは龍巻に傾いてゐた譯でもあるから、寧ろ報酬の値上をして、えらい講義をして貰はない方が可



かつたかも知れない。先生の得意なのは詩であつた。詩を讀むときは顔から肩の邊が震動の様に振動する。——嘘ぢやない。全振動した。其の代り自分で讀んで呉れるのではなく、自分が一人で讀んで楽しんでゐる事に歸着して仕舞ふから詰りは此方の損になる。いつかスキンベインのロザモンドとか云ふものを持つて行つたら、先生一瞥見せ玉へと云つて、二三行朗讀したが、忽ち書物を膝の上に伏せて、鼻眼鏡をわざ／＼はづして、あゝ駄目々々スキンベインも、こんな詩を書く様に老い込んだかなあと云つて嘆息された。自分がスキンベインの傑作アタランタを讀んで見様と思ひ出したのは此の時である。

先生は自分を子供の様に考へてゐた。君かう云ふ事を知つてゐるか、あゝ云ふ事が分つてゐるか、君にも附かない事を成す質問された。かと思ふと、突然えらい問題を提出して急に同輩の振りに飛び移る事がある。いつか自分の前でワトソンの詩を讀んで、是はシェレーに似た所があるかと云ふ人と、全く違つてゐると云ふ人とあるが、君はどう思ふと聞かれた。どう思ふたつて、自分には西洋の詩が、先づ眼に訴へて、しかる後耳を通過しなければ丸で分らないのである。

「お、おれの「ウオーツウオー」は何處へ遣つた」

婆さんは依然として驚いた眼を皿の様にして一應書物を見廻してゐるが、いくら驚いても甚だ驚かなもので、すぐに、「ウオーツウオー」を見附け出す。さうして、「ヒヤ、サー」と云つて、聊かたしなめる様に先生の前に突き附ける。先生はそれを引つたぐの様に受け取つて、二本の指で汚ない表紙をびしゃ／＼敲きながら、君、ウオーツウオーが——と遣り出す。婆さんは、益々驚いた眼をして臺所へ退つて行く。先生は二分も三分も「ウオーツウオー」を敲いてゐる。さうして折角讀して貰つた「ウオーツウオー」を遂に開けずに仕舞ふ。

先生は時々手紙を寄こす。其の字が決して讀めない。尤も二重行だから、何處でも繰返して見る時間はあるが、どうしたつて判定は出来ない。先生から手紙がくれば差支があつて積古が出来ないと云ふこと、斷定して始めから讀む

る。そこで好い加減な挨拶をした。シェレーに似てゐる方だつたか、似てゐない方だつたか、今では忘れて仕舞つた。が可笑しい事に、先生は其の時代の膝を叩いて僕もさう思ふと云はれたので、大いに恐縮した。

ある時窓から首を出して、遙かの下界を忙しさに通る人を見下しながら、君あんなに人間が通るが、あの内で詩の分るものは百人に一人もゐない、可哀相なものだ。一俣英吉利人は詩を解する事の出来ない國民でね。其處へ行くと愛蘭士人はえらいものだ。はるかに高尚だ。實際詩を味ふ事の出来る君だの僕だのは幸福と云はなければならぬ。と云はれた。自分を詩の分る方の仲間へ入れてくれたのは甚だ難有いが、其の割合には取扱が頗る冷淡である。自分は此の先生に於て未だ情合といふものを認めた事がない。全く機械的に喋言つてゐる御爺さんと思はれなかつた。

けれども斯んな事があつた。自分の居る下宿が甚だ厭になつたから、此の先生の所へでも置いて貰はうかしらと思つて、ある日例の積古を済ましたあと、頼んで見ると、先生忽ち膝を敲いて、成程、僕のうちの部屋を見せるから、來給へと云つて、食堂から、下女部屋から、勝

手から、一應すつかり引つ張り回して見せて呉れた。因より四階裏の一隅だから廣い筈はない。二三分かゝると、見る所はなくなつて仕舞つた。先生は其處で、元の席へ歸つて、君斯ういふ家なんだから、何處へも置いて上げる譯には行かないよと思ふと、忽ちワルト・ホイットマンの話を始めた。昔ホイットマンが來て自分の家へ少時逗留して居た事がある——非常に早口だから、よく分らなかつたが、どうもホイットマンの方が來たらしい——で、始めあの人の詩を讀んだ時は丸で物にならない様な心持がしたが、何處も讀み過してゐるうちに段々面白くなつて、仕舞には非常に愛讀する様になつた。だから……

書生に置いて貰ふ件は、丸で何處かへ飛んで行つて仕舞つた。自分はたゞ成行に任せてへえへえと云つて聞いてゐた。何でも其の時はシェレーが誰とかと喧嘩をしたとか云ふ事を話して、喧嘩はよくない、僕は兩方共好きなんだから、僕の好きな二人が喧嘩をするのは甚だよくないと思ふと、居られた。いくら故隙を申し立てても、もう何十年前前に喧嘩をして仕舞つたのだから仕方がない。

先生は疎忽かしいから、自分の本杯をよく置

き遣へる。さうして夫が見當らないと、大いに焦き込んで、臺所に居る婆さんを、ぼやでも起つた様に、仰山な聲をして呼び立てる。すると隣の婆さんが、是れも仰山な聲をして客間へあらはれて来る。

「お、おれの「ウオーツウオー」は何處へ遣つた」

婆さんは依然として驚いた眼を皿の様にして一應書物を見廻してゐるが、いくら驚いても甚だ驚かなもので、すぐに、「ウオーツウオー」を見附け出す。さうして、「ヒヤ、サー」と云つて、聊かたしなめる様に先生の前に突き附ける。先生はそれを引つたぐの様に受け取つて、二本の指で汚ない表紙をびしゃ／＼敲きながら、君、ウオーツウオーが——と遣り出す。婆さんは、益々驚いた眼をして臺所へ退つて行く。先生は二分も三分も「ウオーツウオー」を敲いてゐる。さうして折角讀して貰つた「ウオーツウオー」を遂に開けずに仕舞ふ。

先生は時々手紙を寄こす。其の字が決して讀めない。尤も二重行だから、何處でも繰返して見る時間はあるが、どうしたつて判定は出来ない。先生から手紙がくれば差支があつて積古が出来ないと云ふこと、斷定して始めから讀む

る。そこで好い加減な挨拶をした。シェレーに似てゐる方だつたか、似てゐない方だつたか、今では忘れて仕舞つた。が可笑しい事に、先生は其の時代の膝を叩いて僕もさう思ふと云はれたので、大いに恐縮した。

ある時窓から首を出して、遙かの下界を忙しさに通る人を見下しながら、君あんなに人間が通るが、あの内で詩の分るものは百人に一人もゐない、可哀相なものだ。一俣英吉利人は詩を解する事の出来ない國民でね。其處へ行くと愛蘭士人はえらいものだ。はるかに高尚だ。實際詩を味ふ事の出来る君だの僕だのは幸福と云はなければならぬ。と云はれた。自分を詩の分る方の仲間へ入れてくれたのは甚だ難有いが、其の割合には取扱が頗る冷淡である。自分は此の先生に於て未だ情合といふものを認めた事がない。全く機械的に喋言つてゐる御爺さんと思はれなかつた。

けれども斯んな事があつた。自分の居る下宿が甚だ厭になつたから、此の先生の所へでも置いて貰はうかしらと思つて、ある日例の積古を済ましたあと、頼んで見ると、先生忽ち膝を敲いて、成程、僕のうちの部屋を見せるから、來給へと云つて、食堂から、下女部屋から、勝

手から、一應すつかり引つ張り回して見せて呉れた。因より四階裏の一隅だから廣い筈はない。二三分かゝると、見る所はなくなつて仕舞つた。先生は其處で、元の席へ歸つて、君斯ういふ家なんだから、何處へも置いて上げる譯には行かないよと思ふと、忽ちワルト・ホイットマンの話を始めた。昔ホイットマンが來て自分の家へ少時逗留して居た事がある——非常に早口だから、よく分らなかつたが、どうもホイットマンの方が來たらしい——で、始めあの人の詩を讀んだ時は丸で物にならない様な心持がしたが、何處も讀み過してゐるうちに段々面白くなつて、仕舞には非常に愛讀する様になつた。だから……

書生に置いて貰ふ件は、丸で何處かへ飛んで行つて仕舞つた。自分はたゞ成行に任せてへえへえと云つて聞いてゐた。何でも其の時はシェレーが誰とかと喧嘩をしたとか云ふ事を話して、喧嘩はよくない、僕は兩方共好きなんだから、僕の好きな二人が喧嘩をするのは甚だよくないと思ふと、居られた。いくら故隙を申し立てても、もう何十年前前に喧嘩をして仕舞つたのだから仕方がない。

先生は疎忽かしいから、自分の本杯をよく置



ある。君もしシニミッドと同程度のものを持つてゐる位なら僕は何もこんなに骨を折りはしないさよと云つて、又二本の指を揃へて眞黒なシニミッドをびしや／＼敲き始めた。

「全體何時頃から、こんな事を御始めになつたんですか」

先生は立つて向うの書棚へ行つて、しきりに何か探し出したが、又例の通り焦れつたさうな聲でジーン、ジーン、おれのダウデンは何うしたと、婆さんが出て来ないうちから、ダウデンの在所を尋ねてゐる。婆さんは又驚いて出て来る。さうして又例の如くヒヤ、サーと、響めて歸つて行くと、先生は婆さんの一振には丸で頓着なく、顔じさうに本を開けて、うん此處にある。ダウデンがちやんと僕の名を此處へ擧げて呉れてゐる。特別に沙翁を研究するクレイグ氏と書いて呉れてゐる。此の本が千八百七十一年の出版で僕の研究は大よりやつと前なんだから、自分は全く先生の平抱に恐れ入つた。序でに、ちや何時出来上るんですかと尋ねて見た。何時だか分るものか、死ぬ迄這る丈の事だと先生はダウデンを元の所へ入れた。自分は其の後暫くして先生の所へ行かなくなつた。行かなくなる少し前に、先生は日本の

大學に西洋人の教授は要らんかね。僕も若いと行くがなと云つて、何となく無常を感じた様な顔をしてゐられた。先生の顔にセンチメントの出たのは此の時丈である。自分はまだ若いぢやありませんかといつて慰めたら、いやいや何時どんな事があるかも知れない。もう五十六だからと云つて、妙に沈んで仕舞つた。

日本へ歸つて二年程したら、新着の文藝雑誌にクレイグ氏が死んだと云ふ記事が出た。沙翁の専門學者であること云ふことが、二三行書き加へてあつた丈である。自分は其の時雑誌を下へ置いて、あの字引はつひに完成されずに、反故になつて仕舞つたのかと考へた。

### 修善寺日記

明治四十三年八月六日より明治四十四年一月二十日まで

八月六日

十一時の汽車で修善寺に向ふ。東洋城来らず、白切符二枚を懐中して乗る。しまつた事をしたと思ふ。途中車掌が電報を持って来て、松根は一汽車後れたる故國府津か御殿場で待ち合せるといふ。

○品川から白服の軍人らしき人乗る。細の小紋の様に細かい縞の着物をきた人、下女と向側にゐる。紗の羽織に紫の紐をさけてダイヤの指環をはめた男、壯士の親方か辯護士か。義太夫を語る。

○白切符の買ひ餘しの割戻しの件をボイに聞き合はしてもらふ。御殿場で三圓九十六銭を受取る。角の茶屋でいこふ。三時〇九分。五時二十九分迄待つ。御殿場は五月焼けた。家皆新しけれど昔相末なり。目に入るは富士講のみ、西洋人の出入ちよく見ゆ。

○三島で四十分待つ。大仁へ着いたら車が一枚もみない。漸く三臺を驅り出す。荷物は荷

八月七日

雨聲。雨戸をあければ溪聲なり。上脚無便。浴槽に下る。混雑。妙な工夫をしてひげをそる。朝飯。鶏卵二個。汁一。飯三。飯後上脚便あり。

○東洋城番頭と談判部屋都合つきかねる様也。本店なら一間ある由。今の部屋は前にも山

が見え、後ろにも山が見え。寐てゐると頭も足も山なり。好い部ならん。十疊と六疊つゞき也。此離れの二階を折れ曲つた角には昨日品川から乗つた軍人が何時の間にか来てゐた。海軍少將の由。

○碧雲山庵をはれやかにす。須臾にして雨。鮎賣の笛の聲をきく

○十時本店に移る。三階に入れられる。しばらくして考へると是は宅へ歸るか別の處へ行つた方がよい。十日に来るといふ新築の座敷十疊を談判して借りる事にする。

○胃常ならず。膨満でもなければ疼痛でもなければ嗜睡でもなくて幾分かそれを具へてゐる。眠と寐てゐる。眠り覺めると多少は好い。心持也。とう／＼五時頃迄起たず。アイスクリームを一杯吞む。思ふに朝飯を食ひ過ぎたと汁の實の野菜や、海苔を口にせし爲ならん

○日落つ。隣りで觀世流の謡をうたふ。其隣りで三味線を弾き出す。三味線の方聞き手多し。獨りでジエームスの多元的宇宙を讀む何だか意味が分らず。

○九時に寐る。十時に東洋城来。御上が今御休みになつたと云ふ。十一時頃迄話して歸る。宮様が「猫」を讀んだ由。



八月八日  
雨。五時起上便通なし。入浴。浴後胃痛  
を起す。不快堪へがたし。  
○十二時頃又入浴又ケイレン。漸く一杯の飯  
を食ふ。

○隣の客どこかへ行く。雨月半分と藤波半分  
を譲ふ。四時過松根より迎、足駄をかりて行  
く。七時頃晚餐。誰ものをわざと本店から  
取り寄せる。午よりは食慾あり。松根に含漱劑  
を作つてもらつてうがひをする。かんの聲が潰  
れたので咽喉と鼻の間を濕すと少しは好い心  
持なり。鼻涙を拭ふ。

○殿下が余に話をしてくれと松根迄云はれる  
由。袴も羽織もなし、且此聲では聞く人も話す  
人も苦痛故斷わる。松根の方でも相例なき事故  
御用掛の責任を考へて未だ殿下へは受合はぬ  
よし。

○八時頃歸りて服薬。隣りは話、向座敷は義太  
夫、辨慶上使の半頃也。一時雨半過入浴歸り  
て又服薬。忽ち胃ケイレンに罹る。どうしても  
湯がわるい様に思ふ。

○昨夜夢醒む、一體に苦しく堪へがたし、  
○余に取つては湯治よりも胃腸病院の方が遙か  
の聲耳に入る。

の聲耳に入る。

十五日

苦痛一字を言へ能はず

十六日

ノ事を忘れぬ爲に書く

十七日

八日二十日

の四時過なり。

○十七日吐血、熊の膽の如きもの。醫者見て苦  
い如す

○十八日東洋城来り、今社から社員一名と胃腸  
病院の醫師一名をよこす。十二時四十分の汽車  
で立つと云ふ電話あり。

○同夜二人来。大和堂から長距離電話をかけた  
ら胃腸病院で社へ知らせ、夫から社で驚ろ  
いた山  
○十九日又吐血。夫から水で冷す。安眠療法。  
硝酸銀

○今朝漸く乳五分、ソファ五分、を飲む。二時  
間後腹痛苦痛。三時間目の薬にて漸く癒る。

によし。身體が毫も苦痛の訴がなかつた。萬  
事整頓して心持がよかつた。便通が規則正しく  
あつた。

八月九日

伊豆鐵道がとまるかも知れぬといふ。

八月十日

八月十一日

八月十二日

夢の如く生死の中間に目を送る。膿汁と酸液  
を一升程吐いてから漸く心地なり。米と牛  
乳のみにて命を養ふ。あれの報知所より至  
る。東京より水書の開き合せ来る。湯河原の宿  
屋流れて其宿物がどこかへ上つたといふ。松  
根が余の病状を報知していつでも来られる支  
度をせよと妻にいつてやつた。それを後から電  
報で取り消す。

○昨夜一息づゝ胃の苦痛を句切つてせいくと  
生きてゐる心地は苦しい。誰もこれを知るもの  
はない。あつても何うしてくれぬ事も出来な  
い。背汗が顔から背中へ出る。

○ひるから気分よし。水依然。水飴。水を飲む。  
○八月二十一日  
○十九日の吐血以後最養院。食物は流動物  
大。

○昨日森成氏歸京の筈の處見當たぬ爲め帯  
在。

○但し院長よりは着以後直ちに當分其地にと  
まり看護に手を盡すべしとの好意の電報あり、  
○昨夜終列車にて玄耳來。池邊と相談どんな  
醫者でもどんな器械でも送る事にした山。来て  
見れば夫程にもなしといふ。醫者のいふ事をき  
かぬ爲也といふ。

○始め東洋城が宅へ手紙を出して妻に来る用意  
をうながす。夫から電報にて見合せるといふ。  
宅からは忙がしい處を長距離電話をかける。  
細君と知らず咄咄に問答せり。後にて聞けば山  
田三良の家の電話のよし

○五時半硝酸銀を吞む。  
○昨夜瀧川一五〇持参。意味不明。妻にきく、  
是は坂元のはからひの山。相談の上今月の月給  
の一分として貰ふ事にする

○朝食牛乳一合、半熟鶏卵一個、水飴三匙。  
○昨朝は水飴の重みに堪へず。今日は何の苦

八月十三日  
○今日も亦あれ。隣の人は先達て立つと云つ  
て雨の爲に二日程延ばした。今日は是非と云つ  
てゐたが此模様ではどうするか。

○障子を立てゝ取る。

○午。葛湯、おも湯、玉子豆腐

○晩。重湯一椀、刺身、芍薬、

○下女に今日は幾日だねと聞く、多分十四日  
せうと云ふ。よく知りませんと云ふ。存氣也。

あしたから新聞を御取りなさいといふ。  
○下女の語に下の八番の御客が何とかいふ處  
にゐて、水が用て主人が別荘へ逃げてくれと云  
ふのに薬者をあげて酔つて来たたら四時頃水が  
山が崩れて見る間に押し流された。逃げた御  
客は東京へも歸られず三島迄は汽車が通じ  
と云ふので三島迄来てそれから馬車で此處へ来  
たといふ。

八月十四日  
終夜強雨の音を聞く。山草、樹草、雨聲、耳  
を揺らす。三時頃迄眠れず。天明眠覺む。胃  
部不安。上便通なし。入浴、酸出。苦痛。牛乳、  
チリ玉、重湯にて朝食。食後うとくする。諸

なし。  
○濠川十時四十分の汽車で歸る。  
○弘法様の御祭りで四時頃から花火が揚る。日  
録を活版にしてある。雷鳴、軍旗、露牡丹、秋  
の七草色々なり。

八月二十二日  
○快晴。牛乳一合、重湯五分、玉子黄味一つ。  
○昨夜は寐ながら弘法様の花火を見る。秋の景  
色也。

坂、森、妻三人にて縁で水瓜を食ふ。  
○昨日松根不來。妃殿下は山莊へ御立の由。  
○家のもの夜山莊で酒を酌む。二時過就寝のよ  
し。

○東洋城歸京。十二時頃發  
○尺八の大家と三味線と踊子下の廊下で合奏  
○坂元森成裏の山で七草を折り来る  
○高田早苗投宿

八月二十三日  
快晴。女郎花、野菊、男郎花、薄、萩、桔  
梗、紫の玉(藤の如きもの)  
○おくび生臭し。新出血するものと見ゆ。便は  
無類血色あり。



○高田早苗氏の名刺を番頭持参。坂元に此方の名刺を依頼。高田氏讀をうたひ始む。

八月二十四日(以下九月七日迄日記)

朝より顔色悪シ杉本副院長午後四時大仁重ニテ来ル診察ノ後夜八時急ニ吐血五百グラムト云フ。ノウヒンケツヲオコシ一時人事不省カンフル注射十五食エン注射ニテヤ、午氣ツタ朝迄モタヌ者ト思フ  
社ニ電報ヲカケル夜中ネムラズ

八月二十五日

朝寄徳岡ケバキケンナレドゴク安脚ニシテ居レバモチナラスカモ知レヌト云フ杉本氏歸ル  
東京ノ家ノ東カラ電話ガカ、リ今朝一番デ夏目見上高田翁上御夫婦小供三人高瀬さん野上さん森田さん根橋さんお立ちになりましたと云ふ大塚さん大塚から来ラル安宿さんも来てタレル一汽車ヲタレテ野村さんも来ル  
池邊氏モ来ラル

八月二十六日

容態ヤ、良好  
見舞客 奥村副太郎、瀧藤ノ山崎氏、鈴木三重吉、春田家、湯浅隆彦、高田知一郎、菅虎雄、森野吉、若野福二人、春田家ハ菓子折ヲタレル

サンガ来ル

九月三日

朝十時ノ汽車デ内丸サンガ歸ル野間サンモ午後二時ノ汽車ニテ鹿兒島ヘ歸ル  
朝寄徳岡ナシ

九月四日

朝九時頃湯浅サンガ東京カラ歸道ニヨル阿部次郎サンガ午後ニタル山形カラ歸リ道東京ヲス通りシテ常盤ヘタル病人に話シテ酒デモノマシテ上ゲロト云フ事故ビールヲ二本小宮サント二人デノム湯浅サン三時ノ汽車デ歸ル

九月五日

朝寄徳岡ナシ  
阿部サント小宮サンガサン歩ニ行キ歸リニ草花ヲ取テタル花イケニサス

九月六日

朝寄徳岡ナシ  
今日八十時を過リカン屋ヲスル四人ガ、リデオコシテ大便ヲサセル少シ出タリヨシ  
ハダカニシテセナカヲアルコイルデフキ着物ヲネルト

八月二十七日

容態別ニ悪状ナシ  
小宮豊隆渡邊和太郎香水とビスケットヲモラフ高尾忠繁早稲田大塚ノ學生、早大仕四郎元同ジ編校ニ居テ人ノヨシ、奥村又モウ少シヨクナツタラ来マストアツタニカヘル其時小供見舞上御野村さん一處ニカヘル

八月二十八日

容態別ニ悪状ナシ  
森成さん東京ニ用事ガ出来テ歸ル病院カラヌカダト云フ先生代理ニヨコシテ見舞ル  
小林徳高須賀淳平石井和孝行徳二郎野間重雄

八月二十九日

容態良好ニテ此分ナラバ心配ナシトノ事皆安心シテ東京ヘカヘラル  
大塚さん菅さん森さん野上さん小林さん湯浅さん野間さん  
大倉書店ヨリ見舞状ニソヘテ小包デ菓子折ヲタレル名古屋ノ鈴木カラ心配シテ毎日電話ヲシラシテ見舞レロト云タル見舞トシテ金二十五圓タレル其ハデ毛ブトソノ頃テ病人ニカケロウト思ヒ野上さんニタノム

取カヘルソラフツトノ上ヘナミノフツトニ致カサネテ其上ヘ疑カス皆大變心配シタレド別ニ變リナシ大キニ安心阿部サント午後二時ノ汽車デ東京ヘ歸ル  
今日一番チ板元サン歸ルカミナリヲ行テモラフ野上サンタガタル御土産ヲタレル

九月八日

○ 別るゝや夢一筋の天の川  
○ 秋の江に打ち込む枕の響かな  
○ 秋風や唐紅の咽喉傷  
○ 赤蜻蛉、燕

○ Languid stillness "weak state" "painless" passivity

○ 庇護。被庇護。

○ 氷

○ Intellectuality if indifference. Self-assurance if indifference. 人事ノ葛藤 if indifference

○ Goodness, peace, calmness. Out of struggle for existence, material prosperity.

○ nature

八月三十日

朝寄徳岡ニ悪状ナシ  
ヌカダ醫師午後二時ノ汽車ニテ歸ル森成サン入りカラリ東京カラ歸テタル其時行徳サン高須賀サン一處ニ歸ル夜湯藤ノ中村サンカラ山崎氏ヲコシテ御見舞トシテ金三百圓ヲ下サル

八月三十一日

朝寄徳岡ニ悪状ナシ  
今日カラソツアヲマセルト云故朝トリヲ買テ切テモラヒ酒トツクリヲカリテ其ヘ入レセシニカケテ火鉢デソツアヲコシラエルタ方名古屋カラ鈴木ガタル二三日前ニアツタエタハネブツトガタル

九月一日

朝寄徳岡ヤ、良好ナリ  
早稲田大塚生小林徳二郎ト云フ人ガタル中村さんノ使山崎さん歸ル鈴木モ午後カラ歸ルイロノ東京ヘ買物ヲ置ムタ方野間さんが東京カラタル

九月二日

朝寄徳岡變りなし  
今日カラソツアガ三度ニナル直ベル事バカリカンガヘテイルヨシ板元サンガ七時頃カラゲリヲシテ買ガイタイト云ヒ出スカイロヲコシテヘテ上ル夜九時頃ニナリ内丸

○ 住宅。西洋と日本ノ懸隔。

○ 自然淘汰に違ふ療治。小兒の撫育より手がかかる。半白の人果して此看護をうくる價值あり

○ 吾より云へば死にたくなし。只勿體なし。

○ 九月九日 十一時と二時に間食。アイスクリームは冷たくていやになる。ペプトン・カーニスを五十グラム 位宛

○ 正食。湯煎スープ三十グ、葛湯百グ、今日から三十を百にス

○ アイスクリームの器械は鈴木送る、

○ 吐血の時モルヒン注射 再度の嘔氣を恐れ

十日

○ 昨夜森成氏と禁煙の約をなす。今朝臥して思ふ左のみ旨くなけれど本程害にならぬものを禁ずる必要なし。食後一本宛にナ

○ 森成氏初診の時の胃の亂調の働をかたる

○ 最後の吐血の時、二回の注射。ブンメルン

○ 紫苑 みそはき

○ 万年筆をふる力なし

○ ひかん白萩梅林より来る。



○病院で一ヶ月半、修善寺で一ヶ月是から何月かゝるか分らない惜しい時間也。小宮云ふ幸へ這入つたと思へ。

○時間を惜しいと思ふ程人間に精力が出たのだらう

○森成氏又歸京

十一日

○朝達ビスケットは十七日頃より

○子供の手紙を読む。

九月十二日

○秋晴 寂ながら空を見る。ひげをそる。

○秋晴に病間あるや記を刺る

○秋の空淡黄に澄めり杉に芥

○昨夕大和堂来りいふ。仰臥不動の忍耐感心なり是でよくならなければ醫師の責任

○羽根布團を買はぬ理由

九月十三日

○昨夜森成氏歸來。羽根杖。鹽漬の節。ソーダビスケット来る。

○晴雲層層

○まだ水囊を盛る。

九月十六日

○晴雨 將 至

○昨夜車湯を吞むまづき事甚し。

○ビスケットに更へる事を談判中々聞いてくれず

○今朝より漸く氷を取り除く

○掛香 簡畫帳を見る。藍氏印譜が見たくなる。

○重湯葛湯水筒の力を借りて仰臥靜かに衰弱の回復を待つはまだるき退屈なり併せて長閑なる美はしき心なり。年四十にして始めて赤子の心を得たり。此丹精を敢てする諸人に謝す

○健全なる人の胃潰瘍は三週間で全治する由。余は最後の出血より計算して今三週間目なり。漸く日に半片のビスケットを許さるゝに過ぎず

九月十七日

○一番にて小宮歸る。雨

○安心安神靜意靜情。この忙しき世にかゝる境地に住し得るもの至福也。病の賜也。

○昨夜主人鯛一尾を贈る。氷囊を取り去れる祝の心にかゝ

○鯛切れば鱗眼を射る霜寒み

九月十八日

○宮本叔氏

○吐血は醫師の責任也と杉本氏いふ

○昨日より妻頭痛むとて寐る。

○晝ソップ五十より七十グラムに増

○秋雨蕭々、二粒拳と三味線を合せてゐる

○白川歸る

○四時頃突然ビスケット一個を森成さんが食はしてくれ。嬉しい事限なし

九月十四日

○夜すがらの雨

○晝に夜寒過るや雨の音

○旅にやむ夜寒心や世は情

○一夜眠さめて枕頭に二三子を見る

○蕭々の雨と聞くらん背の伽

○秋風やひびの入りたる胃の袋

○藝術の議論や人生上の理窟が一時は厭になつた。

○一竿風月、明窓淨几

○さらふ趣味が募つた。

○雷雨 窓 冷、一燈 洩竹青

○いふ句を得た。

○風流の昔戀しき紙衣かな

○體力日に加はる。床の上にて身體を動かす

○秋晴 澄々

○昨夜は十五夜で美しくき月のよし

○昨夜東洋城歸京の途次寄る。

○九雲堂の見舞のソップ 虞美人舞の模様のものをくれる。戸部の一輪挿しは本人の土産也。

○地方にて知らぬ人余の病氣を心配するもの澤山ある由難有き事也。京都の髪結某余の小さき寫眞を飾る由。金之助といふ藝者も愛讀者のよし。東洋城より聞く

○宮様余によるしくとの事也

○今日は體力回復と思ふ。明日になると夫がイリニュージョンである。今日は切實に何か思ふ明日になると夫がイリニュージョンである。

○今朝はソーダビスケットを一枚もらふ。旨くも何ともなかつた

○夢中に獻立などをして楽しんでゐたがよくなつて見ると馬鹿氣である

○午食に起き返りて始めて粥半碗を食ふ。起き直りつゝある退儀を思へば粥の味も半分は減る位也。否は是程被れたりやと驚く

○一等軍醫正矢鳥氏伊東進來れる序にと見舞はる森氏の命令也

○病む日又藤の隙より秋の蝶

○晩に百グラムのオートミール旨し

九月十五日

○秋雨山村を鎮す

○昨日瀧腸腸便好成績

○昨夜東來。洪水の寫眞帳。ロサルアカデミ

○土産

○朝飯ソップ百グラム。ソーダビスケット

○立秋の霜落ち付くや伊豫精

○骨立を吹けば疾む身に野分かな

○今朝髪をけづる。

○霜寒の鏡もなくに描る。

○昨夜より白毛布をかく清楚任意

湯煎ソップ百グラム

玉子豆腐、あん百グラム

九月十九日

○晴

○昨夜は御月見をするとして妻が宿から栗などを取り寄せてゐた。栗がもう出てゐるかと思つて驚いた

○病んでより白萩に露の繁く降る事よ

○花が湖むと裏の山から誰か取つて来てくれる。其時は森成さんが大抵一所である。女郎花、薄、桔梗、野菊、あざみに似たものが多い。

○昨日日川の送つた字拾遺を少し讀む。少し讀むと馬鹿々々しくなる。

○瓶に挿した薄の葉の上に何時の間にか蟋蟀が一匹留つてゐる。風が揺れるたびに揺れてゐる。晝のうち恍惚として神遠き思ひあり。生れてより斯の如き退儀を志にせる事なし。衰弱の結果にや。夜は却つて寐られず。屢屢覺む。昨夜は修善寺の太鼓の鳴るを待ちたり

○蜻蛉の夢や幾度杭の先

○蜻蛉や留り損ねて羽の光

○取り留むる命も細き薄かな

九月十九日

○湯煎ソップ百グラム

玉子豆腐、あん百グラム

九月十九日

○晴

○昨夜は御月見をするとして妻が宿から栗などを取り寄せてゐた。栗がもう出てゐるかと思つて驚いた

○病んでより白萩に露の繁く降る事よ

○花が湖むと裏の山から誰か取つて来てくれる。其時は森成さんが大抵一所である。女郎花、薄、桔梗、野菊、あざみに似たものが多い。

○昨日日川の送つた字拾遺を少し讀む。少し讀むと馬鹿々々しくなる。

○瓶に挿した薄の葉の上に何時の間にか蟋蟀が一匹留つてゐる。風が揺れるたびに揺れてゐる。晝のうち恍惚として神遠き思ひあり。生れてより斯の如き退儀を志にせる事なし。衰弱の結果にや。夜は却つて寐られず。屢屢覺む。昨夜は修善寺の太鼓の鳴るを待ちたり

○蜻蛉の夢や幾度杭の先

○蜻蛉や留り損ねて羽の光

○取り留むる命も細き薄かな



九月二十日

夜來の雨。しばし眼をむ。

大風鳴萬木 山雨撼高樓  
病骨瘦如劍 一燈青秋愁

○東云ふ先生は若い神々しい顔をしてゐながら食物の事はかり考へてゐるから可笑しいと。昨日はソップをやめてオートミールか粥を増す事をねだりて拒絶さる。

○朝食にミルクとカシノビスケットを食ふは丸で赤子也。

○昨夜看護婦に二度時を聞く。始は四時十分前。後は五時十五分前。修善寺の太鼓は五時頃より鳴るものと知れり。

○昨日より病前に讀みかけた六づかしい本を寐ながら少々讀むに頭の工合は病前と差して異ならず。其癖起き直りて便器にかゝる事は一世の大事業の如く困難である。かほど衰弱したものが何うして哲學的の書物杯を讀む事が出来るかと思ふと不思議である。妻に其事を話すと、あなたは悪かつた二三日頭が判然し過ぎてみんな困りました。

○蘇氏印略が来る。面白けれども讀めるのは極めて少ない。

○雨申床屋が来て髪を剃る。

○胸も肩も背も痛るとぼろ／＼する

○南無集を買はうと思つたが費澤過ぎるので躊躇す。妻に話すと御買ひなさいといふ。

九月二十一日

○昨夜始めて普通の人の如く眠りたる感あり。節々の痛柔らぎたるためか。體力回復のためか

○蟲遠近病む夜ぞ静なる心

○餘所心三昧聞きむればそゞろ寒

○月を亘るわがいたつきや旅に菊

○起きもならぬわが枕邊や菊を待つ

○朝オートミール百グラムになる。ソーダビスケット一枚ソップ前に同じ

○昨日宮本博士來診の報あり。日取未だ定まらず。博士は一度余に逢ひたき由週日云はれたる由。頼田さんは漱石といふ人はどんな顔か見て置きたいと思つて来た。

○玄耳より醉古堂御掃と列仙傳を送り来る。(蘇氏印略の一卷を看過した時也)

○爽風の秋風縁より入る

○嬉しい。生を九俵に失つて命を一養につなぎ得たるは嬉しい。

生き返るわれ嬉しき上菊の秋

○遠くにて瓦をたたく音す

○夜半魚池中に躍る水時あつて池に注ぐ。未だ其状を見たる事なし

○養其無象象故常存 守其無體也 全故眞 全眞相濟 可以長生 天得其眞 故地得其眞 故久 人得其眞 故壽

(長生論) 洞古經よりか?

(大通經よりか?)

解爲之性 心在其中矣 動爲之心 性在其中央 心生性滅 心滅性生 現如空無象 湛然圓滿

九月二十二日

○秋冷。昨夜は矢張りよく眠らず

○圓覺會參文字禪

○眉毛今日霜前線

○青山不拒席人骨

○却下九原月在天

○たそがれに參れと菊の御使ひ

九月二十三日

○昨日より咽喉わろし。濕布

○妻が桑の眞盆を買つてくる。二圓五十錢とい

が起きてくれた。

○今夜は特別列車で觀光團が修善寺へ押かけるよし。其上宮本叔氏と杉本氏もくる由

○鶴の影穂に長き入り日かな

○午後後鏡をそり、髪を梳り、服を脱ぎ、衣服を着換へ、坂元の持つて来た新しい毛布を懸ける。

○天氣清澄 坂元は昨夜沼津迄来り今朝一番でく大祭日と日曜と重なる爲也

○朝○○の美學を讀む。

○一山や秋色々の竹の色

○四時頃楚人冠至る。觀光團と一所也。汽車が一圓いくらとまりが八十五錢馬車が十錢といふ安いもの也。

○腹へる。森成氏へ訴へる。拒絶

九月二十五日

○曇。昨日觀光團のため終夜擾々。相變らず眠らず。夜通し風呂場に人氣あり。朝は晴いうちから顔を洗ふ。夜半に下女の笑ふ聲す。黎明に又下女の聲す。思ふに下女は床に入らざりしなるべし。

○昨夜宮本杉本二氏來診。十時頃喫飯。醫師も規律ある生活を送りがたし。其上觀光團にて恐らく眠り得ざりしならん。

九月二十四日

○秋淺き樓に一人や小雨がち

○生きて仰ぐ空の高きよ赤蜻蛉

○今日は新鮮のさしみ(もしあれば)を少し食はせてくれる筈。刺身は夫程でもなし

○昨夜右の足の骨が痛むので眠が覺めた。肉がなく骨許の上へ片々の足を載せたため也。其外尻が痛み手が麻痺して眠の覺む事多し。

○昨夜痰がつかへて三四度せく。其度に看護婦

ふ一茶は陣脚である。もう一つあつた棒のを見てよければ代へたいと思ふ。松の盆(角)六圓程といふ。奇麗也。たい全體透明ならず。且つ丸盆が好ましいと思ふ。妻もしかいふ。頼んで外をさがして見る事にする。

○頼も旨い。ビスケットも旨い。オートミールも旨い。人間食事の旨いのは幸福である。其上大事にされて、指定人が洗つてくれる。糞小便の世話は無論の事。これを難有いと云はずんば何をか難有いと云はんや。醫師一人、看護婦二人、妻と外に男一人附添うて轉地先にあるは華族様の贅澤也。

○昨日は雨終日。午前にジェームスの講義をよむ。面白い。蘇氏印略を繰返し見る。面白い。會話の本を讀む。面白い。

○昨雨を聞く。夜もやまず。

○範頼の墓瀧るらん秋の雨

○菊作り門札見れば左京かな

○午前ジェームスを讀み了る。好き本を讀んだ心地す。

○昨夜熱度三十七度一分。輕微の氣管支にて右の方が犯されてゐる由。手を出して本を讀む事を禁ぜらる。

○(病後對鏡) 洪水のあとに色なき茄子かな

○(病後對鏡) 洪水のあとに色なき茄子かな

○(病後對鏡) 洪水のあとに色なき茄子かな



○ 風流人未死 病裡 鎮清閣 日々山中事 朝々見碧山

○ 宮本氏云ふ今二週間に於て歸京し得べし。まづ二十日と見れば可からんと。診察の結果なり。同氏は杉本氏と午頃歸る。坂元も同時に歸る。

○ 古里に歸るは菊の頃 ○ 午飯に鯛の刺身四切を食はせらる。平常刺身に嗜好なきも矢張り。ソーダビスケットに水を塗り食糧をつけて焙りたるを食ふ。是亦旨し。

○ 昨日観光團に加つて見舞に來てくれた畔柳岡田二人去ると十一時頃來る。 ○ 静なる病に秋の空晴れたり

○ 菊の宴に心利きたる下部かな ○ 午後一時楚人退去る。 ○ 二時頃より蒸暑、蟬なく。 ○ タローチエを讀んで疲勞。

○ 無言の文壇、放恣なる安評、努力なき想像雲の袖が出るが如く。起りて自然に消ゆ。無抵抗の放任、目的なき演説。消極に安んずる倦怠。悠々たる精神。罨障なき活動。苦を感じざる程の想像。義務なき願の作用。

九月二十六日 ○ 昨夜始めて起き直つて食事。横に見る世界と壁に見る天地と異なる事を知る。食事をまし。

○ 夜に入つて元氣あり。妻から失心中の事をきく。失心中にも血を吐いて妻の肩へ送れる由。其時間は三十分位注射十六筒といふ。坂元がふるへて時々奥さんしつかりなさいと云つた。電報をかけるのに手がふるへて字が書けなかつた由。

○ 余の見たる吐血は僅かに一部分なりしなり。成程夫では危険な筈である。余は今日迄あれ程の吐血で死ぬのは不思議と思つてゐた。 ○ 人間の血の三分一を吐けば昏睡し。三分二を吐けば死する由。

○ 昨夜は薬の所爲か比較的安眠(四時頃迄)然し夢は始終見たり。友人の坊主が叡山の麓迄うどんを食うたと云つて一時間許りの間に歸つて來た。さうしてうどん程天下に旨いものはないと云つてゐた

○ 朝始めて起き直つて顔を洗ひ髪を梳る。心地よし。 ○ 始めて床の上で起き上りて坐りたる時、今迄横にのみ見たる世界が壁に見えて新らしき心地なり

○ 壁に見て事珍らしや秋の山 ○ 來る。(金をやつて) ○ 堂守に菊乞ひ得たる小銭かな ○ 力なや瘦せたる吾に秋の粥 ○ 住き竹に吾名を刻む日長かな ○ 見もて行く蘇氏の印譜や竹の露 ○ 籠籠の墓守も花を作らるから今度はあすこで貫つてくるといふ。 ○ 秋草を仕立てつ懸を守る身かな

坐して見る天下の秋も二日月目 ○ 其時松陰に百日紅の残紅を見る。久しき花なり。どつと床に伏したる前既に咲けるものなり

○ 病正に輕快に移らんとして、今更病を惹ふの情に堪えず。本復の後はかゝる寛容ある、  
なまなまなき生涯、自己の好む儘の心の働きを盡して朝より夕に至る時間、朝夕余の周圍に奉侍して凡て世話と親切を盡す社會の人知人朋友もしくは余を厚く人のインダグジュエンス。

○ 是等は悉く一朝の夢と消え去りて、殘るものは鐵の如き堅き世界と、磨き澄まさればならぬ意志と、戦はねばならぬ社會丈ならん。余は一日も今日の幸福を棄るを欲せず。

○ 切に考ふれば希望三分二は物質的状況にあり。金を欲するや切也。 ○ 床に就きたる人の天地は床の上に限られる事無論也。されどもわが病甚しき時の天地は狭き布團の一部分に限られたり。足の付く背の觸るゝ處腰の据わる所丈にて其他はわが領分にあらぬ心地なり。衰弱甚しければ容易に動きもならぬ故也。小き枕にてわが領分と領分でない所ありき頭を動かすは大變な事業也。

○ 病床のつれづれに妻より吐血の時の模様を

九月二十七日 ○ 坐。床の上で起きて顔洗、食事、 ○ 昨夜もよく寝ず。寐れば必ず夢を見る。然し家てゐる事が大變樂になつた。 ○ 寂られぬ夜 ○ ともし置いて室明き夜の長かな ○ 午飯減りて殆んど起き直る事能はず。食後疲れて熱三十分の時間に看護婦に起さる。 ○ 妻君と森成さんと東と朝日瀧へ行つたらしい。午院閑寂 ○ 反物屋が麻皮紙織と、眞綿織を持つてくる。眞綿織は伊豆の大島の産也。雅な質で雅な色なり ○ 三人觀音様より歸る。堂守から菊を乞うて

九月二十八日 ○ 曇。昨夜も不眠。去れども眼が冴えるにあらざうとくとして天明に至る也。 ○ 秋の蚊の聲さんとすなり夜明方 ○ や我を蠶さんと ○ 親家の昔も嚙栗の味 ○ 鮎の丈日に延びつらん病んでより ○ 肌寒をかこつとも君の情かな

九月二十九日 ○ 仰臥人如蟻 默然對大空 ○ 大空雲不動 終日杳相同 ○ 昨日も聲刺。細君の注意による。始めは顔の下を刺り落した時は残り惜さうなりき ○ 京に歸る日も近付いて黃菊哉 ○ 既に玉子の煎りたるを食ふ

九月二十八日 ○ 昨日昨夜便通二回。一回を胃腸病院に送る。夜安々と寐る。然し眼未明に覺む。 ○ 桔梗、菊、紫苑、桔梗は濃くふつくらしたり。紫苑は高く大きく薄紫の菊の婆婆たるに似たり

九月三十日 ○ 陰。漸々寐心よくなる。 ○ 東京より返事。二日前に送つた便に血は交らない由申し來る ○ 昨夜オレフ油を十グラム程飲む。是は酸を抑へる功、いたみをとめる功、齒門の出口を滑にする功、及び滋養の功ある由。或病人四十筒の注射をした時オレフで溶解した(藥液の)ために大いに元氣を回復せる由。



○取寄せたる清六家詩鈔、唐賢詩集、宋元明詩集、  
○名古屋の鈴木來る  
○午 鯛のうしほを食ふ。

十月二日

○夜寐られず。看護婦に小便をさして貰ふ。三時半。寐れば夢を見る。夢を見ればすぐ覺める。  
○明方戸を明ける時の心持  
天の河清ゆるか夢の覺來な  
夢 擁 銀河白露流  
夜分形影一燈愁  
旗亭病近修禪寺  
聽到晨鐘早上秋

十月三日

○初めて百舌をきく  
寒座敷林に近き百舌の聲  
歸るは嬉し梧桐の未だ青きうち  
○雨猶歇まず。細雨也  
○午前雲晴日出づ。ミンク病鳴く  
○細君、東、森成どこかへ行つたと見えて音なし。奥の院。(二十一日の絶食)  
歸るべくて歸らぬ吾に月今宵

十月六日

○快晴心地よし。昨夜眠穩。  
冷かや人室静まり水の音  
○昨日森成さん富山入道とかの城跡へ行つて歸りにあげびといふものを取つてくる。ぼけ茄子の小さいのが葡萄のつるになつてゐる様也。うまいよし。女郎花と野菊を澤山取つてくる。莖黄に花青く普通にあらず。野菊が砂壁に映りて暗き所に星の如くに散る。  
的礫と壁に野菊を照し見る  
鳥つゝいて半うつろのあげび哉  
○昨日ベアリングの露文學を読み出す。一日にて現今哲學了  
天下自多事 被吹天下風  
高秋知蟹白 衰病夢顔紅

○陰。秋かと思へば夏の末、夏の末かと思へば秋。柿も大分赤き由。栗もとうから出てゐる。稲は半分刈りと。  
雲を渡る日ざしも薄き一葉哉  
○小宮が毎日の様に繪葉書をよこす。歌麿の浮世繪にこんな人になりたいとか、こんな人を演ずる芝居が見たいとか書いてある。たわいもない事である。  
白川も白雲の繪葉書をくれる。御能のスケッチを色取つたものである。松風針の木、山姥等である。たまには文句入である。甚だうまい  
○昨夜。鯛の煮たのを食ふ。

十月四日

○陰。雨を帯ぶ。昨夜雨滴千萬點を聞き盡す。睡臥状態漸々平生に近づく  
○昨日花を更ゆ。コスモス、菊、菊と野菊の中間にて黄なるもの、東君の取つて来てくれたもの  
○氣管支漸く治まる  
○昨日寒髪を洗ふ。  
○残骸猶春を盛るに堪へたりと前書して  
庭へる我は夜長に少しづつ、  
骨の上に春滴るや粥の味

十月七日

快晴。安眠常人と同じ。  
朝寒や太鼓に痛き五十棒  
鏡中人已老 嘔血 骨痛 存  
病起期何日 夕陽 復一村

十月八日

○數へると明後日は東京へ歸る日也。嬉しくもある。又胆でもある。歸りたくもある。歸りたくもない。現状は餘程の苦痛でなければ變る事を取てし得ないものである。  
顔に漸く血の色が出て来た。

十月九日

○雨濛々。朝食。床の上に起き返りて庭を眺めると残紅をかすかに着けながら、百日紅が既に黄に染つてゐる。  
先づ黄なる百日紅に小雨かな  
○昨日看護婦が裏の縁側に出てもうあの袖が黄になりましたと云ふ。明後日は東京へ歸る日取なり

米は東京より取り寄せたるものなり  
○鶴鶴多き所なり  
鶴鶴や小松の枝に白き葉  
松濤る。瀟る。は女松。降るは秋雨  
寐てみれば栗に鶴の興もなく  
○氣管支にて體を拭く事を禁ぜられたれば觸るとざら／＼して人間の肌とは覺えず。鶴の羽を引きたる如し  
栗の如き肌を切に守る身かな  
○午 障子を開けば噴空澄徹久し振也。體を拭く。垢出で、ぼろ／＼す。定巻を着更ふ。よき心地なり。やがて腹減りて汗出づ。  
○夜は朝食を思ひ、朝は晝飯を思ひ、晝は夕飯を思ふ。命は食にありと。此語の適切なる余の上に若くなし。自然はよく人間を作れり。余は今食事の事をのみ考へて生きてゐる  
萬事休時一息回  
餘生忍比殘灰  
風過梧葉動秋去  
露滴竹根沈翠來  
漫道山中三月滯  
詎知門外一蹊開  
歸期勿後黃花節  
恐有塵落落舊昔

十月五日

○晴。稍寒。眠無事、殆んど平生に近し。  
淋瀝鮮血腹中文 嘔照黃昏淡綺紋

十月十日

○陰。明日東京へ歸れると思ふと嬉しい。  
○客夢同時一鳥鳴  
夜來山雨曉來晴  
孤峯頂上孤松色  
早映紅暈々明  
足腰の立たぬ案山子を車かな  
○昨夜見やげもの杯を買ふ事を相談する。やるとなると何處も彼處もやらなければならぬので

十月十日

○昨夜、寄木細工を取り寄せて色々見る。箱を三つ買ふ。皆美人趣味なり。あげびの箱を買ふ。又読めた棒の烟草盆と烟草箱が一昨日出来上る。  
○愈。明日東京へ歸れると思ふと嬉しい。

十月十日

○昨夜、寄木細工を取り寄せて色々見る。箱を三つ買ふ。皆美人趣味なり。あげびの箱を買ふ。又読めた棒の烟草盆と烟草箱が一昨日出来上る。  
○愈。明日東京へ歸れると思ふと嬉しい。



大徳になる。細君がなる丈書人と修善寺節と  
 柳葉で間に合せて置かうといふ。それもよか  
 らうといふ。  
 ○神代杉の文庫とあけびの籃を買つて池邊湯川  
 兩氏にやり更に桑の視箱を坂元に縮緬の兵児  
 帯を添へてやる事にする。  
 ○骨許りになりて案山子の浮世かな  
 扶け起す案山子の足

十月十一日

○雨の中を馬車にのる。人の考案にて櫓の如き  
 ものにて二階を下る。大を馬車の中へ入れる。  
 浴客皆出見る。櫓は白布で蔽はる。わが第一の  
 葬式の如し  
 ○雨の中を大仁に至る。二月目にて始めて戸外  
 の景色を見る。雨ながら樂し。目に入るもの皆  
 新なり。箱の色尤も目を惹く。竹、松山、岩、  
 木槎、蕎麥、柿、薄、櫻珠沙華、射干、悉く  
 愉快なり。山々僅かに紅葉す。秋になつて又來  
 たしと願ふ。

○大仁にて宿屋の主人、顔先づあり。番頭は  
 人足四人をつれて三鳥迄来る。漸くに汽車を乗  
 りかゆ。人足なかりせば必ず後れたらん。一  
 等室借切りなり。九人のを六人前出二十二間  
 某也。神奈川にて東洋城来る。大森にて楚人  
 冠乗る。新橋にて人々出迎はる少々驚く直ち  
 に擔架にのる。大抵の人には目隠した積なり。  
 あとで聞けば知らぬ人多し。釣臺で病院に行  
 く。暗い中で四邊更に分らず  
 ○入院故郷に歸るが如し。修善寺より靜なり。  
 面會謝絶。醫局の札をかかげたる由。壁を塗り  
 交へ墨をかへて待つてゐると云はれた杉本氏の  
 言葉はまことなり。落付いて寢る。電車の音も  
 左迄ならず。  
 ○昨夜雨

十二日

○朝。食パン二片、牛乳一合、ソップ一合、玉  
 子一個を食ふ。修善寺の俗にあたる  
 ○昨日途中にて  
 ○病んで來り病んで去る吾に案山子哉  
 ○瀧の松の間に蕎麥を見付たる  
 ○藪陰や濡れて立つ鳥蕎麥の花  
 ○稲熟し人憶えて去るや温泉の村

○柳紅葉せり舞はる萬の青き哉  
 ○就中竹葉也秋の村  
 ○數ふべく大きな芋の葉なりけり  
 ○新らしき命に秋の古きかな  
 ○院長の病氣を昨夜後藤さんに聞く。  
 え、又寒くなつたものですから  
 ○今朝妻が來て實はあなたに隠してゐました院  
 長は死んで、葬式には香焚を持って東さんに行つ  
 てもらひました。死んだのは先月五日のよし  
 ○森成さんが最初に歸つたのは危篤のため後で歸  
 つたのは葬式のためだといふ。おるくたつたの  
 は八月の二十四日頃即ち余の吐血したる頃な  
 り。初め余の森成さんを迎へたる時、院長はわ  
 ざわざ電報で其地にて充分看護せよと電報をか  
 けたり。治療を受けた余は未だ生きてあり治療  
 を命じたる人は既に死す。驚くべし  
 ○逝く人に留まる人に来る雁  
 ○杉本さんが疊替をして待つてゐるといふ。成  
 程疊も新らしく暖も降りかへ、襖も張り替へ  
 たり。居心地頗るよし。  
 ○滿鐵の龍居が來て中村が心配してゐる由を妻  
 に物語る。金が要るなら遠慮なく云へといふ意  
 味らしといふ

十月十三日

○陰雨  
 ○頭後に後れず或夜月の雁  
 ○釣臺に野菊も見えぬ桐油哉  
 ○安倍、坂元、池邊、來。妻來  
 ○夜十二時地獄あり  
 ○ジェームスの死を雜誌で見る。八月末の事、  
 六十九歳。

十月十四日

○陰雨  
 ○病室の新らしくなりたるを喜んで  
 ○昨日滿鐵の山崎氏又見舞を持參。

十月十五日

○思ひけり既に幾夜の蟋蟀  
 ○喚に水を掛く音を聞く。はづれの人は胃潰  
 瘍の由。しかも重態と聞く。本復を祈る。  
 ○喚より烈しき雨。恍惚として詩の推敲や俳  
 句の改竄を夢中にやる。  
 ○霧下南雨  
 ○黄花香照額  
 ○欲行沿欄遠

Dr. Fuchiwaki ノ 死 七 月 九 日 の Athenaeum  
 Saturday トアリ

十月十六日  
 二時半より眼覺む。  
 天地有無裏 死生交謝時  
 人間失寄託 如羅一藕絲  
 命根來何處 靈臺不可知  
 窈窕日月忍 炭々萬象危  
 こゝ迄考へたら看護婦が起きて掃除を始め  
 た。

○昨夜洗腸  
 ○幽明忽咫尺 乾坤半箇移  
 ○單騎跨雙界 隻眼掛大疑  
 ○幸生天子國 未達當代師  
 ○四十翁元々 斯道果屬誰  
 ○鈴木、森田、小宮、次の室に來り語る外にも  
 人ある様なり  
 ○狩野來る由會はず歸す。昨日の小林醫師も同  
 じ。今朝長興又郎氏口口迄來て引き返せる由

十月十七日  
 陰、四時に眼覺む。

○櫻樹天地外 生死交謝時  
 ○杳然無寄託 懸命一藕絲  
 ○命根何處在 窈窕不可知  
 ○唯覺天日暗 翻怪人間奇  
 ○幽明因比隣 乾坤一箇移  
 ○單騎入雙界 隻眼掛大疑  
 ○休言閻兩極 曷得窮兩儀  
 ○生住天子國 未許稱人師  
 ○四十徒元々 斯道竟屬誰  
 ○朝食前に昨日の詩を改めてこんなものにし  
 た。實際の詩である。詩のための詩ではない。  
 だから存して置く。  
 ○病院でも朝五時頃になると太鼓の聲が聞え  
 る。始めて聞いた時は恍惚のうちに修善寺に居  
 た様な心持がした。  
 ○過ぎし秋を夢みよと打ち響めよとつ  
 ○孤愁潦亂語 況逢蕭風悲  
 ○仰臥秋已闌 一病欲銀髭  
 ○寥廓天空在 默見高果枝

十月十七日  
 ○晴  
 ○昨服部より銀の貫人を取り寄せて見る。森成  
 さんと相談の上、光澤けしの小さい奴を探びそ



れに修善寺にて森成國手へと前書して  
朝寒も夜寒も人の情かな といふ句をほる事  
にする。價は十三圓五十錢也賤貨は知らず

十月十八日

○昨日池田柳大郎來。禮を述べ  
○同昨日妻來。池邊の所に至り余の旨を傳へ  
たる由を語る

○昨日寮てみてフナネルの柄を擇ぶ。  
○昨日、修善寺の菊屋の朝日より電話、御誂  
の寄木の箱は不足故新たに作らせるから待つ  
て呉れといふ。妻にきくと十六個注文したとい  
ふ。皆様にやるなり。  
○今朝昨日の古詩を作り了へ。帳面の末尾に書  
く。

「帳面の末尾より引出」

命根何處是	窮竟不可知	翻 怪人間奇
香然無寄託	無命一蕪絲	隻 眼掛大疑
單心貫雙界	乾坤頃刻移	易 得明二儀
取言聞兩極	吾事問向誰	

○一等に入院の人は食道癌一人、胃癌一人、胃  
潰瘍一人。何れも死ぬ人のみなり。食道癌の  
人は中途にて退院他の二人はもう二三日で六づ  
かしいといふ。親類杯案まる様様也。胃癌の人は  
死ぬのもあきらめさへすれば何でもないと云  
ひたる由。

十月二十二日

○陰。昨夜十一時三十分、二時二十分前、四時  
三十分前に目醒む。  
○曉。や夢のこなたに淡き月  
是は寐ながらの句也。今朝の實況にはあら  
ず

○縁にベコニヤあり。昨日妻の持つて来たも  
の。實は菊を買ふ積の處積木屋が十六貫だと  
いふので、森成さんが五貫にまけろと云つたら  
負けなかつた。歸りに六貫やると云つたら矢張  
負けなかつた。さうである。今年水で菊が高  
いさうである。

○ふら下る蜘蛛の糸こそ冷やかに  
妻食後始めて室内をあるく。木庵の落款が  
見たくなりし故也。序に北の廊下口迄出て面會  
謝絶の貼紙を見る。

孤愁來落枕 又 搖蕩 悲  
仰臥秋已開 苦 病 欲 銀 匙  
對比 仲 恨 久 晚 懷 無 盡 期

○秋意體によるし。

○今朝眼覺めて發句を思ふ途にならず  
鳴かぬ夜は蟬も亦死んだと思ふ  
と云ふ様な意味のものなり。

○海外漁史より「涸瀉」を贈り来る。漱石先生  
に捧げ上ると書いてありたり。恐縮

○宮本叔氏見舞。東京市廳迄來れりといふ。  
暫時にして歸り去る。

十月十九日

○快晴。昨夜真入の上へ貼る雁皮の上へ細字  
で發句と前書をかく。それを貼り付けて彫る事  
にする。寫眞では焼き付けがたしといふ。  
○朝食前便。

○リードのナチュラル エンド ソシアル モ  
ラルスを讀み出す。  
○昔來る。重武が脚氣で鎌倉へ連れて歸つたと  
云ふ。自分も大森を引き上げて鎌倉に居る由  
○内丸來。東洋城來。皆面會謝絶を無視し  
て來る。東洋城と俳句を作る。宮内省御料地

十月二十二日

半晴。十一時過。三時半小便をする。  
○嬌しく思ふ蹴鞠の如き菊の影

○昨夜九時半頃胃痛の加藤さんが死んだよし。  
道理で眼を覺ますと人聲が聞えた。余は看病  
のため徹夜するのかと思つてゐた。一等室に残  
るは胃潰瘍の二人である。其一人は二三日有つ  
か有たぬかといふ所なり。

○胃に來て人懐かしや赤蜻蛉  
浪極も熱れて玉雜の詩集哉

十月二十三日

○晴。夜十時、三時十五分前に目醒む。兩度  
共小便。

つくんとと行燈の夜の長さかな  
小行燈夜半の秋こそ古めけり

○尻の痛み漸く癒ゆ  
○細き足漸く搭せた身體を支ふ。力石を持ち  
上げる様な氣分直る。

○胃潰瘍の人今日晩景に死す。吾等三人のう  
ちわれ一人生残る。氣の毒の心地す。此病人  
嘔氣ありて始終げえく吐きたるに此二三日は  
靜なる故或は快氣に向へるかと思へるに實は  
疲勞の極摩を出す元氣を失ひたるものと知れ

のバタを四斤くれる。

十月二十日

○昨日黄彦より長き手紙届く。病氣の事を内丸  
の服知で知れる由。旅行中の事など巨細記しあ  
り面白し。

○「思ひ出す事など」一を書き草平に送る。十  
時半頃突然火花の音をきく。寺内統監の歸京  
の由也

十月二十一日

○朝東洋城に編書を出す。菊の句をたの  
まれた故也。昨日草平來。しばらく話す  
○妻來。昨夜よりウオードのダイナミックソ  
シオロジーを讀む。

○獨乙の哲學者の言説は雲の華の如し。ウオ  
ード杯の著述は地を行く人に似たり。平々たり坦  
坦たり。而して足達に地を離れず。散文的也  
○森成君に病氣前の寫眞を望まれて一句を題す  
○我面影やすでに秋

○昨日池邊來。過般來。社から出して呉れた金  
の處置に就いて自分に一任せよといふ。諾す。  
實は歸り匂々妻を以て辨償の事を申し出でたる  
なり

十月二十五日

○雨と陰の間。  
○桃花馬上少年時(醉吟時)

○笑 錄 銀 鞍 柳 枝  
○綠水如今迢遞去  
○空留 明月照秋思  
○別 題  
○霜可考

○一叢の薄に風の強き哉  
○雨多き今年と案山子聞くからに  
○柿一つ枝に残りて鳥哉

○一等患者三名のうち二名死して余獨り生存  
す。運命の不思議な事を思ひ。上の句あり。  
○昨地震あり。看護婦が見舞に來る。長き地震  
なり。三時半と覺ゆ。

十月二十六日

○陰。二十三か二十四の日記をつけ損つたり。  
○昨夜二十四日の晩瀧川玄耳入院。胃カタ  
ルか何か分らぬ由。ちつとも知らず  
○余の病氣につき世話をしてくれた男今は余と  
同じ様に病院の患者となる。うその様なり。



を償うて餘りある様な友人なら余はいつでも  
 離脱する。余はかくの如き友人を多く持たない  
 事を甚だ口惜く思ふ。

○濫川の室より小さい菊の土鍋の平たいのに入  
 れて、長い蔓をつけて提げる様にしたものを入  
 れる。苔の間に白砂を蒔いて、札を立て、日  
 黒の里としてある。

○神崎さんがダリヤを呉れる。ダリヤは今年に  
 入つて非常に発達した様である。大輪の菊の如  
 きもの種々出る。

○明けの菊色未だしき枕元  
 日盛りやしばらく菊を縁のうち  
 縁に上す君が遺愛の白き菊  
 井戸の水波む白菊の最哉  
 蔓で提げる日黒の菊を小鉢哉

十一月二日  
 陰。昨草平来、丸善と南江堂へ電話をかけて  
 もらふ。坂元来、是は醫師の謝禮につき池邊と  
 宮本兩氏の相談の経過を報告の爲め、  
 ○朝倫敦の大谷正信よりブレイゴア、及び  
 ソサエチー一部寄贈、修善寺へ届きたるを回送  
 せり  
 ○身體を拭き爪を剪る。

形ばかりの密す菊の二日載  
 十一月三日  
 三日の菊雨と變るや昨夕より  
 雨。

十一月四日  
 晴。からだを拭く。  
 ○小使が貸してくれた二鉢の白菊に蟲がつく。  
 小使がそれを癒してやると云つて代りに別の鉢  
 を貸してくれた。それは黄の蓋に細い長花片が  
 間を置いて出てゐるものである。野菊の大きい  
 ものである。普通の菊よりも雅である。

○小西海南見舞にくる。讃岐の話をする。  
 ○太田新三郎が立派な風月堂の菓子折を置いて  
 行く。四日の日附のある菓子折なり。

十一月五日  
 ○ナゴヤの鈴木より花瓶を送る旨申し来る。  
 ○森成さんが越後の笹船をくれる。雅なものな  
 れど旨からず。カステラはと聞いたら胃にも腸  
 にも瓦斯があるから御止しなさいと云つて止め  
 られる。  
 ○森岡月来る。疲勞を言譯にして不會。一時間

十一月六日  
 ○つね子、えい子、あい子三人来る。有樂座の  
 御伽芝居を見に行く。歸りに又寄る。

十一月七日  
 ○鈴木より花瓶といく。平安萬歳堂と蓋に銘あ  
 り。

○夜鐵瓶の音をきく。

○篠の鉢は夜見る方よし。  
 濁し見るは白き菊なれば明らか  
 ○篠の鉢の香や

○體重四十五キロ三百。前週より一キロ九百グ  
 ラム増す。十二買餘なり。  
 ○病院へ入つたら好い花瓶と好い贈物が欲し  
 いと云つてゐたら、偶然にも森岡月が藏澤の竹  
 をくれる。藏次が花瓶をくれるといふ報知をす  
 る。人間萬事から思ふ様に行けば難有いもので  
 ある。

○程して小使手紙を持て来る。藏澤の墨竹の軸  
 を添ふ。御見舞とも御土産とも致し進呈すとあ  
 り。早速床にかく。

十月二十八日  
 ○晴。身體を拭く。  
 ○昨日東よりギカーの佛譯来る。二三頁讀む。  
 ○明日は霞賣會の日なり。森成さんは行かれる  
 にや。

十月二十九日  
 ○弓削田が来て大分長く話をする。區役所の役  
 人の様な服装をしてゐる。

十月二十七日  
 ○晴。三時頃より眼覺む。眠つたり覺めたりし  
 て例朝迄過ぐ。詩一首句一句を釋中にて得。  
 馬上青年老 鏡中白髮新  
 幸生天子國 願作太平民  
 君が琴座を拂へば鳴る秋か。  
 (眞彦のアイオリンの事を考へ出  
 して)

十月三十日  
 ○陰。將に晴んとす  
 ○昨日は客四人に接す。社の山本。濫川の妻  
 君。中村翁。西村醉夢。  
 ○昨日體量をはかる。フナネルに薄い毛織の  
 シャツを着て四十四キロ五百ありたり。もと病  
 院を出た時は四十九キロなにしたなりき  
 ○坂元来(ひるから)、唯妻来。ごたごたする  
 気分にて、自分の思ふ事出来ず。不快なり。  
 ○晩に病院の園丁が手作りの菊二鉢を贈り來

○雲出づ。陰晴共に不明。  
 ○昨夜服部より森成さんにやる買入を持參。細  
 君不在にて金なき故拂はず。小僧又持つて歸る。  
 ○濫川の妻君が来て、ウアーフアーとカル、ス  
 煎餅をくれる。  
 ○中根榮といふ名古屋の人一思ひ出す事などし  
 を讀んで長い手紙をくれる。  
 ○中村翁来。西村醉夢來。  
 ○日課。例によりウエードのダイナミック社會  
 學、ギカーの佛譯。  
 ○森成さんが越後高田の笹船をくれる。一日に  
 三つ許さる。  
 ○雨の音蕩々の夜

十月三十一日  
 ○晴。昨夜の菊を見る。  
 ○風流の友に逢ひたし。人生だの藝術だの何の  
 かのといふものには逢ひたくなし。  
 ○今の余は人の聲よりも禽の聲を好む。女の顔  
 よりも空の色を好む。客よりも花を好む。談笑  
 よりも黙想を好む。遊戯よりも讀書を好む。願  
 ふ所は閑適にあり。厭ふものは塵事なり  
 ○妻が昨夜来る時車屋の菊屋で病院へ行くな  
 らと云つてダリヤを呉れた。此ダリヤは丸で菊  
 の様な大きなものである。花の厚い丸は丸で菊  
 の丸で大輪の菊である。色は赤、薄紅、黄等であ  
 る。何となく下品で菊とは較べられない。梅も  
 ときの傍へ放り込んだら不釣合な事甚しい。  
 ○余の病中のアロゲラムを打ち毀して、其損失

○見事なる白菊也。白菊は院長の遺愛の品の  
 よし。院長は菊を愛せるよし。英國から取寄せ  
 た菊が咲いた時見せたら口が利けないので、胸  
 に手をあて、其手を以て胸を打ち喜を表した  
 りといふ。  
 ○森成さんに買入を贈る。  
 ○願ふ所は閑適なり、ざわつく事非常に厭な  
 り



十一月八日  
 ○昨日丸善よりアンブリヂ、英文學史五六二巻を持参す。  
 ○昨日晴井さんに菊を買に行つてもらふ。十輪で十二錢也。直ちに鈴木のかれた瓶に挿む。  
 ○朝野院長兩名宛の手紙をかく。三等の病人宛感して堪へがたき故なり。

十一月九日  
 晴。午前陰に變ず。

十一月十日  
 秋雨蕭々  
 看護婦が小説を讀んでゐる。奇麗な表紙だから何だと開いたら笑つてゐる。見ると虞美人草であつた。六つかしい本だから止せと忠告した。

十一月十一日  
 霧。霧中に電燈を見る。  
 ○金子藤園より短冊と畫帖に題句をたのまる。  
 ○今日は修善寺を出て一ヶ月日なり

十一月十二日  
 晴。是公、三重吉、山口弘一より來信。

十一月十八日  
 晴。始めて微霜を見る。須臾にして日の爲に解く。  
 ○今日午飯に始めてめしを食はせる。粥より旨し。

十一月十九日  
 晴。今日は楠椿さんの葬式である。好き大氣で幸である。  
 ○妻が昨日電話で風邪の由を言ひ越す。今朝森成さんが来て昨夕見舞に行つたと云ふ。風邪の氣味故處方を置いて歸つたといふ。今日大塚の葬儀には行かれぬらし

十一月二十日  
 晴。此前入院した時よりは肥ゆ。昨日體重をはかる十二貫九百四十也。一週間に四五百目づつ増して行く。

十一月二十一日  
 晴。昨日午後五時頃渡邊和太郎さん横濱より來る。八時頃電話して歸る。

○三重吉喇叭を鑑古す。  
 ○藏津の竹を得てより露の庵  
 ○體量。四十六キロ七百。前週より一キロ四百増加ス。

十一月十三日  
 晴。

○新聞で楠椿子さんの死を知る。九日大磯で死んで、十九日に東京で葬式の由。驚く。  
 ○大塚から楠椿さんの死んだ報知と廣告に友人總代として余の名を用ひて可いかといふ。照會が電話でくる。

○池邊義象氏來。倫敦で逢つたぎりなり  
 ○東來、洋服を着てゐる。東洋城來。  
 ○妻來。

十一月十四日  
 晴。

○昨日山田の奥さんから鉢植の西洋花をもらふ。雪の下の様な葉に重の様な紫の花が出てゐる。雪の下の葉よりも遙かによし  
 ○妻來。横濱に行くといふ。森成さんの出診料として五百圓事務に拂ふ。  
 ○蒼來。銅牛來。

十一月二十二日  
 晴。午前石井柏亭來。

十一月二十三日  
 曇。午後黒川朋信來。  
 ○蛭川集後篇の八の終にある楚邦節の撰した蛭川府君行述の一節に曰く  
 府君年二十業見二毛。未及五十。齒牙落。眉髮皓々。七十齒牙不復存一。眉髮成黃。

十一月二十四日  
 風。坂元來。晚餐の時電燈悉く消ゆ。二十分後又明なり

十一月二十五日  
 晴。今日より午も晩も普通の飯となる。午食後二時間程寐る。覺めると頭が痛む、晩食後又寐る。八時頃覺めると今度は胸がわるい、さうして頭も依然として痛い。

十一月二十六日  
 晴。朝、乳をやめる。頭少しよし  
 ○今日より野菜を少し宛食はせる。生返る心地なり

十一月十五日  
 晴。床の中で楠椿子さんの爲に手向の句を作る  
 棺には菊地入れよ有らん程  
 有る程の菊地入れよ棺の中  
 ひたすらに石を除くれば春の水

十一月十六日  
 曇。

○昨夜二時頃火事ありと見えて、蒸気機関の鈴の音聞ゆ。今朝さけば麻布長坂の下のよし。

十一月十七日  
 晴。看護婦が又菊をもらつて来て瓶に活ける。入院患者に楠木屋があつて澤山飾つた花を洗面所に置いてどなたでも好ければ持つて入らつしやいと云ふのださうである。菊の名を知らず

○昨日池邊三山薩天錫の詩集と蛭川の詩集を持つて来てくれる。  
 蛭川の詩の七言絶句杯はゴマカシもの多し。蛭川の文章に至つては甚だ豊はず、まゝ雅を交ゆ。

○池邊三山來。社の金を社長が君にやるから隨意に處置したら善からうといふ。余も其處で貰ふ事にする。せめて二三百圓でも取つて公共の事に使つたらといつたら面倒だと云つて歸つた。

十一月二十七日  
 ○久し振りで妻來る。頭が痛いといふ。筆は此間からパラチアス、毎日森成さんの厄介になつてゐた由。始めてきく。

十一月二十八日  
 晴。山田茂子さんから奇麗な薔薇をくれる。  
 ○二三日前から看が全くいやになる。副食についでゐる些少の野菜を食ふ。  
 ○龍居報三來訪。明朝九時是公が新橋へ着く由をいふ。山田さんへ電話をかけてうちへ其由を取次いでもらふ。

十一月二十九日  
 晴。龍成來、草平來、是公來。是公は馬車に乗つて來たといふ。看護婦の話也  
 十一月三十日



雨。寒氣を覺ゆ。始めて入浴心地快。

十二月一日  
妻晴。草柳詩集と王孟詩集を買ふ。

十二月二日  
晴。菅の重武が死んだので妻が鎌倉へ行く。重武はベースボルで足を怪我して夫から足を切つて片足になつた。夫から脚氣だと云つて菅が東京から鎌倉へ連れて行つた。さうしたら助眼だといふ。氣の毒な事をした。

十二月三日  
晴。玄耳が来て人から頼まれた短冊をかけたといふ。  
松山がくる。夏以来逢はず。

十二月四日  
晴。栗原、梅谷来。  
○玄耳先生退院。

十二月五日  
欠。

十二月六日  
是公が龍居頼三と一所にくる。龍居君がシルクハットを被つてゐるから何處へ行つたかときいたら、野村龍太の御母さんの葬式に行つた歸りだといふ。

十二月七日  
晴。

十二月八日  
晴。坂元、小宮、来。夜に入りて東洋城来。

十二月九日  
晴。島村多三来。

十二月十日  
晴。生田長江来。行徳来。體重五十一キロ(十三貫五百六十六匁)。夜奥村来。

十二月十一日  
晴。内丸、野村。下の竹中から花束をくれる。  
妻、東、小供

十二月十二日  
晴。太田祐三郎が来る。何時の間にか相場師になつて、結城紬の着物を着てゐるには驚いた。

十二月十三日  
晴。欠。

十二月十四日  
晴。菅来。

十二月十五日  
晴。橋口来。水仙をくれる。支那の沙市の話をする。

十二月十六日  
晴。欠。夜雨

十二月十七日  
晴。高原操来。

十二月十八日  
欠。行徳歸。

十二月十九日  
欠。

十二月二十日  
曇。能成来。今日日中に歸省すといふ。障子をあげると高色の霧なり。倫敦の臭がして不愉快なり

十二月二十一日  
陰。橋本左五郎来。午過ぎ草平豊隆来。豊隆明夕故郷に立結婚の爲也。

十二月二十二日  
晴。六時草平来。七時山田の奥さん来。西洋花二鉢をくれる。

十二月二十三日  
晴。中村是公、龍居頼三、鈴木蘭次、高濱盧子、妻

十二月二十四日、  
晴。體重五二キロ百、

十二月二十五日

晴、三浦見雷士官。天生目一治。中村是公。渡邊和太郎。

十二月二十六日  
晴。大塚、坂元、竹中、妻、

十二月二十七日  
晴。物集和子、草平、本多直次郎、

十二月二十八日  
晴。戸川秋骨。橋本左五郎

十二月二十九日  
晴。坂本四方太。坂元雪鳥

十二月三十日  
晴。森巻吉、妻

十二月三十一日  
欠。

一月一日  
島村、子供、野上

一月二日  
妻来、

一月三日  
中根倫、坂元、小林修次郎、野村傳四、東新、

一月四日  
晴。夜古郷時待。——鹽瀬の大きな菓子折をくれる。重くてやつと有つやうなものなり。風呂敷ごと玄關に置いて行つたのを翌日午になつて海く病室に擔ひ入る。

一月五日  
欠。

一月六日  
欠。

一月七日  
神崎、野村、體重五三キロ三百、十四貫百七十八匁)

一月八日  
欠。



一月九日  
山田茂子、服部嘉香、妻

一月十日  
犬塚武夫、坂元雪鳥、

一月十一日  
森田草平、

一月十四日

體重五十四キロ二百(十四貫四百十七匁)  
鈴木謙爾、岡田耕三、

一月二十一日

五十四キロ八百(十四貫五百七十六匁)

### 思ひ出す事など抄

○(原本十三)

其日は東京から杉本さんが診察に来る手筈になつてゐた。雪鳥君が大仁迄迎に出たのは何時頃か覚えてゐないが、山の中を照す日がまだ山の下に隠れない午過であつたと思ふ。其山の中を照す日を、床を離れる事の出来ない、又室を出る事の出来ない、朝から晩迄殆んど仰ぎ見た試しがないのだから、斯う云ふのも實は麻の先に餘る空の端丈を日常に想像した制限である。——余は修善寺に三月と五日ほど滞在しながら、何方が東で、何方が西か、どれが伊東へ越す山で、どれが下田へ出る街道か、丸で知らずに歸つたのである。

杉本さんは豫定の如く宿へ着いた。余は其少し前に、妻の手から吸飲を受け取つて、細長い硝子の口から生温い牛乳を一合程飲んだ。血が出てから、安静状態と流動食事は固く守らなければならぬ様になつてゐたからである。其上出来る丈病人に營養を與へて、體

力の回復の方から、潰瘍の出血を抑へ付けるといふ療法を受けつゝあつた際だから、香

應なしに飲んだ。實を云ふと此日は朝から食慾が萌さなかつたので、吸飲の中に、動く事の出来ぬほど濁つた白い色の漲る様を見せられた時は、すぐと重苦しく舌の先に溜るしつ濃い乳の味を豫想して、手に取らない前から既に反感を起した。強ひられた時、余は已むなく細長く反り返つた硝子の管を傾けて、湯とも水とも捌けない液を、舌の上にとらせようと試みた。それが流れて咽喉を下る後には、潔よからぬ粘り強い香が安りに残つた。半分は口直しの積りであとから水クリームを一杯取つて貰つた。所が何時もの爽かさに引き更へて、咽喉を越すとき一旦溶けたものが、胃の中で再び固まつた様に妙に落ち付が悪かつた。夫から二時間ほどして余は杉本さんの診察を受けたのである。

りすぐ社へ向けて好いといふ電報を打つて仕舞つた。忘るべからざる八百ゲラムの吐血は、此吉報を逆襲すべく、診察後一時間後の暮方に、突如として起つたのである。

斯く多量の血を一度に吐いた余は、其暮方の光景から、日のない眞夜中を通じて、明る日の天明に至る有様を巨細残らず記憶してゐる氣でゐた。程程で妻の心覺に付けた日記を讀んで見て、其中に、ノウヒンケツ(狼狽した妻は膈貧血を斯の如く書いてゐる)を起し人事不省に陥るとあるのに氣が付いた時、余は妻を枕邊に呼んで、當時の模様を委しく聞く事が出来た。微頭徹尾明瞭な意識を有して注射を受けたのみ考へてゐた余は、實に三十分の長い間死んでゐたのであつた。



果だと云ふ。余は其時さつと進める血潮を、驚ろいて余に寄り添はうとした妻の浴衣に、べつとり吐き懸けたさうである。雪鳥君は聲を顔はしながら、奥さん確かりしなくては不可せんと云つたさうである。社へ電報を懸けるのに、手が震いて字が書けなかつたさうである。醫師は追つ懸け追つ懸け注射を試みたさうである。後から森成さんに其数を聞いたら、十六筒迄は覚えてゐますと答へた。

淋濁、血腫、中文、嘔吐、昏暈、淡紋、入夜、空身、是骨、臥牀、如石、夢、寒、寒

○ (原本十四)

眼を開けて見ると、右向になつた儘、瀬戸引の金盥の中に、べつとり血を吐いてゐた。金盥が枕に近く押付けてあつたので、血は鼻の先に鮮やかに見えた。其色は今日迄の様に酸の作用を蒙つた不明瞭なものではなかつた。白い底に大きな動物の肝の如くどろりと固まつてゐた様に思ふ。其時枕元で含嗽を上げませうといふ森成さんの聲が聞えた。

余は黙つて含嗽をした。さうして、つい今しがた傍にゐる妻に、少し其方へ退いてくれと云

つた程の煩悶が忽然何處かへ消えてなくなつた事を自覚した。余は何より先にまあ可かつたと思つた。金盥に吐いたものが鮮血であらうと何であらうと、そんな事は一向氣に掛からなかつた。口頭からの苦痛の塊を一度にどさりと打ち遣り切つたといふ落付をもつて、枕元の人がざわ／＼する様子を殆んど餘所の様に見てゐた。余は右の胸の上部に大きな針内を刺されて夫から多量の食鹽水を注射された。其時、食鹽水を注射される位だから、多少危険な容體に遇つてゐるのだらうとは思つたが、それも殆んど心配にはならなかつた。たゞ管の先から水が洩れて肩の方へ流れるのが厭であつた。左右の腕にも注射を受けた様な氣がした。然し夫は確然覺えてゐない。

妻が杉本さんに、是でも元の様になるでせうかと聞く聲が耳に入つた。左様潰瘍では是まで随分多量の血を止めた事もありますかと云ふ杉本さんの返事が聞えた。すると床の上に釣るした電氣燈ががら／＼と動いた。硝子の中に彎曲した一本の光が、線香煙花の様に疾く閃めいた。余は生れてから此時程強く又恐ろしく光力を感じた事がなかつた。其吐瀉の利那にすら、稲妻を眸に焼き付けるとは是だと

思つた。時に突然電氣燈が消えて氣が遠くなつた。カンフル、カンフルと云ふ杉本さんの聲が聞えた。杉本さんは余の右の手頭をしかと握つてゐた。カンフルは非常に能く利くね、注射し切らない内から、もう反響があると杉本さんが又森成さんに云つた。森成さんはええと答へた計りで、別にはかん／＼しい返事はしなかつた。夫からすぐ電氣燈に紙の蓋をした。傍が一しきり静かになつた。余の左右の手頭は二人の醫師に絶えず握られてゐた。其二人は眼を閉ぢてゐる余を中に挟んで、下の様な話をした(其單語は悉く獨逸語であつた)。

「弱い」

「ええ」

「駄目だらう」

「ええ」

「子供に會はしたら何うだらう」

「さう」

今迄落付いてゐた余は此時急に心細くなつた。何う考へても余は死にたくなかつたからである。又決して死ぬ必要のない程、樂な氣持であつたからである。醫師が余を昏睡の状態にあるものと思ひ誤つて、忌憚なき話を續けて

るうちに、未練な余は、眼目不動の姿勢にありながら、半無氣味な夢に襲はれてゐた。そのうち自分の生死に關する斯様に大膽な批評を、第三者として床の上になつて聞かされるのが苦痛になつて来た。仕舞には多少腹が立つた。徳義上もう少しは遠慮しても可さうなものだと思つた。遂に先がさう云ふ料簡なら此方にも考へがあるといふ氣になつた。人間が今死なうとしつゝある間際にも、まだ是程に機略を弄し得るものかと、回復期に向つた時、余はしば／＼當夜の反抗心を思ひ出しては微笑んでゐる。尤も苦痛が全く取れて、安臥の地位を平靜に保つてゐた余には、充分丈夫の餘裕があつたのであらう。

余は今迄閉ぢてゐた眼を急に開けた。さうして出来る丈大きな聲と明瞭な調子で、私は子供杯に會ひたくはありませんと云つた。杉本さんは何事をも意に介せぬ如く、さうですかと軽く答へたのみであつた。やがて食ひ掛けた食事を済まして來るとか云つて室を出て行つた。夫からは左右の手を左右に開いて、其一つ宛を森成さんと雪鳥君に握られた儘、三人とも無言のうち天明に達した。

冷やかな眼を隠りぬ夜明方

○ (原本十五)

強ひて寤返りを右に打たうとした余と、枕元の金盥に鮮血を認めた余とは、一分の隙もなく連続してゐるとのみ信じてゐた。其間には一本の髮毛を挟む餘地のない迄に、自覺が働いて來たとのみ心得てゐた。程程と妻から、左様ぢやありません、あの時三十分許は死んで入らしたのですと聞いた折は全く驚いた。子供のとき惡戯をして氣絶をした事は二三度あるから、夫から推測して、死とは大方斯んなものだらう位にはかたて想像してゐたが、半時間の長き間、其經驗を繰返しながら、少しも氣が付かず一ヶ月あまりを當然の如くに過したかと思ふと、其だ不思議な心持がする。實を云ふと此經驗——第一經驗と云ひ得るかが疑問である。普通の經驗と經驗の間に挟まつて毫も其連續を妨げ得ないほど内容に乏しい——余は何と云つてそれを形容して可いか遂に言葉に窮して仕舞ふ。余は眼から醒めたといふ自覺さへなかつた。陰から陽に出たとも思はなかつた。微かな羽音、遠きに去る物の響、逃げ行く夢の匂ひ、古い記憶の影、消える印象の名残——凡て人間の神祕を敘述すべき表現を數へ盡して漸

く夢醒すべき靈妙な境界を通過したとは無論考へなかつた。たゞ胸苦しくなつて枕の上の頭を右に傾け様とした次の瞬間に、赤い血を金盥の底に認めた丈である。其間に入り込んだ三十分の死は、時間から云つても、空間から云つても經驗の記憶として全く余に取つて存在しなかつたと一般である。妻の説明を聞いた時余は死とは大程果敢ないものかと思つた。さうして余の頭の上にしかく卒然と照らした生死二面の對照の、如何にも急劇で且没交渉の現象に、同じ自分が支配されたとは納得出来なかつた。よし同じ自分が世界の如何なる世界を横斷したにせよ、其二つの世界が如何なる關係を有するがために、余をして忽ち甲から乙に移るの自由を得せしめたかと考へると、茫然として自失せざるを得なかつた。

生死とは緩急、大小、寒暑と同じく、對照の連想からして、日常一東に使用される言葉である。よし最近の心理學者の唱ふる如く、この二つのものも亦普通の對照と同じく同類連想の部に屬すべきものと判するにたつた所、かく余を翻へすと一般に、唐突なる懸け離れた二象面が前後して我を擁するならば、我は此懸け離



れた二象面を、何うして同性質のものとして、其關係を述べける事が出来やう。

人が余に一個の柿を與へて、今日は半分食へ、明日は残りの半分の半分を食へ、其翌日は又其半分の半分を食へ、かくして毎日現に餘れるもの、半分づつを食へると云ふならば、余は食ひ出してから幾日目に、遂に此命令に背いて、残る全部を悉く食ひ盡すか、又は半分に割る能力の極度に達した爲め、手を携いて空しく残れる柿の一片を見詰めなければならぬ時機が来るだらう。もし想像の論理を許すならば、斯の條件の下に與へられたる一個の柿は、生涯食つても食ひ切れる筈がない。希臘の昔ゼノンの疾きアキリスと歩みの鈍い龜との間に成立する競争に辭を託して、如何なるアキリスも決して龜に追ひ付く事は出来ないと説いたのは取も直さず此消息である。わが生活の内容を構成する個々の意識も亦此の如くに、日毎か月に、其半宛を失つて、知らぬ間に何時か死に近づくならば、いくら死に近づいても死ねない云ふ非事實な論理に愚弄されるかも知れないが、斯う一足飛びに片方から片方に落ち込む様な思索上の不調和を免がれて、生から死に行く徑路を、何の不思議もなく最も自然に感じ得

るだらう。俄然として死し、俄然として吾に還るものは、吾に還つたのだと、人から云ひ聞かざるものは、たゞ寒くなる計である。

櫻井玄黄外 死生交謝時 寄託冥然去  
我心何所之 歸來竟命根 春宵竟難知  
孤窓空透夢 宛爾蕭瑟悲 江山秋已老  
粥藥醫將衰 廓寥天尚在 高樹獨餘枝  
晚懷如此道 風露入詩遲

○(原本十六)

安らかな夜は次第に明けた。室を包む影法師が床を離れて遠退くに從つて、余は又常の如く枕邊に寄る人々の顔を見る事が出来た。其顔は常の顔であつた。さうして余の心も亦常の心であつた。病の何處にあるかを知り得ぬ程に落ち付いた身を床の上に横へて、少しだに動く必要を有たぬ余に、死の病室に徘徊して居やうとは全く思ひ設けぬ所であつた。眼を明けた時余は昨夕の睡きをたどつて、さうして死は過去の夢の如く遠くに眺めた。さうして死は明け渡る夜と共に立ち退いたのだらう位の度胸でも据つたものと見えて、何等の掛念もない気分を、障子から射し込む朝日の光に、心地よく曝してゐた。實は無知な余を許はり終せた死

は、何時の間にか余の血管に滑り込んで、乏しい血を追ひ越しつゝ、流れてゐたのださうである。「容體を聞くと、危険なれど極安靜にしてゐれば持ち直すかも知れぬといふ」とは、妻の此日の朝の部に書き込んだ日記の一句である。余が夜明迄生きやうとは、誰も期待して居なかつたのだとは後から聞いて始めて知つた。

余は今でも白い金盞の底に吐き出された血の色と嗜好とを、あり／＼とわが眼の前に思ひ浮べる事が出来る。況して其當分は寒天の様に固まり掛けた醒いものが常に眼先に散ら付いてゐた。さうして吾が想像に映る血の分量と、それに起因した衰弱とを比較しては、どうしてあれ丈の出血が、斯う弱しく身體に應へるのだらうと何時でも不審に堪へなかつた。人間は脈の中の血を半分失ふと死に、三分の一失ふと昏厥するものだといひ、それに吾も知らず妻の肩に吐き掛けた生血の容積を想像の天秤に盛つて、命の向ふ側に重りとして付け加へた時ですら、余は是程無理な工夫をして生き延びたのだとは思へなかつた。

杉本さんが東京へ歸るや否や、——杉本さんは其朝すぐ東京へ歸つた。もつと居りたいが忙がしいから失禮します、其代り手當は充分す

る積でありますと云つて、新しい襟と袴を着け替へて、余の枕邊に坐つたとき、余は昨夕夜半に、若丈の足りない宿の浴衣を着たまひ、そつと障子を明けながら、どうかと一言森成さんに余の様子を聞いてゐた彼人の様子を思ひ出した。余の記憶にはたゞそれ丈しか留まらなかつた杉本さんが、出掛に妻を顧みて、もう一遍吐血があれば、何うしても回復の見込みはないものと御諦めなさらなければ不可ませんと注意を與へたさうである。實は朝夕にも此恐るべき再度の吐血が来さうなので、意々モルヒネ注射を引してそれを防ぎ止めたのだとは、後になつて其韻味を審らかにした余に取つて、全く思ひ掛けない報知であつた。あれ程胸の中は落ち付いてゐたものをと云ひたい位に、余は平常の心持で苦痛なく其夜を明したのである。——話が

ついで外れて仕舞つた。

杉本さんは東京へ歸るや否や、自分で電話を看護婦會へ掛けて、看護婦を二人ずつ余の出入へ送る様に頼んで呉れた。其時、早く行かんと間に合はないかも知れないからと電話口で急いだので、看護婦は汽車で来る途々も、もう不可ない頃ではなからうかと、絶えず余の生命に疑ひを挿さんでゐた。折角行つても、行き着いて

見たら、選過つ間に合はなかつたと云ふ様な事があつては詰らないと語り合つて来た。——是も回復期に向いた頃、病室の徒然に看護婦と世間話をした序に、彼等の口からちかちかに聞いたたよりである。

斯く凡ての人に十の九迄見放された眞中に、何事も知らぬ余は、曠野に捨てられた赤子の如く、ぼかんとして居た。苦痛なき生は余に向つて何等の煩悶をも與へなかつた。余は寡ながらたゞ苦痛なく生きて居るといふ一事實を認める事であつた。さうして此事實が、はからざる病のために、周囲の人の丁重な保護を受けて、健康な時に比べると、一歩浮世の風の當り悪い安全な地に移つて来た様に感じた。實際余と余の妻とは、生存競争の辛い空氣が、直に通はない山の底に住んでゐたのである。

露けさの里にて靜なる病

○(原本十七)

病者の特權として、余はかねてより妖怪に逢ふ資格があると思つてゐた。余の血の中には先祖の迷信が今でも多量に流れてゐる。文明の肉が社會の鋭とき鞭の下に萎縮するとき、余は常に幽霊を信じた。けれども虎列刺を畏れ



ける自分ではない。然し切めて此假定から出立して、地球の意識とは如何なる性質のものであらう位の想像はあつて然るべきだと思ふ。

我々の意識には幾層の様な境界線があつて、其線の下は暗く、其線の上は明らかであるとは現代の心理学者が一般に認識する議論の様に見えるし、又わが経験に照しても至極と思はれるが、肉體と共に活動する心的現象に斯様の作用があつたに於て、わが暗中の意識即ち是死後の意識とは受取れない。

大なるものは小さいものを含んで、其小さいものに氣が付いてゐるが、含まれたる小さいものは自分の存在を知るばかりで、己等の寄り集つて持たへてゐる全部に對しては風馬牛の如く無着であるとは、ゼームスが意識の内容を解き放したり、又結び合せてたりして得た結論である。それと同じく、個人全體の意識も亦より大なる意識の中に含まれながら、しかも其存在を自覺せずに、孤立する如くに考へてゐるのだらうとは、彼が此類推より下し来るスピリチズムに都合よき假定である。

假定は人々の隨意であり、又時にとつて研究上必要の活力でもある。然し此假定だけでは、如何に意識の結果圖象を見ようとする、

又、信の極不可思議を夢みんとする余も、信力を以て彼等の説を奉ずる事が出来ない。

物理学者は分子の容積を計算して、蠶の卵にも及ばぬ(長さ高さともに一ミリメートル)の立方體に一千萬を三乗した數が這入ると斷言した。一千萬を三乗した數とは一の下に零を二十一付けた莫大のものである。想像を恣にするの權利を有する吾々も此一の下に二十一の零を付けた數を思ひ浮べるのは容易でない。

形而下の物質界にあつてすら、相當の學者が精密な手續を経て發表した數字上の結果すら、吾々はたゞ數理的の頭腦にのみ尤もと首肯すべからざる。數量のあらまじさへ應用の利かぬ心の現象に關しては云ふ迄もない。よし物理学者の分子に對する如き明瞭な知識が、吾人の内面生活を照らす機會が来たに於て、余の心は遂に余の心である。自分に經驗の出來ない限り、如何な精密な學說でも吾を支配する能力は持ち得ない。

余は一度死んだ。さうして死んだ事實を、平生からの想像通りに経験した。果して時間と空間を超越した。然し其超越した事が何の能力をも意味しなかつた。余は余の個性を失つた。余の意識を失つた。たゞ失つた事だけが明白な

用ひる言葉が、たゞ一つある計である。少しも身體を動かさずとすると、關節がみしくと鳴つた。

昨日迄狭い布團に割された余の天地は、急に又狭くなつた。其布團のうちの一部より外に出る能力を失つた今の余には、昨日迄狭く感ぜられた布團が更に大きく見えた。余の世界と接觸する點は、こゝに至つてたゞ肩と背中と細長く伸べた足の裏側に過ぎなくなつた。――頭は無縁枕に着いてゐた。

是程に切り詰められた世界に住む事すら、昨夕は許されさうに見えなかつたのにと、傍のものは心の中で余の爲に願じて呉れたらう。何事も辨へぬ余にさへ夫が憐れであつた。たゞ身の布團に關れる所のみがわが世界である丈に、さうして其觸れる所が少しも變らなないために、我と世界との關係は、非常に單純であつた。

余はスタタク(音)であつた。従つて安全であつた。縮を敷いた箱の中に長く寝て、われ箱を出ず、人箱を襲はざる亡者の氣分は――もし亡者に氣分が有り得るならば、――此時の余のそれと餘り懸け隔つては居なかつたらう。

しばらくすると、頭が麻痺れ始めた。腰の骨が骨丈になつて板の上に載せられてゐる様な氣

計である。どうして幽霊となれよう。どうして自分より大きな意識と冥合出来よう。臆病にして且つ洋信強き余は、たゞ此不可思議を他人に待つばかりである。

迎火を焚いて待つ組の羽織

○(原本十八)

たゞ驚ろかれたのは身體の變化である。騒動のあつた明る朝、何かの必要に促がされて、助の左右に横たへた手を、顔の所迄持つて來ようとする、急に持主でも變つた様に、自分の腕ながら丸で動かなくなつた。人を知らず手数を厭つて、無理に肘を杖として、手強から起し掛けたは掛けたが、僅か何寸かの距離を通して、宙に知かい氣を強く努力と時間とは容易のものでなかつた。漸く浮き上つた筋の力を利用して、高い方へ引く丈の精氣に乏しいので、途中から離念して、再び元の位置にわが腕を落さうとすると、それが又安くは落ちなかつた。無論其儘にして心を放せば、自然の重みで故に倒れる丈の事ではあるが、其倒れる時の激動が、如何に全身に響き渡るか考へると、非常に恐ろしくなつて、つひに思ひ切る勇氣が出なかつた。余は仰す事も上げる事も、又半途に支へ

がした。足が重くなつた。かくして社會的の危險から安全に保證された余一人の狭い天地にも亦相應の苦しみが出来た。さうして其苦痛を逃れるべく余は一寸の外にさへ出る能力を持たなかつた。枕元に何んな人が何うして坐つてゐるか、丸で氣が付かなかつた。余を看護する爲に、余の視線の届かぬ傍らに占めた人々の姿は、余に取つて神のそれと一般であつた。

余はこの安らかながら痛み多き小世界にじつと仰向けに寐た儘、身の及ばざる所に時々眼を走らした。さうして天井から釣つた長い米藁の縁を屢見詰めた。其縁は冷たい袋と共に、胃の上でびくり／＼と鋭い脈を打つてゐた。

朝寒や生きたる骨を動かさず

○(原本十九)

余は此の心持を何う形容すべきかに迷ふ。力を商ひにする相撲が、四つに組んで、かつきり合つた時、土俵の真中に立つ彼等の姿は、存外靜かに落ち付いてゐる。けれども其腹は一分と細たないうちに、恐るべき波を上下に描かなければ已まない。さうして熱さうな汗の球が幾粒となく背中を流れ出す。

最も安全に見える彼等の姿勢は、此波と此汗

る事も出来ない腕を意識しつゝ、其遣り所に窮した。漸く傍のもの氣が付いて、自分の手をわが手に添へて、無理のない様に顔の所迄持つて來てくれて、歸りにも亦二つ腕を一所にしてやつと床の上まで戻した時には、何うして斯う自己が空虚になつたものか、我ながら殆んど想像が付かなかつた。後から考へて見て、あれは全く誤謬風船に穴が開いて、その穴から空氣が一度に走り出したため、風船の皮が忽ちしゆつといふ音と共に收縮したと一般の吐血だから、夫であらう身體に應へたのだらうと判斷した。夫にしても風船はたゞ縮まる丈である。不幸にして余の皮は血液の外に大きな長い骨を澤山に包んでゐた。其骨が――

余は生れてより以來此時程に吾骨の硬さを自覺した事がない。其朝眼が覺めた時の第一の記憶は、實にわが全身に滿ち渡る骨の痛みの聲であつた。さうして其痛みが、背に、酒を被つた勢で、多數を相手に轉しい喧嘩を挑んだ末、散々に打ち据ゑられて、手も足も利かなくなつた時の如くに吾を鈍く叩きこなしてゐた。痛に擲られた布は、斯うもあらうかと迄考へた。夫程正體なく極め付けられた状態を適當に形容するには、ぶちのめすと云ふ下等社會で



の辛うじて齎らす努力の結果である。静かなのは相対する血と骨の、僅に平均を得た象徴である。之を互殺の和といふ。二三十秒の現狀を維持するに、彼等が何れほどの氣魄を消耗せねばならぬかを思ふとき、看る人は始めて殘酷の感を超すだらう。

自活の計に迫られる動物として、生を營む一點から見た人間は、正に此相撲の如く苦しむものである。吾等は平和なる家庭の主人として、少くとも衣食の満足と、吾等と吾等の妻子とに與へんがために、此相撲に等しい程の緊張に甘んじて、日々自己と世間との間に、互殺の平和を見出さうと力めつゝある。戸外に出て笑ふわが顔を鏡に映すならば、さうして其笑ひの中に殺伐の氣に充ちた我を見出すならば、更に此笑ひに伴ふ恐ろしき腹の波と、背の汗を想像するならば、最後にわが必死の努力の、同向院のそのの様に、一分足らずで引分を期する望みもなく、命のあらん限は一生涯かなければならないといふ苦しい事實に想ひ至るならば、我等は神經衰弱に陥るべき極度に、わが精力を消耗するために、日に生き月に生きつゝあると途言ひたくなる。

馬上青年老 鏡中白雲新 幸生天子國 郎作太平民

○ [原木二十]

ツルゲニエフ以上の藝術家として、有力なる方面の尊敬を新たにしつゝあるドストイエフスキーには、人の知る如く、子供の時分から編纂の著作があつた。われ等日本人は編纂と聞くと、たゞ白い泡を連想するに過ぎないが、西洋では古くこれを神聖なる疾と稱へてゐた。此神聖なる疾に冒かされる時、或は其少し前に、ドストイエフスキーは普通の人が大音楽を聞いて始めて到り得るやうな一種奇妙の快感に支配されたさうである。それは自己と外界との間に満ち満ちた境地で、丁度大體の端から、無限の空間に足を滑らして落ちるやうな心持だとか聞いた。

イエフスキーの享けたと云ふ不可解の歡喜をひそかに想像して見た。それを想像するか思ひ出す程に、余の精神状態は尋常を飛び越えてゐたからである。ドクインセイの細かに書き残した驚くべき阿片の世界も余の連想に上つた。けれども讀者の心目を眩惑するに足る妖麗な彼の叙述が、鈍い色をした卑しむべき原料から人工的に生れたのだと思ふと、それを自分の精神状態に比較するのが急に厭になつた。

其所を照す意識の色が濃かになつた。すると、ズイルに似た調子が遠く全面に向つて萬遍なく展びて来た。さうして總體の意識が何處も彼處も稀薄になつた。それは普通の夢の様に濃いものでもなかつた。又其中間に横はる重い影でもなかつた。魂が身體を抜けると云つては既に謬言がある。靈が細い神經の末梢に進行して、泥で出来た肉體の内部を、軽く滑り去ると共に、官能の實感から昏かに遠からしめた状態であつた。余は余の周圍に何事が起りつつあるかを自覺した。同時に其自覺が驚異として地の奥を帯びぬ一種特別のものであると云ふ事を知つた。床の下に水が廻つて、自然と塵が浮き出すやうに、余の心は己の宿る身體と共に、蒲團から浮き上がった。より適當に云へば、眼と鼻と頭に觸れる堅い蒲團が何處かへ行つて仕舞つたのに、心、身體は元の位置に安んじて居た。著作前、起るドストイエフスキーの歡喜は、斷つたために十年もしくは幾生の命を賭しても然るべき性質のものとか聞いてゐる。余のそれは左様に強烈なものではなかつた。寧ろ恍惚として幽かな趣を生活動面の全部に軽く且つ深く印し去つたのみであつた。

世の中は悉く敵である。自然は公平で冷酷な敵である。社會は不正で人情のある敵である。もし彼對我の敵を極端に引延ばすならば、朋友もある意味に於て敵であるし、妻子もある意味に於て敵である。さう思ふ自分さへ日に何處となく自分の敵になりつゝある。疲れてもじめ得ぬ戦ひを持續しながら、毅然として獨り其間に老ゆるものは、見物と評するより外に評しやうがない。

古臭い愚癡を繰返すといふ聲が頻りに聞えた。今でも聞える。それを聞き捨てにして、古臭い愚癡を繰返すのは、しみん／＼さう感じたから計りではない、しみん／＼さう感じた心持を、急に病氣が来て顛覆したからである。血を吐いた余は土俵の上に仆れた相撲と同じ事であつた。自活のために戦ふ勇氣は無論、戦はねば死ぬといふ意識さへ持たなかつた。余はたゞ仰向けに寝て、幾な呼吸を敢てしながら、怖い世間を遠くに見た。病氣が床の周圍を屏風の様に取り巻いて、寒い心を暖かにした。今迄は手を打たなければ、わが下女さへ顔を突き出さなかつた。人に頼まなければ用は辨じなかつた。いくら仕ようと思つても、調はない事が多かつた。それが病氣になると、がらりと變

つた。余は寝てゐた。黙つて寝てゐた丈である。すると醫者が来た。社員が来た。妻が来た。仕舞には看護婦が二人来た。さうして悉く余の意志を働かさないうちに、ひとりで来た。一安心して療養せよと云ふ電報が滿洲から、血を吐いた翌日に来た。思ひがけない知己や朋友が代る／＼枕元に来た。あるものは鹿兒島から来た。あるものは山形から来た。又あるものは眼の前に通る結婚を延期して来た。余は是等の人に、どうして来たか聞いた。彼等は皆新聞で余の病氣を知つて来たといふつた。仰向けに寝た余は、天井を見詰めながら、世の人は皆自分より親切なものだと思つた。住み悪いとのみ觀じた世界に忽ち暖かな風が吹いた。

四十を越した男、自然に淘汰せられんとした男、左したる過去を持たぬ男に、忙しい世が、是程の時間と時間と親切を掛てくれやうとは夢にも待設けなかつた余は、病に生き還ると共に、心に生き還つた。余は病に謝した。又余のために是程の時間と時間と親切を惜まざる人々に謝した。さうして願はくは善良な人間になりたいと考へた。さうして此幸福な考へをわれに打撃す者を、永久の敵とすべく心に誓つた。



従つて余にはドストイエフスキーの受けた様な愛憎性の反動が来なかつた。余は朝から屢此状態に入つた。午過にもよく此語を味つた。さうして覺めたときは何時でも其楽しい記憶を抱いて幸福の記念とした位であつた。

仰臥人如壁 默然見大空 大空雲不動 終日杳相同

○ (原本二十一)

同じドストイエフスキーも亦死の門口迄引き摺られながら、辛うじて後戻りする事の出来た幸福な人である。けれども彼の命を危めにかつた災は、余の場合に於けるが如き悪辣な病氣ではなかつた。彼は人の手に作り上げられた法と云ふ器械の敵となつて、どんと心臓を打ち貫かれやうとしたのである。

彼は彼の俱樂部で時事を説いた。びびりなくば只一揆あるのみと叫んだ。さうして因はれた。八ヶ月の長い間薄暗い獄舎の日光に浴したのち、彼は蒼空の下に引き出されて、新たに

刑壇の上に立つた。彼は自己の宣告を受けると、二十一度の霰に、襦袢一枚の襦袢となつて、申渡の終るのを待たつた。さうして銃殺に處するの一句を突然として鼓膜に受けた。本當に殺されるのかとは、自分の耳を信用し兼ねた彼が、傍に立つ同囚に問うた言葉である。――白い手巾を合圖に振つた。兵士は視を定めた銃口を下に伏せた。ドストイエフスキーは斯くして法律の掣ね丸めた熱い鉛の丸を吞まずに済んだのである。其代り四年の月日をサイベリヤの野に暮した。

彼の心は生から死に行き、死から又生に戻つて、二時間と経たぬうちに三たび説き、曲折を描いた。さうして其三段落が三段落ともに、安協を許さぬ強い角度で連結された。其變化丈でも驚くべき経験である。生きつゝあると固く信ずるものが、突然是から五分のうちに死ななければならぬと云ふ時、既に死ぬと極つてから、猶餘る五分の命を捉けて、特に来るべき死を迎へながら、四分、三分、二分と意識しつゝ進む時、更に突き當ると思つた死が、忽ちとんぼ返りを打つて、新たに生と名づけられる時、――余の如き神童では此三象面の一つにすら堪へ得まいと思ふ。現にドストイエフスキーと運命

を同じくした同囚の一人は、是がために其堪へ氣が狂つて仕舞つた。夫にも拘はらず、回復期に向つた余は、病牀の上に寝ながら、屢ばドストイエフスキーの事を考へた。ことに彼が死の宣告から蘇へつた最後の一幕を眼に浮べた。――寒い空、新らしい刑壇、刑壇の上に立つ彼の姿、襦袢一枚の襦袢へてゐる彼の姿、――悉く鮮やかな想像の鏡に映つた。獨り彼が死罪を免かれたと自覺し得た唯の表情が、何うしても判然然然なかつた。しかも余はたゞ此唯の表情が見たい計に、凡ての畫面を組み立て、居たのである。

余は自然の手に握つて死なうとした。現に少しの間死んでゐた。後から當時の記憶を呼び起した上、猶所々の穴へ、妻から聞いた願末を埋めて、始めて全く出来る構圖を振り返つて見ると、所謂懐然と云ふ感じに打たれなければならぬ。其恐ろしさに比例して、九つに失つた命を一養に取り留める嬉しき又特別であつた。此死此生に伴ふ恐ろしきと嬉しきが紙の裏表の如く重なつたため、余は連想上常にドストイエフスキーを思ひ出したのである。――もし最後の一節を欠いたなら、余は決して正氣ではゐられなかつたらう」と彼自身が物語つ

てゐる。氣が重なるほどの緊張を辛ひに受けずと済んだ余には、彼の恐ろしき嬉しき程度を判り得ぬと云ふ方が寧ろ適當かも知れぬ。夫であればこそ、審判點睛とも云ふべき肝心の刹那の表情が、何う想像しても淡として眼の前に描き出せないのだらう。運命の擒縱を感じる點に於て、ドストイエフスキーと余とは、殆んど詩と散文ほどの相違がある。

夫にも拘はらず、余は屢ばドストイエフスキーを想像して已まなかつた。さうして寒い空と、新らしい刑壇と、刑壇の上に立つ彼の姿と、襦袢一枚で顔へてゐる彼の姿とを、根氣よく描き去り描き來つて已まなかつた。今は此想像の鏡も何時となく曇つて來た。同時に、生き返つたわが嬉しさが日に／＼われを遠ざかつて行く。あの嬉しさが始終わが傍にあるならば、――ドストイエフスキーは自己の幸福に對して、生涯感謝する事を忘れぬ人であつた。

○ (原本二十二)

中にて、餘が深山に向つてあつた。其鯉が五分に一度位は必ず高い音を立て、げしやりと水を打つ。晝のうちでも折々は耳に入つた。夜は殊に甚しい。隣りの部屋も、下の風呂場も、向うの三階も、裏の山も、悉く静まり返つた眞夜中に、余は絶えず此音を覺えました。犬の眼りと云ふ英語を知つたのは何時の昔か忘れてしまつたが、犬の眼りと云ふ意味を實地に経験したのは此頃が始めてあつた。余は犬の眼りのために夜毎悩まされた。漸く察付いて難有いと思ふ間もなく、すぐ眼が開いて、まだ突は白まないだらうかと、幾度も唖を待ち控びた。床に踊り付けられた人の、しんとした夜半に、たゞ獨り生きてゐる長さは存外な長さである。――壁が勢よく水を切つた。自分の描いた波の上を叩く尾の音で、余は眼を覺ました。

室の中は夕暮よりも猶暗い光で照されてゐた。天井から下がつてゐる電氣燈の球は黒布で隙間なく捲がしてあつた。弱い光りは此黒布の目を洩れて、微かに八疊の室を射た。さうして此薄暗い灯影に、眞白な着物を着た人間が二人坐つてゐた。二人とも口を利かなかつた。二人とも動かなかつた。二人とも膝の上へ手を置

いて、左ひの肩を鼓べた儘としてゐた。黒い布で包んだ球を見たとき、余は妙で今宵を巻いた巾着の頭を思ひ出した。此喪章と關係のある球の中から出る光線によつて、薄く照された白衣の看護婦は、静かなる點に於て、行儀の好い點に於て、胸裏の細の線に見えた。さうして其難は必要のあるたびに無言の儘必ず動いた。余は聲も出さなかつた。呼びもしなかつた。夫でも余の寐てゐる位置に、少しの變化さへあれば彼等は屹度動いた。手を毛布のうちで、もち付かせても、心持肩を右から左へ揺つても、頭を――頭は眼が覺める度に必ず麻痺してゐた。或は麻痺れるので眼が覺めるのかも知れなかつた。――其頭を枕の上で一寸揺らしても、或は足――足は能く寢覺めの種となつた。平生の癖で時々、片方を片方の上へ重ねて、其儘とろ／＼となると、下になつた方の背が溼い。溼いでも載せられた様に、みし／＼と痛んで眼が覺めた。さうして余は必ず強い痛さと重たさを忍んで足の位置を變へなければならなかつた。――是等のあらゆる場合に、わが變化に應じて、白い着物の動かない事は決してなかつた。時にはわが動作を豫期して、向うから動くと思



はれる場合もあつた。時には手も足も頭も動かさないのに、眼が盡きて不圖眼を開けさへすれば、白い着物はすぐ顔の傍へ来た。余には白い着物を着てゐる女の心持が少しも分らなかつた。けれども白い着物を着てゐる女は余の心を善く悟つた。さうして影の形に随ふ如くに變化した。響の物に應ずる如くに働いた。黒い布の目から洩れる薄暗い光の下に、眞白な着物を着た女が、わが肉體の先を越して、ひそひそと、しかも規則正しく、わが心のまゝに動くのは恐ろしいものであつた。

余は此氣味の悪い心持を抱いて、眼を開けると共に、ぼんやり眸に映る室の天井を眺めた。さうして黒い布で包んだ電氣燈の球と、其黒い布の織目から洩れてくる光に照らされた白い着物を着た女を見た。見たか見ないうちに白い着物が動いて余に近づいて来た。

秋風鳴萬木 山雨撼高樓 病骨瘦如劍 一燈青欲愁

### ケーベル先生

木の葉の間から高い音が見えて、其窓の隅からケーベル先生の頭が見えた。後から濃い藍色の煙が立つた。先生は煙草を吞んでゐると余は安倍君に云つた。

此前此處を通つたのは何時だか忘れて仕舞つたが、今日見ると僅の間にもう大分様子が変わつてゐる。甲武線の屋上は軒並新しい立派な家に建て易へられて、何れも現代的日本の産み出した富の威力と切り放す事の出来ない門構計である。其中に先生の住居だけが過去の記念の如くたつた一軒古ぼけたなりで残つてゐる。先生は此煙ぶり返つた家の書齋に這入つたなり、減多に外へ出た事がない。其書齋は取も直さず、先生の頭が見えた木の葉の間の高い所であつた。

余と安倍君とは先生に導かれて、數物も何も足に觸れない素襦の儘の低い階子段を薄暗がりながた／＼云はせながら上つて、階上の右手にある書齋に入つた。さうして先生の今迄を御して窓から頭丈を出してゐた一番光に近い

子に余は坐つた。そこで外面から射す夕暮に近い明りを受けて始めて先生の顔を熟視した。先生の顔は昔と左違つて居なかつた。先生は自分で六十三だと云はれた。余が先生の美學の講義を聴きに出たのは、余が大学院に這入つた年で、憶か先生が日本へ来て始めての講義だと思つてゐるが、先生は其時から已に斯う云ふ顔であつた。先生に日本へ来てもう二十年になりますかと聞いたら、左様はならない、たしか十八年日だと答へられた。先生の愛も驚も英語で云ふとオーパーンとか形容すべき、ごく薄い麻の様な色をしてゐる上に、普通の西洋人の通り非常に細くつて柔かいから、少しの白髪が生えても丸で目立たないのだらう。夫にしても血色が元の通りである。十八年を日本で住み古した人とは思へない。

先生の容貌が永久にみづ／＼してゐる様に見えるのに引き易へて、先生の書齋は老け切つた色で包まれてゐた。洋書といふものは、唐本や和書よりも裝飾的な背皮に、學問と藝術の派

出かきを思はせるが常であるのに、此部屋は余の眼を引く何物をも藏してゐなかつた。たゞ大きな机があつた。色の揃めた椅子が四脚あつた。マツチと埃及煙草と灰皿があつた。余は埃及煙草を吹かしながら先生と話をした。けれども部屋を出て、下の食堂へ案内される迄、余は遂に先生の書齋にどんな書物がどんなに並んでゐたかを知らずに過ぎた。

花やかな金文字や赤や青の背表紙が余の眼を刺激しなかつた計りではない。純潔な白色でさへ遂に余の眼には觸れずに済んだ。先生の食卓には當の歐州人が必要品とまで認めてゐる白布が懸つてゐなかつた。其代りにくすんだ更紗形を置いた布が一杯に被さつてゐた。さうして其布は此間迄余の家に預かつてゐた娘の子を纏づける時に新調して遣つた布團の表と同じものであつた。此卓を前にして坐つた先生は、襟も標飾も着けてはゐない。千筋の縮みの襦衣を着た上に、玉子色の薄い背廣を一枚無造作に引掛けた丈である。始めから儀式ばらぬ様にとの注意ではあつたが、あまり失禮に當つてはと思つて、余は白い襦衣と白い標と紺の着物を着てゐた。君が正装をしてゐるのに私はこんな服でと先生が最前云はれた時、正装の二字に縮



み入る計であつたが、成程洗ひ立ての白いものが手と首に着いてゐるのが正装なら、余の方が先生よりも餘程正装であつた。

余は先生に一人で淋しくありませんかと聞いた。先生は少しも淋しくはないと答へられた。西洋へ歸りたくはありませんかと尋ねたら、大程西洋が好きとは思はない、然し日本には演奏會と芝居と圖書館と旅館がないのが困る、それ丈が不便だと云はれた。一年位暇を買つて遊んで来ては何うですと促して見たら、ソリや無端遣つて貰へる、けれども夫は好まない。私がもし日本を離れる事があるとすれば、水久に離れる。決して二度とは歸つて来ないと云はれた。

先生は斯ういふ風に、大程故郷を慕ふ様子もなく、あなたが日本を嫌ふ氣色もなく、自分の性格とは容れ難い程に矛盾な複雑な、空虚にして安つばい、所謂新時代の世態が、周囲の過渡層の底から次第々々に浮き上つて、自分を其中心に陥落せしめねば已まぬ勢ひを得つゝ進むのを、日毎眼前に目撃しながら、それを別世界に起る風馬牛の現象の如く餘所に見て、極めて落ち付いた十八年を吾邦で過ごされた。先生の生活は、そつと煤煙の世に棄てられた希臘

の彫刻に血が通ひ出した様なものである。無闇の中に己れを動かして如何にも静かである。先生の踏む靴の底には磁石を噛む鋼の響がない。先生は紀元前の半島の人の如くに、しなやかな革で作つたサンダルを穿いて、音なしく電車の傍を歩いてゐる。

先生は昔し鳥を飼つて居られた。何處から来たか分らないのを餌を遣つて放し飼にしたのである。先生と鳥とは妙な因縁に聞える。此二つを頭の中で結び付けると一種の氣持が起る。先生が大學の圖書館で書架の中からボアの全集を引出したのを見たのは昔の事である。先生はボアもホフマンも好きなのだ云ふ。此夕其鳥の事を思ひ出して、あの鳥は何うなりましたと聞いたら、あれは死にました、凍えて死にました。寒い晩に庭の木の枝に留まつたまんま、翌日になると死んでおましたと答へられた。

鳥の序に蝙蝠の話が出た。安倍君が蝙蝠は懐な鳥だと云ふから、何故と反問したら、でも海がりににはたゞ飛んでゐるからと謎の様な答をした。余は蝙蝠の翼が好だと云つた。先生はあれは悪魔の翼だと云つた。成程畫にある悪魔は何時でも蝙蝠の羽根を背負つてゐる。

其時夕暮の窓際に近く日暮しが来て朗らかに鋭い聲を立てたので、卓を圍んだ四人はしばらくそれに耳を傾けた。あの鳴聲にも以太利の連想があるでせうと余は先生に尋ねた。是は先生が少し前に蜥蜴が美しいと云つたので、青く澄んだ以太利の空を思ひ出させやしませんかと聞いた。左様だと答へられたからである。然し日暮しの時には、先生は少し首を傾けて、いや彼は以太利ぢやない、何うも以太利では聞いた事がない様に思ふと云はれた。

余等は然し都の中心に誤つて點せられたとも見える古い家の中で、静かにこんな話をした。夫から菊の話と格の話と鈴蘭の話をした。果物の話もした。其果物のうちで尤も香りの高い遠い國から来たレモンの露を搾つて水に滴らして飲んだ。珈琲も飲んだ。凡ての飲料のうちで珈琲が一番旨いといふ先生の嗜好も聞いた。夫から静かな夜の中に安倍君と二人で出た。

先生の顔が花やかな演奏會に見えなくなつてから、もう餘程になる。先生はピアノに手を觸れる事すら日本に来ては口外せぬ積であつたと云ふ。先生は大程浮いた事が嫌なのである。凡ての演奏會を謝絶した先生は、たゞ自分の部

屋で自分の氣に向いたとき支樂器の前に坐る、さうして自分の音楽を自分丈で聞いてゐる。其外にはたゞ書物を読んでゐた。

文科大學へ行つて、此處で一番人格の高い教授は誰だと問いたら、百人の學生が九十八人は、數ある日本の教授の名を口にする前に、まづフォン・ケーベルと答へるだらう。斯程に多くの學生から尊敬される先生に、日本の學生に對して終始流らざる興味を抱いて、十八年の長い間哲學の講義を續けてゐる。先生が疾くは索然たる日本を去るべくして、未だに去らないのは、實に此愛すべき學生あるが爲である。

京都の深田教授が先生の家にゐる頃何時でも閑な時に晚餐を食へに來いと云はれてから、行かずに経過した月日を數へると、もう四年以上になる。漸く其約を果して安倍君と一所に大きな暗い夜の中に出た時、余は先生は是から先もう何年位日本に居る積だらうと考へた。さうして一度日本を離れ、ばもう歸らないと云はれた時、先生の引用した "in hope, never more." といふボアの句を思出した。



硝子戸の中抄

○(原本十四)

ついで此間許私の家へ泥棒の入つた時の話を比較的詳しく聞いた。

ある夜一番目の硝子が、夜中に小用に起きた後、手を洗ふために、硝子戸を開けると、狭い中庭の隅に壁を押し付ける様な勢ひで立つてゐる梅の古木の根方が、赫々と明るく見えた。

て考へてゐた娘盛りの彼女を、今朝のうちに描き出す事は一寸困難である。

少時立つた儘考へてゐた彼女の頭に、此時もしかすると火事ぢやないかといふ懸念が起つた。それで彼女は思ひ切つて又硝子戸を開けて外を覗かうとする途端に、一本の光る抜身が、闇の中から、四角に切つた硝子戸の中へすうと出た。

却承知しなかつた。今角の小倉屋といふ酒屋へ入つて、其處で教へられて来たのだから隠しても駄目だと云つて動かなかつた。

泥棒が出て行く時、此家は大變綺麗の好い宅だといふ云つて賞めたさうだが、其綺麗の好い家を泥棒に教へた小倉屋の半兵衛さんの頭には、あくる日から擦り傷がいくつとなく出来た。是は金はありませんと断る度に、泥棒がそんな管があるものかと云つては、抜身の先でちよいち

(抄中の戸子硝)

○(原本十六)

よい半兵衛さんの頭を突つたからだといふ。それでも半兵衛さんは、どうしても宅にはありません、裏の夏目さんには澤山あるから、あそこへ入らつしやいと強情を張り通して、とうとう金は一文も奪られずじまつた。

宅の前のだら／＼坂を下りると、一間ばかりの小川に渡した橋があつて、其橋向うのすぐ左側に、小さな床屋が見える。私はたつた一度其處で髪を刈つて貰つた事がある。

○(原本十六)

の郵便局の倉に店を持って、今と同じやうに、散髪を渡世としてゐた事が解つた。

「高田の旦那などにも大分御世話になりました。其高田といふのは私の従兄なのだから、私も驚いた。」

○(原本十六)

「うん、あの二階のある家だらう。」

「え、御二階がありましたか。あそこ、御移りになつた時なんか、方が様から御祝物なんかあつて、大變御慶びでしたがね。それから後でしたつけか、行願寺の寺内へ御引越すつたのは。」







ものがあるか通りからは全く見えなかつたが、其奥でする朝晩の御勤の証の音は、今でも私の耳に残つてゐる。ことに霧の深い秋から木枯の吹く冬へ掛けて、かん／＼と鳴る西陽草の証の音は、何時でも私の心に悲しくて冷たい或物を叩き込むやうに、小さい私の氣分を寒くした。

○ (原文二十一)

此豆腐屋の隣に寄席が一軒あつたのを、私は夢幻のやうにまだ覚えてゐる。こんな場末に人寄りのあらう筈がないといふのが、私の記憶に淡を掛ける所爲だらう、私はそれを思ひ出すたびに、奇異で感じに打たれたが、不思議さうな眼を見張つて、遠い私の過去を振り返るのが常である。

其寄席の主人といふのは、町内の青頭で、時々日曜朝の腹掛に赤い着の入つた甲持を着て、突つ掛け草履か何かでよく表を歩いてゐた。其處にまたお藤さんといふ娘があつて、其人の容色が能く家の者の口の上つた事も、まだ私の記憶を離れずにある。後には養子を買つたが、それが口髭を生やした立派な男だつたので、私は一寸驚かされた。お藤さんの方でも目慢の養子だといふ評判が高かつたが、後か

ら聞いて見ると、此人は何處かの區役所の書記だといふ話であつた。

此養子が来る時分には、もう寄席も已めて、仕舞ふた屋になつてゐたやうであるが、私は其處の宅の軒先にまだ薄暗い看板が淋しさに懸つてゐた頃、よく母から小遣を買つて其處へ講釋を聞きに出掛けたものである。講釋師の名前はたしか、南嶽とかいつた。不思議な事に、此寄席へは南嶽より外に誰も出なかつた様である。此男の家は何處にあつたか知らないが、何の見當から歩いて来るにしても、道普請が出来て、家並の揃つた今から見れば大事業に相違なかつた。其上客の頭数は何時でも十五か二十位なのだから、何んなに想像を逞しくしても、夢としか考へられないのである。「もうし／＼花魁へ、と云はれてハッ橋なんざますえと振り返る。途端に切り込む光といふ變な文句は、私が其時分南嶽から教はつたのか、夫とも後になつて落語家の遺る講釋師の眞似から覺えたのか、今では混雜してよく分らない。

當時私の家からまづ町らしい町へ出やうとするには、何うしても人家のない茶店とか、竹藪とか又は長い田圃路とかを通り抜けなければならなかつた。買物らしい買物は大抵神樂坂迄

出る例になつてゐたので、さうした必要に馴らされた私に、左した苦痛のある筈もなかつたが、それでも矢來の坂を上つて酒井様の火の見櫓を通り越して幸町へ出やうといふ、あの五六町の一筋道などになると、晝でも陰森として、大空が曇つたやうに始終薄暗かつた。

あの土手の上に二抱も三抱もあらうといふ大木が、何本となく並んで、其隙間々々をまた大きな竹藪で塞いでゐたのだから、日の目を拜む時間と云つたら、一日のうち恐らくたゞの一刻もなかつたのだらう。下町へ行かうと思つて、日下駄などを穿いて出やうものなら、砂皮非道い目にあふに耐つてゐた。あすこの霜降は雨よりも雪よりも恐ろしいものゝやうに私の頭に染み込んでゐる。

其位不便な所でも火事の處はあつたものと見えて、矢張町の曲角に高い櫓子が立つてゐた。さうして其上に古い半鐘も製の如く釣るしてあつた。私は斯うした有の儘の昔をよく思ひ出す。其半鐘のすぐ下にあつた小さな一階の隙間からあたかさうな養子の香が煙と共に往來へ流れ出して、それが夕暮の霧に懸け込んで行く。趣なども忘れる事が出来ない。私が

子規のまだ生きてゐるうちに、半鐘と並んで高き冬木藪」といふ句を作つたのは、實は此半鐘の記念のためであつた。

○ (原文二十二)

私の家に關する私の記憶は、總じて斯ういふ風に歸つてゐる。さうして何處かに薄ら寒い清らかな影を宿してゐる。だから今生に残つてゐる兄から、つゝ此間、うちの姉達が芝居に行つた當時の様子を聞いた時には驚いたのである。そんな派手な暮しをした昔もあつたのかと思ふと、私は愈夢のやうな心持になるより外はない。

其頃の芝居小屋はみんな猿若町にあつた。電車も伸もない時分に、高田の馬場の下から淺草の觀音様の先迄朝早く行き着かうと云ふのだから、大抵の事ではなかつたらしい。姉達はみんな夜半に起きて支度をした。途中が物騒だといふので、用心のため、下男が度供をして行つたさうである。

彼等は筑土を下りて、柿の木横町から揚場へ出て、豫て其處の船宿にあつらへて置いた屋根船に乗るのである。私は彼等が如何に豫期に充ちた心をもつて、のろ／＼砲兵工廠の前か

ら御茶の水を通り越して柳橋迄滑がれつゝ、行つただらうと想像する。しかも彼等の道中は決して其處で終りを告げる譯に行かないのだから、時間に制限を置かなかつた其の昔が猶ほ更回顧の種になる。

大川へ出た船は、流れを避つて吾妻橋を通り抜けて、今戸の有明樓の位に着けたものだといふ。姉達は其處から上つて芝居茶屋迄歩いて、それから漸く設けの席に着くべく、小屋へ送られて行く。設けの席といふのは必ず高土間に限られてゐた。是れ彼等の粉装なり顔なり、髪飾なりが、一般の眼によく着く便利のいゝ場所なので、派出を好む人達が、争つて手に入れたがるからであつた。

幕の間には役者に隨つてゐる男が、何うぞ樂屋へお遊びに入らっしゃいませと云つて案内に来る。すると姉達は此縮緬の模様のある着物の上に袴を穿いた男の後に眼いて、田之助とか消升かいふ番屋の役者の部屋へ行つて扇子に蜜などを描いて買つて歸つてくる。是が彼等の見茶だつたのだらう。さうして其見茶は金の力でなければ買へなかつたのである。

歸りには元來た路を同じ船で揚場迄滑き戻す。無用心だからと云つて、下男が又提灯を點

けて迎に行く。宅へ着くのは今の時計で十二時位にはなるのだらう。だから夜半から夜半迄掛つて彼等は漸く芝居を見る事が出来たのである。

斯んな華麗な話を聞くと、私は果してそれが自分の宅に起つた事か知らんと疑ひたくな。何處か下町の富裕な町家の昔を語られたやうな氣もする。尤も私の家も身分ではなかつた。派出な付合をしなければならぬ名主といふ町人であつた。私の知つてゐる父は、禿頭の爺さんであつたが、若い時分には、一山節を習つたり、囃染の女に縮緬の積夜具をして遣つたりしたのでさうである。青山に田地があつて、其處から上つて来る米丈でも、家のものが食ふには不足がなかつたとか聞いた。現に今生に残つてゐる三番目の兄などは、其米を春く音を始終聞いたと云つてゐる。私の記憶によると、町内のものがみんなして私の家を呼んで、玄關々々と稱へてゐた。其時分の私には、何ういふ意味か解らなかつたが、今考へると、式装のついた殿めしい玄關付の家は、町内にたつた一軒しかなかつたからだらうと思ふ。其式装を上つた所に、袴や、袖櫛や刺服や、又古ぼけた馬

出る例になつてゐたので、さうした必要に馴らされた私に、左した苦痛のある筈もなかつたが、それでも矢來の坂を上つて酒井様の火の見櫓を通り越して幸町へ出やうといふ、あの五六町の一筋道などになると、晝でも陰森として、大空が曇つたやうに始終薄暗かつた。



上提灯などが、並んで懸けてあつた昔なら、私でもまだ覚えてゐる。

○(原本二十三)

今私の住んでゐる近所に喜久井町といふ町がある。是は私の生れた所だから、外の人よりもよく知つてゐる。けれども私が家を出て、方々流浪して歸つて来た時には、其喜久井町が大分廣がつて、何時の間にか根來の方迄延びてゐた。

私に縁故の深い此町の名は、あまり聞き慣れて育つた所爲か、ちつとも私の過去を誦び出す懐かしい響を私に與へて呉れない。然し晝齋に獨り坐つて、烟杖を突いた儘、流れを下る船のやうに、心を自由に遊ばせて置くと、時々私の聯想が、喜久井町の四字にばたりと出會つたり、其處でしばらく低徊し始める事がある。

此町は江戸と云つた昔には、多分存在してゐなかつたものらしい。江戸が東京に改まつた時か、それともずつと後になつてからか、年代はたしかに分らないが、何でも私の父が拵へたものに相違ないのである。

私の家の定紋が井桁に菊なので、大にちなんだ菊に井戸を使つて、喜久井町としたといふ

話には、父自身の口から聞いたのか、又は他のものから教はつたのか、何しろ今でもまだ私の耳に残つてゐる。父は名主がなくなつてから、一時區長といふ役を勤めてゐたので、或はそんな自由も利いたかも知れないが、それを誇りにした彼の虚榮心を、今になつて考へて見ると、厭な心持は疾くに消え去つて、只微笑したくなる丈である。

父はまだ其上に自宅の前から南へ行く時は是非其登らなければならぬ長い坂に、自分の姓の夏目といふ名を付けた。不幸にして是は喜久井町暫存名にならずに、只の坂として残つてゐる。然し此間、或人が来て、地圖で此邊の名前を調べたら、夏目坂といふのがあつたと云つて話したから、ことによると父の付けた名が今でも役に立つてゐるのかも知れない。

私が早稲田に歸つて来たのは、東京を出てから何年振になるだらう。私は今の住居に移る前、家を探す目的であつたか、又遠足の歸り路であつたか、久し振で偶然私の舊家の横へ出た。其時表から二階の古瓦が少し見えたのでまだ生き残つてゐるのかしらと思つたなり、私は其儘通り過ぎてしまつた。

早稲田に移つてから、私は又其門前を通つて

見た。表から覗くと、何だか故と變らないやうな氣もしたが、門には思ひも寄らない下宿屋の看板が懸つてゐた。私は此の早稲田田圃が見たかつた。然し其處はもう町になつてゐた。私は根來の茶當と竹藪を一日眺めたかつた。然し其處は何處にも發見する事が出来なかつた。多分此邊だらうと推測した私の見當は、當つてゐるのか、外れてゐるのか、それさへ不明であつた。

私は茫然として佇立した。何故私の家丈が過去の殘骸の如くに存在してゐるのだらう。私は心のうちで、早くそれが廢れて仕舞へば好いのにと思つた。

一時は力であつた。去年私が高田の方へ散歩した序に、何氣なく其處を通り過ると、私の家は倚崖に取り壊されて、其あとに新しい下宿屋が建てられつゝあつた。其傍には質屋も出てゐた。質屋の前に疎かな圍をして、其中に庭木が少し植てあつた。三本の松は、見る影もなく枝を刈り込まれて、殆ど時形兒の裸になつてゐたが、何處か見覺のあるやうな心持を私に起させた。昔し、影法師松三本の月夜かなと詠つたのは、或は此松の事ではなかつたらうかと考へつゝ、私はまた家に歸つた。

○(原本二十六)

益さんが何うしてそんなに零落したものか私には解らない。何しろ私の知つてゐる益さんは郵便脚夫であつた。益さんの弟の庄さんも、家を潰して、私の所へ轉がり込んで食客になつてゐたが、是はまだ益さんよりは社會的地位が高かつた。子供の時分本町の鮎屋へ奉公に行つてゐた時、濱の西洋人が可愛がつて、外國へ連れて行くと言つたのを斷つたのが、今考へると残念だなど、始終話してゐた。

二人とも私の母方の従兄に當る男だつたから、其縁故で、益さんは弟に會ふため、又私の父に敬意を表するため、月に一通位は、牛込の奥庭前庭の袋などを手土産に持つて、よく訪ねて来た。

益さんは其時何でも芝の外れか、又は品川近くに世帯を持つて、一人暮しの呑氣な生活を營んでゐたらしいので、宅へ來ると能く泊つて行つた。たまに歸らうとすると、兄達が寄つてたかつて、歸ると承知しないぞなどと威嚇したものである。

當時二番目と三番目の兄は、まだ南校へ通つてゐた。南校といふのは今の高等商業學校の

位置にあつて、そこを卒業すると、開成學校即ち今日の大學へ這入る組織になつてゐたものらしかつた。彼等は夜になると、玄關に桐の机を並べて、明日の下讀みをする。下讀みと云つた所で、今の書生の遣ふのは大分違つてゐた。ドリドリチの英國史といつたやうな本を、一節位づゝ讀んで、それからそれを机の上へ伏せて、口の内で今讀んだ通りを誦誦するのである。

其下讀みが済むと、段々益さんが必要になつて来る。庄さんも何時の間にか其處へ顔を出す。一番目の兄も、機嫌の好い時は、わざ／＼奥から玄關迄出張つて来る。さうしてみんな一所になつて、益さんに調教ひ始める。

「益さん、西洋人の所へ手紙を配達する事もあるだらう」  
「そりや商賣だから厭だつて仕方がありません、持つて行きますよ」  
「益さんは英語が出来るのかね」  
「英語が出来る位なら斯んな眞似をしちやしません」  
「然し郵便ツとか何とか大きな聲を出さなくつちやならぬだらう」  
「そりや日本語で間に合ひますよ。異人だつて、近頃は日本語が解りますもの」

「へえ、向でも何とか云ふのかね」  
「云ひますとも。ペロリの奥さんなんか、貴方よろしい有難うと、ちゃんと日本語で挨拶をする位です」  
みんなは益さんを此處迄おびき出して置いて、どつと笑ふのである。それから又益さん何て云ふんだつて、其奥さんは「何通も一つ事を訊いては、何時迄も笑ひの種にしようと思つて、と云ふ。益さんも仕舞には苦笑ひをして、と云ふ。貴方よろしい」を巴めにしてしまふ。すると今度は「ちや益さん、野中の一本杉を遣つて御覽よ」と誰かが云ひ出す。

「やれつたつて、左右おそれと遣れるもんぢやありません」  
「まあ好いから、御遣りよ。愈野中の一本杉の所迄参りますよ」  
益さんは大でもにや／＼して應じない。私はとう／＼益さんの野中の一本杉といふものを聴かずにはしまつた。今考へると、それは何でも講釈か人情噺の一篇ぢやないかしらと思ふ。私の成人する頃には益さんももう宅へ來なくなつた。大方死んだのだらう。生きてゐれば何か消息のある筈である。然し死んだにして、何時死んだのか私は知らない。



ちやんといふ仲の好い友達があつた。喜いちやんは當時中町の叔父さんの宅にゐたので、さう道程の近くない私の所からは、毎日會ひに行く事が出来悪かつた。私は重に自分の方から出掛けないで、喜いちやんの来るのを宅で待つてゐた。喜いちやんはいくら私が行かないでも、乾度向うから来るに極つてゐた。さうして其来る所は、私の家の長屋を借りて、紙や筆を賣る松さんの許であつた。

喜いちやんには父母がない様だつたが、子供の私には、それが一向不思議とも思はれなかつた。恐らく訊いて見た事もなかつたらう。従つて喜いちやんが何故松さんの所へ来るのか、其譯さへも知らずにゐた。是はずつと後で聞いた話であるが、喜いちやんの御父さんといふのは、昔銀座の役人か何かをしてゐた時、賈金を作つたとかいふ嫌疑を受けて、入牢した儘死んでしまつたのだといふ。それであとに取り残された細君が、喜いちやんを先夫の家へ置いたなり、松さんの所へ再嫁したので、喜いちやんが時々生の母に會ひに来るのは當り前の話であつた。

何にも知らない私は、此事情を聞いた時ですら、別段變な感じも起さなかつた位だから、

喜いちやんと巫山戯つて遊ぶ頃、彼の境遇などを考へた事はたゞの一度もなかつた。

喜いちやんも私も漢學が好きだつたので、解りもしない譯に、能く文章の議論などをして面白がつた。彼は何處から聴いてくるのか、調べてくるのか、能く六づかしい漢籍の名前などを擧げて、私を驚かす事が多かつた。

彼はある日私の部屋同様になつてゐる玄關に上り込んで、懐から二冊つゞきの書物を出して見せた。それは確に寫本であつた。しかも漢文で綴つてあつた様に思ふ。私は喜いちやんから、其書物を受け取つて、無意味に其處此處を引つ繰返して見てゐた。實は何が何だか私には薩張り解らなかつたのである。然し喜いちやんは、それを知つてゐるかなど、露骨な事をいふ性質ではなかつた。

一是は太田南畝の自筆なんだがね。僕の友達がそれを賣りたいといふので君に見せに来たんだが、買つて置かないか」

「私は太田南畝といふ人を知らなかつた。

「太田南畝つて一體何だい」

「蜀山人の事さ。有名な蜀山人さ」

「蜀山人といふ名前さへまだ知らなかつた。然し喜いちやんにさう云はれて見る

がある。私は驚いて眼を覺ましたが、周圍が眞暗なので、誰が其處に蹲居つてゐるのか、一寸判斷が付かなかつた。けれども私は子供だから唯唯として先方の云ふ事を聞いてゐた。すると聞いてゐるうちに、それが私の家の下女の聲である事に気が付いた。下女は暗い中で私に耳語をするやうに斯ういふのである。

「貴君が御爺さん御婆さんだと思つてゐらつしやる方は、本當はあなたの御父さんと御母さんなのですよ。先ね、大方その所爲であんなに此方の宅が好なんだらう、妙なものだ、と云つて二人で話してゐらしたのを、私が聞いたから、そつと貴君に教へて上げるんですよ。誰にも話しちゃ不可せんよ。よござんすか」

私は其時たゞ誰にも云はないよと云つたぎりだつたが、心の中では大變嬉しかつた。さうして其嬉しさは事實を教へて呉れたからの嬉しさではなくつて、單に下女が私に親切だつたからの嬉しさであつた。不思議にも私はそれ程嬉しく思つた下女の名も顔も丸で忘れてしまつた。覺えてゐるのはたゞ其人の親切である。

「私はまだ小學校に行つてゐた時分に、喜いと、何だか貴重の書物らしい氣がした。

「若干なら賣るのかい」と訊いて見た。

「五十錢に賣たいと云ふんだがね。何うだらう」

私は考へた。さうして何しろ行切つて見るのが上策だと思ひついた。

「二十五錢なら買つても好い」

「それぢや二十五錢で買はなから、買つて遣り給へ」

喜いちやんは斯う云ひつゝ、私から二十五錢受取つて置いて、又しきりに其本の效能を述べ立てた。私には無闇其書物が解らないのだから、それ程嬉しくもなかつたけれども、何しろ損はしないのだらうといふ事の満足はあつた。

私は其夜南畝券書——たしかそんな名前だと記憶してゐるが、それを机の上に載せて置いた。

○ (原本三十二)

翌日になると、喜いちやんが又ぶらりと遣つて来た。

「君昨日買つて置つた本の事だがね」

喜いちやんはそれ云つて、私の顔を見ながら愚圖々々してゐる。私は机の上に載てあつた書物に眼を注いだ。

○ (原本二十九)

私は兩親の晩年になつて出来た所謂木ッ子である。私を生んだ時、母はこんな年齒をして懐妊するのは面白くないと云つたとかいふ話があり、今でも折々は繰り返されてゐる。

單に其爲ばかりでもあるまいが、私の兩親は私が生れ落ちると間もなく、私を里に遣つてしまつた。其里といふのは、無論私の記憶に残つてゐる筈がないけれども、成人の後聞いて見ると、何でも古道其の賣買を渡世にしてゐた貧しい夫婦ものであつたらしい。

私は其道具屋の我樂多と一所に、小さい派の中に入れて、毎晩四谷の大通りの夜店に曝れてゐたのである。それを或晩私の姉が何かの序に其處を通り掛つた時見付けて、可哀想でも思つたのだらう、懐へ入れて宅へ連れて来たが、私は其夜どうしても寝付かずに、とうとう一晩中泣き續けに泣いたとかいふので、姉は大いに父から叱られたさうである。

私は何時頃其里から取り戻されたか知らない。然しちぎ又ある家へ養子に遣られた。それは懐私の中の四つ歳の歳であつたやうに思ふ。私は物心のつく八九歳迄其處で成長したが、や

がて養家に妙なごた／＼が起つたため、再び實家へ戻る様な仕儀となつた。

淺草から牛込へ遷された私は、生れた家へ歸つたとは氣が付かずに、自分の兩親をもと通り祖父母とのみ思つてゐた。さうして相變らず彼等を御爺さん、御婆さんと呼んで毫も怪しまなかつた。向でも急に今迄の習慣を改めるのが變だと考へたものか、私にさう呼ばれながら置ました顔をしてゐた。

私は普通の木ッ子のやうに決して兩親から可愛がられなかつた。是は私の性質が素直でなかつた爲だの、久しく兩親に遠ざかつてゐた爲だの、色々の原因から來てゐた。とくに父からは寧ろ苛酷に取扱はれたといふ記憶がまだ私の頭に残つてゐる。それなのに淺草から牛込へ移された當時の私は、何故か非常に嬉しかつた。さうして其嬉しさが誰の目にも付く位に著るしく外へ現れた。

馬鹿な私は、本當の兩親を爺婆とのみ思ひ込んで、何の位の月日を空に暮らしたものであらう。それを訊かれると丸で分らないが、何でも或夜斯んな事があつた。

私がひとりで座敷に坐つてゐると、枕元の所で小さな聲を出して、しきりに私の名を呼ぶもの

がある。私は驚いて眼を覺ましたが、周圍が眞暗なので、誰が其處に蹲居つてゐるのか、一寸判斷が付かなかつた。けれども私は子供だから唯唯として先方の云ふ事を聞いてゐた。すると聞いてゐるうちに、それが私の家の下女の聲である事に気が付いた。下女は暗い中で私に耳語をするやうに斯ういふのである。

「貴君が御爺さん御婆さんだと思つてゐらつしやる方は、本當はあなたの御父さんと御母さんなのですよ。先ね、大方その所爲であんなに此方の宅が好なんだらう、妙なものだ、と云つて二人で話してゐらしたのを、私が聞いたから、そつと貴君に教へて上げるんですよ。誰にも話しちゃ不可せんよ。よござんすか」

私は其時たゞ誰にも云はないよと云つたぎりだつたが、心の中では大變嬉しかつた。さうして其嬉しさは事實を教へて呉れたからの嬉しさではなくつて、單に下女が私に親切だつたからの嬉しさであつた。不思議にも私はそれ程嬉しく思つた下女の名も顔も丸で忘れてしまつた。覺えてゐるのはたゞ其人の親切である。

○ (原本三十一)

私がまだ小學校に行つてゐた時分に、喜いと、何だか貴重の書物らしい氣がした。

「若干なら賣るのかい」と訊いて見た。

「五十錢に賣たいと云ふんだがね。何うだらう」

私は考へた。さうして何しろ行切つて見るのが上策だと思ひついた。

「二十五錢なら買つても好い」

「それぢや二十五錢で買はなから、買つて遣り給へ」

喜いちやんは斯う云ひつゝ、私から二十五錢受取つて置いて、又しきりに其本の效能を述べ立てた。私には無闇其書物が解らないのだから、それ程嬉しくもなかつたけれども、何しろ損はしないのだらうといふ事の満足はあつた。

私は其夜南畝券書——たしかそんな名前だと記憶してゐるが、それを机の上に載せて置いた。

○ (原本三十二)

翌日になると、喜いちやんが又ぶらりと遣つて来た。

「君昨日買つて置つた本の事だがね」

喜いちやんはそれ云つて、私の顔を見ながら愚圖々々してゐる。私は机の上に載てあつた書物に眼を注いだ。



「あの本かい。あの本が何うかしたのかい」  
「實はあすこの宅の阿爺に知れたもんだから、阿爺が大變怒つてね。どうか返して貰つて来てくれつて僕に頼むんだよ。僕も一週間に渡したもんだから厭だつたけれども仕方ないから又来たのさ」  
「本を取りにかい」  
「取りにつて譯でもないけれども、もし君の方で差支がないなら、返して遣つて呉れないか。何しろ二十五錢ぢや安過ぎるつていふんだから」  
此最後の一言で、私は今迄安く買ひ得たといふ満足裏に、ぼんやり滑んでゐた不快、不善の行爲から起る不快、を判然自覺し始めた。さうして一方では狡猾い私を怒ると共に、一方では二十五錢で賣つた先方を怒つた。何うして此の二つの怒りを同時に和らげたものだらう。私は苦い顔をしてしばらく黙つてゐた。私のこの心理状態は、今の私が子供の時の自分を回顧して解するのだから、比較的明瞭に描き出されるやうなもの、其場合の私には殆ど解らなかつた。私さへたゞ苦い顔をしたといふ結果だけしか自覺し得なかつたのだから、相手の喜いちやんには無論それ以上解る筈がなかつた。

「あ、思ふ人の手の届く所に一つと云つた風に都合よく置かれるのである。菓子のは箱に十位の割だつたかと思ふが、それを食べた文食べて、後から其代價を箱の中に入れるのが無言の規約になつてゐた。私は其頃此習慣を珍らしいものやうに興がつて眺めてゐたが、今となつて見ると、斯うした態度で存心な気分は、何處の人等場へ行つても、もう味はふ事が出来まいと思ふと、それが又何となく懐しい。私はそんなおつとりと物言ひた空気の古めかしい講義といふものを色々の人から聴いたのである。其中には、すとと、のん、のん、ざい、ざい、などといふ妙な言葉を使ふ男もゐた。是は田邊南龍と云つて、もとは何處かの下足番であつたといふ話である。其すとと、のん、のん、ざい、ざい、は甚だ有名なものであつたが、其意味を理解するものは一人もなかつた。彼はたゞそれを軍勢の押寄せる形容詞として用ひてゐたらしいのである。此南龍はとつと昔に死んでしまつた。其外のものも大抵は死んでしまつた。其後の様子を丸で知らない私には、其時分私を喜ばせて呉れた人のうちで生きてゐるものが果して何人あるのだから全く知らなかつた。

「そのや左右に違ひない。違ひないが向の宅でも困つてるんだから」  
「だから返すと云つてるやないか。だけど僕は金を取る譯がないんだ」  
「そんな解らない事を云はずに、まあ取つて置き給ひな」  
「僕は遣るんだよ。僕の本だけでも、欲しければ遣らうといふんだよ。遣るんだから本だけ持つてつたら好いぢやないか」  
「左右かそんなら、左様しよう」  
喜いちやんは、とう／＼本だけ持つて歸つた。さうして私は何の意味なしに二十五錢の小遣を取られてしまつたのである。

「あ、思ふ人の手の届く所に一つと云つた風に都合よく置かれるのである。菓子のは箱に十位の割だつたかと思ふが、それを食べた文食べて、後から其代價を箱の中に入れるのが無言の規約になつてゐた。私は其頃此習慣を珍らしいものやうに興がつて眺めてゐたが、今となつて見ると、斯うした態度で存心な気分は、何處の人等場へ行つても、もう味はふ事が出来まいと思ふと、それが又何となく懐しい。私はそんなおつとりと物言ひた空気の古めかしい講義といふものを色々の人から聴いたのである。其中には、すとと、のん、のん、ざい、ざい、などといふ妙な言葉を使ふ男もゐた。是は田邊南龍と云つて、もとは何處かの下足番であつたといふ話である。其すとと、のん、のん、ざい、ざい、は甚だ有名なものであつたが、其意味を理解するものは一人もなかつた。彼はたゞそれを軍勢の押寄せる形容詞として用ひてゐたらしいのである。此南龍はとつと昔に死んでしまつた。其外のものも大抵は死んでしまつた。其後の様子を丸で知らない私には、其時分私を喜ばせて呉れた人のうちで生きてゐるものが果して何人あるのだから全く知らなかつた。

「あ、思ふ人の手の届く所に一つと云つた風に都合よく置かれるのである。菓子のは箱に十位の割だつたかと思ふが、それを食べた文食べて、後から其代價を箱の中に入れるのが無言の規約になつてゐた。私は其頃此習慣を珍らしいものやうに興がつて眺めてゐたが、今となつて見ると、斯うした態度で存心な気分は、何處の人等場へ行つても、もう味はふ事が出来まいと思ふと、それが又何となく懐しい。私はそんなおつとりと物言ひた空気の古めかしい講義といふものを色々の人から聴いたのである。其中には、すとと、のん、のん、ざい、ざい、などといふ妙な言葉を使ふ男もゐた。是は田邊南龍と云つて、もとは何處かの下足番であつたといふ話である。其すとと、のん、のん、ざい、ざい、は甚だ有名なものであつたが、其意味を理解するものは一人もなかつた。彼はたゞそれを軍勢の押寄せる形容詞として用ひてゐたらしいのである。此南龍はとつと昔に死んでしまつた。其外のものも大抵は死んでしまつた。其後の様子を丸で知らない私には、其時分私を喜ばせて呉れた人のうちで生きてゐるものが果して何人あるのだから全く知らなかつた。

「あ、思ふ人の手の届く所に一つと云つた風に都合よく置かれるのである。菓子のは箱に十位の割だつたかと思ふが、それを食べた文食べて、後から其代價を箱の中に入れるのが無言の規約になつてゐた。私は其頃此習慣を珍らしいものやうに興がつて眺めてゐたが、今となつて見ると、斯うした態度で存心な気分は、何處の人等場へ行つても、もう味はふ事が出来まいと思ふと、それが又何となく懐しい。私はそんなおつとりと物言ひた空気の古めかしい講義といふものを色々の人から聴いたのである。其中には、すとと、のん、のん、ざい、ざい、などといふ妙な言葉を使ふ男もゐた。是は田邊南龍と云つて、もとは何處かの下足番であつたといふ話である。其すとと、のん、のん、ざい、ざい、は甚だ有名なものであつたが、其意味を理解するものは一人もなかつた。彼はたゞそれを軍勢の押寄せる形容詞として用ひてゐたらしいのである。此南龍はとつと昔に死んでしまつた。其外のものも大抵は死んでしまつた。其後の様子を丸で知らない私には、其時分私を喜ばせて呉れた人のうちで生きてゐるものが果して何人あるのだから全く知らなかつた。



母は私の十三四の時に死んだのだけれども、私の今遠くから呼び起す彼女の幻像は、記憶の絲をいくら辿つて行つても、御父さんに見えぬ。晩年に生れた私には、母の可愛らしい姿を覚えてゐる特権が遂に與へられずにしまつたのである。

私の知つてゐる母は、常に大きな眼鏡を掛けて裁縫をしてゐた。其眼鏡は鐵線製の古風なもので、球の大きさが直径二寸以上もあつたやうに思はれる。母はそれを掛けた儘、すこし頭を襟元へ引き付けたが、私を眺めると見る事が、屢あつたが、老眼の性質を知らない其頃の私には、それがたゞ彼女の癖とのみ考へられた。私は此眼鏡と共に、何時でも母の背景になつてゐた一間の換を想ひ出す。古びた張文の中に、生死事大無常迅速云々と書いた石指なども鮮やかに目に浮んで来る。

夏になると母は始終紺無地の絹の帷子を着て、幅の狭い黒縞子の帯を締めてゐた。不思議な事に、私の記憶に残つてゐる母の姿は、何時でも此夏夏の服装で頭の中に現れる丈なので、それから紺無地の絹の着物と幅の狭い黒縞子の帯を取り除くと、後に後るものはたゞ彼女の顔ばかりになる。母がかつて縁鼻へ出て、兄と恭

を打つてゐた様子などは、彼等二人を組み合わせせた圖柄として、私の胸に収めてある唯一の記念なのだが、其處でも彼女は矢張り帷子を着て、同じ帯を締めて坐つてゐるのである。

私はつひそ母の里へ行かれて行かれた覚えがないので、長い間母が何處から嫁に來たのか知らずに暮らしてゐた。自分から求めて訊きたがるやうな好奇心は更になかつた。それで其點も矢張りぼんやり霞んで見えるより外に仕方がないのだが、母が四ッ谷大番町で生れたといふ話丈は確に聞いてゐた。宅は質屋であつたらしい。蔵が幾戸前とかあつたのだと、かつて人から教へられたやうにも思ふが、何しろ其大番町といふ所を、此年になる迄今だに通つた事のない私のことだから、そんな細な點は丸で忘れてしまつた。たとひそれが事實であつたにせよ、私の今有つてゐる母の記念のなかに蔵屋敷などは決して現れて來ないのである。大方其頃にはもう潰れて仕舞つたのだらう。

母が父の所へ嫁にくる迄御殿奉公をしてゐたといふ話も、臆気に覚えてゐるが、何處の大名の屋敷へ上つて、何の位長く勤めてゐたのか、御殿奉公の性質をへ能く辨へない今の私には、たゞ淡い影を残して消えた香のやうなも

ので、殆ど取り留めやうのない事實である。然しさう云へば、私は御殿に描いた御殿女中の羽織つてゐるやうな華美な總模様の着物を其の藏の中で見た事がある。紅縞裏を付けた其着物の表には、櫻だか梅だかが一面に染め出されて、所々に金糸や銀糸の刺繍も交つてゐた。是は恐らく當時の補綴とかいふものなのだから。然し母がそれを打ち掛けた姿は、今想像しても丸で眼に浮かばない。私の知つてゐる母は、常に大きな老眼鏡を掛けた御婆さんであつたから、そのみか私には此美しい補綴が其後小振巻に仕立直されて、其頃宅に出來た病人の上に載せられたのを見た位だから。

○(原本三十八)

私が大學で教はつたある西洋人が日本を去る時、私は何か贈物を贈らうと思つて、宅の藏から高時輪に替の房の付いた美しい文箱を取り出して來た事も、もう古い昔である。それを父の前へ持つて行つて貰ひ受けた時の私は、全く何の氣も付かなかつたが、今斯うして筆を執つて見ると、その文箱も小振巻に仕立直された紅縞裏の補綴同様に、若い時分の母の面影を濃かに宿してゐるやうに思はれてならない。母

兄は色の白い鼻筋の通つた美しい男であつた。然し顔立ちから云つても、表情から見ても、何處かに破しい相を具へてゐて、無暗に近寄れないと云つた風の通つた心持を他に與へた。

兄の在學中には、まだ地方から出て來た貴遊生などの居る頃だつたので、今の青年には想像の出來ないやうな氣風が校内の其處此處に残つてゐたらしい。兄は或上級生に覽書を付けられたと云つて、私に話した事がある。其上級生といふのは、兄などよりもずつと年齒上の男であつたらしい。斯んな習慣の行はれない東京で育つた彼は、果して其文を何う始末したのだらう。兄はそれ以後學校の風呂で其男と顔を見合せるたびに、極りの悪い思ひをして困つたと云つてゐた。

學校を出た頃の彼は、非常に四角四面で、始終堅苦しく構へてゐたから、父や母も多少彼に氣を置く様子が見えた。其上病氣の所爲でもあらうが、常に陰氣臭い顔をして、它にはばかり引込んでゐた。

それが何時となく融けて來て、人柄が自ら柔らかなつたと思ふと、彼は能く古波唐棧の着物に角帯などを締めて、夕方から宅を外にし始めた。時々には紫色で鎧甲型を一面に描つた

集法の團扇などが茶の間に放り出される様になつた。それ丈ならまだ好いが、彼は長火鉢の前へ坐つた儘、しきりに假聲を遣ひ出した。しかし宅のものは別段それに頓着する様子も見えなかつた。私は無論平氣であつた。假聲と同時に藤八拳も始まつた。然し此方は相手が要るので、さう毎晩は繰返されなかつたが、何しろ變に無器用な手を上げたり下げたりして、熱心に遣つてゐた。相手は重に三番目の兄が勤めてゐた様である。私は眞面目な顔をして、たゞ傍觀してゐるに過ぎなかつた。

此兄はとうとう肺病で死んでしまつた。死んだのは憶か明治二十年だと覚えてゐる。すると葬式も済み、連夜も済んで、まづ一片付といふ所へ一人の女が尋ねて來た。三番目の兄が出て應接して見ると、其女は彼に斯んな事を訊いた。

「兄さんは死ぬ迄、奥さんを御持ちになりましたますまいね。」

兄は病氣のため、生涯妻帯しなかつた。「いゝえ仕舞迄御身で暮らしてゐました。」

「それを聞いてやつと安心しました。家のやうなもの、どうせ旦那がなくなつちや生きて行かないから、仕方がありませんけれども……」

兄の遺骨の埋められた寺の名を教はつて歸つ

て行つた此女は、わざ／＼甲州から出て來たのであるが、元柳橋の藝者をしてゐる頃、兄と關係があつたのだといふ話を、私は其時始めて聞いた。

私は時々此女に會つて兄の事などを物語つて見たい氣がしないでもない。然し會つたら定めしお婆さんになつて、昔とは丸で違つた顔をしてゐはしまいかと考へる。さうして其心も其顔同様に軟弱が寄つて、から／＼に乾いてゐはしまいかとも考へる。もし左右だとすると、彼女が今になつて兄の弟の私に會ふのは、彼女にとつて却て辛い悲しい事かも知れない。

○(原本三十七)

私は母の記念の爲に此處で何か書いて置きたいと思ふが、生憎私の知つてゐる母は私の頭に大した材料を遺して行つて呉れなかつた。

母の名は千枝といつた。私は今でも此千枝といふ言葉を懐かしいもの、一つに數へてゐる。だから私にはそれがたゞ私の母の名前で、決して外の女の名前であつてはならない様な氣がする。幸ひに私はまだ母以外の千枝といふ女に出會つた事がない。



は生涯父から着物を着て貰った事がないといふ話だが、果して着て貰はないでも済む位な支度をして来たものだらうか。私の心に映るあの紺無地の絹の帷子も、幅の狭い黒縞子の帯も、矢張り嫁に来た時から既に箆笥の中にあつたものなのだらうか。私は再び母に會つて、萬事を悉く口づから訊いて見たい。

悪戯で強情な私は、決して世間の木っ子のやうに母から甘く取扱はれなかつた。それでも宅中で一番私を可愛がつて呉れたものは母だといふ強い親しみの心が、母に對する私の記憶の中には、何時でも籠つてゐる。愛情を別にして考へて見ても、母はたしかに品位のある床しい婦人に違なかつた。さうして父よりは賢いさうに誰の目にも見えた。氣六づかしい兄も母丈には畏敬の念を抱いてゐた。

「阿母さんは何にも云はないけれども、何處かに悔いところがある。」

私は母を評した兄の此言葉を、暗い遠くの方から明かに引張り出してくる事が今でも出来る。然しそれは水に融けて流れかゝつた字體を、屹となつて漸と元の形に返したやうな際どい私の記憶の断片に過ぎない。其外の事になると、私の母はすべて私に取つて夢である。

途切れ途切れに残つてゐる彼女の面影をいくら丹念に拾ひ集めても、母の全體はともても變つて行かない。其途切れ／＼に残つてゐる昔さへ、半以上はもう薄れ過ぎて、しつかりとは掴めない。

或時私は二階へ上つて、たつた一人で、晝寐をした事がある。其頃の私は晝寐をする、よく變なものを襲はれがちであつた。私の親指が見る間に大きくなつて、何時迄経つても留らなかつたり、或は仰向に眺めてゐる天井が段々上から下りて来て、私の胸を叩き付けた時、又は眼を開いて普段と變らない周圍を現に見てゐるのに、身體丈が睡魔の掬となつて、いくら掻いても、手足を動かす事が出来なかつたり、後で考へてさへ、夢だか正氣だか譯の分らない場合が多かつた。さうして其時も私は此變なものに襲はれたのである。

私は何時何處で犯した罪か知らないが、何しろ自分の所有でない錢を多額に費消してしまつた。それを何の目的で何に遣つたのか、其邊も明瞭でないけれども、子供の私には到底償ふ譯に行かないので、氣の強い私は晝寐が大變苦しみ出した。さうして仕舞に大きな聲を掲げて下にある母を呼んだのである。

二階の櫛子段は、母の大眼鏡と晝寐の出来ない、生死事大無常迅速云々と書いた石指の張文にしてある襖の、すぐ後に附いてゐるの、母は私の聲を聞き付けると、すぐ二階へ上つて来て呉れた。私は其處に立つて私を眺めてゐる母に、私の苦しみを話して、何うかして下さいと頼んだ。母は其時微笑しながら「心配しないで好いよ。御母さんがいくらでも御金を出して上げるから」と云つて呉れた。私は大變嬉しかつた。それで安心してまたすやすや寐してしまつた。

私は此出来事が、全部夢なのか、又は半分本當なのか、今でも疑つてゐる。然し何うしても、私は實際大きな聲を出して母に救ひを求め、母は又實際の姿を現して私に慰撫の言葉を與へて呉れたとしか考へられない。さうして其時の母の服装は、いつも私の眼に映る通り、やはり紺無地の絹の帷子に幅の狭い黒縞子の帯だつたのである。

### 道 草

健三が遠い所から歸つて来て胸迄の奥に世帯を持つたのは東京を出てから何年目になるだらう。彼は故郷の土を踏む珍らしさのうちに一種の淋しみを感じた。

彼の身體には新しく後に見捨てた遠い國の臭がまだ付着してゐた。彼はそれを思ひだ。一日も早く其臭を振り落さなければならぬと思つた。さうして其臭のうちに潜んでゐる彼の誇りと満足には却つて氣が付かなかつた。

彼は斯うした氣分を有つた人に有難な落付のない態度で、千駄木から追分へ出る通りを日に二通づゝ規則のやうに往來した。

ある日小雨が降つた。其時彼は外套も雨具も着けずに、たい傘を差した丈で、何時もの通りを本郷の方へ例刻に歩いて行つた。すると車屋の少しさきで思ひ懸けない人はいたりと出會つた。其人は根津權現の裏門の坂を上つて、彼と反対に北へ向いて歩いて来たものと見えて、健三

三が行手を何気なく眺めた時、十間位先から既に彼の視線に入つたのである。さうして思はず彼の眼をわきへ外させたのである。

彼は知らん顔をして其人の傍を通り抜けようとした。けれども彼にはもう一遍此男の眼鼻立を確かめる必要があつた。それで御互が二三間の距離に近づいた頃又眸を其人の方角に向けると、すると先方ではもう疾く彼の姿を凝と見詰めてゐた。

往來は静であつた。二人の間にはたゞ細い雨の線が絶間なく落ちてゐる丈なので、御互が御互の顔を確認するには何の困難もなかつた。健三はすぐ眼をそらして又真正面を向いた儘歩き出した。けれども相手は道端に立ち留まつたなり、少しも足を運ぶ氣色なく、ぢつと彼の通り過ぎるのを見送つてゐた。健三は其男の顔が彼の歩調につれて、少しづゝ動いてゐるのに氣が着いた位であつた。

彼は此男に何年會はなかつたらう。彼が此男と縁を切つたのは、彼がまだ二十歳になるかな

らない昔の事であつた。それから今日迄に十五年の月日が経つてゐるが、その間彼等はつひぞ一度も顔合せた事がなかつたのである。

彼の位地も境遇もその時分から見ると丸で變つてゐた。黒い髪を生やして山高帽を被つた今の姿と坊主頭の昔の面影とを比べて見ると、自分でさへ隔世の感が起らないとも限らなかつた。然しそれにしては相手の方があまりに變らな過ぎた。彼は何う勘定しても六十五六であるべき筈の其人の髪の色が、何故今でも元の通り黒いのだらうと思つて、心のうちで怪しんだ。帽子なしで外出する昔ながらの襟を今でも押通してゐる其人の特色も、彼には異な氣分を與へる媒介となつた。

彼は固より其人に出會ふ事を好まなかつた。萬一出會つても其人が自分より立派な服装でもしてゐて呉れれば好いと思つてゐた。然し今日前見た其人は、あまり裕福な境遇に居るとは誰が見ても決して思へなかつた。帽子を被らないのは常人の自由として、羽織なり着物なりに就いて判別したところ、何うしても中流以下の活計を營んでゐる町家の年寄としか受取れなかつた。彼は其人の差してゐた洋傘が、重さうな毛織子であつた事に逆氣が付いてゐた。



其日彼は家へ歸つても途中で會つた男の事を忘れ得なかつた。折々は道端へ立ち止まつて彼と彼を見送つてゐた其人の眼付に惱まされた。然し細君には何も打ち明けなかつた。機嫌のよくない時は、いくら話したい事があつても、細君に話さないのが彼の癖であつた。細君も黙つてゐる夫に對しては、用事の外決して口を利かない女であつた。

二

次の日健三は又同じ時刻に同じ所を通つた。其次の日も通つた。けれども帽子を被らない男はもう何處からも出て來なかつた。彼は器械のやうに又、務のやうに何時もの道を往つたり來たりした。斯うした無事の日が五日續いた後、六日目の朝になつて帽子を被らない男は突然又根津権現の坂の麓から現はれて健三を脅した。それが此前と略同じ場所、時間も殆ど此前と違はなかつた。其時健三は相手の自分に近づくのを意識しつゝ、何時もの通り器械のやうに又義務のやうに歩かうとした。けれども先方の態度は正對であつた。何人をも不安にしなれば済まない程

いらしなればならなかつた。彼が遠い所から持つて來た書物の箱を此六疊の中で開けた時、彼は山のやうな洋書の裡に胡坐をかいて、一冊も二冊も裏らしてゐた。さうして何でも手に觸れるものを片端から取り上げては二三頁づゝ讀んだ。それがため肝心の書籍の整理に何時迄経つても片付かなかつた。しまひに此書だらくを見るに見かねた或友人が來て、順序にも冊数にも順序なく、ある本の書物をさつと書棚の上に放つてしまつた。彼を知つてゐる多數の人は彼を神經衰弱だと評した。彼自身はそれを自分の性質だと信じてゐた。

三

健三は實際其日々の仕事に追はれてゐた。家へ歸つてからも氣樂に使へる時間は少しもなかつた。其上彼は自分の讀みたいものを讀んだり、書きたい事を書いたり、考へたい問題を考へたりしたかつた。それで彼の心は殆ど餘裕といふもの知らなかつた。彼は始終机の前にこびり着いてゐた。読樂の場所へも減多に足を踏み込めない位忙しがつてゐる彼が、ある時友達から諸の標

な注意を雙眼に集めて彼を凝視した。隙さへあれば彼に近付かうとする其人の心が鼻よりした汗のうちにあり／＼と讀まれた。出來る大容赦なく其傍を通り抜けた健三の胸には變な豫覺が起つた。

一とでも是又では済むまい。然し其日家へ歸つた時も、彼はつひに帽子を被らない男の事を細君に話さずにした。彼と細君と結婚したのは今から七八年前で、もう其時分には此男との關係がとくの昔に切れてゐたし、其上結婚地が故郷の東京でなかつたので、細君の方ではちか／＼その人を知る筈がなかつた。然し噂として丈夫なら或は健三自身の口から既に話してゐたかも知れず、又彼の親類のものから聞いて知つてゐないとも限らなかつた。それは何れにしても健三にとつて問題にはならなかつた。

たゞ此事件に關して今でも時々彼の胸に浮んでくる結婚後の事實が一つあつた。五十年前彼がまだ地方にゐる頃ある日女文字で書いた厚い封書が突然彼の勤め先の机の上へ置かれた。其時彼は變な顔をして其手紙を讀んだ。然しいくら讀んでも／＼讀み切れなかつた。半紙二十枚ばかりへ隙間なく細字で書いたものの、古を勧められて、體よくそれを斷つたが、彼は心のうちで、他人には何うしてそんな暇があるのだらうと驚いた。さうして自分の時間に対する態度が、恰も守銭奴のそれに似通つてゐる事には、丸で氣がつかなかつた。自然の勢ひ彼は社交を避けなければならなかつた。人間を避けなければならなかつた。彼の頭と活字との交渉が複雑になればなる程、人としての彼は孤獨に陥らなければならなかつた。彼は腦氣にその淋しさを感ずる場合さへあつた。けれども一方ではまた心の底に異様の熱地があるといふ自信を持つてゐた。だから素突たる曠野の方角へ向けて生活の路を歩いて行きながら、それが却つて本來だとばかり心得てゐた。温い人間の血を枯らしに行くのだとは決して思はなかつた。

彼は親類から變人扱にされてゐた。然しそれは彼に取つて大した苦痛にもならなかつた。「教育が道ふんだから仕方がない」彼の腹の中には常に斯ういふ答辯があつた。「矢つ張り手前味附よ」是は何時でも細君の解釋であつた。氣の毒な事に健三は斯うした細君の批評を超越する事が出来なかつた。さう云はれる度に

五分の一ほど眼を通した後、彼はつひにそれを細君の手に渡してしまつた。

其時の彼には自分宛でこんな長い手紙をかけた女の素性を細君に説明する必要があつた。それから其女に關聯して、是れとも此細君を被らない男を引合に出す必要もあつた。健三はさうした必要にせまられた過去の自分を記憶してゐる。然し機嫌な彼がどの位稀な程度で細君に説明してやつたか、その點になると、彼はもう忘れてゐた。細君は女の本心だからまだ判然と覚えてゐるだらうが、今の彼にはそんな事を改めて彼女に問ひ訊して見る氣も起らなかつた。彼は此長い手紙を書いた女と、此細君を被らない男とを一所に鎖べて考へるのが大變ひだつた。それは彼の不幸な過去を遠くから呼び起す媒介となるからであつた。

幸ひ彼の目下の状態はそんな事に屈してゐる餘裕を彼に與へなかつた。彼は家へ歸つて衣服を着換へると、すぐ自分の書棚へ這入つた。彼は始終その六疊の狭い臺の上に自分のする事が山のやうに積んであるやうな氣持であるのである。けれども實際から云ふと、仕事をすゝるよりも、しなればならぬといふ刺戟の方が、遙に強く彼を支那してゐた。自然彼はいら

氣不味い顔をした。ある時は自分を理解しない細君を心から罵つて思つた。ある時は叱り付けた。又ある時は頭ごなしに遣り込めた。すると彼の細君が細君の耳に空處張をする人の言葉のやうに響いた。細君は「手前味附」の四字を一大風呂敷の四字に訂正するに過ぎなかつた。彼には一人の腹造の姉と一人の兄があるが、りであつた。親類と云つた所で此二軒より外に持たない彼は、不幸にして其二軒ともあまり親しく往來をしてゐなかつた。自分の姉や兄と疎遠になるといふ變な事實は、彼に取つても餘り氣持の好いものではなかつた。然し親類づきあひよりも自分の仕事の方が彼には大事に見えた。それから東京へ歸つて以後既に三四回彼等と顔を合せたといふ記憶も、彼には多少の言辭になつた。もし細君を被らない男が突然彼の行手を遮らなかつたら、彼は何時もの通り千駄木の町を毎日二返規則正しく往來する丈で、當分外の方角へは足を向けずにしたらう。もし其間に身體の樂に出来る日曜が來たら、ぐたりと被れ切つた四肢を臺の上に横たへて半日の安息を食ふに過ぎなかつたらう。然し次の日曜が來た時、彼は不圖途中で二度



會つた男の事を思ひ出した。さうして急に思ひ立つたやうに姉の宅へ出掛けた。姉の宅は四谷の津の守坂の横で、大通りから一町ばかり奥へ引込んだ所にあつた。彼女の夫といふのは健三の従兄にあたる男だから、つまり姉にも従兄であつた。然し年齢は同年か一つ違で、健三から見ると幾方とも一週りも上であつた。此夫がもと四谷の區役所へ勤めた縁故で、彼が其處を已めた今日でも、まだ馴染の多い土地を離れるのが厭だといつて、姉は今の勤先に不便なのも構はず、矢つ張り元の古ぼけた家に住んでゐるのである。

四

此姉は喘息持であつた。年が年中せいで、云つてゐた。それでも生れ付が非常な痲性なので、餘程苦しくないと思つて居た。何か用を拵へて狭い家の中を始末するに、廻つて歩かないと承知しなかつた。其落付のないがさつた態度が健三の眼には如何にも氣の毒に見えた。姉は又非常に喋舌る事の好きな女であつた。さうして其喋舌り方に少しも品位といふものがない。彼女と對面する健三は乾度苦しい顔をして居た。

健三は些少ながら月々いくらかの小遣を姉に遣る事を忘れなかつたのである。少し復せた様ですね。一なに是や私の持前だから仕方がない。昔から肥つた事のない女なんだから。矢つ張り細が強いもんだからね。細で肥る事が出来ないんだよ。

姉は肉のない細い腕を捲つて健三の前に出して見せた。大きな落ち込んだ彼女の眼の下を薄黒い半圓形の暈が、意さうな皮で物憂げに染めてゐた。健三は黙つて其ばさ／＼した手の平を見詰めた。

「でも健ちゃん立派になつて本當に結構だ。御前さんが外國へ行く時なんか、もう二度と生きて會ふ事は六づかしからうと思つてたのに、それでもよくまあ返つて來られたのね。御父さんや御母さんが生きて御出でだつたら、御喜びだらう。」

姉の眼にはいつか涙が溜つてゐた。姉は健三の子供の時分、一今に姉さんに御金が出來たら、健ちゃんに何でも好きなものを買つて上げるよ」と口癖のやうに云つてゐた。さうかと思ふと、こんな偏富ちや此子はとても物にやならぬ」とも云つた。健三は姉の昔の言葉やら語氣

して黙らなければならなかつた。

「是が己の姉なんだからなあ」

彼女と話をした後の健三の胸には何時でも斯ういふ遠慮が起つた。

其日健三は例の如く襦袢を掛けて戸棚の中を覗きまはしてゐる此姉を見出した。

「まあ珍しく能く來て呉れたこと。さあ御敷きなさい。」

姉は健三に座蒲團を勤めて縁側へ手を洗ひに行つた。

健三は其留守に座敷のなかを見廻した。欄間には彼が子供の時から見覚えのある古ぼけた額が懸つてゐた。其落款に書いてある筒井忠といふ名は、たしか旗本の書家か何かで、大變字が上手なんだと、十五六の昔此處の主人から教へられた事を思ひ出した。彼は其主人をその頃へは兄さん兄さんと呼んで始終遊びに行つたものである。さうして年々云へば叔父甥の相違があるのに、二人して能く座敷の中で相撲をとつては姉から怒られたり、屏根へ登つて無花果を拵いで食つて、其皮を隣の庭へ投げたため、尻を持ち込まれたりした。主人が箱入りのコンパスを買つて遣ると云つて彼を騙したなり何時迄も買つてくれなかつたのを非常な恨

五

そんな古い記憶を喚び起すにつけても、久しく會はなかつた姉の老けた様子が一層健三の眼についた。

「一時に姉さんは幾何でしたかね」

「もう御婆さんさ。取つて一だもの御前さん」

姉は黄色い疎らな齒を出して笑つて見せた。

「實際五十一とは健三にも意外であつた。」

「すると私とは一週以上違ふんだね。私や又精々違つて十か十一だと思つてゐた」

「どうして一週どころか。健ちゃんとは十六違ふんだよ。姉さんは。良人が末の二弟で姉さんが四歳なんだから。健ちゃんに七歳差だつたね。」

「何だか知らないが、とにかく三十六ですよ」

「縁つて見て御覽。乾度七赤だから」

健三はどうして自分の尻を繰るのかそれさへ知らなかつた。年齢の話はそれぎり已めてしまつた。

「今日は御留守なんですか」と比田の事を訊いて見た。

「昨夕も宿直でね。なに自分の分だけなら月に

めしく思つた事もあつた。姉と喧嘩をして、もう向うから謝罪つて來ても堪忍してやらないと覺悟を極めたが、いくら待つてゐても、姉が歸らないので、仕方なしに此方からのこゝへ出掛けて行つた時に、手持無沙汰なので、向うで御這入りといふ迄、黙つて門口に立つてゐた滑稽もあつた。

古い額を眺めた健三は、子供の時の自分に明かな記憶の探照燈を向けた。さうして夫程世話になつた姉夫婦に、今は大した好意をもつ事が出来にくくなつた自分を不快に感じた。

「近頃は身置の具合はどうです。あんまり苦道く起る事もありませんか」

彼は自分の前に坐つた姉の顔を見ながら斯う訊ねた。

「え、有難う。御座さまで陽氣が好いもんだから、まあ何うか斯うか家の事は遣つてゐるんだけれど、でも矢張り年が年だからね。とても昔の様にがせいに働く事は出来ないのさ。昔健ちゃんの遊びに來てくれた時分にや、随分尻／＼端折りで、夫こそ御家の御尻洗つたもんだが、今やちやとそんな元氣はありやしない。だけど御座様で斯う遣つて毎日牛乳も飲んでるし。」

三度か四度で済むんだけれども、他に頼まれるもんだからね。それに一晩でも餘計泊りさへすればやつぱり若干かになるだらう、それでついで他の分送引受ける氣にもなるのさ。此頃ちや彼方へ寝ると此方へ歸ると、まあ半々位なものだらう。ことによると、向うへ泊る方が却つて多いかも知れないよ。」

健三は黙つて障子の傍に据ゑてある比田の机を眺めた。襦袢や状態や巻紙がきちりと行儀よく並んでゐる傍に、簿記用の帳面が赤い背皮を此方へ向けて、二三冊立て懸けてあつた。それから輪麗に光つた小さい算盤も其下に置いてあつた。

時によると比田は此頃變な女に關係をつけて、それを自分の勤め先のつい近くに閉つてゐるといふ評判であつた。宿直だ宿直だと云つて宅へ歸らないのは、或はその所爲ぢやなからうか、健三には思へた。

「比田さんは近頃どうです。大分年を取つたら元とは違つて眞面目になつたでせう」

「なに矢つ張り相變らずさ。ありや一人で遊ぶために生れて來た男なんだから仕方がないよ。やれ寄席だ、やれ芝居だ、やれ相撲だつて、御金さへありや年が年中飛んで歩いてるんだから



ね。でも奇體なもので、年の所爲だか何だか知らないが、昔に比べると、少しは優しくなつたやうだよ。もとは健ちゃんも知つてゐる通りの始末で、随分細しかつたもんだがね。嫌つたり、敵いたり、髪を毛を持つて床敷中引摺廻したり……」

「其代り姉さんも負けてる方ぢやなかつたんだからな」

「なに私や手出しなんかした事あ、つい一度だつてありやしない」

健三は勝氣な姉の昔を考へ出してつい可笑しくなつた。二人の立ち廻りは今姉の面白がるやうに受身のものばかりでは決してなかつた。ことに口は姉の方が比田に比べると十倍も達者だつた。それにしても此利かぬ氣の姉が、大に馴されて、彼が宅へ歸らない以上、屹度會社へ泊つてゐるに違ひないと信じ切つてゐるのが妙に不調に思はれて来た。

「久し振に何か寄りませうか」と姉の顔を見ながら云つた。

「ありがと、今朝飯をさういつたから、珍らしくもあるまいけれども、食べてつて御免れ」

姉は客の顔さへ見れば、時間に關係なく、何か食はせなければ承知しない女であつた。

「さうかい大ぢや御前さんの方から先へ聞くのが願だつたね。何故早く話さなかつたの」

「だつて話せないんだもの」

「そんなに遠慮しないでいいやね。姉弟の間ぢやないか、御前さん」

姉は自分の多辯が相手の口を塞いでゐるのだといふ明白な事實には毫も氣が付いてゐなかつた。

「まあ姉さんの方から先へ片付けませう。何ですか、あなたの話つていふのは」

「實は健ちゃんにはまことに氣の毒で、云ひ悪いんだけれども、あたしも段々年を取つて身體は弱くなるし、夫に良人があの通りの男で、自分一人さへ好けりや、女房なんか何うなつたつて、己の知つた事ぢやないつて顔をしてゐるんだから。尤も月々の取高が少い上に、實際もあるんだから、仕方がないよと云へば大逆だけれどもね……」

姉の云ふ事は女丈に随分曲りくねつてゐた。中々容易な事で目的地へ達しなうになかつたけれども、其主意は健三によく解つた。つまり月遣の小遣をもう少し増して呉れといふのだからと思つた。今でさへそれをよく夫から借りられてしまふといふ話を耳にしてゐる彼には、此

健三は仕方がないから尻を落付けてゆつくり腹の中に入れて来た話を姉に切り出す氣になつた。

### 六

近頃の健三は頭を飾計遣ひ過ぎる所爲かどうも胃の具合が好くなかつた。時々思ひ出したやうに運動して見ると、胸も腹も重くならないで成るべく物を口へ入れないやうに心掛けてゐた。それでも姉の悪戯には敵はなかつた。

「海苔巻なら身體に障りやしないよ。折角姉さんが健ちゃんに御馳走しようと思つて取つたんだから、是非食べて御免れな。厭かい」

健三は仕方なしに旨くもない海苔巻を頬張つて、好い加減煙草で荒らされた口のうちをもぐもぐさせた。

姉が飽り飽り舌るので、彼は何時迄も自分の云ひたい事が云へなかつた。訊きたい問題を持つてゐながら、斯う受身な會話ばかりしてゐるのが、彼には段々むづ痒くなつて来た。然し姉にはそれが一向通じないらしかつた。

他に物を食はせる事の好きなのと同時に、物を遣る事の好きな彼女は、健三が此前買めた古

請求が来てもあり、又腹立たしくもあつた。

「どうか姉さんを助けると思つてね。姉さんだつて此身體ぢやどうせ長い事もあるまいから」

### 七

彼は是から宅へ歸つて今夜中に片付けなければならぬ明日の仕事を持つてゐた。時間の價値といふものを少しも認めない、此姉と對坐して、何時迄も、べん／＼と喋りつてゐるのは、彼にとつて多少の苦痛に違なかつた。彼は好加減に歸らうとした。さうして歸る間際になつてやつと帽子を被らない男の事を云ひ出した。

「實は此間島田に會つたんですがね」

「へえ何處で」

姉は吃驚したやうな聲を出した。姉は無教育な東京ものによく見るわざとらしい、仰山な表情をしたがる女であつた。

「太田の原の傍です」

「ちや御前さんのちや近所ぢやないか。どうしたい、何か言葉でも掛けたかい」

「掛けるつて、別に言葉の掛けやうもないんだから」

「あんなものあ、さにあつたつて仕方がないんだから、持つて御出でよ。なに比田だつて要りやしないやね、汚い洗濯なんか」

健三は實ふとも實はないとも云はずにたゞ苦笑してゐた。すると姉は何か秘密話でもするやうに急に調子を低くした。

「實は健ちゃん、御前さんが歸つて来たから、話さう／＼と思つて、つい今日迄暫つてたんだがね。健ちゃんも歸りたてで無忙しからうし、夫に姉さんが出掛けて行くにしたところ、お住さんが居ちや、少し話し悪い事だしね。さうかつて、手紙を書かうにも御存じの無筆だらう……」

姉の前置は長たらしくもあり、又滑稽でもあつた。小さい時分いくら手習をさせても記憶が悪くつて、どんなに平易しい字も、とう／＼頭へ這入らず仕舞に、五十の今日迄生きて来た女だと思ふと、健三にはわが姉なぶら氣の毒でもあり又うら取づかしくもあつた。

「それで姉さんの話つてえな、一體どんな話なんです。實は私も今日は少し姉さんに話があつて来たんだが」

「さうさね。健ちゃんの方から何とか云はなきや、向うで口なんぞ利けた義理でもないんだから」

姉の言葉は出来る丈健三の意を迎へるやうな調子であつた。彼女は健三に「どんな服装をしてゐたい」と訊き足した後で、「ちや矢つ張り樂でもないんだね」と云つた。其處には多少の同情も籠つてゐるやうに見えた。然し男の昔を話し出した時にはさ／＼悪らしさうな語氣を用ひ始めた。

「なんぼ因業だつて、あんな因業な人つたらありやしないよ。今日が期限だから、是が非でも取つて行くつて、いくら言譯を云つても、坐り込んで動かないんだもの。仕舞に此方も腹が立つたから、お氣の毒さま、お金はありませんが、品物で好ければ、お鍋でもお茶でも持つてつて下さいつて云つたらね、ちや茶を持つてくつて云ふんだよ。あきれるぢやないか」

「茶を持つて行くつたつて、重くつて到底持つてやしないです」

「ところがあの業業の事だから、どんな事をして持つてかないとも限らないのさ。それ其日の御飯をあたしに炊かせまいと思つて、さういふ意地の悪い事をする人なんだからね。どうせ



先へ寄つて好い事はない筈だあねー  
 健三の耳には此話が大の滑稽として聞  
 こえなかつた。其人と姉との間に起つた斯んな  
 交渉のなかに引絡まつてゐる古い自分の影法師  
 は、彼に取つて可笑しいといふよりも寧ろ悲し  
 いものであつた。  
 「私や島田に二度會つたんですよ、姉さん。是  
 から先又何時會ふか分らないんだ」  
 「いゝから知らん顔をして御出でよ。何度會つ  
 たつて構はないぢやないか」  
 「然しわざ／＼被處いらを通つて、私の宅でも  
 探してゐるんだか、また用があつて通りがかり  
 に偶然出つくはしたんだか、それが分らないん  
 でね」  
 此疑問は姉にも解けなかつた。彼女はたい健  
 三に都合の好ささうな言葉を無意味に使つた。  
 「此方へは其後丸で来ないんですか」  
 「あゝ此二三年は丸つきり来ないよ」  
 「其前は？」  
 「其前はね、ちよ／＼つて程でもないが、そ  
 れでも時々は来たのさ、それが又可笑しいんだ  
 よ。来ると何時でも十一時頃でね。饅餡かなに  
 か食べさせないと決して歸らないんだからね。」

だつたけれども、木口杯は可成味味してあるら  
 しく子供の眼にも見えた。間取にも工夫があつ  
 た。六疊の座敷は東向で、松葉を敷き詰めた狭  
 い庭に、大き過ぎる程立派な御影の石燈籠が据  
 置てあつた。  
 綺麗好きで島田は、自分で尻端折りをして、  
 絶えず濡雑巾を縁側や柱へ掛けた。それから足  
 足になつて、南の居間の前庭へ出て、草摺りを  
 した。あるときは鎌を使つて、門口の泥溝も浚  
 つた。其泥溝には長さ四尺ばかりの木の橋が懸  
 つてゐた。  
 島田はまた此住居以外に、粗末な貸家を一軒  
 建てた。さうして雙方の家の間を通り抜けて裏  
 へ出られるやうに三尺ほどの路を付けた。裏は  
 野とも畠とも片のつかない湿地であつた。草を  
 踏むとじく／＼水が出た。一番四んだ所などは  
 始終淺い池のやうになつてゐた。島田は追々  
 其處へも小さな貸家を建てる積でゐるらしくあつ  
 た。然し其企ては何時迄も實現されなかつた。  
 冬になると鴨が下りるから、今度は一つ捕つて  
 やらう杯と云つてゐた。  
 健三は斯ういふ昔の記憶を夫から夫へと繰り  
 返した。今其處へ行つて見たら定めし驚く程變  
 つてゐるだらうと思ひながら、彼はなほ二十年

三度の御まんまを一口たけでも好いから他の家  
 で食べようつて云ふのがつまりあの人の腹なん  
 だよ。其癖服安なんか可なりなものを着てゐる  
 んだがね。  
 姉のいふ事は脱線しがちであつたけれども、  
 それを聞いてゐる健三には、矢張り金銭上の問  
 題で、自分が東京を去つたあとも、なほ多少の  
 交際が二人の間に持續されてゐたのだといふ  
 見當はついた。然しそれ以上何も知る事は出  
 来なかつた。目下の島田に就いては全く分らな  
 かつた。

八  
 島田は今でも元の處に住んでゐるんだらう  
 か  
 斯んな簡単な質問さへ姉には判然答へられな  
 かつた。健三は少しいが外れた。けれども自分  
 の方から進んで島田の現在の居所を突き留め  
 ようと迄は思つてゐなかつたので、大した失望  
 も感じなかつた。彼は此場合まだそれ程の手段  
 を盡す必要がないと信じてゐた。たとひ盡すに  
 した所で、一種の好奇心を満足するに過ぎない  
 とも考へてゐた。其上今の彼は斯ういふ好奇心  
 を輕蔑しなければならなかつた。彼の時間はそ  
 前の光景を今日の事のやうに考へた。  
 「ことによると、良人では年始状態まだ出して  
 ゐるかも知れないよ」  
 健三の歸る時、姉は斯んな事を云つて、暗に  
 比田の戻る迄話して行けと勧めたが、彼にはそ  
 れ程の必要もなかつた。  
 彼は其日無沙汰見舞かた／＼市ヶ谷の藥王寺  
 前にある兄の宅へ寄つて、島田の事を訊いて  
 見ようかと考へてゐたが、時間の遅くなつたの  
 と、どうせ訊いたつて仕方がないといふ氣が大  
 胆に強くなつたので、それなり駒込へ歸つた。  
 其晩は又翌日の仕事に忙殺されなければなら  
 なかつた。さうして島田の事は丸で忘れてしま  
 つた。

九  
 彼はまた平生の我に歸つた。活力の大部分  
 を擧げて自分の職業に使ふ事が出来た。彼の時  
 間は靜かに流れた。然し其靜かなうちに始終  
 いら／＼するものがあつて、絶えず彼を苦しめ  
 た。遠くから彼を眺めてゐなければならなかつ  
 た。細君は、別に手の出しやうもないので澄まし  
 てゐた。それが健三には妻にあるまじき冷淡と  
 しか思へなかつた。細君はまた心の中で彼と同  
 んな事に使用するには餘りに高價すぎた。  
 彼はたい想像の眼で、子供の時分見た其人の  
 家と、其家の周囲とを、心のうちに思ひ浮べ  
 た。  
 其處には往來の片側に幅の廣い大きな塙が一  
 丁も續いてゐた。水の變らない其塙の中は腐つ  
 た泥で不快に濁つてゐた。所々に蒼い色が湧  
 いて腥臭さへ彼の鼻を染つた。彼はその汚な  
 らしい一廓を、一様のお屋敷といふ名で覚えて  
 ゐた。  
 塙の向う側には長屋がずつと並んでゐた。其  
 長屋には一軒に一つの割で四角な暗い窓が開  
 けてあつた。石垣とすれ／＼に建てられた此長  
 屋が何處迄も續いてゐるので、お屋敷のなかは  
 丸で見えなかつた。  
 此お屋敷と反對の側には小さな平家が疎らに  
 並んでゐた。古いのも新しいのもごちや／＼に  
 交つてゐた其町並は無窮不備であつた。老人の  
 齒のやうに所々が空いてゐた。その空いてゐる  
 所を少し許り買つて島田は彼の住居を構へた  
 のである。  
 健三はそれが何時出来上つたか知らなかつ  
 た。然し彼が始めてそこへ行つたのは新築後ま  
 だ間もないうちであつた。四間しかない狭い家

じ非難を夫の上に投げ掛けた。夫の書齋で暮  
 らす時間が多くなればなる程、夫婦間の交渉は、  
 用事以外に少くならなければならぬ筈だと  
 云ふのが細君の方の理窟であつた。  
 彼女は自然の勢ひ健三を一人書齋に遺して  
 置いて、子供を相手にした。其子供たちはま  
 た滅多に書齋へ這入らなかつた。たまに這入る  
 と、屹度何か悪戯をして健三に叱られた。彼は  
 子供を叱る癖に、自分の傍へ寄り付かない彼等  
 に對して、やはり一種の物足りない心持を抱い  
 てゐた。  
 一週間後の日曜が来た時、彼は丸で外出し  
 なかつた。氣分を變へるため四時頃風呂へ行つ  
 て歸つたら、急にうつとりした好い氣持に襲は  
 れたので、彼は手足を盥の上へ伸ばしたまゝ、  
 つい假寐をした。さうして晩食の時刻になつ  
 て、細君から起される迄は、首を切られた人の  
 やうに何事も知らなかつた。然し起きて膳に向  
 つた時、彼には微かな氣が春筋を上から下へ  
 傳はつて行くやうな感じがあつた。その後で烈  
 しい嚏が二つ程出た。傍にゐる細君は黙つてゐ  
 た。健三も何も云はなかつたが、腹の中では斯  
 うした同情に乏しい細君に對する厭な心持を  
 意識しつゝ、箸を取つた。細君の方ではまた夫



が何故自分にも何もかも隨意なく話して、能動的に細君らしく振舞はせないのかと、その方を却つて不愉快に思つた。

其の晩は明かに多少風邪氣味であるといふ事に気が付いた。用心して早く寝ようと思つたが、ついしかけた仕事に妨げられて、十二時過ぎ起きてゐた。彼の床に入る時には家内のもつはもう皆寝てゐた。熱い湯でも飲んで、發汗したい希望をもつてゐた健三は、已むを得ず其儘寒い夜具の裏に潜り込んだ。彼は例にない寒さを感じて、寝付が大変遅かつた。然し頭腦の疲労は程なく彼を深い眠りの境に誘つた。

翌日眼を覺した時は存外安静であつた。彼は床の中で、邪はもう癒つたものと考へた。然し愈起きて顔を洗ふ段になると、何時もの冷水摩擦が舊儀な位身體が倦怠なつてきた。勇氣を鼓して食卓に着いて見たが、朝食は少しも旨くなかつた。いつもは規定として三膳食べる所を、其日は一膳で済ました。後、梅干を熱い茶の中に入れてふうふう吹いて呑んだ。然し其意味は彼自身にも解らなかつた。此時も細君は健三の傍に坐つて給仕をしてゐたが、別に何も云はなかつた。彼には其態度がわざと冷淡に構へてゐる技巧の如く見えて多少腹が立つた。彼

はことさらな喉を二度も三度もして見せた。夫でも細君は依然として取り合はなかつた。健三はさつさと頭から白襪衣を被つて洋服に着換へたなり例朝に它を出た。細君は何時もの通り帽子を持つて夫を支圖迄送つて来たが、此時の彼にはそれがたゞ形式を重んずる女としか受取れなかつたので、彼は猶厭な心持がした。

外ではしきりに悪感を感じた。舌が重々しくばさつて、熱のある人のやうに身體全體が倦怠かつた。彼は自分の脈を取つて見て、其早いのに驚いた。指頭に觸れるピン／＼いふ音が、秒を刻む決時計の音と錯綜して、彼の耳に異様な節奏を傳へた。それでも彼は我慢して、爲る丈の仕事を外でした。

十

彼は例朝に宅へ歸つた。洋服を着換へる時細君は何時もの通り、彼の不斷着を持つた儘、彼の傍に立つてゐた。彼は不快な顔をして其方を向いた。  
「床を取つて呉れ。寝るんだ」  
「はい」  
細君は彼のいふが儘に床を運べた。彼はすぐ

其中に入つて寝た。彼は自分の風邪氣の事を一口も細君に云はなかつた。細君の方でも一向其處に注意してゐない様子を見せた。それで雙方とも腹の中には不平があつた。

健三が眼を塞いでうつら／＼してゐると、細君が枕元へ来て彼の名を呼んだ。  
「あなた御飯を召上がりますか」  
「飯なんか食ひたくない」  
細君はしばらく黙つてゐた。けれどもすぐ立つて部屋の外へ出て行かうとはしなかつた。  
「あなた、何うかなすつたんですか」  
健三は何も答へずに、顔を半分ほど夜具の襟に埋めてゐた。細君は無言のまま、そつと其手を彼の額の上に加へた。

晩になつて醫者が来た。たゞの風邪だらうと云ふ診察を下して、水薬と頓服を呉れた。彼はそれを細君の手から飲まして貰つた。  
翌日は熱が猶高くなつた。醫者の注意によつて護謨の米囊を彼の頭の上に載せた細君は、蒲團の下に差し込ひニッケル製の器械と下女が買つてくる迄、自分の手で落ちないやうにそれを抑へてゐた。  
壁に裏はれたやうな氣分が二三日つゝいた。健三の裏には其間の記憶といふものが殆ど

ない位であつた。正氣に歸つた時、彼は平氣な顔をして天井を見た。それから枕元に坐つてゐる細君を見た。さうして急に其細君の世話になつたのだといふ事を思ひ出した。然し彼は何も云はずに又顔を背けてしまつた。それで細君の胸には夫の心持が少しも映らなかつた。  
「あなた何うなすつたんです」  
「風邪を引いたんだつて、醫者が云ふぢやないか」  
「そりや解つてます」

會話はそれで途切れてしまつた。細君は厭な顔をしてそれぎり部屋を出て行つた。健三は手を鳴らして又細君を呼び戻した。  
「己が何うしたといふんだい」  
「何うしたつて、——あなたが御病氣だから、私だつて斯うして米囊を更へたり、薬を注いだりして上げるんぢやありませんか。それを彼方へ行けの、邪魔だのつて、あんまり……」  
細君は彼を云はずに下を向いた。  
「そんな事を云つた覚えはない」  
「そりや熱の高い時仰しやつた事ですから、多分覚えちや居らつしやらないでせう。けれども平生からさう考へてさへ居らつしやらないければ、いくら病氣だつて、そんな事を仰しやる時

がないと思ひますわ」  
斯んな場合に健三は細君の言葉の裏に果してどの位な眞實が潜んで居るだらうかと反省して見るよりも、すぐ頭の方で彼女を抑へつけたがる男であつた。事實の問題を離れて、單に論理の上から行くと、細君の方が此場合も白であつた。熱に浮かされた時、魔障薬に酔つた時、もしくは夢を見る時、人間は必ずしも自分の思つて居る事ばかり物語るとは限らないのだから。然しさうした論理は決して細君の心を服するに足らなかつた。

「よござんす。何うせあなたは私を下女同様に取り扱ふ積で居らつしやるんだから。自分一人さへ好ければ構はないと思つて、……」  
健三は座を立つた。細君の後姿を腹立たしきうに見送つた。彼は論理の權威で自己を伴つてゐる事には九で氣が付かなかつた。學問の力で鍛へ上げた彼の頭から見ると、この明白な論理に心底から大人しく従ひ得ない細君は、全くの解らずやに違なかつた。

十一

其の晩細君は上へ入れた湯をもつて、また健三の枕元に坐つた。それを茶碗に盛りなが

ら、「御起になりませんか」と訊いた。彼の舌にはまだ舌が一杯生えてゐた。重苦しいやうな厚ぼつたいやうな口の中へ物を入れる氣には殆どなれなかつた。それでも彼は何故だか床の上に起き返つて、細君の手から茶碗を受取らうとした。然し舌障りの悪い飯粒が、ざら／＼と咽喉の方へ滑り込んで行く支なので、彼はたつた一膳で口を拭つたなり、すぐ故の逆り横になつた。  
「まだ食氣が出ませんか」  
「少しも旨くない」  
細君は帯の間から一枚の名刺を出した。  
「斯ういふ人が貴方の寢て居らつしやるうちに来たんですが、御病氣だから歸つてしました」  
健三は寢ながら手を出して、鳥の子紙に刷つた其名刺を受取つて、姓名を讀んで見たが、まだ會つた事も聞いた事もない人であつた。  
「何時来たのかい」  
「たしか一昨日でしたらう。一寸御話しようと思つたんですが、まだ熱が下らないから、わざと黙つてゐました」  
「丸で知らないだいな」  
「でも鳥田の事で一寸御主人に昨日にかゝり



「健三には會見の順序として、まづ吉田の身元から訊いてかゝる必要があつた。然し彼よりは能辨な吉田は、自分の方で、訊かれない先に、素性の概略を説明した。

彼はもと高崎に居た。さうして其處にある兵營に出入して、糧秣を納めるのが彼の商賣であつた。

「そんな關係から、段々將校方の御世話になるやうになりました。其内でも柴野の且那には特別御恩顧になつたものですから—

健三は柴野といふ名を聞いて急に思ひ出した。それは鳥田の後妻の娘が嫁に行つた先の軍人の姓であつた。

「其縁故で鳥田を御承知なんですか—

二人はしばらくその柴野といふ土官に就いて話し合つた。彼が今高崎に居ない事や、もつと遠くの西の方へ轉任してから幾年目になるといふ事や、相變らずの大酒で家計があまり裕でないといふ事や、すべて是等は、健三に取つて耳新しい報知に違なかつたが、同時に大した興味を惹く話題にもならなかつた。此大婦に對して何等の悪感も抱いてゐない健三は、たゞ左右かと思つて平氣に聞いてゐる丈であつた。然し話が本筋に入つて、愈々鳥田の事を持ち出

てますわ」と云つた。

「兄が何んな事を云つたかい—

「何んな事つて、—なんでも餘り善くない人だつていふ話ぢやありませんか—

細君はまだ其男の事に就いて、健三の心を知らたい様子であつた。然し彼にはまた反對にそれを避けたい意向があつた。彼は黙つて眼を閉ぢた。盆に載せた土鍋と茶碗を持つて席を立つ前、細君はもう一度斯う云つた。

「其名前の名前の人はまた来るさうですよ。いづれ御病氣が御癒りになつたら又何ひますからつて、歸つて行つたさうですから—

健三は仕方なしに又眼を開いた。

「来るだらう。どうせ鳥田の代理だと名乗る以上は又来るに歸つてくるさ—

「然しあなたお會ひになつて、若し来たなら—實をいふと彼は會ひたくなかつた。細君はなほの事夫を此變な男に會はせたくなかつた。

「お會ひにならない方が好いでせう—

「會つても好い。何も怖い事はないんだから—

細君には夫の言葉が、また例の我だと取れた。健三はそれを厭だけれども正しい方法だから仕方がないのだと考へた。

健三の病氣は日ならず全快した。活字に眼を晒したり、萬年筆を走らせたり、又は腕組をしてたゞ考へたりする時が再び續くやうになつた頃、一度無駄足を踏ませられた男が突然また彼の玄關先に現れた。

健三は鳥の子紙に刷つた吉田虎吉といふ見覺のある名刺を受取つて、しばらくそれを眺めてゐた。細君は小さな聲で「御會ひになりますか」と訊ねた。

「會ふから座敷へ通してくれ—

細君は歸りたさうな顔をして少し躊躇してゐた。然し夫の様子を見てとつた彼女は、何も云はずにまた書齋を出て行つた。

吉田といふのは、でつぶり肥つた、かつぶくの好い、四十恰好の男であつた。細君の羽織を着て、其頃迄流行つた白縮緬の兵児帯にびか／＼する時計の鎖を巻付けてゐた。言葉使ひから見て、彼は全くの町人であつた。さうかと云つて、決して堅氣の商人とは受取れなかつた。「成程」といふべき所を、わざと、なまある」と引張つたり、「御尤も」の代りに、さも感服したらしい調子で、「いかさま」と答へたりした。

十三

「ありや何時だつたかね。餘つ程古い事だらう—

健三は其長々しい手紙を細君に見せた時の心持を思ひ出して苦笑した。

「さうね。もう七年位になるでせう。私達がまだ千本通りにゐた時分ですから—

千本通りといふのは、彼等が其頃住んでゐた或都會の外れにある町の名であつた。

細君はしばらくして、「鳥田の事なら、あなたに何はないでも、御兄さんからも聞いて知つ

たいつて、来たんださうですよ—

細君はとくに鳥田といふ二字に力を入れて斯う云ひながら、健三の顔を見た。すると彼の頭に此間途中で會つた帽子を被らない男の影がすぐひらめいた。熱から覺めた彼には、それ迄此男の事を思ひ出す機會が丸でなかつたのである。

「御前鳥田の事を知つてゐるのかい—

「あの長い手紙がお常さんつて女から届いた時、貴方が御話しなすつたぢやありませんか—

健三は何とも答へずに一旦下へ置いた名刺を又取り上げて眺めた。鳥田の事を其時どれ程詳しく彼女に話したかそれが彼には不確であつた。

「兄が何んな事を云つたかい—

「何んな事つて、—なんでも餘り善くない人だつていふ話ぢやありませんか—

細君はまだ其男の事に就いて、健三の心を知らたい様子であつた。然し彼にはまた反對にそれを避けたい意向があつた。彼は黙つて眼を閉ぢた。盆に載せた土鍋と茶碗を持つて席を立つ前、細君はもう一度斯う云つた。

「其名前の名前の人はまた来るさうですよ。いづれ御病氣が御癒りになつたら又何ひますからつて、歸つて行つたさうですから—

健三は仕方なしに又眼を開いた。

「来るだらう。どうせ鳥田の代理だと名乗る以上は又来るに歸つてくるさ—

「然しあなたお會ひになつて、若し来たなら—實をいふと彼は會ひたくなかつた。細君はなほの事夫を此變な男に會はせたくなかつた。

「お會ひにならない方が好いでせう—

「會つても好い。何も怖い事はないんだから—

細君には夫の言葉が、また例の我だと取れた。健三はそれを厭だけれども正しい方法だから仕方がないのだと考へた。



反射から来る其人に對しての嫌惡の情も禁ずる事が出来なかつた。兩方の間に板挟みとなつた彼は、しばらく口を開き得なかつた。  
「手前も折角斯うして上がったものですから、是丈は何うぞ曲げて御承知を願ひたいもので」

吉田の様子は愈々丁寧になつた。何う考へても實際ふのは厭でならなかつた健三は、また何うしてもそれを斷るのを不義理と認めなければ濟まなかつた。彼は厭でも正しい方にはうと思ひ極めた。

「さういふ譯なら宜しう御座います。承知の旨を向うへ傳へて下さい。然し實際は致しても、昔のやうな關係ではとも出来ませんから、それも誤解のないやうに申し傳へて下さい。それから私の今の状況では、私の方から時々出掛けて行つて老人に慰養を與へるなんて事は六づかしいのですが……」

「するとまあたゞ御出入りをさせて戴くといふ譯になりますな」  
健三には御出入といふ言葉を聞くのが辛かつた。左右だとも左右でないとも云ひかねて、また口を閉じた。  
「いえなに夫で結構で、——昔と今とは事情

も丸で違ひますから」  
吉田は自分の役目が漸く済んだといふ顔付をして斯う云つた後、今迄持ち扱つてゐた煙草入を腰へさしたなり、さつさと歸つて行つた。

健三は彼を玄関迄送り出すと、すぐ書齋へ入つた。其日の仕事を早く片付けようといふ氣があるもので、いきなり机に向つたが、心の何處かに引懸りが出来て、中々思ふ通りに抄取らなかつた。

其處へ細君が一寸顔を出した。「あなた」と二過ばかり聲を掛けしたが、健三は机の前に坐つたなり振り向かなかつた。細君が其儘黙つて引退んだ後、健三は進まぬながら仕事を夕方迄續けた。

平生よりは遅くなつて漸く夕飯の食卓に着いた時、彼は始めて細君と言葉を換はした。  
「先刻来た吉田つて男は一體何なんですか」と細君が訊いた。

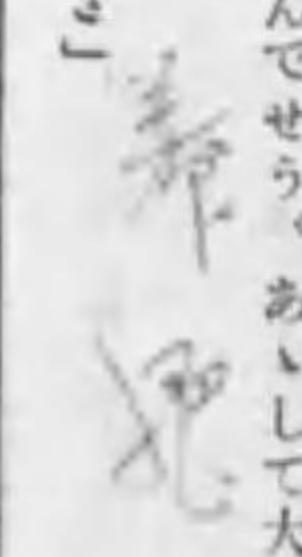
「元高崎で陸軍の用達か何かしてゐたんださうだ。健三が答へた。  
問答は固より夫で盡きる筈がなかつた。彼は女は吉田と柴野との關係やら、彼と鳥田との間柄やらに就いて、自分に納得の行く迄夫か

ら説明を求めようとした。  
「何うせ御余か何か呉れつて云ふんでせう」  
「まあ左右だ」  
「それで貴方何うなすつて。——どうせ御斷りになつたでせうね」  
「うん、斷つた。斷るより外に仕方がないから」

二人は腹の中で、自分等の家の經濟狀態を別々に考へた。月々支出してゐる、また支出しなければならぬ金額は、彼に取つて随分苦しい努力の報酬であると同時に、それで凡てを賄つて行く細君に取つても、少しも裕なものとは云はれなかつた。

十四

健三はそれぎり座を立たうとした。然し細君にはまだ訊きたい事が残つてゐた。  
「それで素直に歸つて行つたんですか、あの男は。少し變ね」  
「だつて斷られれば仕方がないぢやないか。唯唯をする譯にも行かないんだから」  
「だけど、又來るんでせう。あゝして大人しく歸つて置いて」  
「來ても構はないさ」



「でも厭ですわ、着極くつて」  
健三は細君が次の間で先刻の會話を残らず總いてゐたものと察した。  
「御前聞いてたんだらう、悉皆」  
細君は夫の言葉を肯定しない代りに否定もしなかつた。

「ぢや夫で好いぢやないか」  
健三は斯う云つたなり又立つて書齋へ行かうとした。彼は獨逸家であつた。これ以上細君に説明する必要は始めからないと信じてゐた。細君もさうした點に於いて夫の權利を認める女であつた。けれども表向夫の權利を認める丈に、腹の中には何時も不平があつた。事々について出て来る權柄づくな夫の態度は、彼女に取つて決して心持の好いものではなかつた。何故もう少し打ち解けて呉れないのかといふ氣が絶えず彼女の胸の奥に働いた。其解夫を打ち解けさせる天分も技術も自分に十分具へてゐないといふ事實には全く無頓着であつた。

「あなた鳥田と交際しても好いと受合つて居らしたやうですね」  
「あゝ」  
健三はそれが何うしたといつた風の顔付をし

た。細君は何時でも此處迄來て黙つてしまふのを例にしてゐた。彼女の性質として、夫が斯ういふ態度に出ると、急に氣がきして、それから先一步も前へ出る氣になれないのである。その不愛想な様子が又夫の氣質に反射して、益々彼を權柄づくにしがちであつた。

「御前や御前の家族に關係した事でないんだから、構はないぢやないか、己一人で極めたつて」  
「そりや私に對して何も構つて頂かなかつても宜ござんす。構つて呉れつたつて、どうせ構つて下さる方ぢやないんだから……」  
學問をした健三の耳には、細君のいふ事が丸で脱線であつた。さうして其脱線は何うしても頭の悪い證據としか思はれなかつた。「又始まつた」といふ氣が腹の中でした。然し細君はすぐ當の問題に立ち戻つて、彼の注意を惹かなければならぬやうな事を云ひ出した。

「然し御父さまに悪いでせう。今になつてあの人と御交際になつちやあ」  
「御父さまつて己のおやぢかい」  
「無論貴方の御父さまですわ」  
「己のおやぢはとうに死んだぢやないか」  
「然し御亡くなりになる前、鳥田とは絶交だか

ら、向後一切付合をしちやならなかつて仰しやつたさうぢやありませんか」  
健三は自分の父と鳥田とが喧嘩をして義絶した當時の光景をよく覚えてゐた。然し彼は自分の父に對して左程情愛の籠つた優しい記憶を有つてゐなかつた。其上絶交云々に就いても、さう嚴重に云ひ渡された覚えはなかつた。

「御前誰からそんな事を聞いたのかい。己は話した積りはないがな」  
「貴方ぢやありません。御兄さまに何つたんです」  
細君の返事は健三に取つて不思議でも何でもなかつた。同時に父の意志も兄の言葉も、彼には大した影響を與へなかつた。  
「おやぢは阿茶、兄は兄、己は己なんだから仕方がない。己から見ると、交際を拒絶する丈の根柢がないんだから」  
斯う云ひ切つた健三は、腹の中で其交際が厭で厭で堪らないのだといふ事實を意識した。けれどもその腹の中は丸で細君の胸に決らなかつた。彼女はたゞ自分の夫が又例の頑固を覆り通して、徒らに昔の意見に反對するのだとばかり考へた。



十五

健三は昔其人に手を引かれて歩いた。其人は健三のために小さい洋服を揃へて呉れた。大人さへあまり外國の服装に親しみのない古い時分の事なので、裁縫師は子供の着るスタイル杯には丸で頼りなかつた。彼の着るには腰のあたりに鉤が二つ掛んでゐて、胸は開いた儘であつた。霜降の羅紗も襦袢はくはくして、極めて手廻りが粗かつた。ことに洋袴は薄茶色に緊湊の通つた調馬師でなければ穿かないものであつた。然し當時の彼はそれを着て得意に手を引かれて歩いた。

彼の帽子も其頃の彼には珍らしかつた。淺い銅底の様な形をしたフェルトをすぼりと坊主頭へ頭巾のやうに被るのが、彼に大した満足をもたへた。例の如く其人に手を引かれて、寄席へ手品を見に行つた時、手品師が彼の帽子を借りて、大事な黒羅紗の山の裏から表へ指を突き通して見せたので、彼は驚きながら心配さうに、再びわが手に歸つた帽子を、何遍か撫でまはして見た事もあつた。其人は又彼のために尾の長い金魚をいくつも買つて呉れた。武者船、錦船、二枚つゞき三枚

つゞきの輪も彼の云ふがまゝに買つて呉れた。彼は自分の身體にあふ緋緋の鎧と龍頭の兜さへ持つてゐた。彼は日に一度位づゝ其具足を身に着けて、金紙で拵へた采配を振り舞はした。

彼はまた子供の差す位な短い脇差の所有者であつた。その脇差の目貫は、鼠が赤い唐辛子を引いて行く形で出来上つてゐた。彼は銀で作つた此鼠と珊瑚で拵へた此唐辛子とを、自分の寶物のやうに大事がつた。彼は時々此脇差が抜いて見たくなつた。また何度も抜かうとした。けれども脇差は何時か抜けなかつた。この身物時代の裝飾品も矢張り其人の好意で小さな健三の手に渡されたのである。

彼はまた其人に連れられて、よく船に乗つた。船には乾度履を着けた船頭が居て綱を打つた。いなだの鯉だのが水際迄来て跳ね躍る様子が小さな彼の眼に白金のやうな光を興へた。船頭は時々一里も二里も沖へ漕いで行つて、海御といふもの差捕つた。さういふ場合には高い波が来て舟を揺り動かすので、彼の頭はすぐ重くなつた。さうして舟の中へ流れてしまふ事が多かつた。彼の最も面白かつたのは河豚の網にかゝつた時であつた。彼は移築で河豚の腹をかか

ら太鼓のやうに叩いて、その影れたり怒つたりする様子をみて楽しんでゐた。吉田と會見した彼の健三の胸には、不圖斯うした幼時の記憶が續々湧いて来る事があつた。凡てそれらの記憶は、斷片的な割に鮮明に彼の心に映るもの許りであつた。さうして斷片的ではあるが、どれもこれも決して其人と引離す事は出来なかつた。零碎の事實を手繰り寄せれば寄せる程、種が無盡蔵にあるやうに見えた時、又其無盡蔵にある種の各自のうちには必ず帽子を被らない男の姿が残り込まれてゐるといふ事を發見した時、彼は苦しんだ。

「斯んな光景をよく覚えてゐる様に何故自分の有つてゐた其頃の心が思ひ出せないのだから」これが健三にとつて大きな疑問になつた。實際彼は幼少の時分是程世話になつた人に對する當時のわが心持といふものを丸で忘れてしまつた。

「然しそんな事を忘れる筈がないんだから、ことによると始めから其人に對して丈は、恩義相應の情合が缺けてゐたのかも知れない」健三は斯うも考へた。のみならず多分此方だらうと自分を解釋した。

十六

彼は此事情に就いて思ひ出した幼少の時分の記憶を細君に話さなかつた。感情に脆い女の事だから、もし左右でもしたら、或は彼女の反感を和げるに都合が好からうとさへ思はなかつた。

健三は此昔の人に對して何んな言葉を使つて、何んな態度をして好いか解らなかつた。思慮なしにそれ等を續めて呉れる自然の衝動が今の彼には丸で缺けてゐた。彼は二十年餘も會はない人と膝を突き合せながら、大した懐かしみも感じ得ずに、寧ろ冷淡に近い受答へばかりしてゐた。鳥田はかねて横風だといふ評判のある男であつた。健三の兄や姉は單にそれ丈でも彼を忌み嫌つてゐる位であつた。實は健三自身も心のうちでそれを恐れてゐた。今の健三は、單に言葉遣ひの末でさへ、斯んな男から自尊心を傷けられるには、あまりに高過ぎると、自分を評價してゐた。

然し鳥田は思つたよりも丁寧であつた。普通初見の人が挨拶に用ひる「ですか」とか、「ません」とかいふてには、言葉の語尾を切る注意をわざと怠らないやうに見えた。健三はひかしく其人から健功々々と呼ばれた幼い時分を思ひ出した。關係が絶えてからも、會ひさへすれば、矢張り同じ健功々々で通すので、彼はそれを厭に感じた過去も、自然胸のうちに浮かんだ。

「然しこの調子なら好いだらう」健三はそれで、出来る丈不快の顔を二人に見せまいと力めた。向うも成るべく穏かに歸る積りと見えて、少しも健三の氣を惹くするやうな事は云はなかつた。それがために、當然雙方の間に話題となるべき懐舊談杯も殆ど出なかつた。従つて談話はヤゝとすると途切れ勝になつた。健三はふと雨の降つた朝の出来事を考へた。「此間二度程途中で御目にかゝりましたが、時あの邊を御通りになるんですか」「實はあの高橋の總領の娘が片付いてゐる所がつい此先にあるもんですから」高橋といふのは誰の事だか健三には一向解らなかつた。

「はあー」「そら知つて居るでせう。あの芝の」鳥田の後妻の親類が芝にあつて、其處の家は何でも神主か坊主だといふ事を健三は子供心に聞いて覚えてゐるやうな氣もした。然しその親類の人には、要さんといふ彼とおなじ年位な男に二三通會つたきりで、他のものに顔合せた記憶は丸でなかつた。

「芝といふと、たしかお藤さんの妹さんに當る方の御嫁に入らした所でしたわね」「いえ姉ですよ。妹ではないんです」「はあー」「要三丈は死にましたが、あとの姉妹はみんな好い所へ片付いてね、仕合せですよ。それ總領のは、多分知つておいでだらう、一へ行つたんです」「一といふ名前は成程健三に耳新しいものではなかつた。然しそれはもう餘程前に死んだ人であつた。あつたが女と子供ばかりで悶るもんだから、何かにつけて、叔父さんへて重寶がられましてね。それに近頃は宅に手入をするんで監督の必要が出来たものだから、殆ど毎日のやうに此處の前を通ります」



健三は昔此男につれられて、池の端の本屋で法帖を買つて貰つた事を忘れ知らず思ひ出した。たとひ一錢でも二錢でも負けさせなければ物を買つた例のない人は、其時も僅か五厘の釣銭を取るべく、店先へ腰を卸して、頑として動かさなかつた。道其昌の折手本を抱へて傍に佇立んでゐる彼に取つては其態度が如何にも見苦しうな不愉快であつた。

「こんな人に監督される大工や左官はさぞ腹の立つ事だらう」

健三は斯う考へながら、鳥田の顔を見て苦笑を渡らした。しかし鳥田は一向それに気が付かないらしかつた。

十七

「でも御座さまで、本を遣して行つて呉れたもんですから、あの男が亡くなつても、あとはまあ困らないで、何うにか斯うにか遣つて行けるんです」

鳥田は――の作つた書物を世の中の誰でもが知つてゐなければならぬ筈だといつた風の口調で斯う云つた。然し健三は不幸にして其著書の名刺を知らなかつた。字引か教科書だらうとは推察したが、別に訊いて見る氣にもならなかつた。

「本といふものは實に有難いもので、一つ作つて置くとその時迄も賣れるんですからね」

健三は黙つてゐた。仕方なしに吉田が相手になつて、何でも儲けるには本に限るやうな事を云つた。

「御説は済んだが、――が死んだ時後が女だけだもんだから、實は私が本屋に懸け合ひましてね。それで年々若干と極めて、向うから牧めさせるやうにしたんです」

「へえ、大したもんですな。成程何うも學問をなさる時は、それと資金が要るやうで、一寸損な氣もしますが、さて仕上げて見ると、つまり其方が利廻りの好い譯になるんだから、無學のものとはとても敵ひませんな」

「結局得てすよ」

彼等の應對は健三に何の興味も興へなかつた。其上いくら相手を打たうにも打たれないやうな變な見當へ向いて進んで行くばかりであつた。手持無沙汰な彼は、巴むを得ず二人の顔を見比べながら、時々庭の方を眺めた。

其庭はまた見苦しく手入の届かないものであつた。何時かをとなつたか分らないやうな一本の松が、息苦しさうに蒼黒い葉を垣根の傍に茂らしてゐる外に、木らしい木は殆どなかつた。縁に馴染まない地面は小石交りに凸凹してゐた。

「此方の先生も一つ御儲けになつたら如何です」

吉田は突然健三の方を向いた。健三は苦笑しない譯に行かなかつた。仕方なしに「え、儲けたいものですね」と云つて返を合せた。

「なに譯はないんです。洋行迄すりや」

是は年寄の言葉であつた。それが恰も自分で學費でも出して、健三を洋行させたやうに聞こえたので、彼は厭な顔をした。然し老人は一向そんな事に頓着する様子も見えなかつた。迷惑さうな健三の顔を見て澄ましてゐた。仕舞に吉田が例の煙草入を腰へ差して、「では今日は是で御座を致す事にしませうか」と催促したので、彼は漸く歸る氣になつたらしかつた。

二人を送り出して又一寸座敷へ戻つた健三は、再び座蒲團の上に坐つたまゝ、庵組をして考へた。

「一體何の爲に來たのだらう。是ぢや他を厭がらせに來ると同じ事だ。あれで向うは面白いのだらうか」

彼の前には先列鳥田の持つて來た手土産が其

健三はすぐ立上らうとした。

「あの人はまた來るんでせうか」

「來るかも知れない」

彼は斯う言ひ放つた儘、また書齋へ入つた。一しきり筆で座敷を掃く音が聞えた。それが済むと、菓子折を奪り合ふ子供の聲がした。凡てがやがて静になつたと思ふ頃、昔昔の聲から又雨が落ちて來た。健三は買はうと思ひながら、ついまだ買はずにゐるオゾーシユの事を思ひ出した。

十八

雨の降る日が幾日も続いた。それがからりと晴れた時、集付けられたやうな空から深い輝きが大地の上に落ちた。毎日鬱陶しい思ひをして、露針にばかり氣をとられてゐた細君は、縁

鼻へ出て此蒼い空を見上げた。それから急に單筒の抽斗を開けた。

彼女が服袋を改めて夫の顔を覗きに來た時、健三は頬杖を突いたまゝ、盆拍汚ない庭を眺めてゐた。

「あなた何を考へて居らつしやるの」

健三は一寸振り返つて細君の餘所行姿を見た。其刹那に爛熟した彼の眼は不圖した新らしい味を自分の妻の上に見出した。

「何處かへ行くのかい」

「え、」

細君の答は彼に取つて餘りに簡潔過ぎた。彼はまたもとの倦びしい我に歸つた。

「子供は」

「子供も連れて行きます。置いて行くと八茶しぐつて御着ないでせうから」

其日曜の午後を健三は獨り靜かに暮らした。細君の歸つて來たのは、彼が夕飯を済まして又書齋へ引き取つた後なので、もう灯が點いてから一二時間経つてゐた。

「只今」

遅くなりましたとも何とも云はない彼女の無愛嬌が、彼には氣に入らなかつた。彼は一寸振り向いた丈で口を利かなかつた。するとそれが

又細君の心に暗い影を投げる媒となつた。細君も其儘立つて茶の間の方へ行つてしまつた。話をする機會はそれぎり二人の間に絶えた。

彼等は顔さへ見れば自然何か云ひたくなるやうな仲の好い夫婦でもなかつた。又それ丈の親しみを現すには、御互が御互に取つてあまりに陳腐過ぎた。

二三日経つてから細君は始めて其日外出した折の事を食事の時話題に上せた。

「此間宅へ行つたら、門司の叔父に會ひましてね。随分驚いちゃいました。まだ臺灣にゐるのかと思つたら、何時の間にか歸つて來てゐるんですもの」

門司の叔父といふのは油斷のならない男として彼等の間に知られてゐた。健三がまだ地方にゐる頃、彼が突然汽車で遣つて來て、急に入用が出來たから、是非共少し都合して呉れまいかと頼むので、健三は地方の銀行に預けて置いた貯金を些少なから用立てたら、立派に印紙を貼つた証文を後から郵便で送つて來た。其中に「但し利子の儀は」といふ文句が書き添へてあつたので、健三は寧ろ堅過ぎる人だと思つたが、貸した金はそれぎり戻つて來なかつた。



「今何をしてゐるのかね」  
 「何をしてゐるんだか分りやしません。何とかの會社を起すんで、是非健三さんにも賛成して貰ひたいから、其内上る積だつて云つてました」

健三には其後を訊く必要もなかつた。彼が昔金を借りられた時分にも、此叔父は何かの會社を建てゝゐるとかいふので彼はそれを本當にしてゐた。細君の父もそれを疑はなかつた。叔父は其父を旨く説きつけて、門司迄引張つて行つた。さうして是が今建築中の會社だと云つて、縁もゆかりもない他人の建てゝゐる家を見せた。彼は實に此手段で細君の父から何千かの資本を捲き上げたのである。

健三は此人に就いてこれ以上何も知りたがらなかつた。細君も云ふのが厭らしかつた。然し何時もの通り會話は其處で切れてしまはなかつた。  
 「あの日はあまり好い御天氣だつたから、久しぶりで御兄さんの所へも廻つて来ました」  
 「さうか」  
 細君の里は小石川町で、健三の兄の家は市ヶ谷藥王寺前だから、細君の訪問は大した近回でもなかつた。

十九

「御兄さんに鳥田の來た事を話したら驚いて居らつしやいましたよ。今更來られた義理やないんだつて。健三もあんなものを相手にしなければ好いにつつて」

細君の顔には多少諷刺の意が現れてゐた。「それを聞かずに、御前わざ／＼藥王寺前へ廻つたのかい」  
 「またそんな皮肉を仰しやる。あなたは何うしてさう他の事を悪くばかり御取りになるんでせう。義理あんまり御無沙汰をして済まないと思つたから、たゞ歸りに一寸何つた丈ですわ」

彼が滅多に行つた事のない兄の家へ、細君がたまに訪ねて行くのは、つまり夫の代りに實際の義理を立てゝゐるやうなもので、いかな健三もそれには苦情をいふ餘地がなかつた。  
 「御兄さんは貴夫のために心配してゐらつしやるんですよ。あゝ云ふ人と實際ひだして、また何んな面倒が起らないとも限らないからつて」  
 「面倒つて何んな面倒を指すのかね」  
 「そりや起つて見なければ、御兄さんにだつて分りつ子ないでせうけれども、何しろ疎な事は

ないと思つてゐらつしやるんでせう」  
 疎な事があらうとは健三にも思へなかつた。「然し義理が悪いからね」  
 「だつて御金を遣つて縁を切つた以上、義理の悪い譯はないぢやありませんか」  
 手切りの金は昔養育料の名前の下に健三の父の手から鳥田に渡されたのである。それはたしか健三が二十二の春であつた。  
 「其上その御金をやる十四五年も前から貴夫は、もう貴夫の宅へ引取られてゐらしたんでせう」

いくつ年の年からいくつ年の年彼が全然鳥田の手で養育されたのか、健三にも全然分らなかつた。  
 「三つから七つ迄ですつて。御兄さんが左右仰有いましたよ」  
 「左右かしら」

健三は夢のやうに消えた自分の昔を回顧した。彼の頭の中には眼で見るやうな細かい輪が澤山出た。けれども其輪には何れを見ても目付がついてゐなかつた。  
 「遺女にちやんと左右書いてあるさうですか、大丈夫間違はないでせう」  
 彼は自分の簿籍に關した書類といふものを

見た事がなかつた。  
 「見ない譯はないわ。乾度忘れて居らつしやるんですよ」

「然し八つで宅へ歸つたにしろ復讐する迄は多少往來もしてゐたんだから仕方がないさ。全く縁が切れたといふ譯でもないんだからね」  
 細君は口を噤んだ。それが何故だか健三には淋しかつた。  
 「己も實は面白くないんだよ」  
 「ぢや御止しになれば好いのに。つまらないわ、貴夫、今になつてあんな人と實際ふのは。一己何ういふ氣なんぞせう、先方は」  
 「それが己には些も解らない。向うでも無話らないだらうと思ふんだがね」

「御兄さんは何でもまた金にしようと思つて遣つて来たに違ひないから、用心しなくつちや不可いつて云つて居らつしやいましたよ」  
 「然し金は始めから斷つちまつたんだから、構はないさ」  
 「だつて是から先何を云ひ出さないとも限らないわ」

細君の胸には最初から斯うした豫感が働いてゐた。其處を既に防ぎ止めたとはかり信じて

ゐた理に強い健三の頭に、微かな不安が又新しく萌した。

二十

其不安は多少彼の仕事の上に即いて廻つた。けれども彼の仕事はまた其不安の影を何處かへ埋めてしまふ程忙しかつた。さうして鳥田が再び健三の支關へ現れる前に、月は早くも末になつた。

細君は鉛筆で汚ならしく書き込んだ會計簿を持つて彼の前に出た。  
 自分の外で働いて取る金額の全部を擧げて細君の手に委ねるのを例にしてゐた健三は、それが意外であつた。彼は未だ曾て月末に細君の手から支出の明細書を突き付けられた例がなかつた。

「まあ何うにかしてゐるんだらう」  
 彼は常に斯う考へた。それで自分に金の要する時は遠慮なく細君に請求した。月々買ふ書物の代價だけでも随分の多額に上る事があつた。それでも細君は澄ましてゐた。細君に暗い彼は時として細君の放漫をさへ疑つた。  
 「月々の勘定はちやんとして己に見せなければ不可いぜ」

細君は厭な顔をした。彼女自身から云へば日分程忠實な經濟家は何處にも居ない氣なのである。

「え、」  
 彼女の返事は是限であつた。さうして月末が來ても會計簿はつひに健三の手に渡らなかつた。健三も機嫌の好い時はそれを黙認した。けれども悪い時は意地になつてわざと見せろと通る事があつた。其解見せられるとちや／＼して中々解らなかつた。たとひ帳面づらは細君の説明を聴いて解るにしても、實際月に看をどれ丈食つたものか、又は米がどれ程要つたものか、まだそれが高過ぎるのか、安過ぎるのか、更に見當が付かなかつた。

此場合にも彼は細君の手から帳簿を受取つて、ざつと眼を通した丈であつた。  
 「何か變つた事でもあるのかい」  
 「何うかして頂かないと……」  
 細君は目下の暮し向に就いて詳しい説明を夫にして聞かせた。

「不思議だね。それで能く今日迄遣つて來られたものだね」  
 「實は毎月餘らないんです」  
 餘らうとは健三にも思へなかつた。先月末に



舊い友達が四五人で何處かへ遠足に行くとかいふので、彼にも勸誘の編書をよくした時、彼は二回の會費がない丈の理由で、同行を断つた程もあつた。

「然しかつかつ位には行きさうなものだがな」「行つても行かなくつても、是天の收入で遣つて行くより仕方がないんですけれど」

細君は云ひ悪さうに、單筒の捕雁に仕舞つて置いた自分の着物と帯を質に入れた額末を話した。

彼は昔自分の姉や兄が彼等の嗜着を風俗敷へ包んで、こつそり外へ持つて出たり又持つて入つたりしたのをよく目撃した。他に知れないやうに氣を配りがちな彼の態度は、恰も罪を犯した日影者のやうに見えて、彼の子供心に淋しい印象を刻み付けた。斯うした聯想が今の彼を殊更に侘びしく思はせた。

「質を置いたつて、御前が自分で置きに行つたのかい」

彼自身はまだ質屋の暖簾を滑つた事のない彼は、自分より貧苦の経験に乏しい彼女が、平氣でそんな所へ出入する筈がないと考へた。

「いえ頼んだんです」

細君は恨めしさに健三を見た。健三の論理は丸で細君に通じなかつた。

「貴夫の神經は近頃餘つ程變ね。何うしてもつと種當に私を觀察して下さいさらないのでせう」

健三の心には細君の言葉に耳を傾ける餘裕がなかつた。彼は自分に不自然な冷かさに對して腹立たしい程の苦痛を感じてゐた。

「あなたは誰もしないのに、自分一人で苦しんでゐらっしゃるんだから仕方がない」

二人は互に徹底する話話し合ふ事のつひに出來ない男女のやうな氣がした。従つて二人とも現在の自分を改める必要を感じ得なかつた。健三の所に求めた餘分の仕事は、彼の學問なリ教育なりに取つて、さして困難のものではなかつた。たゞ彼はそれに費やす時間と努力とを厭つた。無意味に暇を潰すといふ事が目下の彼には何よりも恐ろしく見えた。彼は生きてゐるうちに、何か爲せぬ、又仕達せなければならぬと考へる男であつた。

彼が其餘分の仕事を片付けて家に歸るときは何時でも夕暮になつた。

或日は疲れた足を急がせて、自分の家の玄関の格子を手荒く開けた。すると奥から出て來た細君が彼の顔を見るなり、「あなた彼の人があつた」

「山野のうちの御婆さんです。あそこには通ひつけの質屋の帳面があつて便利ですから」

健三は其先を訊かなかつた。夫が疎な着物一枚さへ拵へてやらないのに、細君が自分の宅から持つてきたものを質に入れて、家計の足にしなければならぬといふのは、夫の恥に相違なかつた。

二十一

健三はもう少し働かうと決心した。その決心から来る努力が、月々幾枚かの紙幣に變形して、細君の手に渡るやうになつたのは、それから間もない事であつた。

彼は自分の新たに受取つたものを洋服の内隠袋から出して封筒の儘疊の上へ放り出した。黙つてそれを取り上げた細君は裏を見て、すぐ其紙幣の出所を知つた。家計の不足は斯の如くにして無言のうちに補はれたのである。

其時細君は別に嬉しい顔もしなかつた。然し若し夫が優しい言葉に添へて、それを渡して呉れたなら、乾度嬉しい顔をする事が出來たらうにと思つた。健三は又若し細君が嬉しうにそれを受取つてくれたら優しい言葉も掛けられたらうにと考へた。それで物質的の要求に應ずべ

二十二

來ましたよと云つた。細君は鳥田の事を始終あの人あの人と呼んでゐたので、健三も彼女の様子と言葉から、留守のうちに誰が來たのか暗見當が付いた。彼は無言の儘茶の間へ上つて、細君に扶けられながら洋服を取服に改めた。

彼が火鉢の傍に坐つて、煙草を一本吹かしてゐると、間もなく夕飯の膳が彼の前に運ばれた。彼はすぐ細君に質問を掛けた。

「上つたのかい」

細君には何が上つたのか解らない位此質問は突然であつた。一寸驚いて健三の顔を見た彼女は、返事を持ち受けてゐる夫の様子から始めて其意味を悟つた。

「あの人ですか。——でも御留守でしたから」

細君は座敷へ鳥田を上げなかつたのが、恰も夫の氣に障る事でもしたやうな調子で、言辭がましい答をした。

「上げなかつたのかい」

「ええ。たゞ支障で一寸」

「何とか云つてゐたかい」

「とうに何ふ苦たつたけれども、少し旅行してゐたものだから御無沙汰をして済みません」

く工面された此金は、二人の間に存在する精神上の要求を充たす方便としては寧ろ失敗に歸してしまつた。

細君は其折の物足らなさを回復するために、二三日経つてから、健三に一反の反物を見せた。

「あなたの着物を拵へようと思ふんですが、是は何うでせう」

細君の顔は晴々しく輝いてゐた。然し健三の眼にはそれが下手な技巧を交へてゐるやうに映つた。彼は其不純を疑つた。さうしてわざと彼女の愛嬌に誘はれまいとした。細君は寒さうに座を立つた。細君の座を立つた後で、彼は何故自分の細君を寒がらせなければならぬ心理状態に自分が制せられたのかと考へて益々不快になつた。

細君と口を利く次の機會が來た時、彼は斯う云つた。

「己は決して御前の考へてゐるやうな冷嘲な人間ぢやない。たゞ自分の有つてゐる温かい情愛を堰き止めて、外へ出られないやうに仕向けるから、仕方なしに左右するのだ」

「誰もそんな意地の悪い事をする人は居ないぢやありませんか」

「御前は始終してゐるぢやないか」

「済みませんといふ言葉が一種の嘲弄のやうに健三の耳に響いた。

「旅行なんぞするのかな、田舎に用のある身體とも思へないが、御前にその行つた先を話したかい」

「そりや何とも云ひませんでした。たゞ娘の所で來て呉れつて頼まれたから行つて來たつて云ひました。大方あのお嬢さんて人の宅なんぢやせう」

お嬢さんの嫁いだ柴野といふ男には健三も其昔會つた覺があつた。柴野の今の任地先も此間吉田から聞いて知つてゐた。それは師團が旅團のある中國邊の或都會であつた。

「軍人なんですか、其お嬢さんて人の御嫁に行つた所は」

健三が急に話を途切らしたので、細君はしばらく間を置いたあとで斯んな問を掛けた。

「能く知つてゐるね」

「何時か御兄さんから伺ひましたよ」

健三は心のうちで昔見た柴野とお嬢さんの姿を並べて考へた。柴野は肩の張つた色の黒い人であつたが、眼鼻立からいふと寧ろ立派な部類に屬すべき男に違なかつた。お嬢さんは又



すらりとした好の好い女で、顔は面長の色白といふ出来であった。ことに美しいのは睫毛の多い切長の其眼のやうに思はれた。彼の結婚したのは柴野がまだ少尉か中尉の頃であった。健三は一度その新宅の門を滑った記憶を有つてゐた。其時柴野は隊から歸つて来た身體を大きくして、長火鉢の猶板の上にある洋壺から冷酒をぐいぐい飲んだ。お縫さんは白い肌をあらはに、飯桌の前で髪を撫でつけてゐた。彼はまた自分の分として取り配けられた握り鮎を顔りに皿の中から撮んで食べた。

「お縫さんて人はよつほど容色が好いんですか」  
「何故」  
「だつて貴女の御縁にするつて話があつたんださうぢやありませんか」  
成程そんな話もない事はなかつた。健三がまだ十五六の時分、ある友達を往來へ待たせて置いて、自分一人一寸鳥田の家へ寄らうとした時、偶然門前の泥溝に掛けた小橋の上に立つて往來を眺めてゐたお縫さんは、一寸微笑しながら用合頭の健三に合神した。それを目撃した彼の友達は獨逸語を習ひ始めの子供であつたので、「フチャウ門に倚つて待つ」と云つて彼をひやかした。

二十三

「貴女何うして其お縫さんて人をお貰ひにならなかつたの」  
健三は膝の上から急に眼を上げた。追憶の夢を物かされた人のやうに。  
「丸で問題にやならない。そんな料簡は鳥田にあつたぢやないから。それに己はまだ子供だつたしね」  
「あの人の本當の子ぢやないんでせう」  
「無謂さ。お縫さんはお藤さんの連れつ子だもの」  
お藤さんと云ふのは鳥田の後妻の名であつた。

「あなた其端書は比田さんから来たんですよ」  
健三は漸く書物から眼を放した。  
「あの人の事で何か用事が出来たんですつて」  
成程端書には鳥田の事で會ひたいから一寸来てくれと書いた上に、日と時刻が明記してあつた。わざ／＼彼を呼び寄せる失禮も丁寧に記してあつた。

「何うしたんでせう」  
「丸で判明らないね。相談でもなからうし。此方から相談を持ち懸けた事なんか丸でないんだから」  
「みんなで交際つちや不可いつて忠告でもなさるんぢやなくつて。御兄さんも入らつしやると書いてあるでせう、其處に」  
端書には細君の云つた通りの事がちやんと書いてあつた。

「ただ、もしそのお縫さんて人と一所になつて、後まで兩家の關係をつながらうとしたら、此女の生母はまた彼の兄と自分の娘とを夫婦にしたやうな希望を有つてゐたらしかつたのである」  
「健ちゃんの宅と斯んな間柄にならないとね、あたしも始終健ちゃんの家へ行かれるんだけれど」  
お藤さんが健三に斯んな事を云つたのも、願れば古い昔であつた。

「何うしたんでせう」  
「丸で判明らないね。相談でもなからうし。此方から相談を持ち懸けた事なんか丸でないんだから」  
「みんなで交際つちや不可いつて忠告でもなさるんぢやなくつて。御兄さんも入らつしやると書いてあるでせう、其處に」  
端書には細君の云つた通りの事がちやんと書いてあつた。

「何うしたんでせう」  
「丸で判明らないね。相談でもなからうし。此方から相談を持ち懸けた事なんか丸でないんだから」  
「みんなで交際つちや不可いつて忠告でもなさるんぢやなくつて。御兄さんも入らつしやると書いてあるでせう、其處に」  
端書には細君の云つた通りの事がちやんと書いてあつた。

二十四

「何うなつてるか判らないぢやないか、なつて見なければ」  
「でも事によると、幸福かも知れせんわね。其方が」  
「左右かも知れない」  
健三は少し思々しくなつた。細君はそれぎり口を噤んだ。  
「何故そんな事を訊くのだい。訊らない」  
細君は容められるやうな気がした。彼女にはそれを乗り越す丈の勇気がなかつた。  
「どうせ私は始めつから御氣に入らないんだから」  
健三は箸を放り出して、手と頭の中に突込んだ。さうして其處に溜つてゐる雲脂をぐしぐし落し始めた。



姉の家へ来た時、彼の心は沈んでゐた。それと反対に彼の氣は興奮してゐた。

「いや何うもわざ／＼御呼び立て申して」と比田が挨拶した。是は昔の健三に對する彼の態度ではなかつた。然し變つて行く世相のうち、彼がひとり姉の夫たる此人にだけ優者になり得たといふ誇りは、健三にとつて満足であるよりも、寧ろ苦痛であつた。

「一寸上がらうにも、何うにも斯うにも忙しくつて遣り切れないもんですから。現に昨夜なども宿直でしてね。今夜も實は頼まれたんですけれど、貴方と御約束があるから、斷つてやつとの事で今歸つて来た所です」

比田のいふ所を黙つて聽いてゐると、彼が變な女を其勤先の近所に圍つてゐるといふ噂はまるで嘘のやうであつた。

古風な言葉で形容すれば、たい算筆に達者だといふ事の外に、大した學問も才幹もない彼が、今時の會社で、さう重寶がられる筈がないのに、健三の心には斯んな疑問さへ湧いた。

「姉さんは」  
「それにお夏が又例の喘息でね」  
姉は比田のいふ通り針箱の上に載せた括り枕に倚りかゝつて、せい／＼云つてゐた。茶の間に、古いもんで」

比田は笑ひながら、机の上に伏せた本を取つて健三に渡した。それが意外にも常山紀談だつたので健三は少し驚いた。それにしても自分の親君が今にも絶息しやうな勢ひで嘆き込んでゐるのを、丸で餘所事のやうに聽いて、こんなものを平氣で讀んでゐられる所が、如何にも能く此男の性質をあらはしてゐた。

「私や萬葉だから斯ういふ古い講談物が好きでしてね」  
彼は常山紀談を普通の講談物と思つてゐるらしかつた。然しそれを書いた海峽常山を講談師と間違へる程でもなかつた。

「欠つ張り學者なんでせうね、其男は。曲亭馬琴と何方でせう。私や馬琴の八代傳も持つてゐるんだが」  
成程彼は桐の本箱の中に、日本紙へ活版で刷つた豫約の八代傳を綺麗に重ね込んでゐた。

「健ちゃん、江戸名所圖繪を御持ちですか」  
「いえ」  
「ありや面白い本ですね。私や大好きだ。なんなら貸して上げませうか。なにしろ江戸と云つた昔の日本橋や櫻田がすつかり分るんだからね」

を吸きに立つた健三の眼に、其震れた髪の毛がむごたらしく映つた。

「何うです」  
彼女は頭を眞直に上げる事さへ叶はないで、小さな顔を横にした儘健三を見た。挨拶をしようと思ふ努力が、すぐ咽喉に障つたと見えて、今迄多少落ち付いてゐた喉の発音が一度に來た。其喉は一つがまだ済まないうちに、後から／＼仕切りなしに出て來るので、俯で見ても氣が退けた。

「苦しうだな」  
彼は獨り言のやうに斯う呟やいて、眉を蹙めた。

見馴れない四十恰好の女が、姉の後から背中を撫つてゐる傍に、一本の杉箸を添へた水筒の人物が盆の上に載せてあつた。女は健三に會釋した。

「何うも一昨日からね、あなた」  
姉は斯うして三日も四日も不眠絶食の姿で衰へて行つたあと、又活作用の弾力で、ちりちり元へ戻るのを、年來の習慣としてゐた。それを知らない健三ではなかつたが、目前此猛烈な喉と消え入るやうな呼吸道とを見てゐると、病氣に罹つた常人よりも自分の方が却つて

彼は床の上にある別の本箱の中から、美濃紙製の淺色の表紙をした古い本を二冊取り出した。さうして恰も健三を江戸名所圖繪の名さへ聞いた事のない男のやうに取扱つた。其健三には子供の時分その本を蔵から引き取り出して來て、頁から頁へ丹念に挿繪を拾つて見せて行くのが、何よりの樂みであつた時代の、懐かしい記憶があつた。中にも駿河町といふ所に描いてある越後屋の暖簾と富士山とが、彼の記憶を今代表する幾點となつた。

「此分では逆もその頃の悠長な心持で、自分の研究と直接關係のない本などを讀んでゐる暇は、薬にしたくつても出て來ない」  
健三は心のうちで斯う考へた。たゞ焦燥りに焦燥つてばかりゐる今の自分が、浪めしくもあり又氣の毒でもあつた。

兄が約束の時間迄に顔を出さないで、比田は其間を繋ぐためか、しきりに書物の話をうづげようとした。書物の事なら何時迄話してゐても、健三にとつて迷惑にならないといふ自信でも持つてゐるやうに見えた。不幸にして彼の知識は、常山紀談を普通の講談ものとして考へる程度であつた。それでも彼は昔出た風俗畫報を一冊残らず綴じて持つてゐた。

不安で堪らなくなつた。  
一口を利かうとすると喉を誘ひ出すのでせう。靜かにしてゐらつしやい。私は彼方へ行くから」  
發作の一仕切收まつた時健三は斯う云つて、またもとの座敷へ歸つた。

比田は平氣な顔をして本を讀んでゐた。「いえなに又例の持病ですか」と云つて、健三の慰問には丸で取り合はなかつた。同じ事を年に何度となく繰返して行くうちに、自然と未結核來る氣の毒な女房の姿は、此男にとつて密も感傷の種にならないやうに見えた。實際彼は三十年近くも同様して來た彼の妻に、たゞの一つ優しい言葉を掛けた例のない男であつた。

健三の這入つて來るのを見た彼は、すぐ讀み掛けの本を伏せて、鐵條の眼鏡を外した。

「今一寸貴方が茶の間へ行つてゐらした間に、下らないものを讀み出したんです」  
比田と讀書——是は又極めて似つかはしくない取合せであつた。

「何ですか、それは」  
「なに健ちゃんなんぞの讀むもんぢやありません

本の話が盡きた時彼は仕方なしに問題を變へた。  
「もう來さうなもんですね、長さんも。あれ程云つてあるんだから忘れなさいんだが。それに今日は明けの日だから、遅くとも十一時頃迄には歸らなさいやらないんだから。何なら一寸迎に遣りませうか」  
此時又變化が來たと見えて、火の着くやうに嘆き入る姉の聲が茶の間の方で聞こえた。

「やがて門口の格子を開けて、沓履へ下駄を脱ぐ音がした」  
「やつと來たやうですぜ」と比田が云つた。

然し玄關を通り抜けた其足音はすぐ茶の間へ這入つた。  
「また悪いの。驚いた。些も知らなかつた。何時から」

短い言葉が感涙詞のやうに又質問のやうに、座敷に坐つてゐる二人の耳に響いた。その聲は比田の推察通りやつぱり健三の兄であつた。  
「長さん、先刻から待つてゐるんだ」  
性急な比田はすぐ座敷から聲を掛けた。女房の喘息などは何うなつても構はないといつた風



其調子が如何にも此男の特性をよく現はしてゐた。「本當に手前勝手な人だ」とみんなから云はれる丈あつて、彼は此場合にも、自分の都合より外に何も考へてゐないやうに見えた。「今行きますよ」

長太郎も少し癪だと見えて、中々茶の間から出て来なかつた。「重湯でも少し飲んだら好いでせう。喉でござらぬもさう何も食へなくつちや身體が疲れる丈だから」

姉が息苦しくつて、受容へが出来かねるので、背中を撫つてゐた女が一口ごとに適宜な挨拶をした。平生健三よりは親しく其宅へ出入する兄は、見馴れない此女とも近付と見えた。其所爲か彼等の應對は容易に盡きなかつた。

比田はぶりつと駭れてゐた。朝起きて顔を洗ふ時のやうに、兩手で黒い顔をこし／＼擦つた。仕舞ひに健三の方を向いて、小さな聲で斯んな事を云つた。

「健ちゃんあれだから困るんですよ。口ばかり多くつてね。此方も手がないから仕方なしに頼むんだが」

比田の非難は明かに健三の見知らない女の上に投げ掛けられた。

「何ですあの人は」  
「それ勝手のお勢ですよ。昔健ちゃんの遊びに来る時分、よく居たちやありませんか、宅に」  
「へえ」

健三には比田の家でそんな女に會つた覚えが全くなかつた。

「知りませんね」  
「なに知らない事があるもんですか、お勢だもの。彼奴はね、御承知の通りまことに親切で實意のある好い女なんだが、あれだから困るんです。喋るものが病なんだから」

よく事情を知らない健三には、比田のいふ事が、たゞ自分丈に都合のいい誇張のやうに聞こえるばかりで、大した感銘も與へなかつた。姉はまた嘆き出した。その發作が一段落片付く迄は、さすがの比田も黙つてゐた。長太郎も茶の間を出て来なかつた。

「何だか先刻より馴しい様ですね」  
少し不安になつた健三は、さう云ひながら席を立たうとした。比田は一も二もなく留めた。

「なあに大丈夫、大丈夫。あれが持病なんですから大丈夫。知らない人が見ると一寸吃驚しますがね。私なんざあもう年來馴れつ子になつてから平氣なもんです。實際又あれを一々苦

にしてゐるやうぢや、とても今日迄一所に住んでる事は出来ませんからね」  
健三は何とも答へる譯に行かなかつた。たゞ腹の中で、自分の細君が私的里の發作に買された時の苦しい心持を、自然の對照として描き出した。

姉の嘆息が一收まり收まつた時、長太郎は始めて座敷へ顔を出した。

「何うも済みません。もつと早く来る筈だつたが、生憎珍らしく客があつたもんだから」  
「来たか長さん持つてたは。冗談ぢやないよ。使でも出さうかと思つてた所です」

比田は健三の兄に向つてこの位な氣安い口調で話の出来る地位にあつた。

二十七

三人はすぐ用談に取り掛つた。比田が最初に口を開いた。

彼は一寸した相談事にも仔細ぶる思であつた。さうして仔細ぶればぶる程、自分の存在が周囲から強く認められると考へてゐるらしかつた。「比田さん比田さんつて、立てゝ置さへすりや好いんだ」と昔が腕で笑つてゐた。一時に長さん何うしたもんだらう」

「さう」  
「何うもこりや天から筋が違ふんだから、健ちゃんに話をする迄もなからうと思ふんだがね、私や」

「左様さ。今更そんな事を持ち出して来たつて、此方で取り合ふ必要もないだらうぢやないか」  
「だから私も突つ跳ねたのさ。今時分そんな事を持ち出すのは、丸で自分の殺した子供を、もう一返生かして呉れつて、御尊様へ頼みに行くやうなものだからお止しなさいつて。だけど大將、いくら何と云つても、坐り込んで動かないんだからね、仕方がない。然しあの男があゝやつて今頃私の宅へのんこのしやあで遣つて来るのも、實はといふと、矢つ張り昔の關係があつたからの事さ。だつてそりや昔も昔も昔も、ずつと昔の話でさあ。其上たゞで借りやしましね」

「またたゞで貸す風でもなしね」  
「さうさ。口ぢや親類合だとか何とか云つてる癖に、金にかけちやあかの他人より阿漕なんだから」  
「来た時にさう云つて遣れば好いのに」  
比田と兄との談話は中々元へ戻つて来なかつた。ことに比田は其處に健三のゐるのさへ忘れ

てしまつたやうに見えた。健三は好加減に何とか口を出さなければならなくなつた。

「一體何うしたんです。鳥田が此方へでも突然何かつたんですか」  
「いやわざ／＼御呼び立て申して置いて、つい自分の勝手ばかり喋つて済みません。——ちや長さん私から健ちゃんに一應其顛末を御話する事にしようか」

「え、何うぞ」  
話は意外にも單純であつた。——ある日鳥田が突然比田の所へ来た。自分も年を取つて頼りにするものがゐないので心細いといふ理由の下に、昔通り鳥田姓に復歸して貰ひたいから何うぞ健三にさう取次いでくれと頼んだ。比田も其要求の突飛なものに驚いて最初は拒絶した。然し何と云つても動かないので、兎も角も彼の希望又は健三に通じようと受合つた。——たゞ是

だけなのである。  
「少し變ですねえ」  
健三には何う考へても變としか思はれなかつた。

「變だよ」  
兄も同じ意見を言葉にあらはした。  
「何うせ變にや違ない、何しろ六十以上にな

つて、少しやきが過つてゐるからね」  
「然でやきが過りやしないか」  
比田も兄も可笑しさうに笑つたが、健三は獨り其仲間へ入る事が出来なかつた。彼は何時迄も變だと思ふ氣分に制せられてゐた。彼の頭から判斷すると、そんな事は到底ありよう筈がなかつた。彼は最初に吉田が来た時の談話を思ひ出した。次に吉田と鳥田が一所に來た時の光景を思ひ出した。最後に彼の留守に旅先から歸つたと云つて、鳥田が一人で訊ねて來た時の言葉を思ひ出した。然し何處を何う思ひ出して、其處から斯んな結果が生れて來ようとは考へられなかつた。

「何うしても變ですね」  
彼は自分の爲に同じ言葉をもう一度繰返して見た。それから漸と氣を換へて斯う云つた。  
「然しそりや問題にやならないでせう。たゞ斷りさへすりや好いんだから」

二十八

健三の眼から見ると、鳥田の要求は不思議な位理に合はなかつた。従つてこれを片付けるのも容易であつた。たゞ簡單に斷りさへすれば済んだ。



「然し一旦は貴方の御耳迄入れて置かないと、私の態度になりますから」と比田は自分を辯護するやうに云った。彼は何處迄も此會合を眞面目なものにしなければ済まないらしく、それで言ふ事も時によつて變化した。一それに相手が相手ですからね。まかり間違へば何をするか分らないんだから、用心しなくつちやいけませんよ」

「一燒が過つてゐるなら構はないぢやないか」と兄が元氣半分に彼の矛盾を指摘すると、比田は眞面目になつた。一燒が過つてゐるから怖いんです。なに先が當り前の人間なら、私だつて其場ですぐ斷つちまひますよ」

「いや人間も五十になるともう駄目ですね。もとは健ちゃんの見ている前で天ぶら蕎麥を五杯位べろりと片付けたもんでしたかね」

「健三は昔此人に連れられて寄席などに行つた歸りに、能く二人して屋敷の暖簾を滑つて、鮎や天麩羅の立食をした當時を思ひ出した。彼は健三に其寄席で聴いたしかをどりとかいふ三味線の手を教へたり、又はさばを讀むといふ隠語などを習ひ覚えさせたりした。一どうも欠つ張り立食に限るやうですね。私も此年になる迄、段々方々食つて歩いて見たが、健ちゃん、一廻輕井澤で蕎麥を食つて御覽なさい、聞かれたと思つて。汽車の停つてゐるうちに、始終叩いて見せた。」

降りて食ふんです、プラスチックホームの上へ立つてね、流石本場丈あつて旨うがすぜ」

「一それよか、善光寺の境内に元祖藤八御指南所といふ看板が懸つてゐたには驚いたね、長さん」

た役で、別々に比田の家を出た。

二十九

健三は自分の背後にこんな世界の控へてゐる事を遂に忘れることが出来なくなつた。此世界は平生の彼にとつて遠い過去のものであつた。然しいとといふ場合には、突然現在に變化しなければならぬ性質を帯びてゐた。

彼の頭には願仁坊主に似た比田の種栗頭が浮いたり沈んだりした。猫のやうに覗いた瞳の奥の奥深くに、薄く透るやうな姿が薄く見えた。血の氣の濁きかけた兄に特有なひすばつた長い顔も出たり引込んだりした。

昔この世界に人となつた彼は、その後自然の力でこの世界から切り出されてしまつた。さうして脱け出したまゝ、永く東京の地を踏まなかつた。彼は今再びその中へ後戻りをして、久し振に過去の臭を嗅いだ。それは彼に取つて、三分の一の懐かしさと、三分の二の厭らしさとを齎す混合物であつた。

彼の頭の中には自分と丸で縁故のない或女の事が閃いた。其女は昔薬者をしてゐた頃人を殺した罪で、二十年餘りも牢屋の中で暗い月日を送つた後、漸と世の中へ顔を出す事が出来るやうになつたのである。

氣の所爲か近頃めつきり白い筋が増して来た。自分はまだ一と思つてゐるうちに、十年は何時の間にか過ぎた。



「そんな事はありません」  
彼の意味はつひに青年に通じなかつた。彼は今の自分が、結婚當時の自分と、何んなに變つて、細君の眼に映るだらうかを考へながら歩いた。其細君はまた子供を生むたびに老けて行つた。髪や毛なども氣の引ける程抜ける事があつた。さうして今は既に三番目の子を胎内に宿してゐた。

三十

家へ歸ると細君は奥の六疊に手紙をしたたり寐てゐた。健三は其傍に散らばつてゐる赤い片端だの物指だの針箱だのを見て、又かといふ顔をした。  
細君はよく寐る女であつた。朝もことによると健三より遅く起きた。健三を送り出してから又横になる日も少くはなかつた。斯うして飽く迄眠りを食らないうと、頭が痺れたやうになつて、其日一日何事をしても何然しないといふのが、常に彼女の癖であつた。健三は或は左右かも知れないと思つたり、又はそんな事があるものかと考へたりした。ことに小言を云つたあとで、寐られるときは、後の方の感じが強く起つた。

「不貞をやるんだ」  
彼は自分の小言が、私私的里性の細君に對して、何う反應するかを、よく觀察してやる代りに、單なる面當のために、斯うした不自然の態度を彼女が彼に示すものと解釋して、苦々しい味を口の内で漏らす事がよくあつた。  
「何故夜早く寐ないんだ」  
彼女は背つ張であつた。健三に斯う云はれる度に、夜は眼が冴えて寐られないから起きてゐるのだといふ答辭を乾度した。さうして自分の起きてゐたい時迄は必ず起きて繻物の手を巴めなかつた。  
健三は斯うした細君の態度を悪んだ。同時に彼女の私私的里を恐れた。それからもしや自分の解釋が間違つてゐるはしまいかといふ不安にも制せられた。  
彼は其處に立つた儘、しばらく細君の寐顔を見詰めてゐた。眼の上に載せられた其横顔は寧ろ蒼白かつた。彼は黙つて立つてゐた。お作といふ名前さへ呼ばなかつた。  
彼は不圖眼を轉じて、あらはな白い腕の傍に放り出された一束の書物に氣を付けた。それは普通の手紙の重なり合つたものでもなければ、又新しい印刷物を一週めに括つたものとも見えなかつた。總體が茶色が、つて既に多少の時代を帯びてゐる上に、古風なかんじで丁寧な結び目があつた。其書物の一端は、殆ど細君の頭の下に敷かれてゐると思はれる位、彼女の黒い髪で、健三の目を遮つてゐた。  
彼はわざ／＼それを引き出して見る氣にもならず、又眼を蒼白い細君の額の上に注いだ。  
彼女の額は滑り落ちるやうにこけてゐた。  
「まあ御復せなすつた事」  
久し振に彼女を訪問した親族のある女は、近頃の彼女の顔を見て驚いたやうに、斯んな評を加へた事があつた。其時健三は何故だか此細君を獲せさせた凡ての原因が自分一人にあらずやうな心持がした。  
彼は書齋に入つた。  
三十分も経つたと思ふ頃、門口を開ける音がして、二人の子供が外から歸つて来た。坐つてゐる健三の耳には、彼等と子守との問答が手に取るやうに聞えた。子供はやがて駆け込むやうに奥へ入つた。其處では又細君が蒼白いといつて、彼等を叱る聲がした。  
夫からしばらくして細君は先朝自分の枕元にあつた一束の書き物を手に持つた儘、健三の前にはあらはれた。

「先程御留守に御兄いさんがいらつしやいましたね」  
健三は萬年筆の手を止めて、細君の顔を見た。  
「もう歸つたのかい」  
「ええ、今一寸散歩に出掛けましたから、もうちき歸りませうつて御止めしたんですけれども、時間がなからつて御上りになりませんでした」  
「さうか」  
「何でも谷中に御友達とかの御葬式があるんですつて。それで急いで行かないと間に合はないから、上つてゐられないんだと仰しやいました。然し歸りに暇があつたら、もしかすると寄るかも知れないから、歸つたら待つてるやうに云つて呉れつて、云ひ置いて行らつしやいました」  
「何の用なのかね」  
「矢つ張りあの人の事なんださうです」  
兄は鳥田の事で来たのであつた。

三十一

細君は手に持つた書物の束を健三の前に出した。  
「是を貴夫に上げて呉れと仰しやいました」  
健三は怪訝な顔をしてそれを受取つた。  
「何だい」  
「みんなあの人の關係した書類なんださうです。健三に見せたら参考になるだらうと思つて、用筆筒の抽匣の中に仕舞つて置いたのを、今日出して持つて来たつて仰しやいました」  
「そんな書類があつたのかしら」  
彼は細君から受取つた一括りの書物を手に載せた儘、ぼんやり時代の付いた紙の色を眺めた。それから何の意味なしに、裏表を引繰返して見た。書類は厚さにして暗二寸もあつたが、風の通らない温氣た所に長い間放り込んであつた所爲か、蟲に食はれた一筋の痕が偶然健三の眼を懐古的にした。彼は其不規則な筋を指の先でざら／＼撫で、見た。けれども今更丁寧に結ばれたかんじの結び目を解いて、一々中を檢める氣も起らなかつた。  
「開けて見たつて何が出て来るものか」  
彼の心は此一句でよく代表されてゐた。  
「御父さまが後々の爲にちやんと一纏にして取つて御置になつたんですつて」  
「左右か」  
健三は自分の父の分別と理解力に對して大した尊敬を拂つてゐなかつた。  
「おやぢの事だから程度何でもかんでも取つて置いたんだらう」  
「然しそれも皆貴夫に對する御親切からなんですか。あんな奴だから己のゐなくなつた後に、何んな事を云つて来ないとも限らない、其時には是が役に立つつて、わざ／＼一纏にして、御兄さんに御渡になつたんださうです」  
「左右かね、己は知らない」  
健三の父は中氣で死んだ。その父のまだ達者であるすつと前から彼はもう東京にゐなかつた。彼は親の死目にさへ會はなかつた。斯んな書物が自分の眼に觸れないで、長い間兄の手元に保管されてゐたのも、別段の不思議ではなかつた。  
彼は漸く書類の結び目を解いて一所に重なつてゐるものを、一々ほごし始めた。手續書と書いたものや、取替せ一札の事と書いたものや、明治二十一年一月約定金請取の證と書いた半紙二つ折の帳面やらが順々にあらはれて来た。其帳面の仕舞には、右本日受取右月賦金は皆済相成候事と鳥田の手蹟で書いて黒い判がべたりと捺してあつた。  
「おやぢは月々三四か四四づゝ取られたんだ



「あの人のですか」  
 細君は其帳面を迷まに覗き込んでみた。  
 「さて若干になるかしら。然し此外にまだ一時に遣つたものがある筈だ。おやぢの事だから、屹度その受取を取つて置いたに違ない。何處かにあるだらう」

書付は夫から夫へと續々出て来た。けれども、健三の眼には何れも是もごちやくして容易に解らなかつた。彼はやがて四つ折にして一纏に重ねた厚みのあるものを取り上げて中を開いた。

「小學校の卒業證書入れである」  
 其小學校の名は時によつて變つてゐた。一番古いものには第一大學區第五中學區第八番小學校といふ朱印が押してあつた。

「何ですかそれは」  
 「何だか己も忘れてしまつた」

「よつほど古いものね」  
 證書のうちには賞状も二三枚交つてゐた。昇り龍と降り龍で丸い輪廓を取つた眞中に、甲科と書いたり乙科と書いたりしてある下に、いつも筆墨紙と横に斷つてあつた。  
 「書物も貰つた事があるんだがな」

彼は勤善調家だの奥地隠岐だのを抱いて喜びの餘り飛んで宅へ歸つた昔を思ひ出した。御褒美をもらふ前の夢に見た若い龍と白い虎の事も思ひ出した。是等の遠いものが、平生と違つて今の健三には甚だ近く見えた。

三十二

細君には此古臭い免狀が猶の事珍らしかつた。夫の一日下へ置いたのを又取り上げて、一枚一枚丁寧に刺繰つて見た。  
 「變ですわね。下等小學第五級だの六級だのつて。そんなものが在つたんでせうか」

「在つたんだね」

健三は其儘外の書付に手を着けた。讀みにく彼の父の字蹟が大いに彼を苦しめた。  
 「之を御覽、逆も讀む勇氣がないね。只でさへ判明らない所へ持つて来て、無暗に朱を入れたり棒を引いたりしてあるんだから」  
 健三の父と島田との懸合に就いて必要な下書らしいものが細君の手に渡された。細君は女史あつて、綿密にそれを讀み下した。  
 「貴方の御父さまはあの島田つて人の世話をなすつた事があるのね」  
 「そんな話は己も聞いてはゐるが」

「何が可笑しいんだ」

「だつて」

細君は何も云はずに、書付を夫の方に向け直した。さうして人さし指の頭で、細かく割註のやうに朱で書いた所を抑へた。

「一寸其處を讀んで御覽なさい」

健三は八の字を寄せながら、其一行を六づかしさうに讀み下した。

「取扱ひ所勤務中遠山藤と申す後家へ通じ合ひ候が事の起り。何だ下らない」

「然し本當なんでせう」

「本當は本當さ」

「それが貴夫の八つの時なのね。それから貴夫は御自分の宅へ御歸りになつた譯ね」

「然し籍を返さないんだ」

「あの人か」

細君はまた其書付を取り上げた。讀めない所は其儘にして置いて、讀める所丈眼を通して、自分のまだ知らない事實が出て来るだらうといふ興味を、少からず彼女の好奇心を喚び出した。書付の仕舞の方には、島田が健三の戸籍を元通りに置いて置いて實家へ返さないのみならず、いつの間にか戸主に改めた彼の印形を濫用して金を借り散らした例などが擧げてあつた。

愈手を切る時に養育料として島田に渡した金の證書も出て来た。それには、然る上は健三無縁本籍と引替に當金一圓御渡し被下、殘金一圓は毎月三十日限り月賦にて御差入の積御對談云々と長たらしく書いてあつた。

「凡て變な文句許りだね」

「親類取扱人比田寅八つて下に印が押してあるから、大方比田さんでも書いたんでせう」

健三はつい此間會つた比田の萬事に心得頗な様子と、此證書の文句とを引き比べて見た。

三十三

葬式の歸りに寄るかも知れないと云つた兄は遂に顔を見せなかつた。

「あんまり遅くなつたから、すぐ御歸りになつたんでせう」

健三には其方が便宜であつた。彼の仕事は前日の前夜の晩を潰して調べたり考へたりしなければ義務を果す事の出来ない性質のものであつた。従つて必要な時間を他に食ひ削られるのは、彼に取つて甚だしい苦痛になつた。

彼は兄の置いて行つた書類をまた一讀めにして、元のかんじん燃で括らうとした。彼が指先を力を入れた時、其のかんじん燃はぶつりと切

「此處に書いてありますよ。——同人幼少にて勤向相成りがたく當方へ引き取り五箇年間養育致候縁合を以てと」

細君の讀み上げる文章は、丸で舊時代の町人が町奉行か何かへ出す訴狀のやうに聞えた。其口調に動かされた健三は、自然古風な自分の父を眼の前に見舞した。其父から、將軍の鷹狩に行く時の模様などを、それ相當の敬語で聞かされた昔も思ひ合せられた。然し事實の興味が主として働きかけてゐる細君の方では丸で文體などに頓着しなかつた。

「その縁故で貴夫はあの人の所へ養子に遣られたのね。此處にさう書いてありますよ」

健三は因果な自分を自分で憐んだ。平氣な細君は其縁を讀み出した。

「右健三三歳の朝、養子に差遣はし置候處平吉儀妻常と不和を生じ、遂に離別と相成候につき當時八歳の健三を當方へ引き取り今日迄十四箇年間養育致し、——あとは眞赤でごちやくして讀めないわね」

細君は自分の眼の位置と書付の位置とを色々に配合して後を讀まうと企てた。健三は腕組をして黙つて待つてゐた。細君はやがてくすくす笑ひ出した。

「あんなり古くなつて、弱つたのね」

「まさか」

「だつて書付の方は蠶が食つてる位ですもの、貴夫」

「左右云へばさうかも知れない。何しろ抽斗に投げ込んだり、今日迄放つて置いたんだか、然し兄貴も能くまあ斯んなものを取つて置いたものだね。困つちや何でも賣る癖に」

細君は健三の顔を見て笑ひ出した。

「誰も買ひ手がないでせう。そんな蠶の食つた紙なんか」

「だがさ。能く紙屑籠の中へ入れてしまはなかつたと云ふ事さ」

細君は赤と白で燃つた細い線を火鉢の抽斗から出して来て、其處に置かれた書類を新しく箱けた上、それを夫に渡した。

「己の方にや仕舞つて置く所がないよ」

彼の周圍は書物で一杯になつてゐた。手文庫には文藝とノットがぎつしり詰つてゐた。空地のあるのは夜具蒲團の仕舞つてある一間の戸欄丈であつた。細君は苦笑して立ち上つた。  
 「御兄さんは二三日うち屹度また入らつしやいますよ」







みるうちに能くそんな物を買ふ氣になれたのね、あの人が。私今でも不思議だと思ひますわ。

「或は婚禮の時に穿く積りでわざ／＼梅へたの

かも知れないね。」

二人は其時の異様な結婚式に就いて笑ひながら話した。

東京からわざ／＼彼女を伴つて来た細君の父は、娘に振袖を着せながら、自分は一通りの

禮装さへ測へてゐなかつた。セルの單衣を着流

しの儘で仕舞には胡坐さへ蓋いた。婆さん一人

より外に誰も相談する相手のない健三の方では

猶の事困つた。彼は結婚の儀式に就いて全く

の無方針であつた。もと／＼東京へ歸つてから

賞ふといふ約束があつたので、媒酌人も其地には

はゐなかつた。健三は参考のため此媒酌人が書いて

送つて呉れた注意書のやうなものを讀んで見た。

それは立派な紙に楷書で認められた

嚴しいものには違なかつたが、中には東洋な

どが例に引いてある丈で、何の實用にも立たな

かつた。

「雌蝶も雄蝶もあつたもんぢやないのよ貴方。

「それだ、御盃の縁が缺けてゐるんですもの。」

「それで三々九度を遣つたのかね。」

「書が其處から出て来ようとは、二人とも思ひが

けなかつた。

「え、だから夫婦中が斯んなにがたびしする

んでせう。」

兄は苦笑した。

「健三も中々の氣六かしやだから、お住さんも

骨が折れるだらう。」

細君はたゞ笑つてゐた。別段兄の言葉に取

合ふ氣色も見えなかつた。

「もう歸りさうなものですからね。」

「今日は待つて、例の事件を話して行かなくつ

ちや。」

兄はまだ其後を云はうとした。細君はふいと

立つて茶の間へ時計を見に這入つた。其處から

出て来た時、彼女は此間の書類を手にしてゐ

た。

「是が要るんでせう。」

「いえ夫はたゞ参考迄に持つて来たんだから、

多分要るまい。もう健三に見せて呉れたんでせ

う。」

「え、見せました。」

「何と云つてたかね。」

細君は何とも答へやうがなかつた。

「随分澤山色々な書付が這入つてゐますわね。

「御父さんが、今に何か事があると不可いって、

此中には。」

「送籍願が紛れ込んでゐるなら、それを御返し

するから、持つて行つたら好いでせう。」

丹念に取つて置いたんだから。」

細君は夫から頼まれて其の中の最も大切らしい

一部分を彼の爲に代讀した事は云はなかつた。

兄もそれぎり書類に就いて讀まなくなつた。二

人は健三の歸る迄の時間をたゞの雜談に費し

た。其健三は約三十分程して歸つて来た。

三十五

彼が何時もの通り服装を改めて座敷へ出た

時、赤と白と混り合はせた細い縁で括られた例

の書類は兄の膝の上にあつた。

「先達ては。」

兄は油氣の抜けた指先で、一度解きかけた縁

の結び目を元の通りに締めた。

「今一寸見たら、此中には君に不必要なものが

紛れ込んでゐるね。」

「左右ですか。」

此大事さうに仕舞込まれてあつた書付に、兄

が長い間眼を通さなかつた事を健三は知つた。

兄は又自分の弟がそれ程熱心にそれを調べて

ゐない事に氣が附いた。

「お山の送籍願が這入つてゐるんだよ。」

お山といふのは兄の妻の名であつた。彼が其

人と結婚する當時に必要であつた區長宛の願

書が其處から出て来ようとは、二人とも思ひが

けなかつた。

兄は最初の妻を離別した。次の妻に死なれ

た。其二度目の妻が病氣の時彼は夫として心配

の様子もなく能く出歩いた。病氣が惡化だか

ら大丈夫といふ安心もあるらしく見えたが、容

體が險惡になつて後、彼は依然として其態度

を改める様子になかつたので、人はそれを氣に

入らない妻に對する仕打とも解した。健三も

或は左右だらうと思つた。

二度目の妻を迎へる時、彼は自分から望みの

女を指名して父の許諾を求めた。然し弟には

一言の相談もしなかつた。それがため其の強い

健三の、兄に對する不平が、罪もない義理の方

に影を落した。彼は教育も身分もない人を自分

の姉と呼ぶのは厭だと主張して、氣の弱い兄を

苦しめた。

「なんて強くない人だらう。」

誰で批評の口にする斯うした言葉は、彼を反

省させるよりも却つて頑固にした。習俗を重

んずるために學問をしたやうな悪い結果に陥

つて自ら知らなかつた彼には、とかく自分の不

見識を認めて見識と誇りたがる弊があつた。彼

は極度の眼をもつて當時の自分を回顧した。

「もう古い事さ。」

兄は是を云つたときりであつた。其の唇には

微笑の影が差した。最初も二返日も失敗つて、

最後にやつと自分の氣に入つた女と一所になつ

た昔を忘れる程、彼は遷徙してゐなかつた。同

時にそれを口へ出す程若くもなかつた。

「御覽年でしたかね」と細君が叫んだ。

「お山ですか。お山はお住さんと一つ違ですよ」

「まだ御覧いのね。」

兄はそれには何とも答へずに、先刻から膝の

上に置いた書類の帯を急に解き始めた。

「まだ斯んなものが這入つてゐたよ。是も君に

や關係のないものだ。さつき見て僕もちよいと

驚いたが、こら。」

彼はごた／＼した故紙の中から、何の雜作も

なく一枚の書付を取出した。それは寡代子とい

ふ彼の長女の出生届の尺書であつた。「右者

本月二十三日午前十一時五十分出生致し候」

といふ文句の、本月二十三日、丈に棒が引懸け

て消してある上に、蟲の食つた不規則な線が筋

道に入つてゐた。

「是も御父さんの手蹟だ。ねえ。」

彼は其一枚の反故を大事らしく健三の方へ向

け直して見せた。

「御覽、蟲が食つてるよ。尤も其筈だね。出生

届ばかりぢやない、もう死亡届迄出てゐるん

だから。」

結核で死んだ其子の生年月を、兄は口のうち

で靜かに讀んでゐた。

三十七

兄は過去の人であつた。華美な前途はもう彼

の前に横たはつてゐなかつた。何かに付けて後

を振り返り膝な彼と對坐してゐる健三は、自分

の進んで行くべき生活の方向から逆方向に引き戻

されるやうな氣がした。

「淋しいな。」

健三は兄の道徳になるには餘りに未來の希望

を多く持ち過ぎた。其體現在の彼も可なり淋

しいものに違なかつた。其現在から順に推し

た未來の、當然淋しかるべき事も彼にはよく解

る。

「淋しいな。」

健三は兄の道徳になるには餘りに未來の希望

を多く持ち過ぎた。其體現在の彼も可なり淋

しいものに違なかつた。其現在から順に推し

た未來の、當然淋しかるべき事も彼にはよく解

る。



てゐた。  
兄は此間の相識通り鳥田の要求を断つた旨を健三に話した。然し何んな手續までそれを断つたのか、又先方がそれに對して何んな挨拶をしたのか、さういふ細かい點になると、全く要領を得た返事をしなかつた。  
「何しろ比田からさう云つて来たんだから憶だらう」

其比田が鳥田に會ひに行つて話を付けたとも、又は手紙で會見の始末を知らせて遣つたとも、健三には判明しなかつた。  
「多分行つたんだらうと思ふがね。それとも彼の人の事だから、手紙で済まして仕舞つたのか。其處はつい聞いて来るのを忘れたよ。尤もあの後一通姉さんの見舞かたゝ行つた時にや、比田が相變らず留守だつたので、つい會ふ事が出来なかつたのさ。然し其時姉さんの話ぢや、何でも忙しいんで、まだ其儘にしてあるやうだつて云つてたがね。あの男も随分無責任だから、ことによると行かないのかも知れないよ」

健三の知つてゐる比田も無責任の男に相違なかつた。其代り頼むと何でも引き受ける性質であつた。たゞ他から頭を下げて頼まれるのが嬉しくつて物を受合ひたがる彼は、頼み方が

寂しい人らしいと容易に動かなかつた。然しこんだの事なんざあ、鳥田がちかに比田の所へ持ち込んだんだからねえ」

兄は暗に比田自身が先方へ出向いて話を付けたければ善理の悪いやうな事を云つた。其辭はこんな場合に決して自分が懸合事杯に出掛ける人ではなかつた。少し氣を遣はなければならぬ。而も起ると必ず顔を背けた。さうして事情の許す限り涙と辛抱して獨り苦しんだ。健三には此矛盾が腹立たしく可笑しくもない代りに何となく氣の毒に見えた。

「自分も兄弟だから他から見たら何處か似てゐるのかも知れない」  
斯う思ふと、兄を氣の毒がするのは、つまり自分を氣の毒がると同じ事にもなつた。

「姉さんはもう好いんですか」  
問題を變へた彼は、姉の病氣に就いて経過を訊ねた。

「あゝ。どうも喘息つてもおは不思議だねえ。あんなに苦しんでゐても直癒るんだから」  
「もう話が出来ますか」  
「出来るどころか、中々好く健舌つてね。例の調子で。――姉さんの考へぢや、鳥田はお蔵さんの所へ行つて、智慧を付けられて来たんだらう」

は、彼を取つて沈黙の日に過ぎなかつた。彼は其間に時々己の追憶を辿るべく餘儀なくされた。自分の兄を氣の毒がりつゝも、彼は何時の間にか、其兄と同じく過去の人となつた。

彼は自分の生命を兩断しようと思つた。すると綺麗に切り棄てられべき筈の過去が、却つて自分を追掛けて来た。彼の眼は行手を望んだ。然し彼の足は後へ歩きがちであつた。

さうして其行き話まりには、大きな四角な家が建つてゐた。家には幅の廣い階子段のついた二階があつた。其二階の上も下も、健三の眼には同じやうに見えた。廊下で圍まれた中庭もまた四角であつた。

不思議な事に、其廣い宅には人が誰もしんでゐなかつた。それを淋しいとも思はずにみられる程の幼い彼には、まだ家といふものゝ經驗と理解が缺けてゐた。

彼は幾つとなく續いてゐる部屋だの、遠く迄眞直に見える廊下だのを、恰も天井の付いた町のやうに考へた。さうして人の通らない往來を一人で歩く氣でそこいら中駆け廻つた。  
彼は時々表二階へ上つて、細い椅子の間から下を見下した。鈴を鳴らしたり、腹掛を掛けた

りした馬が何匹も續いて彼の眼の前を過ぎた。路を隔てた眞ん向うには大きな唐金の佛様があつた。其佛様は胡坐をかいて蓮臺の上に坐つてゐた。太い錫杖を握いでゐた。それから頭に笠を被つてゐた。

健三は時々薄暗い土間へ下りて、其處からすぐ向側の石段を下りるために馬の通る往來を横切つた。彼は斯うしてよく佛様へ攀ち上つた。着物の袂へ足を掛けたり、錫杖の柄へ捉まつたりして、後から肩に手が届くか、又は笠に自分の頭が觸れると、其先はもう何うする事も出来ずにまた下りて来た。

彼はまた四角な家と唐金の佛様の近所にある赤い門の家を覺えてゐた。赤い門の家は狭い往來から細い小路を二十間も折れ曲つて這入つた突き當りにあつた。其奥は一面の高敷で葺はれてゐた。

此狭い往來を突き當つて左へ曲ると長い下り坂があつた。健三の記憶の中に出てくる其坂は、不規則な石段で下から上迄積み上げられてゐた。古くなつて石の位置が動いた爲か、段の方々に凸凹があつた。石と石の罅からは青草が風に靡いた。それでも其處は人の通行する路に違なかつた。彼は草履穿の儘で、何處か其

うつて云ふんだがね」  
「まさか。それよりあの男だから彼んな非常識な事を云つて来るのだと解釋する方が適當でせう」  
「さう」  
兄は考へてゐた。健三は馬鹿らしいといふ顔付をした。  
「でなければね。乾度年を取つて昔から邪魔にされるんだらうつて」  
健三はまだ黙つてゐた。

「何しろ淋しいには違ないんだね。それも彼奴の事だから、人情で淋しいぢやない、然で淋しいんだ」

兄はお蔵さんの所から毎月彼女の母の方へ手當が届く事を何うしてか知つてゐた。  
「何でも命迫動草の年金か何かをお蔵さんが貰つてゐるんだとさ。だから鳥田も何處からか貰はなくつちや淋しくつて堪らなくなつたんだらうよ。何しろあの位番張つてゐるんだから」

健三は熱で淋しがつてる人に對して大した同情も起し得なかつた。

三十八

高い石段を上つたり下つたりした。坂を下り盡すと又坂があつて、小高い行手に杉の木立が蒼黒く見えた。丁度其坂と坂の間の、谷になつた窪地の左側に、又一軒の葺葺があつた。家は表から引込んでゐる上に、少し右側の方へ片寄つてゐたが、往來に面した一部分には掛茶屋の様な雑な構が掛へられて、常には二三脚の床几さへ體よく据えてあつた。

葺葺の隙から覗くと、奥には石で圍んだ池が見えた。その池の上には藤棚が釣つてあつた。水の上に差し出された兩端を支へる二本の欄柱は池の中に埋まつてゐた。周囲には藤園が多かつた。中には綺麗な影があちこちと動いた。濁つた水の底を幻影の様に赤くする其魚を健三は是非捕りたいと思つた。

或日彼は誰も宅にゐない時を見計らつて、不細工な布袋竹の先へ一枚鉢を着けて、何と其に池の中に投げ込んだら、すぐ鉢を引く氣味の悪いものに脅された。彼は水の底に引つ張り込まなければ巴まない其強い力が二の腕を伝へた時、彼は恐ろしくなつて、すぐ筆を放り出した。さうして翌日前かに水面に浮いてゐた一尺餘りの鉢を見出した。彼は獨り怖がつ



た。自分は何時分誰と共に住んでゐたのだらう。彼には何等の記憶もなかつた。彼の頭は丸で白紙のやうなものであつた。けれども理解力の素質に訴へて考へれば、何うしても島田夫婦と共に暮したと云はなければならなかつた。

### 三十九

それから舞臺が急に變つた。淋しい田舎が突然彼の記憶から消えた。すると表に襦子窓の付いた小さな宅が腦氣に彼の前にあらはれた。門のない其宅は裏通りらしい町の中にあつた。町は細長かつた。さうして右にも左にも折れ曲つてゐた。

彼の記憶がぼんやりしてゐるやうに、彼の家も始終薄暗かつた。彼は日光と其家とを連想する事が出来なかつた。

彼は其處で抱合をした。大きくなつて聞く。襦子が元で、本抱合を誘ひ出したのだとかいふ話であつた。彼は暗い襦子のうちで轉げ廻つた。總身の肉を所縁はず掻き揉んで泣き叫んだ。

彼はまた偶然廣い建物の中に幼い自分を発見した。區切られてゐる様で續いてゐる仕切の

うちには人がちらほら居た。空いた場所の塵だか薄縁だか、黄色く光つて、あたりを伽藍堂の如く濡しく見せた。彼は高い所にゐた。其處で精進を食つた。さうして油揚げの餅を干瓢で結へた稲荷餅の恰好に似たものを、上から下へ落した。彼は勾欄につらまつて何處も下を覗いて見た。然し誰もそれを取つて呉れるものはない。作の大人はみんな正面に氣を取られてゐた。正面ではぐらぐらと柱が揺れて大きな宅が潰れた。すると其の潰れた屋根の間から、屍を生やした軍人が威嚇つて出て来た。——其頃健三はまだ芝居といふものゝ觀念を有つてゐなかつたのである。

彼の頭には此芝居と外れ鷹とが何の意味なしに結び付けられてゐた。突然鷹が向うに見える青い竹藪の方へ筋道に飛んで行つた時、誰だか彼の傍に居るものが「外れた」と叫んだ。

すると誰だかまた手を叩いて其聲を呼び返さうとした。——健三の記憶は此處でぶつりと切れてゐた。芝居と鷹と何方を先に見たのか、大まかには不分明であつた。従つて彼が田圃や藪ばかり見える田舎に住んでゐたのと、狭苦しい町内の往來に向いた薄暗い宅に住んでゐたのと、何方が先になるのか、それも彼にはよく

判明ならなかつた。さうして其時代の彼の記憶には、殆ど人といふものゝ影が働いてゐなかつた。

然し島田夫婦が彼の父母として明確に彼の意識に上つたのは、それから間もない後の事であつた。

其時夫婦は變な宅にゐた。門口から右へ折れると、他の堀際傳ひに石段を三つ程上らなければならなかつた。そこからは幅三、尺ばかりの路地で、抜けると廣くて賑かな通りへ出た。左は廊下を曲つて、今度は反対に二三段下りる順になつてゐた。すると其處に、長方形の廣間があつた。廣間に沿つた土間も長方形であつた。土間から表へ出ると、大きな河が見えた。其上を白帆を懸けた船が何艘となく往つたり來つたりした。河岸には櫓を結つた中へ薪が一杯積んであつた。櫓と櫓の間にある空地は、だら／＼下りに水際迄續いた。石垣の隙間からは掃蕪葉がよく鏡を出した。

島田の家は此細長い屋敷を三つに區切つたものゝ真中であつた。もとは大きな町人の所有で、河岸に面した長方形の廣間が其店になつてゐたらしく思はれるけれども、その持主の何者であつたか、又何うして彼が其處を立ち退いた

ものか、それらは凡て健三の知識の外に秘はる秘密であつた。

一頃その廣い部屋がある西洋人が借りて英語を教へた事があつた。まだ西洋人を異人といふ昔の時代だつたので、島田の妻のお常は、化物と同居でもしてゐるやうに氣味を悪がつた。尤も此西洋人は上靴を穿いて、島田の借りてゐる部屋の縁側迄のそ／＼歩いてくる癖を有つてゐた。お常が氣味の氣味だとか云つて着い顔をして寝てゐると、其處の縁側へ立つて座敷を覗き込みながら、見舞を述べたりした。その見舞の言葉は日本語か、英語か、又はたゞ手間似だけか、健三には丸で解つてゐなかつた。

### 四十

西洋人は何時の間にか去つてしまつた。小さい健三が不圖心付いて見ると、其廣い家は既に扱所といふものに變つてゐた。

扱所といふのは今の區役所の様なものらしかつた。みんなが低い机を一行に並べて事務を執つてゐた。テーブルや椅子が今日のやうに長く用ひられない時分の事だつたので、臺の上に長く坐るのが、大程の不使でもなかつたのだらう。呼び出されるものも、また自分から遣つて

来るものも、悉く自分の下駄を土間へ履き捨て、掛り／＼の机の前へ畏まつた。

島田は此扱所の頭であつた。従つて彼の席は入口からずつと遠い一番奥の空當りに設けられた。其處から直角に折れ曲つて、河の見える襦子窓の際迄に、人の數が何人ゐたか、机の數が幾脚あつたか、健三の記憶は憶にそれを彼に語り得なかつた。

島田の住居と扱所とは、もとより細長い一ツ家を仕切つた迄の事なので、彼は出勤と云はず退出と云はず、少からぬ便宜を有つてゐた。彼には天氣の好い時でも土を踏む面儀がなかつた。雨の降る日には傘を差す補助を省く事が出来た。彼は自宅から縁側傳ひで勤めに出了。さうして同じ縁側を歩いて宅へ歸つた。

斯ういふ關係が小さい健三を少からず大膽にした。彼は時々公の場所へ顔を出して、みんなから相手にされた。彼は好い氣になつて、書記の硯箱の中にある朱筆を弄つたり、小刀の鞘を拂つて見たり、他に着飽がられるやうな惡戯を續けざまにした。島田はまた出来る限りの忠告をもつて、此小暴君の態度を是認した。島田は奇奇な男であつた。妻のお常は島田よりも猶奇奇であつた。

一爪に火を點すつてゐるのは、あの事だね。彼が實家に歸つてから後、斯んな評が時々彼の耳に入つた。然し當時の彼は、お常が長火鉢の傍へ坐つて、下女に味噌汁をよそつて進るのを何の氣もなく眺めてゐた。

「それぢや何ほ何でも下女が可哀さうだ」

彼の實家のものは苦笑した。

お常はまた飯櫃や御茶の這入つてゐる戸口に、いつでも鏡を飾した。たまに實家の父が訪ねて來ると、お常は飯櫃を取寄せて食はせた。其時は彼女も健三も同じものを食つた。その代り飯時が來ても決して何時ものやうに膳を出さなかつた。それを當然のやうに思つてゐた健三は、實家へ引き取られてから、間食の上に三度の食事が重なるのを見て、大いに驚いた。

然し健三に對する夫婦は余の點に掛けて來る不思議な位寛大であつた。外へ出る時は黄八丈の袴を着せたり、縮緬の着物を買ふために、わざ／＼城後屋迄引つ張つて行つたりした。其城後屋の店へ腰を掛けて、柄を擇り分けてゐる間に、夕暮の時間が過つたので、大勢の小僧が廣い間口の南戸を、兩側から一度に締め出した時、彼は急に恐ろしくなつて、大きな聲を掲げて泣き出した事もあつた。



彼の望む玩具は無論彼の自由になつた。其中には寫し輪の道具も交つてゐた。彼はよく紙を綴ぎ合はせた幕の上に、三番叟の影を映して、烏帽子姿に鈴を振らせたり足を動かさせたりして喜んだ。彼は新しい調樂を買つて買つて、時代を着けるために、それを河岸際の溝泥の中に浸けた。所が其泥溝は薪炭場の柵と柵との間から流れ出して河へ落ち込むので、彼は調樂の失くなるのが心配に、日に何遍となく掘り出した。掘り出して行つて、何遍となくそれを取ら出して見た。そのたびに彼は石垣の間へ逃げ込む窟の穴を棒で突つた。それから逃げ損つたもの、甲を抑へて、いくつも生捕りにして扱へ入れた。

四十一

然し夫婦の心の奥には健三に對する一種の不安が常に清んでゐた。彼等が長火鉢の前で差向ひに坐り合ふ夜寒の宵などには、健三によく斯んな質問を掛けた。御前の御父さんは誰だい。

自分達の親切と、無理にも子供の前には外部から叩き込まうとする彼等の努力は、却つて反對の結果を其子供の上に引き起した。健三は蒼蠅がった。

「なんでそんなに世話を焼くのだらう」御父さんがとか、御母さんがとか、出るたびに、健三は己の自由を欲しがった。自分の買つて貰ふ玩具を喜んだり、錦繪を他かぞへ眺めたりする彼は、却つてそれ等を買つてくれる人を嬉しがらなくなつた。少くとも兩つのものを綺麗に切り離して、純粋な樂みに耽りたかつた。夫婦は健三を可愛がつてゐた。けれども其愛情のうちには憂な報酬が豫期されてゐた。金の力で美しい女を圍つてゐる人が、其女の好きなものを、云ふが儘に買つて呉れるのと同じ様に、彼等は自分達の愛情そのもの、發現を目的として行動する事が出来ず、たゞ健三の歡心を得るために親切を見せなければならなかつた。さうして彼等は自然のために彼等の不純を罰せられた。しかも自ら知らなかつた。

四十二

同時に健三の氣質も損はれた。願良な彼

健三は鳥田の方を向いて彼を指した。「ちや御前の御母さんは」健三はまたお常の顔を見て彼女を指した。是で自分達の要求を一應満足させると、今度は同じやうな事を外の形で訊いた。

「ちや御前の本當の御父さんと御母さんは」健三は厭々ながら同じ答を繰返すより外に仕方がなかつた。然しそれが何故だか彼等を喜ばした。彼等は顔を見合せて笑つた。或時はこんな光景が殆ど毎日のやうに三人の間で起つた。或時は單に是丈の間答では済まなかつた。ことにお常は執着かつた。

「御前は何處で生れたの」斯う聞かれるたびに健三は、彼の記憶のうちに見える赤い門——高敷で蔽はれた小さな赤い門の家を擧げて答へなければならなかつた。お常は何時此質問を掛けても、健三が支支なく同じ返事の出来るやうに、彼を仕込んだのである。彼の返事は無論器械的であつた。けれども彼女はその事には一向顧着しなかつた。健坊、御前本當は誰の子なの。隠さずにさう御云ひ」

彼は苦められるやうな心持がした。時には苦しいより腹が立つた。向うの聞きたがる返事

の天性は次第に表面から落ち込んで行つた。さうして其隙を捕ふものは強情の二字に外ならなかつた。彼の我儘は日増に募つた。自分の好きなものが手に入らないと、往來でも道端でも構はずに、すぐ其處へ坐り込んで動かなくなつた。ある時は小僧の背中から彼の髪を毛を力に任せて撚り取つた。ある時は神社に放し飼の鳩を何うしても宅へ持つて歸るのだと主張して已まなかつた。養父母の寵を欲し、まに専有し得る狭い世界の中に起きたり寝たりする事より外に何も知らない彼には、凡ての他人が、たゞ自分の命令を聞くために生きてゐるやうに見えた。彼は云へば通るとばかり考へるやうになつた。やがて彼の横着はもう一歩深入りをした。ある朝彼は親に起こされて、眼を擦りながら縁側へ出た。彼は毎朝寝起きに其處から小便をする癖を有つてゐた。所が其日は何時もより眠かつたので、彼は用を足しながら中途で寝てしまつた。さうして其後を知らなかつた。眼が覺めて見ると、彼は小便の上に轉げ落ちてゐた。不幸にして彼の落ちた縁側は高かつた。大通りから河岸の方へ滑り込んでゐる地面

を與へずに、わざと黙つてゐた。御前が「御前誰が一番好きだい。御父さん？ 御母さん？」

健三は彼女の意を迎へるために、向うの望むやうな返事をするのが厭で堪らなかつた。彼は無言のまま棒のやうに立つてゐた。それを只年齒の行かなたためとのみ解釋したお常の觀察は、寧ろ簡單に聞きた。彼は心のうちで彼女の斯うした態度を思ひ悪んだのである。

夫婦は全力を盡して健三を彼等の専有物にしようとした。また事實上健三は彼等の専有物に相違なかつた。従つて彼等から大事にされるのは、つまり彼等のために彼の自由を奪はれるのと同一結果に陥つた。彼には既に身體の束縛があつた。然しそれよりも痛惡らしい心の束縛が、何も解らない彼の胸に、ぼんやりした不満足の影響を投げた。

夫婦は何か付けて彼等の恩恵を健三に意識させようとした。それで或時は「御父さんが」といふ聲を大きくした。或時はまた「御母さんが」といふ言葉に力を入れた。御父さんと御母さんを離れたたゞの菓子を食べたり、たゞの着物を着たりする事は、自然健三には禁じられてゐた。

の中心に當るので、普通の信賴があつた。彼はその出来事のためにとうとう腰を抜かした。驚いた養父母はすぐ彼を千住の名前へ伴れて行つて出来る丈の治療を加へた。然し強く痛められた腰は容易に立たなかつた。彼は腰の奥のする黄色いどろ／＼したものを毎日局部に塗つて座敷に寝てゐた。それが幾日経たか彼は知らなかつた。

「まだ立てないかい。立つて御覽」お常は毎日のやうに催促した。然し健三は動けなかつた。動けるやうになつてもわざと動かさなかつた。彼は寝ながらお常のやきもきする顔を見てひそかに喜んだ。彼は仕舞に立つた。さうして平生と何の異なる所なく其處いら中歩き廻つた。するとお常の驚いて嬉しがりやうが、如何にも老居じみた表情に充ちてゐたので、彼はいつそ立たずにもう少し寝てお常の弱點とまともに相押つ事も少くはなかつた。

お常は非常に嘘を吐く事の巧い女であつた。それから何んな場合でも、自分に利益があると見えれば、すぐ涙を流す事の出来る重寶な女であつた。健三をほんの子供だと思つて氣



を許してゐた彼女は、其裏面をすつかり彼に曝露して自ら知らなかつた。

或日一人の客と相対して坐つてゐたお常は、其席で話題に上つた甲といふ女を、傍で聴いてゐても聴きづらい位罵つた。所が其客が歸つたあとで、甲が又偶然彼女を訪ねて来た。するとお常は甲に向つて、そんなくしい御世辭を使ひ始めた。遂に、今誰さんとあなたの事を大變賞めてゐた所だといふやうな不必要な嘘を吐いた。健三は腹を立てた。

「あんな嘘を吐いてらあ」  
彼は一徹な子供の正直を、其儘甲の前に披露した。甲の歸つたあとでお常は大變に怒つた。「御前と一所にゐると顔から火の出るやうな思ひをしなくつちやならない」  
健三はお常の顔から早く火が用れば好い位に感じた。

彼の胸の底には彼女を思ひ嫌ふ心が我が知らず常は何處かに働いてゐた。いくらお常から可愛がられても、それに酬いてゐるの情合が此方に出て来ないやうな醜いものを、彼女は彼女の人格の中に藏してゐたのである。さうして其醜いものを一番能く知つてゐたのは、彼女の懐に温められて育つた駄々っ子に外ならなかつたのである。

つたのである。

四十三

其中變な現象が島田とお常との間に起つた。ある晩健三が不圖眼を覺まして見ると、夫婦は彼の傍ではげしく罵り合つてゐた。出来事は彼に取つて突然であつた。彼は泣き出した。其翌晩も彼は同じ事ひの聲で熟睡を破られた。彼はまた泣いた。

斯うした騒がしい夜が幾つとなく重なつて行くに連れて、二人の罵る聲は次第に高まつて来た。仕舞には雙方共手を出し始めた。打つ音、踏む音、叫ぶ音が、小さな彼の心を恐ろしがらせた。最初彼が泣き出すと已んだ二人の喧嘩が、今では寢ようが覺めようが、彼に用捨なく通行するやうになつた。

幼穉な健三の頭では何の爲めに、つひぞ見馴れない此光景が毎夜深更に起るのか、丸で解釋出来なかつた。彼はたゞそれを嫌つた。道徳も理非も持たない彼に、自然はたゞそれを嫌ふやうに教へたのである。

やがてお常は健三に事實を話して聞かせた。其話によると、彼女は世の中で一番の美人であつた。これに反して島田は大變な悪ものであつた。

四十四

問もなく島田は健三の眼から突然消えて失くした。何岸を向いた裏通りと賑やかな表通りとの間に挟まつてゐた今迄の住居も急に何處へか行つてしまつた。お常とたつた二人ぎりになつた健三は、見馴れない變な宅の中に自分を見出した。

其家の表には門口に糊嚙籠を下げて来屋だか味噌屋だかであつた。彼の記憶は此大きな店と、茹でた大豆とを彼に連想せしめた。彼は毎日それを食つた事をいまだに忘れずにゐた。然し自分の新しく移つた住居については何の影響も浮かべ得なかつた。一時は綺麗に此怪しい記念を彼のために拂ひ去つてくれた。

た。然し最も悪いのはお常さんであつた。「あいつが」とか「あの女が」とかいふ言葉を使ふとき、お常は口惜しくつて堪まらないといふ顔付をした。眼から涙を流した。然しさうした劇烈な表情は却つて健三の心持を悪くする事で、外に何の効果もなかつた。

「彼は何だ。御前さんにもお前にも儲だよ。骨を粉にしても仇討をしなくつちやあ」  
お常は顔をきり／＼喚んだ。健三は早く彼女の傍を離れたくなかつた。

彼は始終自分の傍にゐて、朝から晩まで味方にしたがるお常よりも、寧ろ島田の方を好いた。其島田は以前と違つて、大抵は宅にゐない事が多かつた。彼の歸る時刻は何時も夜更らしかつた。従つて日中は滅多に顔を合せる機会がなかつた。

然し健三は毎晩暗い灯火の影で彼女を見た。其險惡な眼と怒りに顔へる唇とを見た。咽喉から溢れ出る煙のやうに洩れて出る其憤りの聲を聞いた。

それでも彼は時々健三を伴つて以前の通り外へ出る事があつた。彼は一口も酒を飲まない代りに大嚼甘いものを喰んだ。ある晩彼は健三とお常さんの娘のお遊さんとを伴つて、賑やかな口惜しいと云つて泣いた。

「死んで帰つてやる」  
彼女の權威は健三の心をますます彼女から遠ざける媒介となるに過ぎなかつた。

大と離れた彼女は健三を自分一人の専有物にしよとした。また専有物だと信じてゐた。一是からは御前一人が依怙だよ。好い。確かりして呉れなくつちや不可いよ」  
斯う頼まれるたびに健三は云ひ違つた。彼はどうしても素直な子供のやうに、心持の好い返事を彼女に與へる事が出来なかつた。

健三を物にしよといふお常の腹の中には愛に驅られる衝動よりも、寧ろ懲に押し出される邪氣が常に働いてゐた。それが頑是な健三の胸に、何の理窟なしに、不愉快な影を投じた。然し其他の點について彼は全くの無夢中であつた。

二人の生活は僅の間しか續かなかつた。物質的の缺乏が原因になつたのか、又はお常の再縁が現状の變化を餘儀なくしたのか、事實の行かない彼には丸で解らなかつた。何しろ彼女は又突然健三の眼から消えて失くなつた。さうして彼は何時の間にか彼の實家へ引き取られてゐた。

通りを散歩した歸りに汁粉屋へ寄つた。健三のお常さんに會つたのは此時が始めてであつた。それで彼等は縁に縁さへ見合せなかつた。口は丸で利かなかつた。

「何で利かなかつた。健三はお常から、まづ島田に何處へ行かれたかを訊かれた。それからお常さんの宅へ寄りはいしなかと念を押された。最後に汁粉屋へは誰と一所に行つたといふ詰問を受けた。健三は島田の注意に拘らず、事實を有の儘に告げた。然しお常の疑ひはそれでも中々解けなかつた。彼女はいろ／＼な縁を掛けて、それ以上の事實を釣り出さうとした。

「彼奴も一所なんだらう。本當を御云ひ。云へば御母さんが好いものを上げるから御云ひ。あの女も行ったんだらう。さうだらう」  
彼女は何うしても行つたと云はせようとした。同時に健三は何うしても云ふまいと決心した。彼女は健三を疑つた。健三は彼女を卑しんだ。



「考へると丸で他の身の上のやうだ。自分の事とは思へない」  
健三の記憶に上せた事は餘りに今の彼と懸隔してゐた。それでも彼は他人の生活に似た自分の昔を思ひ浮べなければならなかつた。しかも或る不快な意味に於いて思ひ浮べなければならなかつた。  
「お常さんて人は其時におの波多野とか云ふ七へ又御塚に行つたんでせうか」  
細君は何年前か夫の所へお常から来た長い手紙の上書をまだ覚えてゐた。  
「左右だらうよ。己も能く知らないが」  
「其波多野といふ人は大方まだ生きてるんでせうか」  
健三は波多野の顔さへ見た事がなかつた。生死は無論考へる中にならなかつた。  
「警部だつて云ふぢやありませんか」  
「何んぞか知らないね」  
「あら、貴方が自分でさう仰しやつた様に」  
「何時」  
「あの手紙を私に御見せになつた時よ」  
「左右かしら」  
健三は長い手紙の内容を少し思ひ出した。其中には彼女が幼い健三の世話をした時の苦辛

ばかりが鏡を立てもあつた。乳がないので最初からおぢや丈で育てた事だの、下性が悪くつて糞小便の始末に困つた事だの、凡てさうした類末を、飽きる程委しく述べた中に、甲府とかにゐる親類の裁判官が、月々彼女に金を送つてくれるので、今では大變仕合せだと書いてあつた。然し肝腎の彼女の夫が警部であつたか何うか、其處になると健三には全く覚えがなかつた。  
「ことによると、もう死んだかも知れないね」  
「生きてゐるかも知れませんわ」  
二人の間には波多野の事ともつかず、又お常の事ともつかず、斯んな問答が取り換はされてた。  
「あの人が不意に遣つて来たやうに、其女の人も、何時突然訪ねて来ないとも限らないわね」  
細君は健三の顔を見た。健三は腕組をしたなり黙つてゐた。  
四十五

健三も細君もお常の書いた手紙の傾向をよく覚えてゐた。彼女とはさして縁のない人ですら、親切に毎月若干かづの送金をして呉れるのに、小さい時分あれ程世話になつて置きながら、今更知らん顔をしてゐられた義理でもあるまいと云つた風の筆意が、一頁ことに見透かされた。  
其時彼は此手紙を東京にゐる兄の許に送つた。其先へこんなものを度々寄こされては迷惑するから、少し氣を付けるやうに先方へ注意してくれと頼んだ。兄からはすぐ返事が来た。もとゞ、養家先を謝儀になつて、他家へ嫁に行つた以上は他人である、其上健三はその養家まへ既に出て仕舞つた後なのだから、今になつて直接本人へ交通などされては困るといふ理由を持ち出して、先方を承知させたから安心しろと、其返事には書いてあつた。  
お常の手紙は其後ふつり来なくなつた。健三は安心した。然し何處かに心持の悪い所があつた。彼はお常の世話を受けた昔を思はれる時に行かなかつた。同時に彼女を思ふ嫌ふ念は世の通り變らなかつた。要するに彼のお常に對する態度は、彼の島田に對する態度と同じ事であつた。さうして島田に對するよりも一層嫌悪の念が刺しかつた。  
「島田一人でもう澤山な所へ、又新しくそんな女が遣つて来られちや困るな」  
健三は腹の中で斯う思つた。夫の過去に就いて

て、それ程知識のない細君の腹の中は斯くの事であつた。細君の同情は今其生家の方にばかり注がれてゐた。もと可なり地位にあつた彼女の父は、久しく浪人生活を続けた結果、漸々經濟上の苦境に陥つて来たのである。  
健三は時々宅へ話しに来る青年と對生して、晴々しい彼等の様子と自分の内面生活を對照し始めるやうになつた。すると彼の眼に映ずる青年は、みんな前ばかり見詰めて、愉快に先へへといつて行くやうに見えた。  
或日彼は其青年の一人に向つて斯う云つた。  
「君等は幸福だ。卒業したら何にならうとか、何をしようとか、そんな事はばかり考へてゐるんだから」  
青年は苦笑した。さうして答へた。  
「それは貴方方時代の事でせう。今の青年はそれ程呑氣でもありません。何にならうとか、何をしようとか思はない事は無論ないでせうけれども、世の中が、さう自分の思ひ通りにならぬ事も亦能く承知してゐますから」  
成程彼の卒業した時代に比べると、世間は十倍も世知辛くなつてゐた。然しそれは衣食住に關する物質的問題に過ぎなかつた。從つて青年の答には彼の思はくと多少噴ひ違つた

點があつた。  
「いや君等は僕のやうに過去に煩はされなからんがせいで云ふのさ」  
青年は解しがたいといふ顔をした。  
「あなただつて此も過去に煩はされてゐるやうには見えませんよ。矢つ張り己の世界は是からだと云ふ所があるやうですわね」  
今度は健三の方が苦笑する番になつた。彼は其青年に佛蘭西のある學者が唱へ出した記憶に關する新説を話した。  
人が溺れかゝつたり、又は絶壁から落ちようとする間に、よく自分の過去全體を一瞬間の記憶として、其頭に描き出す事があるといふ事實に、此哲學者は一種の解釋を下したのである。  
「人間は平生彼等の未來ばかり望んで生きてゐるのに、其未來が咄嗟に起つたある危険のために突然來がれて、もう己は駄目だと事が極ると、急に眼を轉じて過去を振り返り向くから、そこで凡ての過去の経験が一度に意識に上るのだといふんだね。その説によると」  
青年は健三の紹介を面白さうに聴いた。けれども事狀を一向知らない彼は、それを健三の身の上に引直して見る事が出来なかつた。健三も

一刹那にわが全部の過去を思ひ出すやうな危険な境遇に置かれたものとして今の自分を考へる程の馬鹿でもなかつた。  
四十六  
健三の心を不愉快な過去に捲き込む端緒になつた島田は、それから五六日経つて、つひに又彼の座敷にあらはれた。  
其時健三の眼に映じた此老人は正しく過去の幽霊であつた。また現在の人間でもあつた。それから薄暗い未來の影にも相違なかつた。  
「何處迄此影が己の身體に付いて回るだらう」  
健三の胸は好奇心の刺戟に促されるよりも寧ろ不安の漣海に揺れた。  
「此間比田の所を一寸訪ねて見ました」  
島田の言葉遣ひは此前と同じやうに鄭重であつた。然し彼が何で比田の家へ足を運んだのか、其點になると、彼は全く知らん顔をして澄ましてゐた。彼の口からは凡て無沙汰見舞かたがた其方へ用のあつた序に立ち寄つた人の如くであつた。  
「あの逢も昔と違つて大分變りましたね」  
健三は自分の前に坐つてゐる人の眞面目さの程度を疑つた。果して此男が彼の復讐を比田



「健三は其明白な事實さへ疑はずには居られなかつた。」

「舊はそれ彼處に澤があつて、みんな夏になると能く出掛けたものですがね。」

「鳥田は相手に顔着なくたゞ世間話を進めて行つた。健三の方では無論自分から進んで不愉快な問題に觸れる必要を認めないので、たゞ老人の速に引いて引つ張られて行く丈であつた。すると何時の間にか鳥田の言葉遣が刷れて来た。仕舞に彼は健三の姉を呼び捨てにし始めた。」

「お夏も年を取つたね。尤ももう大分久しく會はないには違ひないが。昔はあれで中々勝負な女で、能く私に喰つて掛つたり何かしたものだ。其代り元々兄弟同様の間柄だから、いくら暗喩をしたつて、仲の直るのも亦早には早い。何が何しろ困ると助けて呉れつて能く泣き付いて来るんで、私や可哀想だからその度に若干かつ都合して遣つたよ。」

鳥田の云ふ事は、姉が嫉で聴いてゐたら腹怒るだらうと思ふやうに横柄であつた。それから手前勝手な立場からばかり見た歪んだ事實を他に押しつけようとする邪氣に充ちてゐた。

健三は次第に言葉少なになつた。仕舞には黙つたなり健三と鳥田の顔を見詰めた。

鳥田は妙に鼻の下の長い男であつた。其上往來などで物を見るときは必ず口を開けてゐた。だから一寸馬鹿のやうであつた。けれども善い良な馬鹿としては決して誰の眼にも映する男ではなかつた。落ち込んだ彼の眼は其底で常に反對の何物かを語つてゐた。別は寧ろ険しかつた。狭くて高い彼の顔の上にある髪は、若い時分から左右に分けられた例がなかつた。法印か何ぞのやうに常に後へ進で付けられて居た。

彼は不圖健三の眼を見た。さうして相手の眼を讀んだ。一旦横風の昔に返つた彼の言葉遣ひが又何時の間にか現在の郷寧さに立ち戻つて来た。健三に對して過去の己に返らうとする試みを遂に斷念してしまつた。

彼は室の内をきよ／＼見廻し始めた。殺風景を極めた其室の中には生憎も掛物も掛つてゐなかつた。

「李鴻章の書は好きですか。」

彼は突然斯んな問を發した。健三は好きとも嫌ひとも云ひ兼ねた。

「好きなら上げてあげよう。あれでも價値にしたら今ちや餘つ程するでせう。」

昔鳥田は藤田東湖の舊筆に時代を着けるのだと云つて、白雲斎の死後云々と書いた半切の唐紙を、案所の電の上に釣るしてゐた事があつた。彼の健三に呉れるといふ李鴻章も、何處の誰か書いたものか頗る怪しかつた。鳥田から物を買ふ氣の絶對になかつた健三は取り合はずにゐた。鳥田は漸く歸つた。

四十七

「何しに來たんでせう、あの人は」

「目的なしに只來る筈がないといふ感じが細君には強かつた。健三も丁度同じ感じに多少支離されてゐた。」

「解らないね、何うも。一體魚と獸程違ふんだから。」

「何が。」

「あゝ、云ふ人とはな、はさ。」

細君は突然自分の家族と夫との關係を思ひ出した。兩者の間には自然の作つた溝があつて、御互を離隔してゐた。片意地な夫は決してそれを飛び超えて呉れなかつた。溝を指へたもので、それを埋めるのが當然ぢやないかと云つた風の氣分で何時迄も押し通してゐた。里ではまた反對に、夫が自分の勝手で此溝を掘

り始めたのだから、彼の方で其處を平にしたら好からうと云ふ考へを有つてゐた。細君の同情は無論自分の家族の方に在つた。彼女はわが夫を世の中と調和する事の出来ない偏窄な學者だと解釋してゐた。同時に夫が甲と調和しなくなつた原因の中に、自分が主要要素として這入つてゐる事も認めてゐた。

細君は黙つて話を切上げようとした。然し鳥田の方にはばかり氣を取られてゐた健三には其意味が通じなかつた。

「お前はさう思はないかね。」

「そりや彼の人と貴夫となら魚と獸位違ふでせう。」

「無論外の人と己と比較してゐやしない。」

「話はまだ鳥田の方へ戻つて來た。細君は笑ひながら訊いた。」

「李鴻章の掛物を何うと云つてたのね。」

「己に遣らうかつて云ふんだ。」

「御止しなさいよ。そんな物を買つてまた後から何んな無心を持ち懸けられるかも知れないわ。遣らうつて云ふのは、大方口の先丈なんぞせう。本當は買つて呉れつていふ氣なんですよ、乾度。」

夫婦には李鴻章の掛物よりもまだ外に買ひ

たいものが澤山あつた。段々大きくなつて來る女の子に、相當の着物を着せて表へ出す事の出來ないのも、細君から云へば、夫の氣の付かない心配に違ひなかつた。二圓五十錢の月賦で、此間掛へた雨合羽の代を、月々洋服屋に拂つてゐる夫も、あまり長閑な心持になれよう筈がなかつた。

「復讐の事は何も云ひ出さなかつた様ですね。」

「うん何も云ひはない。丸で眞に掴まれたやうなものだ。」

「始めから此方の氣を引く爲にわざとそんな突飛な要求を持ち出したものか、又は眞面目な應合として、それを比田持ち込んだ後、比田からさつぱり斷られたので、始めて駄目だと覺つたものか、健三には丸で眞當が付かなかつた。」

「何方でせう。」

「到底解らないよ、あゝいふ人の考へは。」

鳥田は實際何方でも遣りかねない男であつた。

彼は三日程して又健三の玄關を開けた。其時健三は書齋に灯火を點けて机の前に坐つてゐた。丁度彼の頭に思想上のある問題が、筋の端緒を見せかけた所であつた。彼は一圖にそれを手近迄手繰り寄せようとして骨を折つ

た。彼の思索は突然破ち切られた。彼は苦い顔をして室の入口に手を突いた。下女の方を顧みた。

「何もさう度々來て、他の邪魔をしなくつても好ささうなものだ。」

彼は腹の中で斯う呟いた。斷然面會を謝絶する勇氣を有たない彼は、下女を見たなり少時黙つてゐた。

「御通し申しますか。」

「うん。」

彼は仕方なしに答へた。それから奥さんは」と訊ねた。

「少し御氣分が悪いと仰しやつて先刻から伏せつてゐらつしやいます。」

細君の寝るときは徹私的の起つた時に限るやうに健三には思へてならなかつた。彼は漸く立ち上つた。

四十八

電氣燈のまだ戸毎に點せられない頃だつたので、客間には例の通り暗い洋燈が點いてゐた。其洋燈は細長い竹の案の上に油を嵌め込むやうに拵へたもので、鼓の胴の竹好に似た平たい底が盤へ摺わるやうに出来てゐた。



健三が客間へ出た時、島田はそれを自分の手元へ引き寄せて心を出したり引つ込ましたりしながら灯火の具合を眺めてゐた。彼は改まった挨拶もせず、少し油煙がたまる様ですねと云つた。

成程火屋が薄黒く煙つてゐた。丸心の切方が平に行かない所を、無暗に灯を高くすると、斯んな變調を来すのが此洋燈の特徴であつた。

「換へさせませう」  
家には同じ製のもが三つばかりあつた。健三は下女を呼んで茶の間にあるのと取り換へさせようとした。然し島田は生返事をする限で、容易に煤で曇つた火屋から眼を離さなかつた。

「何ういふ加減だらう」  
彼は獨り言を云つて、草花の模様を不透明に描つた丸い蓋の間を覗き込んだ。

健三の記憶にある彼は、斯んな事を能く氣にするといふ點に於いて、頗る几帳面な男に相違なかつた。彼は寧ろ潔癖であつた。持つて生れた倫理上の不潔癖と金銭上の不潔癖の備ひにてもなるやうに、座敷や縁側の座を氣にした。彼は尻をからげて、拭掃除をした。跣足で庭へ出て要らざる所を掃いたり水を打つたりした。物は壊れると彼は度度自分で修復した。或は

修復さうとした。それがために何の位な時間が要つても、又何んな努力が必要になつて来て、彼は決して厭はなかつた。さういふ事が彼の性にある筈でなく、彼にけ手に握つた一銭銅貨の方が、時間や努力よりも遙に大切に扱つたのである。

「なにそんなものは家で出来る。金を出して頼むがものはない。損だ」  
損をするといふ事が彼には何よりも恐ろしかつた。さうして目に見えない損は幾何しても解らなかつた。

「宅の人はあんまり正直過ぎるんで」  
お藤さんは昔健三に向つて、自分の夫を評するときに、斯んな言葉を使つた。世の中をまだ知らない健三にも其眞實でない事はよく解つてゐた。たゞ自分の手前、唯と承知しながら、夫の品性を取り繕ふのだらうと善意に解釋した彼は、其時お藤さんに向つて何も云はなかつた。併し今考へて見ると、彼女の批評にはもう少し鋭い根柢があるらしく思へた。

「必竟大きな損に氣のつかない所が正直なんだらう」  
健三はたゞ金銭上の惡を満たさうとして、其惡に作はない程度の幼稚な頭腦を精一杯に働

かせてゐる老人を寧ろ憐れに思つた。さうして四んだ眼を今探り硝子の蓋の傍へ寄せて、研究でもする時のやうに、暗い灯を見詰めてゐる彼の氣の毒な人として眺めた。

「彼は斯うして老いた」  
島田の一生を煎じ詰めたやうな一句を眼の前に映つた健三は、自分は果して何うして老ゆるのだらうかと考へた。彼は神といふ言葉が嫌であつた。然し其時の彼の心にはたしかに神といふ言葉が出た。さうして、若し其神が神の眼で自分の一生を通して見たならば此強慾な老人の一生と大した變りはないかも知れないといふ氣が強くした。

其時島田は洋燈の螺旋を急に廻したと見えて、細長い火屋の中が、赤い火で一杯になつた。それに驚いた彼は、又螺旋を逆に廻して過ぎたらしく、今度はたゞでさへ暗い灯火を發の事暗くした。

「何うも何處も調子が狂つてますね」  
健三は手を敲いて下女に新しい洋燈を持つて来させた。

四十九

其晩の島田は此前來た時と態度の上になつて

何の異る所もなかつた。應對には何處迄も健三を獨立した人と認めるやうな言葉ばかり使つた。

然し彼はもう先達の掛物に就いては丸で忘れてゐるかの如くに見えた。李鴻章の李の字も口にしなかつた。復讐の事は猶更であつた。噫にさへ用字様子を見せなかつた。

彼は成るべく唯の話をしようとした。然し二人に其通した興味のある問題は、何處を何う探しても落ちてゐる筈がなかつた。彼のいふ事の大部分は、健三に取つて全くの無意味から餘り遠く隔たつてゐると思へなかつた。

健三は退屈した。然し其退屈のうちには一種の注意が散つてゐた。彼は此老人が或日或物を持つて、今より列明した姿で、数度自分の前に現れてくるに違ないといふ豫覺に支配された。其或物がまた必ず自分に不愉快な若くは不利な形を具へてゐるに違ないといふ推測にも支配された。

彼は退屈のうちに細いながら可なり鋭い眼を張を感じた。その所爲か、島田の自分を見る眼が、さつき探硝子の蓋を通して油煙に煙つた洋燈の灯を眺めてゐた時とは全く變つてゐた。一隙があつたら飛び込もう

落ち込んだ彼の眼は鈍い癖に明かに此意味を物語つてゐた。自然健三はそれに抵抗して身構へなければならなくなつた。然し時によると、其身構へをさらりと投げ出して、飢ゑたやうな相手の眼に、落付を興へて遣りたくなるやうな場合もあつた。

其時突然奥の間で細君の啜るやうな聲がした。健三の神經は此聲に對して普通の人以上の敏感を有つてゐた。彼はすぐ耳を轉てた。

「誰か病氣ですか」と島田が訊いた。  
「え、甚が少し」  
「左右ですか、それはいけませんね。何處が悪いんです」

島田はまだ細君の顔を見た事がなかつた。何時何處から嫁に來た女かさへ知らないうらしかつた。従つて彼の言葉にはたゞ挨拶がある丈であつた。健三も此人から自分の妻に對する同情を求めようとは思つてゐなかつた。

「近頃は時候が悪いから、能く氣を付けたいといけませんね」  
子供は疾うに寝付いた後なので奥は寂としてゐた。下女は一番懸け離れた處所の傍の三疊にゐるらしくあつた。斯んな時に細君をたつた一人を置くのが健三には何より苦しかつた。彼は手

を叩いて下女を呼んだ。  
「一寸奥へ行つて奥さんの傍に坐つて呉れ」  
「へえ」  
下女は何の爲だか解らないと云つた様子をして間の襖を締めた。健三は又島田の方へ向き直つた。けれども彼の注意は寧ろ老人を離れてゐた。腹の中で早く歸つて呉れば好いと思ふので、其腹が言葉にも態度にもあり／＼と現れた。

夫でも島田は容易に立たなかつた。話の接續がなくなつて、手持無沙汰で仕方なくなつた時、始めて座蒲團から滑り落ちた。

「何うも御邪魔をしました。御忙しい所を、何れまた其内」  
細君の病氣に就いては何事も云はなかつた。彼は、香殿へ下りてから又健三の方を振り向いた。

「夜分なら大抵御暇ですか」  
健三は生返事をしたなり立つてゐた。

「實は少し御話したい事があるんですが」  
健三は何の御用ですかとも聞き返さなかつた。老人は健三の手に持つた暗い灯影から、鈍い眼を光らして又彼を見上げた。其眼には欠つ張り何處かに隙があつたら彼の懐に滑り込ま



うといふ人の悪い眼な色が動いてゐた。  
「ぢや御免」  
最後に格子を開けて外へ出た島田は斯う云つてとうとう暗がりに消えた。健三の門には軒燈さへ點いてゐなかつた。

五十

健三はすぐ奥へ来て細君の枕元に立つた。  
「何うかしたのか」  
細君は眼を開けて天井を見つめた。健三は蒲團の横からまた其眼を見下した。  
「換の影に置かれた洋燈の灯は客間のよりも暗かつた。細君の背が何處に向つて注がれてゐるのか能く分らない位暗かつた。」  
「何うかしたのか」  
健三は同じ問をまた繰返さなければならなかつた。それでも細君は答へなかつた。  
彼は結婚以來斯ういふ現象に何處となく遭遇した。然し彼の神懸はそれに慣らされるには餘りに鈍過ぎた。遭遇するたびに、同程度の不安を感じるのが常であつた。彼はすぐ枕元に腰を卸した。  
「もう彼方へ行つても好い。此處には己が居るから」

ほんやり蒲團の裾に坐つて、退屈さうに健三の様子を眺めてゐた下女は無言の儘立ち上つた。さうして「御休みなさい」と敷居の所へ手を突いて御座儀をしたなり襖を立て切つた。後には赤い筋を引いた光るものが畳の上に残つた。彼は眉を擧めながら下女の振り落して行つた針を取り上げた。何時もなら婢を呼び返して小言を云つて渡す所を、今の彼は黙つて手に持つたまゝ、しばらく考へてゐた。彼は仕舞に其針をぶつりと襖に立てた。さうして又細君の方へ向き直つた。  
細君の眼はもう天井を離れてゐた。然し判然何處を見てゐると思へなかつた。黒い大きな瞳子には生きた光があつた。けれども生きた働が缺けてゐた。彼女は魂と直接に繋がつてゐないやうな眼を一杯に開けて、漫然と瞳孔の向いた見當を眺めてゐた。  
「おい」  
健三は細君の肩を揺つた。細君は返事をせず只首丈をそろりと動かして心持健三の方に顔を向けた。けれども其處に夫の存在を認める何等の輝もなかつた。  
「おい、已だよ。分るかい」  
斯ういふ場合に彼の何時でも用ひる陣胸で簡

健三は細君の額の上に自分の右の手を載せた。  
「水で頭でも冷して遣らうか」  
「いゝえ、もう好ござんす」  
「大丈夫かい」  
「本當に大丈夫かい」  
「えゝ。貴夫ももう御休みなさい」  
「己はまだ寢る譯に行かないよ」  
健三はもう一遍書櫃へ入つて静な夜を一人更かさなければならなかつた。

五十一

彼の眼が浮えてゐる。精に彼の頭は澄み渡らなかつた。彼は思索の網を中斷された人のやうに、考察の通路を遮る霧の中で苦しんだ。  
彼は明日の朝多くの人より一段高い所に立たなければならぬ。憐れな自分の姿を想ひ見た。其情れな自分の顔を見詰めて、または不得意な自分の云ふ事を眞面目に筆記したりする青年に對して済まない氣がした。自分の虚榮心や自尊心を傷けるのも、それらを超越する事の出来ない彼には、大きな苦痛であつた。

「明日の講義もまた遅まらないのかしら」  
斯う思ふと彼は自分の努力が急に厭になつた。愉快に考へた筋道が運んだ時折々何者にか煽動されて起る、「己の頭は悪くない」といふ自信も己惚も忽ち消えてしまつた。同時に此頭の働きを攪き亂す自分の周囲に就いての不も常時よりは高まつて来た。  
彼は仕舞に投げるやうに洋筆を放り出した。「もう已めた。何うでも構はない」  
時計はもう一時過ぎてゐた。洋燈を消して暗闇を縁側傳ひに座下へ出ると、突當りの奥の間の障子二枚丈が灯に映つて明るかつた。健三は其一枚を開けて内に入つた。  
子供は大きなやうに塊つて寢てゐた。細君も靜かに眼を閉じて仰向に眠つてゐた。  
音のしないやうに氣を付けて其傍に坐つた彼は、心持頭を延ばして、細君の額を上から覗き込んだ。それからそつと手を彼女の額の上に置いた。彼女は口を閉ぢてゐた。彼の掌には細君の鼻の穴から出る生暖かい呼吸が微かに感ぜられた。其呼吸は規則正しかつた。また露がだつた。  
彼は漸く出した手を引いた。するともう一度細君の名を呼んで見なければまだ安心が出来な

略でしかもぞんざいな此言葉のうちには、他に知れないで自分ばかり解つてゐる憐憫と苦痛と悲哀があつた。それから跪いて天に歸る時の誠と願もあつた。  
「何うぞ口を利いて呉れ。後生だから己の顔を見て呉れ」  
彼は心のうちで斯う云つて細君に頼むのである。然し其痛切な頼を決して口へ出して云はうとはしなかつた。感傷的な氣分に支配され易い癖に、彼は決して外表的になれない男であつた。  
細君の眼は突然平生の我に歸つた。さうして夢から覺めた人のやうに健三を見た。  
「貴夫？」  
彼女の聲は細くかつ長かつた。彼女は微笑しかけた。然しまだ緊張してゐる健三の顔を認め、彼女は其笑ひを止めた。  
「あの人はもう歸つたの」  
「うん」  
二人はしばらく黙つてゐた。細君は又頭を曲げて、傍に寢てゐる子供の方を見た。  
「能く寢てゐるのね」  
子供は一つ床の中に小さな枕を並べてサヤサや寢てゐた。  
いといふ氣が彼の胸を衝いて起つた。けれども彼は直に其衝に打勝つた。次に彼はまた細君の肩へ手を懸けて、再び彼女を振り起さうとしたが、それも已めた。  
「大丈夫だらう」  
彼は漸く普通の人の斷案に歸着する事が出来た。然し細君の病氣に對して神懸の宛敏になつて居る彼には、それが何人も斯ういふ場合に取らなければならぬ尋常の手續のやうに思はれたのである。  
細君の病氣には斷斷が一番の薬であつた。長時間彼女の傍に坐つて、心配さうに其顔を見詰めて居る健三に、何よりも有難い其眼が、靜かに彼女の顔の上に落ちた時、彼は天から降る甘露をまのあたり見るやうな氣が當にした。然し其眼がまた餘り長く續き過ぎると、今度は自分の視線から隠された彼女の眼が却つて不安の種になつた。つひに健三の顔してゐる奥を見るために、彼は正體なく寝入つた細君を、意圖揺り起して見る事が折々あつた。細君がもつと寢かして置いて呉れ、は好いものといふ語へを被れた顔色に現はして重い眼を開くと、彼は其時始めて後悔した。然し彼の神懸は斯んな氣の毒な眞似をして迄も、彼女の實在を認めな



ければ承知しなかつたのである。やがて彼は寝衣を着換へて、自分の床に入つた。さうして濁りながら動いてゐるやうな彼の頭を、静かな夜の支配に任せた。夜は其濁りを清めて呉れるには餘りに暗過ぎた。然し疑がしい其動きを止めるには十分解かであつた。翌朝彼は自分の名を呼ぶ細君の聲で眼を覺ました。

「貴方ももう時間ですよ」

まだ床を離れない細君は、手を延ばして彼の枕元から取つた袂時計を眺めてゐた。下女が組板の上で何か刺む音が臺所の方で聞こえた。

「婢はもう起きてゐるのか」

「えい、先刻起しに行つたんです」

細君は下女を起して置いて又床の中に入つたのである。健三はすぐ起き上つた。細君も同時に立つた。

昨夜の事は二人共丸で忘れたやうに何とも云はなかつた。

五十二

二人は自分達の此態度に對して何の注意も省察も辨はなかつた。二人は二人に特有な因果關係を有つてゐる事を冥々の裡に自覺してゐた。

た。さうして其因果關係が一切の他人には全く通じないのだといふ事も能く呑み込んでゐた。だから事狀を知らない第三者の眼に、自分達が或は變に映りはしまいかといふ疑念さへ起さなかつた。

健三は黙つて外へ出て、例の通り仕事をした。然し其仕事の眞隙中に彼は突然細君の病氣を想像する事があつた。彼の眼の前に、夢を見てゐるやうな細君の黒い眼が不意に浮んだ。すると彼はすぐ自分の立つてゐる高い壇から降りて宅へ歸らなければならぬやうな氣がした。或は今にも宅から迎が来るやうな心持になつた。

彼は廣い室の片隅に居て眞に向うの突當りにある遠い戸口を眺めた。彼は仰向いて兜の鍔金を伏せたやうな高い丸天井を眺めた。假漆で塗り上げた角材を幾段にも組み上げて、高いものを一層高く見えるやうに工夫した其天井は、小さい彼の心を包むに足りなかつた。最後に彼の眼は自分の下に黒い頭を釣つて、神妙に彼の云ふ事を聴いてゐる多くの青年の上に落ちた。さうして復然として現實に歸るべく彼等から餘儀なくされた。

是程細君の病氣に悩まされてゐた健三は、比較的島田のために祟られる恐れを抱かなかつた事。一口も云はなかつた。

五十三

翌日例刻に歸つた健三は、机の前に坐つて、大事らしく何時もの所に置かれた昨日の紙入に眼を付けた。革で拵へた大槓の此二つ折は彼の持物として奪ふ立派過ぎる位上等な品であつた。彼はそれを倫敦の最も賑やかな町で買つたのである。

外國から持つて歸つた記念が、何の興味も惹かなくなりつゝある今の彼には、此紙人も無用の長物と見える外はなかつた。細君が何故丁寧にそれを元の場所へ置いて呉れたのだらうかとさへ疑つた彼は、皮肉な一瞥を交つぼうの入物に興へたさうり、手も觸れずに幾日かを過ぎた。

其内何かで金の要る日が来た。健三は机の上の紙入を取り上げて細君の鼻の先へ出した。

「おい少し金を入れて呉れ」

細君は右の手で物指を持つた儘夫の顔を下から見上げた。

「這入つてる筈ですよ」

彼は此老人を因縁で強慾な男と思つてゐた。然し一方では又それ等の性質を十分發揮する能力が無いものとして奪ふ見極つてもゐた。たゞ要らぬ會談に惜しい時間を潰されるのが、健三には或種類の人の受ける程度より以上の嫌ひになつた。

「何を云つて来る氣かしら、此次は」

襲はれる事を豫期して、暗にそれを苦にするやうな健三の口振が、細君の言葉を促した。

「何うせ分つてゐるぢやありませんか。そんな事を氣になさるより早く絶交した方が餘つ程得ですよ」

健三は心の裡で細君のいふ事を肯がった。然し口では却つて反對な返事をした。

「それ程氣にしちや居ないさ、あんな者。もともし恐ろしい事なんかないんだから」

「恐ろしいつて誰も云へませんわ。けれども面儀臭いには違ひないでせう、いくら貴方だつて」

「世の中にはたゞ面儀臭い位な單純な理由で已める事の出来ないものが幾何でもあるさ」

多少片意地の分子を含んでゐる斯んな會話を細君と取り換はせた健三は、その次島田の来た時、例よりは忙しい頭を抱へてゐるにも拘

島田のちと話したい事があるよと云つたのは、細君の推察通り矢つ張り金の問題であつた。隙があつたら飛び込もうとして、此間から視ひを付けてゐた彼は、何時迄待つても眼がなれないと思つたものか、機會のあるなしに頓着なく、つひに健三に内薄し始めた。

「何うも少し困るので、外に何處と云つて紙みに行く所もない私なんだから、是非一つ」

老人の言葉の何處かには、義務として承知して貰はなくつちや困ると云つた風の横着さが滲んでゐた。然しそれは健三の神經を自尊心の一角に於いて傷め付ける程強くも現れてゐなかつた。

健三は立つて書齋の机の上から自分の紙入を持つて来た。一家の會計を司どつてゐない彼の財源は無算無算かつた。空の儲積箱の傍に幾日も横たはつてゐる事さへ珍らしくはなかつた。彼は其中から手に觸れる丈の紙幣を握み出して島田の前に置いた。島田は變な顔をした。

「何うせ貴方の請求通り上げる譯には行かないんです。それでも有つ丈悉皆上げたんですよ」

健三は紙入の中を開けて島田に見せた。さう

して彼の歸つたあとで、空の財布を客間へ放り出した儘また書齋へ入つた。細君には金を遣つた事を一口も云はなかつた。

翌日例刻に歸つた健三は、机の前に坐つて、大事らしく何時もの所に置かれた昨日の紙入に眼を付けた。革で拵へた大槓の此二つ折は彼の持物として奪ふ立派過ぎる位上等な品であつた。彼はそれを倫敦の最も賑やかな町で買つたのである。

外國から持つて歸つた記念が、何の興味も惹かなくなりつゝある今の彼には、此紙人も無用の長物と見える外はなかつた。細君が何故丁寧にそれを元の場所へ置いて呉れたのだらうかとさへ疑つた彼は、皮肉な一瞥を交つぼうの入物に興へたさうり、手も觸れずに幾日かを過ぎた。

其内何かで金の要る日が来た。健三は机の上の紙入を取り上げて細君の鼻の先へ出した。

「おい少し金を入れて呉れ」

細君は右の手で物指を持つた儘夫の顔を下から見上げた。

「這入つてる筈ですよ」

彼は此老人を因縁で強慾な男と思つてゐた。然し一方では又それ等の性質を十分發揮する能力が無いものとして奪ふ見極つてもゐた。たゞ要らぬ會談に惜しい時間を潰されるのが、健三には或種類の人の受ける程度より以上の嫌ひになつた。

「何を云つて来る氣かしら、此次は」

襲はれる事を豫期して、暗にそれを苦にするやうな健三の口振が、細君の言葉を促した。

「何うせ分つてゐるぢやありませんか。そんな事を氣になさるより早く絶交した方が餘つ程得ですよ」

健三は心の裡で細君のいふ事を肯がった。然し口では却つて反對な返事をした。

「それ程氣にしちや居ないさ、あんな者。もともし恐ろしい事なんかないんだから」

「恐ろしいつて誰も云へませんわ。けれども面儀臭いには違ひないでせう、いくら貴方だつて」

「世の中にはたゞ面儀臭い位な單純な理由で已める事の出来ないものが幾何でもあるさ」

多少片意地の分子を含んでゐる斯んな會話を細君と取り換はせた健三は、その次島田の来た時、例よりは忙しい頭を抱へてゐるにも拘



「どうせ御産で死んでしまふんだから構やしない」  
 彼女は健三に聞えよがしに呟いた。健三は死んちまへと云ひたくなつた。  
 或は彼は不圖眼を覺まして、大きな眼を開いて天井を見詰めてゐる細君を見た。彼女の手には彼が西洋から持つて歸つた髪剃があつた。彼女が黒檀の箱に折り込まれた其刃を眞直に立てずに、たゞ黒い柄杓を握つてゐたので、寒い光は彼の視覚を襲はずに済んだ。それでも彼はきよつとした。半身を床の上に起して、いきなり細君の手から髪剃を抜き取つた。  
 「馬鹿な眞剣をするな」  
 斯ういふと同時に、彼は髪剃を投げた。髪剃は障子に嵌め込んだ硝子の中つて其一部分を推いて向う側の縁に落ちた。細君は茫然として夢でも見てゐる人のやうに一口も物を云はなかつた。  
 彼女は木當に情に逼つて刃物三昧をする氣なのだらうか、又は病氣の發作に自己の意志を拵げべく儉儀なくされた結果、無我夢中で切ものを弄ぶのだらうか、或は單に夫に打ち勝たうとする女の策略から斯うして人を驚かすのだらうか、驚かすにしても其眞意は果して

何處にあるのだらうか。自分に對する夫を平和で親切な人に立ち返らせる積なのだらうか、又はたゞ淺ましい征服感に驅られてゐるのだらうか、――健三は床の中で一つの出来事を五條にも六條にも解釋した。さうして時々眠れない眼をそつと細君の方に向けて其動靜をうかがつた。寤てゐるとも起きてゐるとも付かない細君は、丸で動かなくなつた。恰も死を街ふ人のやうであつた。健三は又枕の上でまた自分の問題の解決に立ち歸つた。  
 其解決は彼の實生活を支配する上に於いて、學校の講義よりも遙に大切であつた。彼の細君に對する基調は、全く其解決一つでちやんと定められなければならなかつた。今よりずつと單純であつた昔、彼は一圓に細君の不可思議な舉動を、病の爲とのみ信じ切つてゐた。其時代には發作の起るたびに、神の前に己を懺悔する人の誠を以つて、彼は細君の膝下に跪いた。彼はそれを夫として最も親切で又最も高尚な處置と信じてゐた。  
 「今だつて其原因が判然分りさへすれば」  
 彼には斯ういふ慈愛の心が充ち満ちてゐた。けれども不幸にして其原因は昔のやうに單純には見えなかつた。彼はいくらでも考へなければならなかつた。到底解決の付かない問題に彼

ばならなかつた。到底解決の付かない問題に彼が出て、とろ／＼と眠ると又すぐ起きて講義をしに出掛けなければならなかつた。彼は昨夕の事に就いて、つひに一言も細君に口を利く機會を得なかつた。細君も日の出と共にそれを忘れてしまつたやうな顔をしてゐた。  
 五十五  
 斯ういふ不愉快な場面の後には大抵仲裁者としての自然が二人の間に這入つて来た。二人は何時となく普通夫婦の利くやうな口を利き出した。  
 けれども或時の自然は全くの傍觀者に過ぎなかつた。夫婦は何處迄行つても中合の儘で暮した。二人の關係が極端な緊張の度合に達すると、健三はいつも細君に向つて生家へ歸れと云つた。細君の方ではまた歸らうが歸るまいが此方の勝手だといふ顔をした。その態度が憎らしいので、健三は同じ言葉を何回でも繰返して押らなかつた。  
 「ちや當分子供を伴つて宅へ行つてゐませう」  
 細君は斯う云つて一旦里へ歸つた事もあつた。健三は彼等の食料を毎月送つて遣るといふ條件の下に、また昔のやうな書生生活に立

のである。  
 「己が内訌で烏田に金を奪られたのを氣の毒でも思つたものかしら」  
 彼は斯う考へた。然し口へ出して其理由を彼女に訊き出して見る事はしなかつた。夫と同じ態度をつひに失はずにゐた彼女も、自ら進んで己を説明する面倒を取つてしなかつた。彼女の増補した金は斯くして黙つて受取られ、又黙つて消費されてしまつた。  
 其内細君の御腹が段々大きくなつて来た。起居に重苦しさうな氣息をし始めた。氣分も能く變化した。  
 「私今度はこのよると助からないかも知れませんよ」  
 彼女は時々河に感じてか斯う云つて涙を流した。大抵は取り合はずにゐる健三も、時として相手にさせられなければ濟まなかつた。  
 「何故だい」  
 「何故だかさう思はれて仕方がないんですもの」  
 質問も説明も是以上には上る事の出来なかつた言葉のうちに、ぼんやりした或ものが常に滲んでゐた。其或ものは單純な言葉を傳はつて、言葉の届かない遠い所へ消えて行つた。鈴

の音が鼓膜の及ばない幽かな世界に滑り込むやうに。  
 彼女は悪阻で死んだ健三の兄の細君の事を思ひ出した。さうして自分が長女を生む時に同じ病で苦しんだ昔と照し合せて見たりした。もう二三日食物が通らなければ滋養瀉腸をする筈だつた際といふ所を、よく通り抜けたものだと考へると、生きてゐる方が却つて偶然の縁な氣がした。  
 「女は詰らないものね」  
 「それが女の義務なんだから仕方がない」  
 健三の返事は世間並であつた。けれども彼自身の頭で批判すると、全くの出鱈目に過ぎなかつた。彼は腹の中で苦笑した。  
 五十四  
 健三の氣分にも上り下りがあつた。出任せにもせよ細君の心を休めるやうな事はばかりは云つてはゐなかつた。時によると、不快さうに寝てゐる彼女の體たらくが喉に障つて堪らなくなつた。枕元に突つ立つた儘、わざと便食に要らざる用を命じて見たりした。  
 細君も動かなくなつた。大きな腹を疊へ着けたなり打つとも腹とも勝手にしろといふ態度を

とつた。平生からあまり口數を利かない彼女は益々沈黙を守つて、それが夫の氣を焦立たせるのを目の前に見ながら澄ましてゐた。  
 「詰らしぶといのだ」  
 健三の胸には斯んな言葉が細君の凡ての特色でもあるかのやうに深く刻み付けられた。彼は外の事を丸で忘れて仕舞はなければならなかつた。いふといふ不觀念文があらゆる注意の焦點になつて来た。彼は餘所を眞實にして置いて、出来る丈強烈な憎惡の光を此四字の上に向け懸けた。細君は又魚か蛇のやうに黙つて其憎惡を受取つた。従つて人目には、細君が何時でも品格のある女として映る代りに、夫は何うしても氣遣染みた痴癡持として評價されなければならなかつた。  
 「貴夫がさう邪慳になさると、また私私的里を起しますよ」  
 細君の眼からは時々斯んな光が出た。何ういふものか健三は非道くその光を怖れた。同時に劇しくそれを惡んだ。我儘な彼は内心に無事を祈りながら、外部では強ひて勝手にしろといふ風を装つた。其強硬な態度の何處かに何時でも假裝に近い弱點があるのを細君は能く承知してゐた。



ち歸れた自分を喜んだ。彼は比較的廣い屋敷に下女とたつた二人ざりになつた此突然の變化を見て、少しも淋しいとは思はなかつた。

「あゝ、嗚々して好い心持だ」

彼は八疊の座敷の真中に小さな筒傘を据ゑて其上で朝から夕方迄ノートを書いた。丁度極暑の頃だつたので、身體の強くない彼は、よく仰向になつてはたりと疊の上に倒れた。何時替へたとも知れない時代の着いた其疊には、彼の背中を蒸すやうな黄色い古びが心透透つてゐた。

彼のノートもまた暑苦しい程細かな字で書き下された。蠅の頭といふより外に形容のしやうのない其原稿を、成る可くだけ餘計掃へるのが、其時の彼に取つては、何よりの愉快であつた。そして苦痛であつた。又義務であつた。

菓鴨の植木屋の娘とかいふ下女は、彼のために二三の盆を宅から持つて来て呉れた。それを茶の間の縁に置いて、彼が飯を食ふ時給仕をしながら色々な話をした。彼は彼女の親切を喜んだ。けれども彼女の盆を輕蔑した。それは何處の縁日へ行つても、二三十錢出せば、鉢ごと買へる安價な代物だつたのである。

彼は細君の事をかつて考へずにノートばかり作つてゐた。彼女の里へ顔を出さうなどいふ

氣は丸で起らなかつた。彼女の病氣に對する懸念も悉く消えてしまつた。

「病氣になつても父母が付いてゐるぢやないか。もし悪ければ何とか云つて来るだらう」

彼の心は二人一所にゐる時よりも遙に平靜であつた。

細君の關係者に會はないのみならず、彼はまた自分の兄や姉にも會ひに行かなかつた。其代り向うでも來なかつた。彼はたつた一人で、日中の勉強につゞく涼しい夜を散歩に費やした。さうして襪布のあつたつた青い蚊帳の中に入つて寝た。

「箇月あまりすると細君が突然遣つて來た。其時健三は日のかぎつた夕暮の空の下に、廣くもない庭先を逍遙してゐた。彼の歩みが書齋の縁側の前へ來た時、細君は半分朽ち懸けた枝折戸の影から急に姿を現はした。

「貴夫故のやうになつて下さらなくつて」

健三は細君の穿いてゐる下駄の表が髪にささくられて、其後の方が如何にも見苦しく擦り減らされてゐるのに氣が付いた。彼は憐れになつた。紙入の中から三枚の一回紙幣を出して細君の手に握らせた。

「見つともないから是で下駄でも買つたら好い

だらう」

細君が歸つてから幾日か経つた後彼女の母は始めて健三を訪れた。用事は細君が健三に頼んだのと大同小異で、もう一遍彼等を引取つて呉れといふ主意を疊の上で布折したに過ぎなかつた。既に本人に歸りたい意志があるのを拒絶するのは、健三から見ると無情な舉動であつた。

彼は一も二もなく承知した。細君は又子供を連れて駒込へ歸つて來た。然し彼女の態度は里へ行く前と老も違つてゐなかつた。健三は心のうちで彼女の母に騙されたやうな氣がした。

斯うした夏の出来事を自分丈で繰り返して見るたびに、彼は不愉快になつた。是が何時迄續くのだらうかと考へたりした。

五十六

同時に島田はちよい／＼健三の所へ顔を出す事を忘れなかつた。利益の方面で一度手掛りを得た以上、放したらそれ切だといふ懸念が猶更彼を奮起させた。健三は時々書齋に入つて、例の紙入を老人の前に持ち出さなければならなかつた。

「好い紙入ですね。へえ、外國のものは欠

つ張り何處か違ひますね」

島田は大きな二つ折を手を取つて、左も感服したらしく、裏表を打返して眺めたりした。

「失禮ながら是で何の位します。彼方では」

「たしか十志だつたと思ひます。日本の金にするると、まあ五圓位なものでせう」

「五圓?—五圓は随分好い値ですね。淺草の黒船町に古くから私の知つてる袋物屋があるが、彼處ならもつとずつと安く拵へて呉れますよ。こんだ要る時にや、私が頼んで上げませう」

健三の紙入は何時も充實してゐなかつた。全く空虚の時もあつた。左ういふ場合には、仕方がないので何時迄経つても、立ち上がらなかつた。島田も何かに事寄せて尻を長くした。

「小遣を遣らないうちは歸らない。厭な奴だ」

健三は腹の内、憤つた。然しいくら迷惑を感じても細君の方から特別に金を取つて老人に渡す事はしなかつた。細君も其位の事ならと云つた風をして別に苦情を鳴らさなかつた。

左う斯うしてゐるうちに、島田の態度が段々高慢的になつて來た。二十三十と進まつた金を、平氣に向うから請求し始めた。

「何うか一つ。私も此年になつて倚る子はな

し、依怙にするのは貴方一人なんだから」

彼は自分の言葉遣ひの横着さ加減にさへ氣が付いてゐなかつた。それでも健三がむつとして黙つてゐると、悶んだ鈍い眼を狡猾らしく動かして、じろ／＼彼の様子を眺める事を忘れなかつた。

「是丈の生活をしてゐて、十や二十の金が出来ない筈はない」

彼は斯んな事迄口へ出して云つた。彼が歸ると、健三は厭な顔をして細君に向つた。

「ありや成し崩しに己を侵蝕する氣なんだね。始め一度に攻め落さうとして斷られたもんだから、今度は遠慮にしてじろ／＼寄つて來ようつてんだ。實に厭な奴だ」

健三は腹が立ちさへすれば、よく實にとか一番とか大とかいふ最大級を使つて鬱頂の一端を洩らしたがる男であつた。斯んな點になると細君の方はしよとい代りに大分落付いてゐた。

「貴夫が引つ掛かるから悪いのよ。だから初めから用心して寄せ付けないやうになされば好いのに」

健三は其位の事なら最初から心得てゐると云はぬばかりの様子を、むつとした頬と唇と

に見せた。

「絶交しようと思へば何時だつて出来るさ」

「然し今迄付合つた丈が損になるぢやありませんか」

「そりや何の關係もない御前から見れば左うさ。然し己は御前とは違ふんだ」

細君には健三の意味が能く通じなかつた。

「何うせ貴夫の眼から見たら、私なんぞは馬鹿でせうよ」

健三は彼女の誤解を正してやるのさへ面倒になつた。

二人の間に感情の行違ひでもある時は是又の會話すら交換されなかつた。彼は島田の後影を見送つたまま、黙つてすぐ書齋へ入つた。そこで書物も讀まず筆も執らずたいと坐つてゐた。細君の方でも、家庭と切り離されたやうな此孤獨な人に何時迄も構ふ氣色を見せなかつた。夫が自分の勝手で座敷牢へ入つてゐるのだから仕方がない位に考へて、丸で取り合はずにゐた。

五十七

健三の心は紙屑を丸めた様にくしや／＼した。時によると刺戟の電流を何かの機會に應



じて外へ渡らなければ苦しうして居られなく  
なつた。彼は子供が母に強請つて貰つて貰つた  
草花の鉢などを、無意味に縁側から下へ墜飛ば  
して見たりした。赤ちやけた素焼の鉢が彼の思  
ひ通りにがら／＼と破れるのさへ彼には多少の  
満足になつた。けれども残酷ならしく摧かれた  
其花と葉の、憐れな姿を見るや否や、彼はすぐ  
又一種の果敢ない気分になり勝たれた。何も知  
らない我子の、嬉しがつる美しい思みを、  
無慈悲に破壊したのは、彼等の父であるといふ  
自覺が、猶更彼を悲しくした。彼は半自分の行  
爲を悔いた。然し其子供の前にわが非を自白す  
る事は敢てし得なかつた。  
一己の責任ぢやない。畢竟こんな氣遣ひみた  
眞似を己にさせるものは誰だ。其奴が悪いん  
だ。  
彼の腹の底には何時でも斯ういふ解解が溜ん  
でゐた。

平靜な會話は波だつた彼の氣分を沈めるに  
必要であつた。然し人を避ける彼に、その會話  
の届きようがなかつた。彼は一人居て一人自  
分の熱で燃るやうな心持がした。常でさへ有  
難くない保險會社の勤務員などの名刺を見る  
と、大きな聲をして罪もない取次の下女を叱つ  
た。其の聲は玄關に立つてゐる勸誘員の耳に  
迄明かに響いた。彼はあとで自分の態度を取  
ちた。少くとも好意を以て一般の人類に接す  
る事の出来ない己を怒つた。同時に子供の積木  
鉢を墜飛ばした場合と同じやうな言葉を、堂々  
と心の裡で讀み上げた。  
「己が悪いのぢやない。己の悪くない事は、假  
令彼の男に解つてゐなくつても、己には能く解  
つてゐる」  
無信心な彼は何うしても、神には能く解つて  
ゐる。と云ふ事が出来なかつた。もし左右いひ  
得たならばどんなに合せだらうといふ氣さへ  
起らなかつた。彼の道徳は何時でも自己に始つ  
た。さうして自己に終るぎりであつた。  
彼は時々金の事を考へた。何故物質的の富を  
目標として今日迄働いて來なかつたのだらう  
と疑ふ日もあつた。  
「己だつて、専門に其方ばかり造りや」  
彼の心には斯んな己惚もあつた。  
彼はけち臭い自分の生活状態を馬鹿らしく  
感じた。自分より貧乏な親類の、自分より切り  
詰めた暮らし向に悩んでゐるのを氣の毒に思つ  
た。極めて低級な慾望で、朝から晩迄離脱して  
ゐるやうな島田をさへ憐れに眺めた。

「みんな金が欲しいのだ。さうして金より外に  
は何も欲しくないのだ」  
斯う考へて見ると、自分が今迄何をして來た  
のか解らなくなつた。  
彼は元來儲ける事の下手な男であつた。儲  
けられても其方に使ふ時間を惜しがる男であ  
つた。卒業したてに、悉く他の口を斷つて、  
たゞ一つの學校から四十圓貰つて、それで満足  
してゐた。彼はその四十圓の半分を阿茶に取ら  
れた。残る二十圓で、古い寺の座敷を借りて、  
芋や油揚げばかり食つてゐた。然し彼は其間に  
遂に何事も仕出かさなかつた。  
其時分の彼と今の彼とは色々な點に於いて大  
分變つてゐた。けれども經濟に餘裕のないの  
と、遂に何事も仕出かさなれないとは、何處迄行  
つても變りがなささうに見えた。  
彼は金持になるか、偉くなるか、二つのうち  
何方かに中途半端な自分を片付けたくなつた。  
然し今から金持になるのは迂闊な彼に取つて  
もう遅かつた。偉くならうとすれば又色々な塵  
勞が邪魔をした。其塵勞の種をよく／＼調べて  
見ると、矢つ張り金のないのが大原因になつて  
ゐた。何うして好いか解らない彼はしきりに魚  
れた。金の力で支配出来ない眞に偉大なもの

が彼の眼に這入つて來るにはまだ大分間があつ  
た。  
健三は外國から歸つて來た時既に金の必要  
を感じた。久し振にわが生れ故郷の東京に新  
しい世帯を持つ事になつた彼の懐中には一片の  
銀貨さへなかつた。  
彼は日本を立つ時、其妻子を細君の父に託し  
た。父は自分の取内にある小さな家を空けて彼  
等の住居に充てた。細君の祖父が亡くなる迄  
居た其家は狭いながら左程見苦しくもなかつ  
た。聖文の棟には南湖の畫だの勸齋の書だの、  
すべて亡くなつた人の趣味を偲ばせる記念と見  
るべきものさへ故の通り貼り付けてあつた。  
父は官吏であつた。大して派手な暮しの出  
來る身分ではなかつたけれども、留守中手元に  
預かつた自分の娘や娘の子に、苦しい思ひを  
させる程窮してもゐなかつた。其上健三の細君  
へは月々若干かの手當が公から下りた。健三  
は安心してわが家族を後に遣した。  
彼が外國にゐるうち、内閣が變つた。其時細  
君の父は比較的安んずる職からまた引張出さ  
れて劇しく活潑しなければならぬ或位地に就

五十八

いた。不幸にして其新しい内閣はすぐ倒れた。  
父は崩壊の渦の中に捲き込まれなければなら  
なかつた。  
遠い所で此變化を聞いた健三は、同情に充  
ちた眼を故郷の空に向けた。けれども細君の父  
の經濟状態に關しては別に顧慮する必要のな  
いものとして、殆ど心を悩ませなかつた。  
迂闊な彼は歸つてからも其處に注意を拂は  
なかつた。また氣も付かなかつた。彼は細君が  
月々貰ふ二十圓支でも子供二人に下女を使つて  
十分遣つて行ける位に考へてゐた。  
「何しろ家賃が出ないんだから」  
斯んな呑氣な想像が、實際を見た彼の眼を驚  
愕で丸くさせた。細君は夫の留守中に自分の  
不慮落をこと／＼と着切つてしまつた。仕方が  
ないので、仕舞には健三の置いて行つた地味な  
男物を縫ひ直して身に纏つた。同時に蒲團か  
らは綿が出た。夜具は裂けた。それでも傍に見  
てゐる父は何うして遣る譯にも行かなかつた。  
彼は自分の地位を失つた後、相場に手を出し  
て、多くもない貯蓄を悉く亡くして仕舞つた  
のである。

首の廻らない程高い標を掛けて外國から歸  
つて來た健三は、此悲惨な境遇に置かれたわが  
妻を黙つて眺めなければならなかつた。ハイ  
カラな彼はアイロニーの爲めに手非道く打ち据  
ゑられた。彼の唇は苦笑する勇氣さへ有たな  
かつた。  
其内彼の荷物が着いた。細君に指輪一つ買つ  
て來なかつた彼の荷物は、書籍支であつた。喪  
苦しい隠居所のため、彼は其箱の蓋さへ開け  
る事の出来ないのを馬鹿らしく思つた。彼は新  
しい家を捜し始めた。同時に金の工面もしなけ  
ればならなかつた。  
彼は唯一の手段として、今迄繼續して來る自  
分の職を辭した。彼は其行為に作つて起る必  
然な結果として、一時賜金を受け取る事が出来  
た。一年勤めれば役を已めた時に月給の半額を  
呉れるといふ規定に従つて彼の手に入つた其金  
額は、無算大したものではなかつた。けれども  
彼はそれで漸と日常生活に必要な家具家財を  
調へた。  
彼は僅ばかりの金を懐にして、或る舊い友  
達と一所に方々の道具屋などを見て歩いた。其  
の友達がまた品物の如何に拘らず無暗に價切  
り倒す癖を有つてゐるので、彼はたい／＼歩いた  
に少からぬ時間を費やされた。茶盆、煙草盆、  
火鉢、井鉢、眼に入るものは幾何でもあつた



が、買へるのは減多に出て来なかつた。是文に負けて置けと命令するやうに云つて、もし主人が其通りにしないと、友達は健三を店先に残したまゝ、さつさと先へ歩いて行つた。健三も仕方なしに後を追跡しなければならなかつた。たまに愚問々々してゐると、彼は大きな聲を出して遠くから健三を呼んだ。彼は親切な男であつた。同時に自分の物を買ふのか他の物を買ふのか、其區別を辨へてゐないやうに猛烈な男であつた。

### 五十九

健三は又日常使用する家具の外に、本棚だけのものを新調しなければならなかつた。彼は洋風の指物を渡世にする男の店先に立つて、しきりに算盤を弾く主人と談判した。彼の誤へた本棚には硝子戸も後部も着いてゐなかつた。塵埃の積る位は懐中に餘裕のない彼の意とする所ではなかつた。木がよく枯れてゐないので、重い洋書を載せると、棚板が氣の引ける程揺つた。斯んな粗末な道具ばかりを揃へるのにさへ彼は少からぬ時間を費やした。わざ／＼辭職して買つた金は何時の間にかもう無くなつてゐた。

迂闊な彼は不潔な眼を開いて、素然たる彼の新居を見廻した。さうして外國にある時、衣服を作る必要に迫られて、同宿の男から借りた金は何うして返して好いか分らなくなつて仕舞つた様に思ひ出した。そこへ其男から若し都合が付くなら算段して貰ひたいといふ催促状が届いた。健三は新しく揃へた高い机の前に坐つて、少時彼の手紙を眺めてゐた。

彼の問とは云ひながら、遠い國で一所に暮らした其人の記憶は、健三に取つて淡い新しさを帯びてゐた。其人は彼と同じ學校の出身であつた。卒業の年もさう違はなかつた。けれども立派な御役人として、ある重要な事項取調の爲といふ名義の下に、官命で造つて来た其人の財力と健三の給費との間には、殆ど比較にならない程の懸隔があつた。

彼は寢室の外に應接間も借りてゐた。夜になると硝子で作つた軒のある綺麗な襦袢、衣を着て、暖かきうに暖爐の前で書物などを讀んでゐた。北向の寒苦しい部屋で押込められたやうに凝と凍んでゐる健三は、ひそかに彼の境遇を羨んだ。其健三には書食を節約した儉れな経験さへあつた。

ある時の彼は表へ出た歸り掛に途中で買つたサンドキツチを食ひながら、廣い公園の中を目的もなく歩いた。斜に吹きかける雨を片々の手に持つた傘で防げつゝ、片々の手で薄く切つた肉と麵を何度にも噛張るのが非常に苦しかった。彼はいくたびか其處にあるベンチへ腰を卸さうとしては躊躇した。ベンチは雨の爲に悉く濡れてゐたのである。

ある時の彼は町で買つて来たビスケットの罐を午になると開いた。さうして湯も水も吞まずに、硬くて脆いものをぼり／＼噛み潰しては、生睡の力で無理に呑み下した。

ある時の彼はまた取者や労働者と一所に如何はしい一膳飯屋で形ばかりの食事を済ました。其處の懸掛の後部は高い屏風のやうに切立つてゐるので、普通の食堂の如く、廣い室を一日に見渡す事は出来なかつたが、自分と一列に並んでゐるものの紙文は自由に眺められた。それは昔何時湯に入つたか分らない程であつた。

斯んな生活をしてゐる健三が、此同宿の男の眼には左も氣の毒に映つたと見えて、彼は能く健三を午後誘ひ出した。錢湯へも案内した。茶の時刻には向うから呼びに来た。健三が彼から金を借りたのは斯うして彼と大分親意になつてゐた。

た時の事であつた。其時彼は反故でも棄てるやうに無難な態度を見せて、五磅のバンクノートを二枚健三の手に見せた。何時返して呉れとは無論云はなかつた。健三の方でも日本へ歸つたら何うにかなるだらう位に考へた。日本へ歸つた健三は能く此バンクノートの事を覚えてゐた。けれども催促状を受取る迄は、それ程急に戻す必要が出来るやうとは思はなかつた。行き詰つた彼は仕方なしに、一人の舊い友達の所へ出掛けて行つた。彼は其友達の大した金持でない事を承知してゐた。然し自分よりも少しは融通の利く地位にある事も呑み込んでゐた。友達は果して彼の請求を容れて、要する金の金を彼の前に揃へて呉れた。彼は早速それを外國で恩を受けた人の許へ返しに行つた。新しく借りた友達へは月に十圓宛の割で成し崩しに取つて貰ふ事に極めた。

### 六十

斯んな具合にして漸と東京に落付いた健三は、物質的に見た自分の如何にも貧弱なのに氣が付いた。それでも、金力を離れた他の方面に於いて自分が優者であるといふ自覺が絶えず

彼の心に往來する間は幸福であつた。其日覺が遂に金の問題で色々に抱き寄せられてくる時、彼は始めて反省した。平生何のなく身に着けて外へ出る黒木綿の紋付さへ、無能力の證據のやうに思はれ出した。此己をまた強請りに来る奴があるんだから非道い。彼は最も質の悪い其種の代表者として鳥田の事を考へた。

今の自分が何の方角から眺めても鳥田より好い社會的地位を占めてゐるのは明白な事實であつた。それが彼の虚榮心に少しの反響も與へないのも亦明白な事實であつた。昔し自分を呼び捨てにした人から今となつて無様な挨拶を受けるのは、彼に取つて何の満足にもならなかつた。小遣の財源のやうに見込まれるのは、自分を貧乏人と見做してゐる彼の立場から見ても腹が立つ丈であつた。

彼は念のために姉の意見を訊ねて見た。「一體何の位困つてゐるんでせうね、あの男は」一左右さね。さう度々無心を云つて来るやうぢや、随分苦しいのかも知れないね。だけど健ちゃんだつてさう／＼他にばかり買ひでゐた目にや際限がないからね。いくら御金が取れたつ

「御金がそんなに取れるやうに見えますか」一だつて宅なんぞに比べれば、御前さん、御金がいくらでも取れる方ぢやないか」

姉は自分の宅の活計を標準にしてゐた。相違らず口数の多い彼女は、比田が月々買ふものを満足に持つて歸つた例のない事や、供給の少い割に交際費の要する事や、宿直が多いので辨當代だけでも随分の額に上る事や、毎月の不足はやつと益暮の賞與で間に合はせてゐる事などを詳しく健三に話して聞かせた。

「その賞與だつて、そつくり私の手に渡して呉れるんぢやないんだからね。だけど近頃ぢや私達二人はまあ隠居見たやうなもので、月々食料を産さんの方へ遣つて贈つて貰つてゐるんだから、少しは樂にならなけりやならないさ」

養子と認濟を別々にしながら一所の家に住んでゐた姉夫婦は、自分達の携いた餅だの、自分達の買つた砂糖だのといふ特別な食物を有つてゐた。自分達の所へ来た客に出す御馳走なども乾度自分達の懐中から拂ふ事にしてゐるらしかつた。健三は殆ど考へる及ばないやうな眼付をして、極端に近い一種の個人主義の下に



存在してゐる此一家の經濟狀態を眺めた。然し主義も理窟も有たない姉にはまた是程自然な現象はなかつたのである。

「健ちゃんなんざ、斯んな眞似をしなくつても済むんだから好いやあね。それに胸があるんだから、稼ぎさへすりや幾何でも欲しい丈夫の御金は取れるしよ」

彼女のいふ事を黙つて聞いてゐると、島田などは何處へ行つたか分らなくなつてしまひ勝であつた。それでも彼女は最後に付け加へた。

「まあ好いやね。面時臭くなつたら、其内都合の好い時に上げませうとか何とか云つて歸して仕舞へば、それでも若難いなら留守をお遣ひよ。構ふ事はないから」

此注意は如何にも姉らしく健三の耳に響いた。姉から要領を得られなかつた彼はまた比田を捉まへて同じ質問を掛けて見た。比田はたゞ、

「何しろ故の通りあの地面と家作を有つてゐるんだから、さう困つてゐない事は儘でさあ。それにお藤さんの方へはお藤さんの方からちゃんちやんと送金はあるしよ。何でも好い加減な事を云つて来るに違ないから放つて御置きなさい」

比田の云ふ事も矢つ張り好い加減の範圍を脱し得ない上つ調子のものには相違なかつた。

六十一

仕舞には健三は細君に向つた。「一體何ういふんだらう、今の島田の實際の境遇つて云ふのは、姉に訊いても比田に訊いても、本當の所が能く分らないが」

細君は氣のなまさうに夫の顔を見上げた。彼女は産に間もない大きな腹を苦しうに抱へて、朱塗の船底枕の上に亂れた頭を載せてゐた。

「そんなに氣になさるなら、御自分で直に調べて御覽になるが好いぢやありませんか。左右すればすぐ分るでせう。御姉さんだつて、今あの人と交際して居らつしやらないんだから、そんな難な事の知れてゐる筈がないと思ひますわ」

「己にはそんな暇なんかないよ」  
「それぢや放つて御置きなれば夫迄でせう」  
細君の返事には、男らしくもないといふ意味で、健三を非難する調子があつた。腹で思つてゐる事もさう無暗に口へ出して云はない性質に出来上つた彼女は、自分の生家と夫との面白くない間柄に就いてさへ、餘り言葉に現してつ

べこへ辯じ立てなかつた。自分と關係のない島田の事などは丸で知らない振をして浸ましてゐる日も少くなかつた。彼女の持つた心の鏡に映る神祕的な夫の影は、いつも度胸のない偏屈な男であつた。

「放つて置け？」  
健三は反問した。細君は答へなかつた。「今迄だつて放つて置いてるぢやないか」  
細君は猶答へなかつた。健三はぶいと立つて書齋へ入つた。

島田の事に限らず二人の間には斯ういふ光景が能く繰返された。其代り前後の關係で反對の場合も時には起つた。

「お藤さんが春儲病なんださうだ」  
「春儲病ぢや六づかしいでせう」  
「到底助かる見込はないんだとさ。それで島田が心配してゐるんだ。あの人が死ぬと榮野とお藤さんとの縁が切れてしまふから、今迄毎月送つてくれた例の金が来なくなるかも知れないつてね」

「可哀想ね今から春儲病なんぞに罹つちや、まだ若いんでせう」  
「己より一つ上だつて話したぢやないか」  
「子供はあるの」

「何でも澤山のやうな様子だ。幾人だか能く訊いて見ないが」  
細君は成人しない多くの子供を後へ遣して死に、行く、まだ四十に充たない夫人の心持を想像に描いた。間近に通つたわが産の結果も新に氣遣はれ始めた。重さうな腹を眼の前に見ながら、それ程心配もして呉れない男の氣分が、情なくもあり又羨ましくもあつた。夫は丸で氣が付かなかつた。

「島田がそんな心配をするのも必死は平生が惡いからなんだらうよ。何でも嫌はれてゐるらしいんだ。島田に云はせると、其聲野といふ男が酒食ひで喧嘩早くつて、それで何時迄経つても出世が出来なくつて、仕方がないんださうだけれども、何うも夫許ぢやないらしい。矢つ張島田の方が愛想を盡かされてゐるに違ないんだ」

「愛想を盡かされなくつたつて、そんなに子供が澤山あつちや何うする事も出来ないでせう」  
「さうさ。軍人だから大方己と同じやうに貧乏してゐるんだらうよ」

「一體あの人は何うして其お藤さんて人と」  
細君は少し躊躇した。健三には意味が解らなかつた。細君は云ひ直した。

「何うして其お藤さんて人と懸念になつたんでせう」  
お藤さんがまだ若い未亡人であつた頃、何かの用で扱所へ出なければならぬ事の起つた時、島田はさういふ場所へ出つけない女一人を、氣の毒に思つて、色々親切に世話をして遣つたのが、二人の間に關係の付く始りだと、健三は小さい時分に誰かから聴いて知つてゐた。然し愛といふ意味を何う島田に應用して好いか、今の彼には解らなかつた。

六十二

「悉も手傳つたに違ないね」  
細君は何とも云はなかつた。

不治の病氣に悩まされてゐるといふお藤さんに就いての報知が健三の心を和げた。何年振にも概を合せた事のない彼と其人とは、度々會はなければならぬ昔でさへ、殆ど親しく口を利いた例がなかつた。席に着くときも座を立つときも、大抵は黙禮を取り換はせる丈で済ましてゐた。もし交際といふ文字を斯んな間柄にも使ひ得るならば、二人の交際は極めて淡くさうして軽いものであつた。強烈な好い印象のない代りに、少しも不快の記憶に濁されて

ゐない其人の面影は、島田やお藤のそれよりも、今の彼に取つて遙に尊かつた。人類に對する慈愛の心を、硬くなりかけた彼から喚り得る點に於いて、また漠然として散漫な人類を、比較的判明した一人の代表者に縮めて呉れる點に於いて、彼は死なうとしてゐる其人の姿を、同情の眼を開いて遠くに眺めた。

それと共に彼の胸には一種の利害心が働いた。何時起るかも知れないお藤さんの死は、彼が備な島田にまた彼を強請る口實を與へるに違なかつた。明かにそれを豫想した彼は、出来る限りそれを避けたと思つた。然し彼は此場合何うして避けるかの策略を講ずる男ではなかつた。

「衝突して破裂する迄行くより外に仕方がない」  
彼は斯う観念した。彼は手を掛けて島田の來るのを待ち受けた。其島田の來る前に突然彼の敵のお藤が訪ねて來ようとは、彼も思ひ掛けなかつた。

細君は何時もの通り書齋に坐つてゐる彼の前に出て、「あの波多野つて御婆さんがとうとう遣つて來ましたよ」と云つた。彼は驚くよりも寧ろ迷惑さうな顔をした。細君には其態度が尋常







あの女と交際した事のない御前には、己の批評の正しさ加減が解らないからそんなあべこべを云ふのだ」

「だつて現に貴夫の考へてゐた女とは丸で違つた人になつて貴夫の前へ出て来た以上は、貴夫の方で昔の考へを取り消すのが當然ぢやありませんか」

「本當に違つた人になつたのなら何時でも取消すが、左右ぢやないんだ。違つたのは上部丈で腹の中は故の通りなんだ」

「それが何うして分るの。新しい材料も何もないのに」

「御前に分らないでも己にはちゃんと分つてるよ」

「随分獨斷的ね、貴夫も」

「批評が中つてさへゐれば獨斷的で一向差支ないものだ」

「然しもし申つてゐなければ迷惑する人が大分出て来るでせう。あの御婆さんは私と關係のない人だから、何うでも構ひませんけれども」

「健三には細君の言葉が何を意味してゐるのか能く解つた。然し細君はそれ以上何も云はなかつた。腹の中で自分の父母兄弟を辯護してゐる彼女は、表向夫と道り合つて、行ける所

るだらうかと、一時疑つて見た位、彼女の口は旨かつた。

彼女に會ふときの健三が、心中迷惑を感じたのは大部分此口にあつた。

「御前を育てたものは此私だよ」

この一句を二時間でも三時間でも敷衍して、幼少の時分思になつた記憶を又新しく復習させられるのかと思ふと、彼は群易した。

「鳥田は御前の敵だよ」

彼女は自分の頭の中に残つてゐる此古い主観を、活動寫眞のやうに誇張して、又彼の前に露け出すに極つてゐた。彼はそれにも群易しない譯に行かなかつた。

何方を導くにしても涙が交るに違ひなかつた。彼は裝飾的に使用される其涙を見るに堪へないやうな心持がした。彼女は話す時に姉のやうな大きな聲を出す女ではなかつた。けれども自分の必要と思ふ場合には、其言葉に厭らしい強い力を入れた。圓朝の人情癖に出て来る女が、長い火箸を灰の中に突き刺し突き刺し、人に騙された恨みを述べて、拍手を困らせるのと時同じ態度で又同じ口調であつた。

彼の後期が外れた時、彼はそれを仕合せと考へるよりも寧ろ不思議に思ふ位、お富の性格が進行く氣はなかつた。彼女は理智に富んだ性質ではなかつた。

「面倒臭い」

少し込み入つた議論の筋道を辿らなければならなくなると、彼女は乾度斯う云つて當面の問題を投げた。さうして解決を付ける迄進まないために起る面倒臭さは何時迄も辛抱した。然し其辛抱は自分自身に取つて決して、快いものではなかつた。健三から見ると猶更心持が悪かつた。

「執拗だ」

二人は兩方同じ非難の言葉を御互の上に投げかけ合つた。さうして御互の腹の中にある嫌りを御互の素振から能く讀んだ。しかも其の非難に理由のある事も亦御互に認め合はなければならなかつた。

我慢な健三は遂に細君の生家へ行かなくなつた。何故行かないとも訊かず、又時々行つて呉れとも頼まずにたゞ黙つてゐた細君は、依然として「面倒臭い」を心の中に繰り返すきりで、少しも其態度を改めようとしなかつた。

「是で澤山だ」

「己も是で澤山だ」

率として崩すべからざる判明した一種の製になつて、彼の頭の何處かに入つてゐたのである。

細君は彼の爲に説明した。

「三十年近くにもなる古い事ぢやありませんか。向うだつて今となりや少しは遠慮があるでせう。それに大抵の人はもう忘れてしまひませぬ。それから人間の性質だつて長い間には少しづつ變つて行きますからね」

遠慮、忘却、性質の變化、それ等のものを前に鼓べて考へて見ても、健三には少しも合點が行かなかつた。

「そんな淡泊した女ぢやない」

彼は腹の中で斯う云はなければ何うしても承知が出来なかつた。

六十五

お富を知らない細君は却つて夫の執拗を笑つた。

「それが貴夫の癖だから仕方がない」

平生彼女の眼に映る健三の一部分はたしかに斯うなのであつた。ことに彼と自分の生家との關係に就いて、夫の此惡い癖が著しく出てゐるやうに彼女は思つてゐた。

「己が執拗なのぢやない、あの女が執拗なのだ。また同じ言葉が雙方の胸のうちで、屢繰り返された。

それでも議論のやうに彈力性のある二人の間柄には、時により目によつて多少の伸縮があつた。非常に緊張して何時切れるか分らない程に行き詰つたかと思ふと、それがまた自然の勢ひで徐々元へ戻つて来た。さうした日和の好い精神状態が少し繼續すると、細君の唇から暖い言葉が洩れた。

「是は誰の子？」

健三の手を握つて、自分の腹の上に載せた細君は、彼に斯んな問を掛けたりした。其頃細君の腹はまだ今のやうに大きくはなかつた。然し彼女は此時既に自分の胎内に蠢き掛つてゐる生の脈搏を感じ始めたので、その微動を同情のある夫の指頭に傳へようとしたのである。

「喧嘩をするのは語り兩方が悪いからですね」

彼女は斯んな事も云つた。夫程自分が悪いと思つてゐない頑固な健三も、微笑するより外に仕方がなかつた。

「離れ、ばい、くらくらくしても夫切になる代りに、一所にゐさへすれば、たとひ敵同志でも何うにか斯うにかなるものだ。つまりそれが人間なんだらう」

に思ひ到つた位、お富は能く喋る女であつた。ことに自分を護る事に巧な伎倆を有つてゐた。他の口車に乗せられ易い、又見え透いた御世辭を繕しがり勝な健三の實父は、何時でも彼女を責める事を忘れなかつた。

「感心な女だよ。だいち身上持が好いからな」

鳥田の家庭に風波の起つた時、彼女は有るだけの言葉を父の前に鼓べ立てた。さうして其言葉の上にまた悲しい涙と口惜しい涙とを多量に振り掛けた。父は全く感動した。すぐ彼女の味方になつて仕舞つた。

御世辭が上手だといふ點に於いて健三の父は彼の姉をも大變可愛がつてゐた。無心に來られるたんびに、「さうくは己だつて困るよ」とか何とか云ひながら、いつか入用丈の金子は手文庫から取出されてゐた。

「比田はあんな奴だが、お富が可哀想だから」

姉の歸つた後で、父は何時でも尋ねらしい言葉を傍のものに聞えるやうに云つた。

然し是は極父を自由にした姉の口先は、お富に比べると遙に下手であつた。眞しやかといふ點に於いて遠く及ばなかつた。實際十六七になつた時の健三は彼女と接觸した自分以外のもので、果してその性格を見抜いたものが何人あ

るだらうかと、一時疑つて見た位、彼女の口は旨かつた。

彼女に會ふときの健三が、心中迷惑を感じたのは大部分此口にあつた。

「御前を育てたものは此私だよ」

この一句を二時間でも三時間でも敷衍して、幼少の時分思になつた記憶を又新しく復習させられるのかと思ふと、彼は群易した。

「鳥田は御前の敵だよ」

彼女は自分の頭の中に残つてゐる此古い主観を、活動寫眞のやうに誇張して、又彼の前に露け出すに極つてゐた。彼はそれにも群易しない譯に行かなかつた。

何方を導くにしても涙が交るに違ひなかつた。彼は裝飾的に使用される其涙を見るに堪へないやうな心持がした。彼女は話す時に姉のやうな大きな聲を出す女ではなかつた。けれども自分の必要と思ふ場合には、其言葉に厭らしい強い力を入れた。圓朝の人情癖に出て来る女が、長い火箸を灰の中に突き刺し突き刺し、人に騙された恨みを述べて、拍手を困らせるのと時同じ態度で又同じ口調であつた。

彼の後期が外れた時、彼はそれを仕合せと考へるよりも寧ろ不思議に思ふ位、お富の性格が

率として崩すべからざる判明した一種の製になつて、彼の頭の何處かに入つてゐたのである。

細君は彼の爲に説明した。

「三十年近くにもなる古い事ぢやありませんか。向うだつて今となりや少しは遠慮があるでせう。それに大抵の人はもう忘れてしまひませぬ。それから人間の性質だつて長い間には少しづつ變つて行きますからね」

遠慮、忘却、性質の變化、それ等のものを前に鼓べて考へて見ても、健三には少しも合點が行かなかつた。

「そんな淡泊した女ぢやない」

彼は腹の中で斯う云はなければ何うしても承知が出来なかつた。

六十五

お富を知らない細君は却つて夫の執拗を笑つた。

「それが貴夫の癖だから仕方がない」

平生彼女の眼に映る健三の一部分はたしかに斯うなのであつた。ことに彼と自分の生家との關係に就いて、夫の此惡い癖が著しく出てゐるやうに彼女は思つてゐた。



健三は立派な哲理でも考へ出したやうに首を捻つた。

六十六

お常や鳥田の事以外に、兄と姉の消息も折々健三の耳に入つた。  
毎年時節が寒くなると乾度身體に故障の起る兄は、秋口から又風邪を引いて一週間は局を休んだ揚句、氣分の悪いのを押し出動した結果、幾日経つても熱が除れないで苦しんでゐた。

「つい無理をするもんだから」  
無理をして月給の壽命を長くするか、養生をして免職の時期を早めるか、彼には二つの内何方かを經ぶより外に仕方がない様に見えたのである。

「何うも助腹らしいつていふんだがね」  
彼は心細い顔をした。彼は死を恐れた。肉の消滅について何人よりも強い畏怖の念を抱いてゐた。さうして何人よりも強い速度で、其肉塊を減らして行かなければならなかつた。

健三は細君に向つて云つた。――  
「もう少し平氣で休んでゐられないものかな。責めて熱の失くなる迄でも好いから」

「左右したいのは山々なんでもせうけれども、欠つ張さうは出来ないうでせう」  
健三は時々兄が死んだあとの家族を、たゞ活計の方面からのみ眺める事があつた。彼はそれを残酷ながら自然の眺め方として許してゐた。

同時にさういふ觀察から逃れる事の出来ない自分に對して一種の不快感を感じた。彼は苦しい顔をした。  
「死にやしまいな」

「まさか」  
細君は取り合はなかつた。彼女はたゞ自分の大きな腹を持って餘してばかりゐた。生家と縁故のある産婆が、遠い所から俵に乗つて時々遣つて来た。彼は其産婆が何をしに來て、又何をして歸つて行くのか全く知らなかつた。

「腹でも揉むのかい」  
「まあ左右です」  
細君ははか／＼しい返事さへしなかつた。其内兄の熱がころりと除れた。

「御祈禱をなすつたんですつて」  
朱信家の細君は加持、祈禱、占ひ、神信心、大抵の事を好いてゐた。  
「御前が勤めたんだらう」  
「いゝえそれが私なんぞの知らない妙な御祈

禱なのよ。何でも聖刺を頭の上へ載せて遣るんですつて」  
健三には聖刺の御蔭で、いじらしい熱が除れようと思へなかつた。

「氣の所爲で熱が出るんだから、氣の所爲でそれが又直ぐ除れるんだらうよ。聖刺でなくつたつて、杓子でも刺さても同じ事さ」  
然しいくら御蔭の藥を飲んでも故らないもんだから、試しに遣つて見たら何うだらうつて勤められて、とう／＼遣る氣になつたんですつて。何うせ高い御祈禱代を拂つたんぢやないんでせう」

健三は腹の中で兄を馬鹿だと思つた。また熱の除れる迄藥を飲む事の出来ない彼の内狀を氣の毒に思つた。聖刺の御蔭でも何でも熱が除れさへすればまづ合せだとも思つた。  
「兄が強ると共に姉がまた喘息で悩み出した。又かい」

健三は我知らず斯う云つて、不圖女房の持病を苦しにした比田の様子を想ひ浮べた。  
「しかし今度は何時もより重いんですつて。こ

とによると六づかしいかも知れないから、健三に見舞に行くやうに左右云つて呉れつて仰しやいました」  
に無頓着過ぎる比田を一方に置いて此姉の態度を見ると、寧ろ氣の毒な位親切だつたからである。  
「私や本當に損な生れ付でね。良人とは丸であべこべなんだから」  
姉の夫思ひは全く天性に違なかつた。けれども比田が時として理の徹らない我儘を云ひ募るやうに、彼女は譯の解らない實意立をして却つて夫を辱がらせる事があつた。それに彼女が針の道を心得てゐなかつた。手習をさせても遊樂を仕込んで何一つ覺える事の出来なかつた彼女は、嫁に來てから今日迄、つひそ夫の着物一枚縫つた例がなかつた。それでゐて彼女は人一倍勝氣な女であつた。子供の時分強情を張つた嗣として土蔵の中に押し込められた時、小用に行きたいから是非出して呉れ、もし出さなければ倉の中で用を足すが好いかと云つて、細君の内外で母と論争をした話はいまだ健三の耳に残つてゐた。

兄の注意を健三に傳へた細君は、重苦しさうに自分の尻を敷の上に着けた。  
「少し立つてゐると御腹の具合が變になつて來て仕方がないんです。手なんぞ延ばして細に載つてゐるものなんか到底取れやしません」  
産が通る程細君は運動すべきものだ位に考へてゐた健三は意外な顔をした。下腹部だの腰の周圍の感じが何んなに退儀であるかは全く彼の想像の外にあつた。彼は活動を強ひる勇氣も自信も失つた。  
「私達も御見舞にはおれませんよ」  
「無謂御前は行かなくつても好い。己が行くから」

六十七

其頃の健三は宅へ歸ると甚だしい倦怠を感じた。たゞ仕事をした結果とばかりは考へられない此疲勞が、一層彼を出不精にした。彼はよく晝寝をした。机に倚つて書物を眼の前に開けてゐる時ですら、魔に襲はれる事が屢あつた。愕然として假寐の夢から覺めた時、失はれた時隙を取り返さなければならぬといふ感じが一層強く彼を刺戟した。彼は遂に机の前を離れる事が出来なくなつた。括り付けられた人のやう

に書齋に凝としてゐた。彼の良心はいくら勉強が出来なくつても、いくら愚圖々々してゐても、左右いふ風に凝と坐つてゐると彼に命令するのである。  
斯くして四五日は徒に過ぎた。健三が漸く津の守坂へ出掛けられた時は六づかしいかも知れないと云つた姉が、もう回復期に向つてゐた。  
「まあ結構です」  
彼は尋常の挨拶をした。けれども腹の中では狐にでも掴まれたやうな氣がした。  
「あゝ、でも御蔭さまでね。――姉さんなんざあ、生きてゐたつて何うせ他の厄介になるばかりで何の役にも立たないんだから、好い加減な時分に死ぬと丁度好いんだけれども、欠つ張持つて生れた壽命だと見えて是許りは仕方がない」  
姉は自分の云ふ裏を健三から聴きたい様子であつた。然し彼は黙つて煙草を吹かしてゐた。斯んな些細の點にも姉弟の氣風の相違は現れない。  
「でも比田のゐるうちには、いくら病身でも無能でも私が生きてゐて遣らないと困るからね」  
親類は亭主孝行といふ名で姉を評し合つてゐた。それは女房の心盡しなどに對して餘り

さう思ふと自分とは大變懸け隔たつたやうでゐて、其實何處か似通つた所のある此腹邊の姉の前に、彼は反省を強ひられた。  
「姉はたゞ露骨な丈なんだ。教育の皮を剥けば己だつて大した變りはないんだ」



平生の彼は教育の力を信じ過ぎてゐた。今の彼は其教育の力で何うする事も出来ない野生的な自分の存在を明かに認めた。斯く事實の上に於いて突然人間を平等に視た彼は、不慮から輕蔑してゐた姉に對して多少極りの悪い思ひをしなければならなかつた。然し姉は何にも氣が付かなかつた。

「お住さんは何うです。もう直生れるんだらう」  
「え、落つこちさうな腹をして苦しがつてゐます」  
「御産は苦しいもんだからね。私も覺があるが」

「久しく不妊性と思はれてゐた姉は、片付いて何年目かになつて始めて一人の男の子を生んだ。年齒を取つてからの初産だったので、當人も傍のものも大分心配した割に、それ程の危険もなく胎兒を分娩したが、其子はすぐ死んで仕舞つた。

六十八

姉の言葉には背亡くしたわが子に對する思ひ

年寄と少し趣を異にしてゐる所があつた。優性の病氣が何時迄も纏繞するやうに、慢性の壽命が又何時迄も纏繞するだらうと彼女には見えなかつたのである。

其處へ彼女の痴性が手傳つた。彼女は何んなに氣取苦しくつても、いくら他から忠告されても、何うしても居ながら用を足さうと云はなかつた。這ふやうにしては則ち行つた。それから子供の時からの習慣で、朝は乾度肌痒になつて手水を遣つた。寒い風が吹かうが冷たい雨が降らうが決して止めなかつた。

「そんな心細い事を云はずに、出来る丈養生をしたら好いでせう」  
「養生はしてゐるよ。健ちゃんから貰ふ御小遣ひの中で牛乳又は乾度飲む事に極めてゐるんだから」

田舎ものが米の飯を食ふやうに、彼女は牛乳を飲むのが凡ての養生でもあるかのやうな事を云つた。日に／＼損はれて行く舊體を意識しつつ、此姉に養生を勧める健三の心の中にも、「他事ぢやない」といふ馬鹿らしさが遠くに働いてゐた。  
「私も近頃は具合が悪くつてね。ことによると貴方より早く位牌になるかも知れませんよ」

出の外に、今の養子に飽き足りない意味も含まれてゐた。

「彦ちゃんももう少し確乎してゐて呉れると好いんだけれども」  
彼女は時々傍のものに斯んな迷ひを洩らした。彦ちゃんは彼女の豫期するやうな大した働き手でないにせよ、至極穩かな好人物であつた。朝つばらから酒を飲まなくつちやゐられない人だといふ噂を耳にした事はあるが、其他の點に就いて深い交渉を有たない健三には、何處が不足なのか能く解らなかつた。  
「もう少し御金を取つて呉れると好いんだけど」  
「もう少し御金を取つて呉れると好いんだけど」

無論彦ちゃんは養父母を樂に養へる丈の収入を得てゐなかつた。然し此間も彼を育てた時の事を思へば、今更そんな贅澤の云へた義理でもなかつた。彼等は彦ちゃんを何處の學校へも入れて遣らなかつた。僅ばかりでも彼が月給を取るやうになつたのは、養父母に取つて寧ろ僥倖と云はなければならなかつた。健三は姉の不平に對して眼に見えるほどの注意を拂ひかねた。昔死んだ赤ん坊については、猶の事同様が起らなかつた。彼は其生體を見た事がなかつた。其死體も知らなかつた。名前さへ忘

彼の言葉は無難根のない笑談として姉の耳に響いた。彼もそれを承知の上でわざと笑つた。然し自ら健康を損ひつゝあると確に心得ながら、それを何うする事も出来ない境遇に置かれた彼は、姉よりも却つて自分の方を憐んだ。「己のは黙つて成し崩しに自設するのだ。氣の毒だと云つて呉れるものは一人もありやしない」

彼はさう思つて姉の面み込んだ眼と、瘦けた頬と、肉のない細い手とを、微笑しながら見てゐた。

六十九

姉は細かい所に氣の付く女であつた。従つて細かい事に迄よく好奇心を働かせたが、一面に於いて馬鹿正直な彼女は、一面に於いてまた變な廻り氣を出す癖を有つてゐた。

健三が外國から歸つて来た時、彼女は自家の生計に就いて、他の同情に訴へ得るやうな關係っぽい事實を彼の前に並べた。仕舞に兄の口を借りて、若干でも好いから月々自分の小遣として送つて呉れまいかといふ依頼を持ち出した。健三は身分相應な額を定めた上、また兄の手を廻して先方へ其旨を通知して貰ふ事にした。

「何とか云ひましたね、あの子は」  
「作太郎さ。あすこに位牌があるよ」  
姉は健三のために茶の間の壁を切り抜いて掛へた小さい佛壇を指し示した。薄暗いばかりでなく小汚い。其中には先祖からの位牌が五つ六つ並んでゐた。

「あの小さい奴がさうですか」  
「あゝ、赤ん坊のだからね、わざと小さく掛へたんだよ」  
立つて行つて戒名を讀む氣にもならなかつた健三は、矢張り故の所に坐つた儘、黒塗の上に金字で書いた小形の札のやうなものを遠くから眺めてゐた。

彼の顔には何の表情もなかつた。自分の二番目の娘が赤痢に罹つて、もう少しで命を奪られる所だつた時の心配と苦痛さへ聯想し得なかつた。  
「姉さんも斯んなぢや何時あゝなるか分らないよ、健ちゃん」  
彼女は佛壇から眼を放して健三を見た。健三はわざと其視線を避けた。

心細い事を口にしたがら腹の中では決して死ぬと思つてゐない彼女の云ひ草には、世間並の

すると姉から手紙が来た。長さんの話では御前さんが月々若干私に遣るといふ事だが、實際御前さんの、呉れると云つた金額は何の位なのか、長さんに内證で一寸知らせて呉れないかと書いてあつた。姉はこれから毎月中取次をする役に當るかも知れない兄の心事を察したのである。  
健三は馬鹿々々しく思つた。腹立たしくも感じた。然し何より先に淺問しかつた。「黙つてゐろ」と怒鳴り付けて遣りたくなつた。彼の姉に宛てた返事は、一枚の端書に過ぎなかつたけれども、斯うした彼の氣分を能く現はしてゐた。姉はそれぎり何とも云つて來なかつた。無難な彼女は最初の手紙さへ他に頼んで書いて貰つたのである。

此出来事が健三に對する姉を前よりは一層遠慮がちにした。何でも彼でも訊きたがる彼女も、健三の家庭に就いては、當り障りのない事の外、多く口を開かなかつた。健三も自分等夫婦の間柄を彼女の前で問題にしようなどは台て想ひ到らなかつた。  
「近頃お住さんは何うだい」  
「まあ相變らずです」  
會話は此位で切り上げられる場合が多かつ



間接に細君の病氣を知つてゐる姉の質問には、好奇心以外に、親切から来る懸念も大分交つてゐた。然し其懸念は健三に取つて何の役にも立たなかつた。従つて彼女の眼に見える健三は、何時も親しみがたい無愛想な變人に過ぎなかつた。

淋しい心持で、姉の家を出た健三は、足に任せて北へくさくさ歩いて行つた。さうしてつひぞ見た事もない、新聞地のやうな汚い町の中へ入つた。東京で生れた彼は方角の上にならぬ、自分の今踏んでゐる場所を能く辨へてゐた。けれども其處には彼の道徳を講ぶ何物も残つてゐなかつた。過去の記念が悉く彼の眼から奪はれてしまつた大地の上を、彼は不思議さうに歩いた。

彼は昔あつた青田と、其青田の間を走る眞直な標を思ひ出した。田の盡きる所には三四軒の蕎麥屋根が見えた。菅笠を脱いで、床几に腰を掛けながら、心太を食つてゐる男の姿などが眼に浮んだ。前には野原のやうに廣い紙漉場があつた。其處を折れ曲つて町つゞきへ出ると、狭い川に橋が懸つてゐた。川の左右は高い石垣で積み上げられてゐるので、上から見下

す水の流れには存外の距離があつた。橋の袂にある古風な遊歩の暖簾や、其隣の八百屋の店先に並んでゐる唐菓子などが、若い時の健三によく廣重の風景畫を聯想させた。然し今では凡てのものが夢のやうに悉く消え失せてゐた。残つてゐるのはたゞ大地ばかりであつた。

「何時斯んなに變つたんだらう」人間の變つて行く事へのみ氣を取られてゐた健三は、それよりも一層静しい自然の變り方に驚かされた。彼は子供の時分比田と將棋を差した事を偶然思ひ出した。比田は盤に向ふと、是でも所澤の藤吉さんの御弟子だからと云ふのが解であつた。今の比田も將棋盤を前に置けば、程度同じ事を云ひさうな男であつた。

「己自身は畢竟何うなるのだらう」衰へる丈で案外變らない人間のさまと、變るけれども日に榮えて行く郊外の様子とが、健三に想ひがけない対照の材料を與へた時、彼は考へない譯に行かなかつた。

七十

の事を思ひ出した。兄はそれを天賦羅だらうと云つて陰で評してゐたが、當人は何處迄も本物らしく見せびらかしたがつた。今若せにせよ、本物にせよ、彼が何處で幾何で買つたのか知るものは誰もなかつた。斯ういふ點に掛つては無頓着でゐられない性分の姉も、たゞ好い加減に其出處を推察するに過ぎなかつた。

「月賦で買つたに違ないよ」  
「ことによると質の流れかも知れない」  
姉は聴かれもしないのに、兄に向つて色々な説明をした。健三には殆ど問題にならない事が、彼等の間に想像の種を幾個でも卸した。左右され、ばされる程、又比田は得意らしく見えた。健三が毎月送る小遣さへ時々借りられてしまふ癖に、姉はつひに夫の手に入る、又は現在手元にある、金高を決して知る事が出来なかつた。

「近頃は何でも債券を二三枚持つてゐるやうだ」  
姉の言葉は丸で隣の宅の財産でも云ひ中てるやうに夫から遠ざかつてゐた。  
姉を斯ういふ地位に立たせて平氣である比田は、健三から見ると領解しがたい人間に違なかつた。それが已むを得ない夫婦關係のやう

がすぐ細君の注意を惹いた。  
「御病人は何うなの」  
あらゆる人間が何時か一度は到着しなければならぬ最後の運命を、彼女は健三の口から判然聞かうとするやうに見えた。健三は唇を與へる先に、まづ一種の矛盾を意識した。  
「何もう好いんだ。寢てはゐるが危篤でも何でもないんだ。まあ見貴に騙されたやうなものだね」  
馬鹿らしいといふ氣が幾分か彼の口振に出た。

「騙されても其方がいくらか好いか知れやしませんわ、貴夫。若しもの事でもあつて御覽なさい、それこそ」  
「兄貴が悪いんぢやない。兄貴は姉に騙されたんだから。其姉は又病氣に騙されたんだ。つまり皆騙されてゐるやうなものさ、世の中は。一番利口なのは比田かも知れないよ。いくら女房が煩つたつて、決して騙されないんだからね」  
「矢つ張宅にゐないの」  
「居るもんか。尤も非道く悪かつた時は何うだか知らないが」  
健三は比田の振ら下げてゐる金時計と金鎖

に心得て辛抱してゐる姉自身も健三には分らなかつた。然し金鎖上、他く迄秘密主義を守りながら、時々姉の豫期に釣り合はないやうなものを買ひ込んだり着込んだりして、安りに彼女を驚かせたがる料簡に至つては想像さへ及ばなかつた。妻に對する虚榮心の發現、焦らされたながらも夫を醜利と思ふ妻の満足。——此二つのもの丈では到底十分な説明にならなかつた。

「金の要る時も他人、病氣の時も他人、それぢやたゞ一所にゐる丈ぢやないか」  
健三の語は容易に解けなかつた。考へる事の嫌ひな細君はまた何といふ評も加へなかつた。  
「然し己達夫婦も世間から見れば随分變つてゐるんだから、さう他の事ばかり兎や角云つちやゐられないかも知れない」  
「矢つ張り同じ事ですわ。みんな自分丈は好いと思つてゐるんだから」  
健三はすぐ癪に附つた。  
「御前でも自分ぢや好い積であるのかい」  
「ゐますとも。貴夫が好いと思つてゐらつしやる通りに」  
彼等の争ひは能く斯ういふ所から起つた。

七十一

さうして折角穩かに静まつてゐる雙方の心を攪き亂した。健三はそれを憤りの足りない細君の責に歸した。細君はまた偏執で強情な夫の所爲だとばかり解した。  
「字を書けなくつても、裁縫が出来なくつても、矢つ張りのやうな亭主奉行な女の方が己は好きだ」  
「今時そんな女が何處の國にゐるもんですか」  
細君の言葉の裏には、男ほど手前勝手なものはないといふ大きな反感が横はつてゐた。



ひられても自分には出来ない。もし尊敬を受けなければ、受けられる丈の賞賛を有つた人間になつて自分の前に出て来るがいい。夫といふ肩書などは無くつても構はないから」

不思議にも學問をした健三の方は此點に於いて却つて舊式であつた。自分は自分の爲に生きて行かなければならぬといふ主義を實現したがりながら、夫の爲にのみ存在する妻を最初から假定して憚らなかつた。

「あらゆる意味から見ても、妻は夫に従屬すべきものだ」

二人が衝突する大根は此處にあつた。

夫と獨立した自己の存在を主張しようとする健三を見ると健三はすぐ不快を感じた。動もすると、女の癖にといふ氣になつた。それが一段劇しくなると思ひ、何を生意氣なといふ言葉に變化した。細君の腹には、いくら女だつてといふ挨拶が何時でも貯へてあつた。

「いくら女だつて、さう踏み付にされて堪るものか」

健三は時として細君の顔に用る是夫の表情を明かに讀んだ。

「女だから馬鹿にするのではない、馬鹿だから馬鹿にするのだ。尊敬されなければ尊敬される

夫の人格を掲げるがいい」

健三の論理は何時の間にか、細君が彼に向つて投げる論理と同じものになつてしまつた。彼等は斯うして圓い輪の上をぐる／＼廻つて少いた。さうしていくつか彼れでも氣が付かなかつた。

健三は其論の上にはたりと立ち留る事があつた。彼の留る時は彼の立場が固まる時に外ならなかつた。細君も其論の上で不動動かなくなる事があつた。然し細君の動かなくなる時は彼女の沈滞が抜け出す時に限つてゐた。其時健三は漸く怒氣を已めた。細君は始めて口を利き出した。二人は手を携へて談笑しながら、矢張り圓い輪の上を廻れる譯に行かなかつた。

細君が産をする十日ばかり前に、彼女の父が突然健三を訪問した。生憎留守だつた彼は、夕暮に歸つてから細君に其話を聞いて首を傾けた。

「何か用でもあつたのかい」

「え、少し御話したい事があるんですつて」

「何だい」

細君は答へなかつた。

「知らないのかい」

「ええ、また二三日うちに上つて能く御話をす

るからつて歸りましたから、今度参つたら直に聞いて下さい」

健三はそれより以上何も云ふ事が出来なかつた。

久しく細君の父を訪ねないでゐた彼は、用事のあるなしに拘はらず、向うがわざ／＼此方へ出掛けて来ようなどは夢にも豫期しなかつた。その不審が例より彼の口數を多くする原因になつた。それは反對に細君の言葉は却つて常よりも少かつた。然しそれは彼がよく彼女に於いて發見する不平等や無愛嬌から来る感言とも違つてゐた。

夜は何時の間にかやら／＼の冬に變化してゐた。細い燈火の影を凝と見詰めてゐると、灯は動かないで風の音丈が烈しく兩戸に當つた。ひゆう／＼と樹木の鳴るなかに、夫婦は静かな洋燈を間に置いて、しばらく森と生つてゐた。

七十二

細君が何うしてまたそれを彼女の父に與へたものか、健三には理解出来なかつた。

「あんな汚らしいもの」

彼は不思議といふよりも寧ろ恥かしい氣がした。

「いゝえ、喜んで着て行きました」

「御父さんは、外套を有つてゐないのかい」

「外套どころぢやない、もう何も有つちやゐないんです」

健三は驚いた。細い灯に照された細君の顔が急に慄れに見えた。

「そんなに窮つてゐるのかなあ」

「ええ、もう何うする事も出来ないんですつて」

口數の多い細君は、自分の生家に關する詳しい話を今迄夫の耳に入れずに通して來たのである。驟に離れて以來の不如意を薄々知つてゐながら、まさか是程とも思はずにゐた健三は、急に眼を轉じて其人の昔を見なければならなかつた。

彼は細君にフロックコートで剪ましく官邸の石門を出て行く細君の父の姿を鮮かに思ひ浮べた。堅木を久の字形に切り組んで作つた其玄關の床は、つる／＼光つて、時によると細れ

ない健三の足を滑らせた。前に廣い芝生を控へた庭接間を左へ折れ曲ると、それと接續して長方形の食堂があつた。結婚する前健三は其處で細君の家族のものとして晩餐の卓に着いた事を未だに覚えてゐた。二階には疊が敷いてあつた。正月の寒い晩、歌留多に招かれた彼は、そのうちの一間で暖い宵を笑ひ聲の裡に更にした記憶もあつた。

西洋館に續いて日本建も一種付いてゐた此屋敷には、家族の外に五人の下女と二人の書生が住んでゐた。職務柄客の出入の多い此家の用事には、それ丈の首仕が必要かも知れなかつたが、もし經濟が許さないとすれば、其必要も充たされる筈はなかつた。

健三が外國から歸つて來た時ですら、細君の父は左程困つてゐるやうには見えなかつた。彼が勤忍の奥に住居を構へた當座、彼の新宅を訪ねた父は、彼に向つて斯う云つた。

「まあ自分の宅を有つといふ事が人間には何うしても必要ですね。然しさう急にも行くまいから、それは後廻しにして、精々貯蓄を心掛けたら好いでせう。二三千圓の金を有つてゐないと、いざといふ場合に、大變困るもんだから。なに千圓位出来ればそれで結構です。それを私に

預けて御置きなされると、一年位経つうちには、ちき倍にして上げますから」

貴族の道に心得の足りない健三は其時不思議の感に打たれた。

「何うして一年のうちに千圓が二千圓になり得るだらう」

彼の頭では此疑問の解決が逆も付かなかつた。利息を離れる事の出来ない彼は、驚愕の念を以て、細君の父にのみあつて、自分には全く缺乏してゐる、一種の怪力を疑つた。しかし千圓拵へて預ける見込の到底付かない彼は、細君の父に向つて其方法を訊く氣にもならずにい今日迄過ぎたのである。

「そんなに貧乏する筈がないだらうぢやないか。何ほ何だつて」

「でも仕方がありませんわ、廻り合せだから」

産といふ肉體の苦痛を眼前に控へてゐる細君の氣息遣はたゞでさへ重々しかつた。健三は黙つて氣の毒さうな其腹と、光澤の悪い其顔とを眺めた。

昔田舎で結婚した時、彼女の父が何處からか浮世繪風の美人を描いた下等な團扇を四五本買つて持つて來たので、健三は其一本をぐる／＼覗しながら、随分俗なものだと評したら、父は







送り出した時、夫と娘で香取の上に着いた。遂に香取へは入って来なかつた。金策の事は黙々のうちに二人に了解されてゐながら、遂に二人の間の話題に上らずにしまつた。

けれども健三の心には既に責任の荷があつた。彼はそれを果たすために動かなければならなかつた。彼は世帯を持つときに、火鉢や煙草盆を一所に買つて歩いて買つた友達の宅へ又出掛けた。

「金を貸して呉れないかね」  
彼は数から棒に質問を掛けた。金などを有つてゐない友達は驚いた顔をして彼を見た。彼は火鉢に手を懸しながら友達の前に送一事情を話した。

「何うだらう」  
三年間支那のある學堂で教授を取つてゐた頃、善へた友達の金は、みんな電線か何かの株に變換してゐた。

「ぢや清水に頼んで見て呉れないか」  
友達の姉、婿に當る清水は、下町の可なり繁華な場所、病院を開いてゐた。  
「さあ何うかなあ。彼奴も其位な金はあるだらうが、動かせるやうになつてゐるかしら。まあ訊いて見てやらう」

友達の好意は幸ひ使券にならずに消んだ。健三の借り受けた四百圓の金が、細君の父の手に入つたのは、それから四五日経つて後の事であつた。

七十五

「己は精一杯の事をしたのだ」  
健三の腹には斯ういふ安心があつた。従つて彼は自分の調達した金の價値に就いて餘り考へなかつた。唯、唯しがらうとも思はない代りに、是位の補助が何の役に立つものかといふ氣も起さなかつた。それが何の方面に何う消費されたかの問題になると、全くの無知識で済ましてゐた。細君の父も其處迄内情を打ち明ける程に接近して来なかつた。

従來の儲蓄を取り拂ふには此機會があまりに脆弱過ぎた。若しくは二人の性格があまりに固着し過ぎてゐた。  
父は健三よりも世間的に虚榮心の強い男であつた。成るべく自分を他に能く了解せよと力めるよりも、出来るだけ自分の價値を明るい光輝に照てさせたがる性質であつた。従つて彼を圍繞する妻子近親に對する彼の様子は幾分か誇大に傾きがちであつた。

「何うですか」  
細君は父がある大きな都會の市長の候補者になつた話をして聞かせた。其運動費は財力のある彼の舊友の一人が負擔して呉れてゐるやうであつた。然し市の有志家が何名か打ち揃つて上京した時に、有名な政治家のある伯爵が會つて、父の適不適を問ひ訊いたら、其伯爵が何うも不向だらうと答へたので、話はそれぎりで止めたのださうである。

「何うも困るね」  
「今に何とかなるでせう」  
細君は健三よりも自分の父の方を遙に餘計信用してゐた。健三も例の怪力を知らないではなかつた。

「たゞ氣の毒だからさう云ふ丈さ」  
彼の言葉に嘘はなかつた。

七十六

けれども其次に細君の父が健三を訪問した時には、二人の關係がもう變つてゐた。自ら進んで母に旅費を用立つた女は、一步進かなければならなかつた。彼は比較的遠い距離に立つて細君の父を眺めた。然し彼の眼に漂ふ色は冷凄でも無着でもなかつた。寧ろ黒い瞳

「私、今度といふ今度は困りました」  
最初に斯う云つた父は健三からはかん／＼しい返事すら得なかつた。  
父はやがて世界で有名な或人の名を挙げた。其人は銀行家でもあり、又實業家でもあつた。一實は此間ある人の周旋で會つて見ましたが、

健三と細君との間に斯んな簡単な會話が取り換はされた後、彼はその用事を帯びて北國のある都會へ向けて出發したといふ父の報知を細君から受け取つた。すると一週間はかりして彼女が突然健三の所へ遣つて来た。父が旅先で急に病氣に罹つたので、是から自分も行かなければならぬと思ふが、それに就いて旅費の都合は出来まいかといふのが母の用向であつた。

「え、旅費位何うでもして上げますから、すぐ行つて御上げなさい」  
宿屋に寝てゐる苦しい人と、汽車で立つて行く寒い人とを心から氣の毒に思つた健三は、自分の見た事もない遠くの空の怪しき空想像の眼に浮べた。

「何しろ電報が来た丈で、詳しい事は丸で分りませんのですから」  
「ぢや病氣心配でせう。成るべく早く御立ちになる方が好いでせう」  
「幸ひにして父の病氣は軽かつた。然し彼の手を助けかけたといふ鐵山事業はそれぎり立消になつてしまつた」  
「まだ何も見付からないのかね、口は」  
「有るにはあるやうですけども行く御まらな



何うか行く出来さうですよ。三井と三菱を除けば日本ではまあ彼處位なもんですから、使用人になつたからと云つて、別に私の體面に關する事もありませんし、それに仕事をやる區域も廣い様ですから、面白く働けるだらうと思ふんです。

此財力家によつて細君の父に豫約された地位といふのは、關西にある或私立の鐵道會社の社長であつた。會社の株の大部分を一人で所有してゐる其人は、自分の意志の儘に、其處の社長を選ぶ特權を存してゐたのである。然し何十株か何百株かの持主として、豫め資格を作つて置かなければならない父は、何うして金の工面をするだらう。事狀に通じない健三には此疑問さへ解けなかつた。

「一時必要な株數を私の名義に書換へて貰ふんです。」  
健三は父の言葉に疑ひを挟む程、彼の才能を見極つてゐなかつた。彼と彼の家族とを目下の苦境から解脱させるといふ意味に於いても、其成功を希望しない譯に行かなかつた。然し依然として元の立場に立つてゐる事も改める譯に行かなかつた。彼の挨拶は形式的であつた。さうして幾分か彼の心の柔かい部分をわざと堅苦

しくした。老幼な父は丸で其處に注意を拂はないうやうに見えた。  
「然し困る事に、是は今が今といふ譯に行かないのです。時機があるものですからな。」  
彼は懐から又一枚の附合見たやうなものを取出して健三に見せた。それには或保險會社が彼に頭金を贈與するといふ文句と、其報酬として月々彼に百圓を贈與するといふ條件が書いてあつた。

「今御話した一方の方が出来たら是は已めるか、又は出来ても檢けてやるか、其邊はまだ分らないんですが、兎に角百圓でも當座の凌ぎにはなりますから。」  
昔彼が政府の内意で或官職を抛つた時、當座の人は山陰道筋のある地方の知事なら轉任させても好いといふ條件を付けた事があつた。然し彼は斷然それを斥けた。彼が今大して隆盛でもない保險會社から百圓の金を貰つて、別に厭な顔をしなれないのも、矢張り境遇の變化が彼の性格に及ぼす影響に相違なかつた。

斯うした懸け附てのない父の態度は、動ともすると健三を自分の立場から前へ押し出さうとした。其傾向を意識するや否や彼は又後戻りをしなければならなかつた。彼の自然は不自然なら

しく見える彼の態度を倫理的に認可したのである。  
七十七  
細君の父は事務家であつた。勤ともすると仕事本位の立場からばかり人を評價したがつた。乃木將軍が一時臺灣總督になつて間もなくそれを已めた時、彼は健三に向つて斯んな事を云つた。

「個人としての乃木さんは義に堅く情に篤く實に立派なものです。然し總督としての乃木さんが果して適任であるか何うかといふ問題になると、議論の餘地がまだ大分あるやうに思ひます。個人の徳は自分に親しく接觸する左右のものには能く及ぶかも知れませんが、遠く離れた被治者に利益を興へようとするには不十分です。其處へ行くといふ矢張り手配ですね。手配がなかつちや、何んな善人でもたゞ坐つてゐるより外に仕方がありませんからね。」

彼は在職中の關係から或會の事務一切を管理してゐた。侯爵を會頭に頂く其會は、彼の力で設立の主意を精確に事業の上で完成した後、彼の手元に二萬圓程の剩餘金を委ねた。官途に縁がなくなつてから、不如意に不如

意の讀いた彼は、つい其委託金に手をつけた。さうして何時の間にか全部を消費してしまつた。然し彼は自家の信用を維持するために誰にもそれを打明けなかつた。従つて彼は此預金から當然生まれて来る百圓近くの利子を毎月調達して、體面を繕はなければならなかつた。自家の經濟よりも却つて此方を苦に病んでゐた彼が、公生涯の持論に絶対に必要な其百圓を、月々保險會社から貰ふやうになつたのは、當時の彼の心中に立入つて考へて見ると、全く嬉しいに違なかつた。

餘程後になつて始めて此話を細君から聞いた健三は、彼女の父に對して新たな同情を感じた丈で、不徳義漢として彼を惡む氣は更に起らなかつた。さういふ男の娘と夫婦になつてゐるのが取づかしいなどは更に思はなかつた。然し細君に對しての健三は、此點に關して殆ど無言であつた。細君は時々彼に向つて云つた。

「私、どんな夫でも構ひませんわ、たゞ自分に好くして呉れさへすれば。」  
「泥棒でも構はないのかい。」  
「えええ、泥棒だらうが、詐欺師だらうが何でも好いわ。たゞ女房を大事にして呉れれば、

それで澤山なのよ。いくら偉い男だつて、立派な人間だつて、宅で不親切ぢや私にや何にもならないんですもの。」  
實際細君は此の言葉通りの女であつた。健三も其意見には賛成であつた。けれども彼の推察は月の筆の様に細君の言外に透み出した。學問語りに風説してゐる自分を、彼女が斯ういふ言葉で餘所ながら非難するのだと云ふ奥が何處やらでした。然しそれよりも遙に強く、夫の心を知らぬ彼女が斯んな態度で唯に自分の父を擁護するのではないかと感ずる健三の胸を打つた。

「己はそんな事で人と離れる人間ぢやない。」  
自分を細君に説明しようといふ力なかつた彼も、獨り辯解の言葉を繰り返す事は忘れなかつた。  
然し細君の父と彼の交情に、自然の溝渠が出来たのは、やはり父の重きを置き過ぎてゐる手腕の結果としか彼には思へなかつた。

健三は正月に父の所へ禮に行かなかつた。恭賀新年といふ端書文を出した。父はそれを寛假さなかつた。表向それを答める事もしなかつた。彼は十二三になる末の子に、同じく恭賀新年といふ曲りくねつた字を書かして、其子の名

前で健三に賀狀の返しをした。斯ういふ手腕で彼に返報する事を互細に心得てゐた彼は、何故健三が細君の父たる彼に、賀正を口づから述べなかつたかの原因に就いては全く無反省であつた。  
「一事は萬事に通じた。利が利を生み、子に子が出来た。二人は次第に遠ざかつた。己むを得ないで犯す罪と、造らんでも済むのにわざと遂行する過失との間に、大變な區別を立てゐる健三は、性質の宜しくない此餘裕を非常に惡み出した。」

七十八  
「奥し易い男だ。」  
實際に於いて奥し易い或物を多量に有つてゐると自覺しながらも、健三は他から斯う思はれるのが癪に障つた。  
彼の神態は此細君を乗り越えた人に向つて鋭い懐かしみを感じた。彼は群衆のうちにあつて直ぐさういふ人を物色する事の出来る眼を有つてゐた。けれども彼自身は何うしても其境に達せられなかつた。だから猶さういふ人が眼に着いた。又さういふ人を餘計尊敬したくな



同時に彼は自分を罵った。然し自分を罵ら  
せるやうにする相手は更に烈しく罵つた。  
斯くして細君の父と彼との間には自然の造  
つた溝壑が次第に出来上つた。彼に對する細君  
の態度も暗にそれを手傳つたには相違なかつ  
た。

二人の間柄が擦れ／＼になると、細君の  
心は段々生家の方へ傾いて行つた。生家でも  
同情の結果、冥々の裡に細君の肩を持つたなけ  
ればならなくなつた。然し細君の肩を持つとい  
ふ事は、或場合に於いて、健三を敵とする意味  
に外ならなかつた。二人は益々離れる丈であつ  
た。

幸ひにして自然は緩和親としての歌斯的里  
を細君に與へた。製作は都合よく二人の關係  
が緊張した間隙に起つた。健三は時々使所へ通  
ふ廊下に俯伏になつて居る細君を抱き起  
して床の上迄連れて来た。真夜中に兩片を一枚  
明けた縁側の端に跨りつゝ居る彼女を、後か  
ら兩手で支へて、裏室へ戻つて来た經驗もあ  
つた。

そんな時に限つて、彼女の意識は何時でも朦  
朧として夢よりも分別がなかつた。瞳孔が大き  
く開いてゐた。外界はたゞ幻影のやうに映る

らしかつた。

此邊に坐つて彼女の顔を見詰めてゐる健三  
の眼には何時でも不安が閃いた。時としては不  
便の念が凡てに打ち勝つた。彼は能く氣の毒な  
細君の顔れかゝつた雙に指を入れて遣つた。汗  
ばんだ顔を濡れ手拭で拭いて遣つた。たまに  
は氣を痺にするために、顔へ霧を吹き掛けたり、  
口移しに水を飲ませたりした。

製作の全よりも刺しかつた昔の襟も健三の  
記憶を刺成した。

或時の彼は毎夜細い紐で自分の帯と細君の帯  
とを繋いで寝た。紐の長さを四尺程にして、裏  
返りが充分出来るやうに工夫された此用意は、  
細君の折腰なしに幾度も繰り返された。

或時の彼は細君の尾尾へ茶碗の縁底を宛がつ  
て、力任せに押し付けた。それでも踏ん返り返  
らうとする彼女の腕力を此一點で喚び留めなけ  
ればならない彼は冷たい冷汗を流した。

或時の彼は不思議な言葉を彼女の口から聞か  
された。

「御天道さまが来ました。五色の雲へ乗つて来  
ました。大變よ、貴夫」

「私の赤ん坊は死んぢまつた。私の死んだ赤ん  
坊が来たから行かなくつちやならない。そら其

處にゐるぢやありませんか。精神の中に。私  
一寸行つて見て来るから放して下さい」  
流産してから間もない彼女は、抱き締めにか  
かる健三の手を振り擲つて、斯う云ひながら起  
き上らうとしたのである。

細君の製作は健三に取つての大いなる不安で  
あつた。然し大抵の場合には其不安の上に、よ  
り大なる無愛の雲が籠り込んでゐた。彼は心配  
よりも可哀想になつた。弱い情れなもの前に  
頭を下げて、出来得る限り機嫌を取つた。細君  
も嬉しさうな顔をした。

だから製作に故意だらうといふ疑ひの掛か  
らない以上、また餘りに細君が強過ぎて、何う  
でも勝手にしろといふ氣にならぬ以上、最後  
に其度数が自然の同情を妨げて、何でさう己  
を苦しめるのかといふ不平が高まらない以上、  
細君の病氣は二人の仲を和げる方法として、  
健三に必要であつた。

不幸にして細君の父と健三との間には斯う  
いふ重寶な緩和親が存在してゐなかつた。從  
つて細君が本で出来た兩者の疎隔は、たとひ夫  
婦の關係が常に復した後でも、一寸埋める譯に  
行かなかつた。それは不思議な現象であつた。  
けれども事實上に相違なかつた。

七十九

不合理な事の嫌ひな健三は心の中でそれを苦  
に病んだ。けれども別に何うする料簡も出さな  
かつた。彼の性質はむきでもあり一闘でもあつ  
たと共に頗る消極的な傾向を帯びてゐた。

一己にそんな義務はない

自分に訊いて、自分に答を得た彼は、其答を根  
本的なものとした。彼は何時までも不愉快の  
中で起臥する決心をした。成行が自然に解決を  
付けて呉れるだらうとさへ豫期しなかつた。

不幸にして細君も亦此點に於いて何處迄も消  
極的な態度を離れなかつた。彼女は何か事件が  
あれば動く女であつた。他から頼まれて男よ  
り進退する場合もあつた。然しそれは眼前に手  
で觸れられる丈の明瞭な或物を捉まへた時に限  
つてゐた。所が彼女の見た夫婦關係には、そ  
んな物が何處にも存在してゐなかつた。自分の  
父と健三の間にも是といふ程の破綻は認められ  
なかつた。大きな具象的な變化でなければ事件  
と認めない彼女は其他を聞知した。自分と、自  
分の父と、夫との間に起る精神状態の動搖は  
手の滑りやらのないものと見てゐた。

「だつて何もないぢやありませんか」

裏面に其動搖を意識しつゝ彼女は斯う答へな  
ければならなかつた。彼女に最も正當と思はれ  
た此答が、時として皮肉の響をもつて健三の耳  
を打つ事があつても、彼女は決して動かなかつ  
た。仕舞に何うなつても構はないといふ投げ遣  
りの氣分が、單に消極的な彼女を病の事消極的  
に練り堅めて行つた。

斯くして夫婦の態度は悪い所で一一致した。  
相互の不調和を永続するためにと評されても  
仕方のない此一致は、根強い彼等の性格から割  
り出されてゐた。偶然といふよりも寧ろ必然の  
結果であつた。互に顔を見合せた彼等は、相手  
の人相で自分の運命を判断した。

細君の父が健三の手で調注された金を受取つ  
て歸つてから、それを特別の問題ともしなかつ  
た夫婦は、却つて餘事を話し合つた。

「産婆は何時頃来れると云ふのかい」  
「何時つて判然云ひもしません、もう直です  
わ」

「用意は出来てるのかい」  
「え、奥の戸棚の中に入つてゐます」

健三には何が遠入つてゐるのか分らなかつ  
た。細君は苦しさに大きな溜息を吐いた。  
「何しろ斯う重苦しくつちや堪らない。早く生

れてくれなくつちや」

「今度は死ぬかも知れないつて云つてたぢやな  
いか」

「え、死んでも何でも構はないから、早く生  
んぢまひたいわ」

「どうも御氣の毒さまだな」

「好いわ、死ねば貴方の所爲だから」  
健三は遠い田舎で細君が長女を生んだ時の  
光景を憶ひ出した。不安さうに苦い顔をしてゐ  
た彼が、産婆から少し手を貸して呉れと云はれ  
て産室へ入つた時、彼女は背に懸へるやうな恐  
ろしい力でいきなり健三の腕に頼み付いた。

さうして拷問でもされる人のやうに唸つた。彼  
は自分の細君が身體の上に受けつゝある苦痛を  
精神的に感じた。自分が罪人ではないかといふ  
氣さへした。

「産をするのも苦しいだらうが、それを見てゐ  
るのも辛いものだぜ」  
「ぢや何處かへ遊びにでも入らつしやいな」

「一人で生めるのかい」  
細君は何とも答へなかつた。夫が外國へ行  
つてゐる留守に、次の娘を生んだ時の事などは  
丸で口にしなかつた。健三も訊いて見ようとは  
思はなかつた。生れ付き心配的な彼は、細君の



産婆が次に顔を出した時、彼は念を押した。  
「一週以内かね」  
「いえもう少し後でせう」  
健三も細君も其氣でゐた。

八十

目取が狂つて豫期より早く産氣づいた細君は、苦しうな聲を出して、側に寝てゐる夫の夢を驚かした。  
「先刻から急に御腹が痛み出して……」  
「もう出さうなのかい」  
健三には何の位の程度で細君の腹が痛んでゐるのか分らなかつた。彼は寒い夜の中に夜具から顔を出して、細君の様子をそつと眺めた。  
「少し撫つて遣らうか」  
起き上る事の億劫な彼は出来る丈口先で間に合せようとした。彼は産に就いての経験もたゞ一度しか有つてゐなかつた。其経験も大方は忘れてゐた。けれども長女の生れる時には、斯ういふ痛みが、潮の満干のやうに、何度も来たり去つたりしたやうに思へた。  
「さう急に生れるもんぢやないだらうな、子供

つてもものは。一仕切痛んではまた一仕切治まるんだらう」  
「何だか知らないけれども段々痛くなるですわ」  
細君の態度は明かに彼女の言葉を證據立てた。涙と蒲團の上に落付いてゐられない彼女は、枕を外して右を向いて左へ動いたりした。  
男の健三には手の着けやうがなかつた。  
「産婆を呼ばうか」  
「え、早く」  
職業柄産婆の宅には電話が掛つてゐたけれども、彼の家にそんな氣の利いた設備のあらう筈はなかつた。至急を要する場合は起るたびに、彼は何時でも掛りつけの近所の醫者の所へ駆けつけるのを例にしてゐた。

八十一

初冬の暗い夜はまだ明けぬれるのに大分間があつた。彼は其人と其人の門を敲く下女の迷惑を察した。然し夜明迄安閑と待つ勇氣がなかつた。居室の襖を開けて、次の間から茶の間を通つて、下女部屋の入口迄来た彼は、すぐ召使の一人を急ぎ立て、暗い夜の中へ追ひ遣つた。  
彼が細君の枕元へ歸つて来た時、彼女の痛みは益々劇しくなつた。彼の神経は一分毎に門前で停車の響を待たなければならぬ程に緊

張つて来た。  
産婆は容易に來なかつた。細君の唸る聲が絶間なく靜かな夜の空を不安に振盪した。五分経つか程たないうちに、彼女はもう生れます」と天に宣告した。さうして今迄我慢に我慢を重ねて來て来たやうな叫び聲を一度に揚げると共に胎兒を分娩した。  
「確りしろ」  
すぐ立つて蒲團の裾の方に廻つた健三は、何うして好いか分らなかつた。其時例の洋燈は細長い火蓋の中で、死のやうに靜かな光を薄明く室内に投げた。健三の眼を落してゐる邊は、夜具の縮柄さへ判然しないぼんやりした蔭で一面に裏まれてゐた。

八十二

彼は狼狽した。けれども洋燈を移して其處を照すのは、男の子の見るべからざるものを強ひて見るやうな心持がして氣が引けた。彼は已むを得ず、暗中に摸索した。彼の右手は忽ち一種異様の觸覺をもつて、今迄経験した事のない或物に觸れた。其或物は寒天のやうにぶりにりしてゐた。さうして輪廓からいつても恰好の判然しない何かの塊に過ぎなかつた。彼は氣味の悪い感じを彼の全身に傳へる此塊を強く指頭で撫で、見た。塊は動きもしなければ泣きも

しなかつた。たゞ撫でるとたんびにぶり／＼した寒天のやうなものが剥け落ちるやうに思へた。若し強く抑へたり持つたりすれば、全體が乾度崩れて仕舞ふに違ないと思へた。彼は恐ろしくなつて急に手を引込めた。  
「然し此儘にして放つて置いたら、風邪を引くだらう、寒さで凍えてしまふだらう」  
死んでゐるか生きてゐるかさへ辨別のでない彼にも斯ういふ懸念が湧いた。彼は忽ち出産の用意が戸棚の中に入れてあるといつた細君の言葉と思ひ出した。さうしてすぐ自分の後部にある唐紙を開けた。彼は其處から多量の綿を引き摺り出した。脱脂綿といふ名さへ知らなかつた彼は、それを無暗に千切つて、柔かい塊の上に乗せた。

其内待ちに待つた産婆が來たので、健三は漸く安心して自分の室へ引取つた。  
夜は間もなく明けた。赤子の泣く聲が家の中の寒い空気を顫はせた。  
「御安産で御日出たら御座います」  
「男か女かね」  
「女の御子さんで」

産婆は少し氣の毒さうに中途で句を切つた。  
「又女か」  
健三にも多少失望の色が見えた。一番目が女、二番目が女、今度生れたのも亦女、都合三人の娘の父になつた彼は、さう同じものばかり生んで何うする氣だらうと、心の中で暗に細君を非難した。然しそれを生ませた自分の責任には思ひ到らなかつた。  
川舎で生れた長女は肌理の濃やかな美しい子であつた。健三はよく其子を乳母車に乗せて町の中を後から押して歩いた。時によると、天使のやうに安らかな眼に落ちた顔を眺めながら宅へ歸つて來た。然し當にならぬのは想像の未來であつた。健三が外國から歸つた時、人に伴れられて彼を新橋に迎へた此娘は、久し振りに父の顔を見て、もつと好いお父さまかと思つたと傍のものに語つた如く、彼女自身の容貌もしばらく見ないうちに悪い方に變化してゐた。彼女の顔は段々丈夫が詰つて來た。輪廓に角が立つた。健三は此娘の容貌の中に、いつか成長しつゝある自分の相好の悪い所を明かに認めなければならなかつた。  
次女は年中種物だらけの頭をしてゐた。風通しが悪いからだらうといふのが本で、とう

とう髪を毛をちよぎ／＼に剪つてしまつた。顔の短い眼の大きな其子は、海坊主の化物のやうな風をして、其處いらをろ／＼してゐた。  
三番目の子丈が器量好く育たうとは親の慈目にも思へなかつた。  
「あゝふもものが續々生れて來て、必竟何うするんだらう」  
彼は親らしくもない感想を起した。その中には、子供ばかりではない、斯ういふ自分や自分の細君なども、必竟何うするんだらうといふ意味も臆氣に交つてゐた。  
彼は外へ出る前に一寸浴室へ都を出した。細君は洗ひ立てのシーツの上に裸かに寝てゐた。子供も小さな附屬物のやうに、傍に置いてあつた。其子供は赤い顔をしてゐた。昨夜暗間で彼の手に觸れた寒天のやうな肉塊とは全く感じの違ふものであつた。  
一切も綺麗に始末されてゐた。其處いらには汚れ物の影さへ見えなかつた。夜來の記憶は形もない夢らしく見えた。彼は産婆の方を向いた。  
「蒲團は換へて置つたのかい」  
「え、蒲團も敷布も換へて上げました」



「御前は氣だね」  
 「貴夫こそ氣よ」  
 細君は嬉しうに自分の傍に寝てゐる赤ん坊の顔を見た。さうして指の先で小さい頬片を突つて、あやし始めた。其赤ん坊はまだ人間の體裁を具へた眼鼻を有つてゐるとは云へない程變な顔をしてゐた。  
 「産が軽い丈あつて、少し小さ過ぎる様だね」  
 「今に大きくなりますよ」  
 健三は此小さい肉の塊が今の細君のやうに大きくなる未來を想した。それは遠い先にあつた。けれども中途で命の綱が切れない限り何時か来るに相違なかつた。  
 「人間の運命は中々片付かないもんだな」  
 細君には夫の言葉があまりに突然過ぎた。さうして其意味が解らなかつた。  
 「何ですつて」  
 健三は彼女の前に同じ文句を繰返すべく餘儀なくされた。  
 「それが何うしたの」  
 「何うもしないけれども、左右だから左右だといふのさ」  
 「語らないわ、他に解らない事さへ云ひや、好いかと思つて」

産婆は来る筈になつてゐた。  
 八十二  
 やがて細君の膝の下に産温器が宛かはれた。「熱が少し出ましたね」  
 産婆は斯う云つて産婦の柱の中に入った水銀を振り落した。彼女は比較的言葉薄であつた。用心のため産婦の鬚を呼んで診て貰つたら何うだといふ相談さへせずに歸つてしまつた。  
 「大丈夫なのか」  
 「何うですか」  
 健三は全くの無知識であつた。熱さへ出ればすぐ産婦熱ぢやなからうかといふ危機の念を起した。母から掛り付けて来た産婆に信頼してゐる細君の方が却つて平氣であつた。  
 「何うですか、御前の身體ぢやないか」  
 細君は何とも答へなかつた。健三から見ると、死んだつて構はないといふ表情が其顔に出てゐるやうに思へた。  
 「人が斯んなに心配して遣るのに」  
 此感じを察する目覚持も續けた彼は、何時もの通り朝早く出て行つた。さうして午後歸つて来て、細君の熱がもう退めてゐる事に氣が付いた。  
 彼の心のうちには死なない細君と、丈夫な赤ん坊の外に、免職にならうとしてならざるにゐる兄の事があつた。喘息で覺れようとして未だ覺れずにゐる姉の事があつた。新しい地位が手に入るやうでまだ手に入らない細君の父の事があつた。其他島田の事もお常の事もあつた。さうして自分と是等の人々との關係が皆まだ片付かずにあるといふ事もあつた。

八十三  
 子供は一番氣樂であつた。生きた人形でも買つて貰つたやうに喜んで、閉さへあると、新しい妹の傍に寄りたがつた。其妹の睡きにつきへ驚嘆の種になる彼等には、嘘でも欠でも何でも彼でも不可思議な現象と見えた。  
 「今に何んなになるだらう」  
 當面に叱殺される彼等の胸には曾て斯うした問題が浮かばなかつた。自分達自身の今に何んなになるかをすら了解し得ない子供等は、無論今に何うするだらうと考へる筈がなかつた。此意味で見た彼等は細君よりも尙遠く健三を

「よく斯う早く片付けられるもんだね」  
 産婆は笑ふ丈であつた。若い時から獨身で通して来た此女の聲や態度は何處となく男らしかつた。  
 「貴方が無暗に産婦を使つて御仕舞になつたものだから、足りなくつて大變困りましたよ」  
 「左右だらう、随分驚いたからね」  
 斯う答へながら健三は大して氣の毒な思ひもしなかつた。それよりも多量に血を失つて着い顔をしてゐる細君の方が懸念の種になつた。  
 「何うだ」  
 細君は微に眼を開けて、枕の上で軽く背いた。健三は其儘外へ出た。  
 例朝に歸つた時、彼は洋服のままで又細君の枕元に坐つた。  
 「何うだ」  
 然し細君はもう音かなかつた。  
 「何だか變な様です」  
 彼女の顔は今朝見た折と違つて熱で火熱つてゐた。  
 「心持が悪いのかい」  
 「ええ」  
 「産婆を呼びに遣らうか」  
 「もう来るでせう」

「矢つ張何でもなかつたのか」  
 「ええ、だけれど何時又出て来るか分りませんわ」  
 産婆をする、そんなに熱が出たり引つ込んだりするものかね」  
 健三は眞面目であつた。細君は淋しい顔に微笑を洩らした。  
 熱は幸ひにしてそれぎり出なかつた。産後の経過は先づ順當に行つた。健三は既定の三週間を床の上に過すべく命ぜられた細君の枕元に來て、時々話をしながら坐つた。  
 「今度は死ぬ死ぬつて云ひながら、平氣で生きてゐるぢやないか」  
 「死んだ方が好ければ何時でも死にます」  
 「それは御隨意だ」  
 夫の言葉を戲談半分に聽いてゐられるやうになつた細君は、自分の生命に對して鈍いながらも一種の危機を感じた其當時を顧なければならなかつた。  
 「實際今度は死ぬと思つたんですもの」  
 「何ういふ譯で」  
 「譯はないわ、たゞ思ふのに」  
 死ぬと思つたのに却つて普通の人以上に軽い産をして、豫想と事實が丁度裏表になつた事さへ、細君は氣に留めてゐなかつた。

離れてゐた。外から歸つた彼は、時々洋服も脱がずに、敷居の上に立ちながら、ぼんやり是等の一團を眺めた。  
 「又塊つてゐるな」  
 彼はすぐ踵を回らして部屋の外へ出る事があつた。  
 時によると彼は服も改めずにすぐ其處へ胡坐をかいた。  
 「斯う始終湯婆ばかり入れてゐちや子供の健康に悪い。出してしまへ。第一幾何人れるんだ」  
 彼は何も解らない癖に好い加減な小言を云つて却つて細君から笑はれたりした。  
 日が重なつても彼は赤ん坊を抱いて見る氣にならなかつた。それでゐて一つ室に塊つてゐる子供と細君を見ると、時々別な心持を起した。  
 「女は子供を專領してしまふものだね」  
 細君は驚いた顔をして夫を見返した。其處には自分が今迄無日覺で實行して来た事を、夫の言葉で突然悟らされたやうな感もあつた。  
 「何で戯から棒にそんな事を仰しやるの」  
 「だつて左右ぢやないか。女はそれで氣に入らない亭主に敵討をする積なんだらう」  
 「馬鹿を仰しや。子供が私の傍へばかり寄



「付くのは、貴夫が構ひ付けて御遣りなさらないからです」  
 「己を構ひ付けなくさせたものは、取も直さず御前だらう」  
 「何うでも勝手になさい。何ぞといふと御みばかり云つて。どうせ口の達者な貴夫には敵ひませんから」  
 健三は寧ろ眞面目であつた。餅みとも口巧者とも思はなかつた。  
 「女は策略が好きだから不可い」  
 細君は床の上で寝返りをして彼方を向いた。さうして涙をばた／＼と枕の上に落した。  
 「そんなにも私を慮めなくつても」  
 細君の様子を見てゐた子供はすぐ泣き出しさうにした。健三の胸は重苦しくなつた。彼は征服されると知りながらも、まだ産褥を離れなない彼女の前に慰撫の言葉を並べなければならなかつた。然し彼の理解力は依然として此同情とは別物であつた。細君の涙を拭いてやつた彼は、其涙で自分の考を訂正する事が出来なかつた。  
 次に顔を合せた時、細君は突然夫の弱點を刺した。  
 「貴夫何故其子を抱いて御遣りにならないの」

「何だか抱くと飼育だからさ。首でも折ると大變だからね」  
 「嘘を仰しやい。貴夫には女房や子供に對する情合が缺けてゐるんですよ」  
 「だつて御覽な、ぐた／＼して抱き慣れない男に手なんか出せやしないぢやないか」  
 實際赤ん坊はぐた／＼してゐた。骨などは何處にあるか丸で分らなかつた。それでも細君は承知しなかつた。彼女は昔一番目の娘に水痘着の出来た時、健三の態度が俄に一變した實例を證據に挙げた。  
 「それ迄毎日抱いて遣つて居たのに、それから急に抱かなくなつたぢやありませんか」  
 健三は事實を打消す氣もなかつた。同時に自分の考を改めようとした。かつた。  
 「何と云つたつて女には技巧があるんだから仕方がない」  
 彼は深く斯う信じてゐた。恰も自分自身は凡ての技巧から解放された自由の人であるかのやうに。  
 八十四  
 退屈な細君は貸本屋から借りた小説を能く床の上で讀んだ。時々枕元に置いてある厚紙の

の時期が経過しないうちに、雜物を取上げたのが本で、大變視力を悪くした經驗もあつた。  
 「え、針を持つのは毒ですけれども、本位構はないでせう。それも始終讀んでゐるんぢやありませんから」  
 「然し彼れる迄讀み續けない方が好からう。でないと後で困る」  
 「なに大丈夫です」  
 まだ三十に足りない細君には過勞の意味が能く解らなかつた。彼女は笑つて取り合はなかつた。  
 「お前が困らなくつても己が困る」  
 健三はわざと手前勝手らしい事を云つた。自分の注意を無にする細君を見ると、健三はよく斯んな言葉遣ひをしたがつた。それが又夫の悪い癖の一つとして細君には數へられてゐた。  
 同時に彼のノートは益々細かくなつて行つた。最初細の頭位であつた字が次第に蟻の頭程に縮まつて来た。何故そんな小さな文字を書かなければならぬのかとさへ考へて見なかつた彼は、殆ど無意味に洋筆を走らせて已まなかつた。日の光の弱つた夕暮の窓の下、暗い洋燈から出る薄い灯火の影、彼は暇さへあれば彼の視力を濫費して顧みなかつた。細君に向つてした注意

汚らしい其表紙が健三の注意を惹く時、彼は細君に向つて訊いた。  
 「斯んなものが面白いのかい」  
 細君は自分の文學趣味の低い事を嘲られるやうな氣がした。  
 「可いぢやありませんか、貴夫に面白くなつたつて、私にさへ面白けりや」  
 色々な方面に於いて自分と夫の隔離を意識してゐた彼女は、すぐ斯んな口が利きたくなつた。健三の所へ嫁ぐ前の彼女は、自分の父と自分の弟と、それから官邸に出入する二三の男を知つてゐるざりであつた。さうして其人々々をみんな健三とは異つた意味で生きて行くものばかりであつた。男性に對する觀念をその數人から抽象して健三の所へ持つて来た彼女は、全く豫期と反對した一個の男を、彼女の夫に於いて見出した。彼女は其何方か正しくなければならぬと思つた。無論彼女の眼には自分の父の方が正しい男の代表者の如くに見えた。彼女の考は單純であつた。今に此夫が世間から教育されて、自分の父のやうに、型が變つて行くに違ひないといふ確信を有つてゐた。  
 案に相違して健三は頑強であつた。同時に細君の膠着力も固かつた。二人は二人同士で

をかつて自分に拂はなかつた彼は、それを矛盾とも何とも思はなかつた。細君もそれで平氣らしく見えた。  
 八十五  
 細君の床が上げられた時、冬はもう荒れ果てた彼等の庭に霜柱の錐を立てようとしてゐた。  
 「大變荒れた事、今年は何より寒いやうね」  
 「血が少くなつた所爲で、さう思ふんだらう」  
 「左右でせうかしら」  
 細君は始めて氣が付いたやうに、兩手を火鉢の上に觸して、自分の爪の色を見た。  
 「鏡を見たら顔の色でも分りさうなものだのにね」  
 「え、そりや分つてますわ」  
 彼女は再び火の上に差し延べた手を返して蒼白い頬を二三度撫でた。  
 「然し寒い事も寒いんでせう、今年は一健三には自分の説明を聽かない細君が可笑しく見えた。  
 「そりや冬だから寒いに極つてゐるさ」  
 細君を笑ふ健三はまた人よりも一倍寒がる男であつた。ことに近頃の冬は彼の身體に嚴しく中つた。彼は巴むを得ず書齋に炬燵を入れ

をかつて自分に拂はなかつた彼は、それを矛盾とも何とも思はなかつた。細君もそれで平氣らしく見えた。  
 八十五  
 細君の床が上げられた時、冬はもう荒れ果てた彼等の庭に霜柱の錐を立てようとしてゐた。  
 「大變荒れた事、今年は何より寒いやうね」  
 「血が少くなつた所爲で、さう思ふんだらう」  
 「左右でせうかしら」  
 細君は始めて氣が付いたやうに、兩手を火鉢の上に觸して、自分の爪の色を見た。  
 「鏡を見たら顔の色でも分りさうなものだのにね」  
 「え、そりや分つてますわ」  
 彼女は再び火の上に差し延べた手を返して蒼白い頬を二三度撫でた。  
 「然し寒い事も寒いんでせう、今年は一健三には自分の説明を聽かない細君が可笑しく見えた。  
 「そりや冬だから寒いに極つてゐるさ」  
 細君を笑ふ健三はまた人よりも一倍寒がる男であつた。ことに近頃の冬は彼の身體に嚴しく中つた。彼は巴むを得ず書齋に炬燵を入れ



て、兩膝から腰のあたりに浸み込む冷を防い  
だ。神聖衰弱の結果、斯う感ずるのかも知れな  
いとさへ思はなかつた彼は、自分に對する注意  
の足りない點に於いて、細君と異なる所がな  
かつた。

毎朝夫を送り出してから髪に櫛を入れる細君  
の手には、長い髪が何本となく残つた。彼  
女は梳くたびに櫛の齒に絡まる其抜毛を残り惜  
氣に眺めた。それが彼女には失はれた血潮より  
も却つて大切らしく見えた。

「新しく生きたものを捲へ上げた自分は、其償  
ひとして衰へて行かなければならない。」

彼女の胸には微かに斯ういふ感じが湧いた。  
然し彼女は其微かな感じを言葉に纏める程の頭  
を有つてゐなかつた。同時に其感じには手柄を  
したといふ誇りと、罰を受けたといふ恨みと、  
が交つてゐた。いづれにしても、新しく生れた  
子が可愛くなるばかりであつた。

彼女はぐた／＼して手紙へのない赤ん坊を手  
際よく押し上げて、其丸い頬へ自分の唇を持  
つて行つた。すると自分から出たものは何うして  
も自分の物だといふ氣が理窟なしに起つた。  
彼女は自分の唇に其子を置いて、また其もの  
楳の前に坐つた。さうして時々針の手を已めて

は、暖かさうに寝てゐるその顔を見て、心配さうに  
上から覗き込んだ。

「そりや誰の着物だい」  
「矢つ張此子のです」  
「そんなに幾何も要るのかい」  
「えい」

細君は黙つて手を運ばしてゐた。  
健三は漸と氣が付いた様に、細君の膝の上に  
置かれた大きな襦袢のある切地を眺めた。

「それは姉から贈つて呉れたんだらう」  
「左右です」  
「下らない話だな。金もないのに止せば好い  
に」

健三から貰つた小遣の中を割いて、斯ういふ  
贈り物をしなければ氣の済まない姉の心持が、  
彼には理解出来なかつた。

「つまり己の金で己が買つたと同じ事になるん  
だから」  
でも貴女に對する義理だと思つてゐらつしや  
るんだから仕方がありませんわ」  
姉は世間でない義理を、克明に守り過ぎる女  
であつた。他から物を貰へば恥度それ以上のも  
のを贈り返さうとして苦しがつた。

何うも困るね、さう義理々々つて、何が義理  
だか知らない  
た細長い胡麻竹の下へ振ら下げて、床の間の釘  
へ懸けた。竹に丸味があるので壁に落付かない  
せむか、顔は静かな時でも斜に傾いた。  
彼は又團子坂を下りて谷中の方へ上つて行つ  
た。さうして其處にある陶器店から一個の花瓶  
を買つて来た。花瓶は朱色であつた。中に薄い  
黄で大きな草花が描かれてゐた。高さは一尺  
餘りであつた。彼はすぐそれを床の間の上へ載  
せた。大きな花瓶とふら／＼する比較的小さい  
花瓶とは何うしても釣合が取れなかつた。彼は  
少し失望したやうな眼をして此不調和な配合を  
眺めた。けれども丸でも無いよりは増したと  
考へた。趣味に贅澤をいふ餘裕のない彼は、不  
満足のうち満足しなければならなかつた。

彼は又本郷通りにある一軒の呉服屋へ行つて  
反物を買つた。織物に就いて何の知識もない彼  
はたゞ番頭が見せて呉れるものの中から好い  
加減な選擇をした。それは無暗に光る緋であ  
つた。幼雅な彼の眼には光らないものより光る  
ものの方が上等に見えた。番頭に揃ひの袴織  
と着物を揃へるべく勧められた彼は、遂に一匹  
の伊勢崎銘仙を抱へて店を出た。其伊勢崎銘仙  
といふ名前さへ彼はそれ迄つひぞ聞いた事がな  
かつた。

だか薩張り解りやしない。そんな形式的な事を  
するより、自分の小遣を比田に借りられないや  
うな用心でもする方が餘程増した」  
斯んな事に掛けると存外無神経な細君は、強  
ひて姉を慰撫しようとしなかつた。  
「今に又何か御禮をしますから大で好いでせ  
う」

「一十のものには十五の返しをなさる御姉さんの  
氣性を下つてるもんだから、皆其御禮を目的に  
何か呉れるんださうですよ」  
「十のものに十五の返しをするつたつて、高が  
五十銭が七十五銭になる丈ぢやないか」  
「夫で澤山なんぞせう。さういふ人達は」  
他から見ると酔興としか思はれない程細か  
なノットばかり揃へてゐる健三には、世の中に

そんな人間が生きてゐようと思へなかつ  
た。  
「随分厄介な交際だね。だいち馬鹿々々しいぢ  
やないか」  
「傍から見れば馬鹿々々しいやうですけれど  
も、其中に入ると、矢つ張仕方がないんでせう」  
健三は此間餘所から臨時に受取つた三十圓  
を、自分が何う消費してしまつたかの問題に就  
いて考へさせられた。  
今から一箇月餘り前、彼は或る知人に頼まれ  
て其男の經營する雜誌に長い原稿を書いた。そ  
れ迄細かいノットより外に何も作る必要のな  
かつた彼に取つての此文章は、違つた方面に働  
いた彼の頭腦の最初の試みに過ぎなかつた。  
彼はたゞ筆の先に滴る面白い氣分に驅られた。  
彼の心は全く報酬を豫期してゐなかつた。依  
頼者が原稿料を彼の前に置いた時、彼は意外な  
ものを拾つた様に喜んだ。  
兼てからわが座敷の如何にも殺風景なのを苦  
に病んでゐた彼は、すぐ團子坂にある唐木の指  
物師の所へ行つて、紫檀の團扇を一枚作らせ  
た。彼はその中に、支那から歸つた友達に買つ  
た北條の二十品といふ石指のうちにある一つを  
採り出して入れた。それから其額を環の着い

「だから元は御姉さんの所へ皆が色々な物を  
持つて来たんですつて」  
細君は健三の顔を見て突然斯んな事を云ひ出  
した。  
「十のものには十五の返しをなさる御姉さんの  
氣性を下つてるもんだから、皆其御禮を目的に  
何か呉れるんださうですよ」  
「十のものに十五の返しをするつたつて、高が  
五十銭が七十五銭になる丈ぢやないか」  
「夫で澤山なんぞせう。さういふ人達は」  
他から見ると酔興としか思はれない程細か  
なノットばかり揃へてゐる健三には、世の中に

八十六

是等の物を買ひ調へた彼は、毫も他人に就い  
て考へなかつた。新しく生れる子供さへ眼中  
になかつた。自分より困つてゐる人の生活など  
はでんから忘れてゐた。俗社會の義理を過重  
する姉に比べて見ると、彼は憐なものに對する  
好意すら失つてゐた。  
「さう損をして迄も義理が盡されるのは偉い  
ね。然し姉は生れ付いての見栄坊なんだから、  
仕方がない。偉くない方がまだ増したらう」  
「親切氣は丸でないんでせうか」  
「左右さな」  
健三は一す考へなければならなかつた。姉は  
親切氣のある女に違ひなかつた。  
「ことによると己の方が不人情に出来てゐる  
のかも知れない」

此會話がまだ健三の記憶を新しく移つてゐ  
た頃、彼はお常から第二回の訪問を受けた。  
先達て見た時と略同じやうに粗末な服装をし  
てゐる彼女の恰好は、寒さと共に襦袢脇溜の類  
でも重ねたのだらう、前よりは益々丸まつちく  
なつてゐた。健三は客のために出した火鉢をす  
ぐ其人の方へ押し遣つた。

八十七

だか薩張り解りやしない。そんな形式的な事を  
するより、自分の小遣を比田に借りられないや  
うな用心でもする方が餘程増した」  
斯んな事に掛けると存外無神経な細君は、強  
ひて姉を慰撫しようとしなかつた。  
「今に又何か御禮をしますから大で好いでせ  
う」



「いえもう御構ひ下さいますな。今日は半分御暖かです。御座いますから」  
外部には穏やかな日が、障子に嵌めた硝子越に薄く光つてゐた。  
「あなたは年を取つて段々御肥りになるやうですな」  
「え、御座さまで身軀の方はまことに丈夫で御座います」  
「そりや結構です」  
「其代り身上の方はたゞ瘦せる一方で」  
健三には老後になつてから斯うむくむく肥る人の健康が疑はれた。少なくとも不自然に思はれた。何處か不氣味に見える處もあつた。  
「酒でも飲むぢやなからうか」  
斯んな推察さへ彼の胸を横切つた。  
お常の肌身に着けてゐるものは、悉く古びてゐた。幾度水を滌つたか分らない其着物なり羽織なりは、何處かに細い光が残つてゐるやうで、又髪にこつ／＼してゐた。たゞ何んなに時代を食つても、綺麗に洗濯が出来てゐる所に彼女の氣性が見える丈であつた。健三は丸いながら如何にも窮屈さうな其人の姿を眺めて、彼女の生活状態と彼女の口に距離のない事を知つた。

「何處を見ても困る人だらけで弱りますね」  
「此方などが困つてゐらしつちやあ、世の中に困らないものは一人も御座いません」  
健三は精神する氣にさへならなかつた。彼はすぐ考へた。  
「此人は己を自分より金持と思つてゐるやうに、己を自分より丈夫だと思つてゐるのだから」  
近頃の健三は實際健康を損つてゐた。それを目撃しつゝ彼は醫者にも診て貰はなかつた。友達にも話さなかつた。たゞ一人で不愉快を忍んでゐた。然し身體の未來を想像するたんびに彼はむいやくしやした。或時は他が自分を斯んなに弱くしてしまつたのだといふ様な氣を起して、相手のないのに腹を立てた。  
「年が若くつて起居に不自由さへなければ大丈夫だと思ふんだらう。門構の宅に住んで下女さへ使つてゐれば金でもあると考へるやうに」  
健三は黙つてお常の顔を見てゐた。同時に彼は新しく床の間に飾られた花瓶と其後に懸つてゐる懸額とを眺めた。近いうちに袖を通すべきばかりする反物も彼の心の中にあつた。彼は何故此年寄りに對して同情を起し得ないのだらうかと怪しんだ。

「ことによると己の方が不人情なのかも知れない」  
彼は姉の上に加へた評をもう一遍腹の中で繰返した。さうして「何人人情でも構ふものか」といふ答を得た。  
お常は自分の厄介になつてゐる娘婿の事に就いて色々な話を始めた。世間一般によく見る通り、其人の手腕がすぐ彼女の問題になつた。彼女の手腕といふのは、つまり月々入る金の意味で、其金より外に人間の價値を定めるものは、彼女に取つて、廣い世界に一つも見當らないらしかつた。  
「何しろ取高が少ないもんですから仕方が御座いません。もう少し稼いで呉れると好いのですけれども」  
彼女は自分の娘婿を捉まへて愚圖だとも無能だとも云はない代りに、毎月彼の勢力が産み出す、収入の高を健三の前に並べて見せた。恰も物指で反物の寸法さへ計れば、綿柄だの地質だのは、丸で問題にならないと云つた風に。  
生憎健三はさうした尺度で自分を計つて貰ひたくない商賣をしてゐる男であつた。彼は冷淡に彼女の不平を聞き流さなければならなかつた。

「是からあの人が来ると、何時でも五圓遣らなければならぬやうな氣がする。つまり姉が要らざる義理立をするのと同じ事なのかしら」  
自分の關係した事ぢやないと云つた風に闘争を動かして居た細君は、手を休めずに斯ういつた。  
「無いときは遣らないでも好いちやありませんか。何もさう見榮を張る必要はないんだから」  
「無い時に遣らうつたつて、遣れないのは分つてゐるさ」  
二人の間答はずぐ途切れてしまつた。消えかかつた炭を熨斗から火鉢へ移す音が其間に聞えた。  
「何うして又今日は五圓入つてゐたんです。貴夫の紙入に」  
健三は床の間に釣り合はない大きな朱色の花瓶を買ふのに四圓いくらか拂つた。懸額を眺めるととき五圓なにか取られた。指物師が百圓に負けて置くから買はないかと云つた立派な紫檀の書棚をじろく見ながら、彼は其甘分の一にも足らない代價を大事さうに懐中から出して匠人の手に渡した。彼はまたびか／＼する一匹の伊勢崎錦袖を買ふのに十圓餘りを費やした。

八十八

「好い加減な時分に彼は立つて書齋に入つた。机の上に乗せてある紙入を取つて、そつと中を改めると、一枚の五圓札があつた。彼はそれを手に握つた儘元の座敷へ歸つて、お常の前へ置いた。  
「失禮ですがこれで俵へでも乗つて行つて下さい」  
「そんな御心配を掛けては濟みません。さういふ積で上つたのでは御座いませぬから」  
彼女は辭退の言葉と共に紙幣を受け納めて懐へ入れた。

小遣を遣る時の健三が此前と同じ挨拶を用ひたやうに、それを貰ふお常の辭令も最初と全く違はなかつた。其上偶然にも五圓といふ金高さへ一致してゐた。  
「此次来た時に、もし五圓札が無かつたら何うしよう」  
健三の紙入がそれ丈の實質で始終充たされてゐない事は其所有主の彼に「引れてゐるばかりで、お常に分る筈がなかつた。三度目に來るお常を豫想した彼が、三度目に遣る五圓を豫想する譯に行かなかつた時、彼は不圖馬鹿々々しく

た。友達から受取つた原稿料が斯う形を變へたあとに、手塚の付いた五圓札がたつた一枚残つたのである。  
「實はまだ買ひたいものがあるんだがな」  
「何を御買ひになる積だつたの」  
健三は細君の前に特別な品物の名前を擧げる事が出来なかつた。  
「澤山あるんだ」  
態に際限のない彼の言葉は簡單であつた。夫と懸け離れた好尚を有つてゐる細君は、それ以上追窮する面世を省いた代りに、外の質問を彼に掛けた。  
「あの御婆さんは御姉さんなんぞより餘程落ちついてゐるのね。あれぢや鳥田つて人と宅で落ち合つても、さう喧嘩もしないでせう」  
「落ち合はないからまだ仕合せなんだ。二人が一所の座敷で顔を見合せでもして見るが、それこそ堪らないや。一人づつ、相手にしてゐるんでさへ澤山な所へ持つて来て」  
「今でも矢つ張り喧嘩が始まるでせうか」  
「喧嘩は兎に角、己の方が厭ぢやないか」  
「二人ともまだ知らないやうね。片つ方が宅へ來る事を」  
「何うだか」

「何しろ取高が少ないもんですから仕方が御座いません。もう少し稼いで呉れると好いのですけれども」  
彼女は自分の娘婿を捉まへて愚圖だとも無能だとも云はない代りに、毎月彼の勢力が産み出す、収入の高を健三の前に並べて見せた。恰も物指で反物の寸法さへ計れば、綿柄だの地質だのは、丸で問題にならないと云つた風に。  
生憎健三はさうした尺度で自分を計つて貰ひたくない商賣をしてゐる男であつた。彼は冷淡に彼女の不平を聞き流さなければならなかつた。